

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

元岡・桑原遺跡群20

—第43次・48次・49次・50次・51次・54次調査の報告—

2 0 1 2

福岡市教育委員会

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

Moto oka

Kuwa bara

元岡・桑原遺跡群20

—第43次・48次・49次・50次・51次・54次調査の報告—



2012

福岡市教育委員会



(1) 49次 I 区 (北から)



(2) 49次 III 区 (南西から)

巻頭図版



(3) 51次1区 (南東から)



(4) 51次2区 (北から)



(5) 51次5-3区（東から）



(6) 51次河川032土層5（北東から）

卷頭図版



(7) 49次鋳冶炉SX056
(南東から)



(8) 49次鉄器集中SX089
(北西から)



(9) 51次貯木遺構SX413
(北東から)

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・春日市原町地区キャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原、糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めており、すでに平成18年度には工学部が移転したところです。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区的移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

統合移転用地内における事前発掘調査もこの一環として平成7年度から福岡市教育委員会が取り組んでおり、すでに17冊の発掘調査報告書が発行されております。

本書では第43・48・49・50・51・54次調査の報告になります。いずれもこの地域の歴史を語る上で欠かすことが出来ない成果と考えております。

本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に調査を委託された福岡市土地開発公社、調査にご協力いただいた九州大学をはじめとする関係各機関と地元の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成24年2月29日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例　言

- 本書は、九州大学統合移転事業に伴い福岡市教育委員会が福岡市土地開発公社の委託を受けて実施した元岡・桑原遺跡群第43・48・49・50・51・54次調査の報告書である。報告では、48・54次調査が隣接する調査区であるため連続して編集した。また49・51次調査は隣接して継続した調査で、遺構番号等も連続しているため一緒に報告する。
- 本書に用いた遺構実測図は43次調査については岡田裕之・土井良伸・米倉・池田が、他は池田が作成した。現場での写真は43次追加調査を米倉が、他を池田が撮影した。
- 出土遺物の実測図は、48次・54次・50次の旧石器時代から縄文草創期の石器を吉留秀敏が、49次SX089出土鉄製品を西澤千絵里が作成し、他を大庭友子・濱石正子・山口朱美・福園美由紀・池田が作成した。製図は、撫養久美子・濱石・池田が行った。
- 本書に使用した方位は磁北で、座標北から6°21'西偏する。
- 本書の作成にあたり大淵悦子・前田みゆき・村松睦美・糸井住友の協力を得た。
- 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。
- 遺構の種類に応じて遺構番号の頭に記号を付した。
 - SB（掘立柱建物）、SC（堅穴住居）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（ピット）、SX（その他）
- 遺物番号はすべて通し番号とし、登録番号の下1~4桁と一致する
土器実測図では、おおむね1/4弱以上のものについては反転復元を行った。
- 48次調査の木簡の赤外線写真は福岡市埋蔵文化財センターで田上勇一郎が撮影した。
- 49次調査SX089出土鉄器については福岡市埋蔵文化財センターで西澤千絵里が処理を行った。
- 本書の執筆は43・54・50次調査の旧石器時代から縄文草創期の石器については吉留が、49次調査のSX08出土鉄器については西澤が、他は池田が行った。編集は池田が行った。

調査番号	調査次数	所在地	調査期間	調査面積	内容等
0486	第43次	西区大字桑原字石ヶ原	2006.2.7 ~ 2006.3.8	180.5m ²	古墳墓道、調査後一部破壊
0563	第48次	西区大字桑原字戸山	2006.1.10 ~ 2006.2.23	447.3m ²	古墳住居等・木簡
0611	第49次	西区大字桑原字金糞	2006.4.1 ~ 2007.3.22	2723.0m ²	古墳～古代集落
0709	第50次	西区大字桑原字牛坂	2007.4.1 ~ 2007.8.27	811.0m ²	近代墓
0741	第51次	西区大字桑原字金糞	2007.8.29 ~ 2008.10.3	6887.4m ²	古墳～古代集落
0844	第54次	西区大字桑原字戸山	2008.10.6 ~ 2009.1.9	1872.0m ²	古墳～古代河川

分布地図は43次が130（太郎丸）、他は129（桑原）

目 次

I 調査の経緯と調査組織	1
II 立地と環境	1
III 第43次調査の報告	5
IV 第48次調査の報告	15
V 第54次調査の報告	35
VI 第49・51次調査の報告	67
VII 第50次調査の報告	163

挿 図 目 次

Fig.1 元岡・桑原遺跡群位置図 (1/100000)	2
Fig.2 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15000)	3
Fig.3 調査地点位置図 (1/7000)	4
Fig.4 第45次調査地点周辺図 (1/1000)	5
Fig.5 1号墳測量図 (1/200)	6
Fig.6 1号墳削平状況断面図 (1/200)	6
Fig.7 1号墳削平範囲 (1/800)	6
Fig.8 墓道・土層・土坑実測図 (1/60・80)	8
Fig.9 出土遺物実測図1 (1/3)	10
Fig.10 出土遺物実測図2 (1/3・1)	11
Fig.11 第20次・48次・54次調査地点遺構配置図 (1/1500)	16
Fig.12 第48次調査地点遺構配置図 (1/400・200)	17
Fig.13 積穴住居SC009・010・026、土坑SK008実測図 (1/60・30)	19
Fig.14 SC009・010・026、SK008、出土遺物実測図 (1/3)	20
Fig.15 掘立柱建物SB022・023・024・025・031・032実測図 (1/80)	21
Fig.16 SB022・023・024・031、SD002出土遺物実測図 (1/3)	22
Fig.17 段落状遺構SX028・030実測図 (1/60)	24
Fig.18 SX030出土遺物実測図 (1/3)	25
Fig.19 SX030出土遺物実測図 (1/3・2)	26
Fig.20 3区出土遺物実測図 (1/3)	27
Fig.21 SX028出土遺物実測図 (1/3)	28
Fig.22 SX028出土木器実測図 (1/2)	29
Fig.23 繩文土器実測図 (1/3)	29
Fig.24 出土石器実測図 (1/1・3)	30
Fig.25 旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図 (1/1)	31

Fig.26	第54次調査区全体図 (1/400)	36
Fig.27	土坑SK001・杭列SX002実測図 (1/40)	37
Fig.28	SK001・009・010出土遺物実測図 (1/3)	38
Fig.29	谷部土層実測図 (1/60)	39
Fig.30	1区1・2層出土遺物実測図1 (1/3)	40
Fig.31	1区2層出土遺物実測図2 (1/3)	41
Fig.32	1区4層出土遺物実測図1 (1/3)	42
Fig.33	1区4層出土遺物実測図2 (1/3)	43
Fig.34	1区4層出土遺物実測図3 (1/3)	44
Fig.35	1区4層出土遺物実測図4 (1/3)	45
Fig.36	1区4層出土遺物実測図5 (1/3)	46
Fig.37	1区4層出土遺物実測図6 (1/3)	47
Fig.38	1区5層他出土遺物実測図 (1/2)	48
Fig.39	縄文土器実測図1 (1/3)	50
Fig.40	縄文土器実測図2 (1/3)	51
Fig.41	縄文時代石器実測図 (1/1・2)	52
Fig.42	縄文・弥生時代石器実測図 (1/2)	53
Fig.43	石斧実測図 (1/3)	54
Fig.44	疊石器実測図 (1/3)	55
Fig.45	旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図1 (1/1)	56
Fig.46	旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図2 (1/1)	57
Fig.47	旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図3 (1/1)	58
Fig.48	旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図4 (1/1)	59
Fig.49	旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図5 (1/1)	60
Fig.50	旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図6 (1/1)	61
Fig.51	旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図7 (1/1)	62
Fig.52	第49・50・51次調査区周辺図 (1/1500)	66
Fig.53	第49・51次調査全体図 (1/600)	68
Fig.54	I・II区遺構配置図 (1/200)	69
Fig.55	III区上層遺構配置図 (1/200)	70
Fig.56	III区・5-1区遺構配置図 (1/200)	71
Fig.57	III区土層図 (1/60)	71
Fig.58	1・2・3区遺構配置図 (1/300)	73
Fig.59	53区遺構配置図 (1/250)	74
Fig.60	竪穴住居跡SC007-008-010実測図 (1/60)	76
Fig.61	竪穴住居跡SC011-017実測図 (1/60)	77
Fig.62	SC007-010-011-017-118出土遺物実測図 (1/3)	78
Fig.63	竪穴住居跡SC118-120-167実測図 (1/60・40)	79
Fig.64	SC120出土遺物実測図 (1/3・2)	80
Fig.65	SC167出土遺物実測図 (1/3)	81

Fig.66	竪穴住居跡SC501-587-588-589-632実測図（1/60）	82
Fig.67	SC501-528出土遺物実測図（1/3）	83
Fig.68	SC588出土遺物実測図（1/3）	84
Fig.69	SC587-589出土遺物実測図（1/3）	85
Fig.70	竪穴住居跡SC631実測図（1/60）	86
Fig.71	SC631-632出土遺物実測図（1/3）	87
Fig.72	周溝状溝SX079-088-119-150-151-546-558実測図（1/80）	88
Fig.73	周溝状遺構SX126-526実測図（1/60）	89
Fig.74	SX054-088出土遺物実測図（1/3）	89
Fig.75	SX119出土遺物実測図（1/3）	90
Fig.76	SX126出土遺物実測図（1/3）	91
Fig.77	SX124-127-140-150-526-533-544出土遺物実測図（1/3）	92
Fig.78	掘立柱建物SB042-043-044-045-046実測図（1/80）	93
Fig.79	掘立柱建物SB047-048-049-058-093-094実測図（1/80）	95
Fig.80	掘立柱建物SB095-096-097-098-099実測図（1/80）	96
Fig.81	掘立柱建物SB100-101-107-108-109-110-155実測図（1/80）	97
Fig.82	掘立柱建物SB144-156-157-170-171-172実測図（1/80）	99
Fig.83	掘立柱建物SB173-174-175実測図（1/80）	100
Fig.84	掘立柱建物SB176-177-178-180実測図（1/80）	101
Fig.85	掘立柱建物SB181-182-186-187-190-191実測図（1/80）	102
Fig.86	掘立柱建物SB420-430-440-462-463-464-465-468実測図（1/80）	103
Fig.87	掘立柱建物SB515-545-547-566-567-568-569-570実測図（1/80）	105
Fig.88	掘立柱建物SB571-572-573-574-575-576-577-578実測図（1/80）	106
Fig.89	掘立柱建物SB595-596-597-598-599-600実測図（1/80）	107
Fig.90	掘立柱建物SB611-612-613-614-616-627-628実測図（1/80）	108
Fig.91	掘立柱建物出土遺物実測図1（1/3）	109
Fig.92	掘立柱建物出土遺物実測図2（1/3）	110
Fig.93	掘立柱建物出土遺物実測図3（1/3）	111
Fig.94	掘立柱建物SB615-617-618-633-634実測図（1/80）	112
Fig.95	土坑実測図1（1/40）	113
Fig.96	土坑出土遺物実測図1（1/3・2）	114
Fig.97	土坑実測図2（1/40）	115
Fig.98	土坑出土遺物実測図2（1/3）	116
Fig.99	土坑実測図3（1/40-60）	117
Fig.100	土坑出土遺物実測図3（1/3・4）	118
Fig.101	溝SD003-019-028-030-068-200-201-302-308-310-508-509土層実測図（1/60）	119
Fig.102	SD001-002-003-006-009-012-014-015出土遺物実測図（1/3）	120
Fig.103	SD018-019-020-030-031-038出土遺物実測図（1/3）	121
Fig.104	SD028出土遺物実測図（1/3）	123
Fig.105	SD068出土遺物実測図（1/3）	124

Fig.106	SD200・210・212・218・302・308・310・321・334・403出土遺物実測図（1/3）	125
Fig.107	SD508・509・出土遺物実測図（1/3）	126
Fig.108	鍛冶炉SX056、鉄器集中部SX089実測図（1/40・30）	127
Fig.109	SX089出土遺物実測図（1/2・3）	128
Fig.110	弥生時代の遺構SK153・458・564・620実測図（1/60）	130
Fig.111	SK458出土遺物実測図（1/3）	130
Fig.112	SK564・620出土遺物実測図（1/3）	131
Fig.113	河川・谷部土層実測図（1/80）	133
Fig.114	河川内検出遺構SX343・412・413・415・417・610実測図（1/60・40・80）	135
Fig.115	SX412・415出土遺物実測図（1/3・4）	136
Fig.116	SD607・SX608・610・622出土遺物実測図（1/3・4）	137
Fig.117	3区Ⅱ層出土遺物実測図1（1/3）	138
Fig.118	3区Ⅱ層出土遺物実測図2（1/3）	139
Fig.119	3区Ⅲ層出土遺物実測図（1/3）	140
Fig.120	3区Ⅳ層出土遺物実測図1（1/3）	141
Fig.121	3区Ⅳ層出土遺物実測図2（1/3）	142
Fig.122	5-2区Ⅲ層出土遺物実測図（1/3・4）	143
Fig.123	5-2区Ⅳa・b層出土遺物実測図（1/3）	144
Fig.124	5-2区Ⅳe層出土遺物実測図1（1/3）	145
Fig.125	5-2区Ⅳe層出土遺物実測図2（1/3）	146
Fig.126	5-2区Ⅳe層出土遺物実測図3（1/4）	147
Fig.127	5-2区Ⅳe・V層出土遺物実測図（1/4）	148
Fig.128	6区Ⅱ層出土遺物実測図1（1/3）	149
Fig.129	6区Ⅱ層出土遺物実測図2（1/3）	150
Fig.130	6区Ⅱ層出土遺物実測図3（1/3）	151
Fig.131	6区Ⅲ層出土遺物実測図1（1/3）	152
Fig.132	6区Ⅲ層出土遺物実測図2（1/3・4）	153
Fig.133	6区Ⅳ層出土遺物実測図1（1/3）	154
Fig.134	6区Ⅳ層出土遺物実測図2（1/4）	155
Fig.135	河川・包含層出土土製品遺物実測図（1/3・2）	156
Fig.136	第50次調査区全体図（1/400）	164
Fig.137	遺構配置図、北壁・SD111土層図（1/200・80）	166
Fig.138	甕棺墓実測図1（1/30）	167
Fig.139	甕棺墓実測図2（1/30）	168
Fig.140	甕棺墓実測図3（1/30）	169
Fig.141	小型墓実測図（1/15）	170
Fig.142	土壤墓・木棺墓実測図1（1/30）	171
Fig.143	土壤墓・木棺墓実測図2（1/30）	172
Fig.144	土坑墓・その他の遺構1/30・40・60）	173
Fig.145	甕棺墓実測図1（1/12）	174

Fig.146	壺棺実測図2 (1/8)	175
Fig.147	小型棺実測図 (1/4)	176
Fig.148	副葬遺物実測図1 (1/3)	177
Fig.149	副葬遺物実測図2 (1/3・4)	178
Fig.150	石器包含層遺物分布図 (1/80)	180
Fig.151	旧石器時代～縄文時代草創期の石器実測図1 (1/1)	181
Fig.152	旧石器時代～縄文時代草創期の石器実測図2 (1/1)	182
付図1	元岡・桑原遺跡群第20・48・54次調査全体図 (1/600)	
付図2	元岡・桑原遺跡群第49・51次調査全体図 (1/400)	

図 版 目 次

巻頭図版

- (1) 49次I区（北から）
- (2) 49次III区（南西から）
- (3) 51次I区（南東から）
- (4) 51次2区（北から）
- (5) 51次5-3区（東から）
- (6) 51次河川032土層5（北東から）
- (7) 49次鍛冶炉SX056（南東から）
- (8) 49次鉄器集中SX089（北西から）
- (9) 51次貯木遺構SX413（北東から）

Ph.1	調査区遠景（工事中）
Ph.2	1号墳調査前
Ph.3	調査区全景・墓道（北東から）
Ph.4	石室削平断面（追加調査時）
Ph.5	墓道（南東から）
Ph.6	墓道土層
Ph.7	墓道土層・SX01（南から）
Ph.8	SX01（北東から）
Ph.9	SX028出土木簡134（赤外線写真）
Ph.10	2区全景（東から）
Ph.11	2区遺構集中部分（南から）
Ph.12	3区全景（南西から）
Ph.13	4区全景（南東から）
Ph.14	SC010（東から）
Ph.15	SC026（東から）

Ph.16	SC009・SD002（東から）
Ph.17	SK008（南から）
Ph.18	SC010検出時・SB022（南から）
Ph.19	SC023（東から）
Ph.20	SX030（東から）
Ph.21	SX028土層（東から）
Ph.22	1区上面（南西から）
Ph.23	1区下面（北東から）
Ph.24	1-1区（東から）
Ph.25	2区下面（北から）
Ph.26	7トレンチ土層
Ph.27	調査地点全景（東から）
Ph.28	II区全景（北東から）
Ph.29	III区全景（北から）
Ph.30	6-2区全景（北東から）

- Ph.31 5・3区全景（南から）
Ph.32 Ⅲ区建物群（北から）
Ph.33 Ⅲ区段落ち部（北から）
Ph.34 1・2区 SD306（北から）
Ph.35 2・3区 全景（北東から）
Ph.36 金屎池堤断面（北西から）
Ph.37 SC118（北東から）
Ph.38 SC120（北西から）
Ph.39 SC011（南西から）
Ph.40 SC167（北から）
Ph.41 SX088（北から）
Ph.42 SX079（北西から）
Ph.43 SX054・SB100（北西から）
Ph.44 SB048（北西から）
Ph.45 SB177・178（北東から）
Ph.46 SB420・SP428（東から）
Ph.47 SK113（北東から）
Ph.48 SK450（北から）
Ph.49 SD508・509（北東から）
Ph.50 3区河川032（南から）
Ph.51 河川出土木製鏡
Ph.52 貯木場SX417（南東から）
Ph.53 SK610（西から）
Ph.54 SK620（南東から）
Ph.55 墓域全景（西から）
Ph.56 下面遺構（西から）
Ph.57 調査前（北から）
Ph.58 調査区全景：調査後（西から）
Ph.59 SD111（北西から）
Ph.60 ST102（西から）
Ph.61 ST103（南東から）
Ph.62 ST105（北西から）
Ph.63 ST107木箱（西から）
Ph.64 ST108（南西から）
Ph.65 ST106（西から）
Ph.66 ST147（北西から）
Ph.67 ST 120（北西から）
Ph.68 ST 150（北西から）
Ph.69 ST151周辺（南から）
Ph.70 SX117上部施設（南から）
- Ph.71 SX117（西から）
Ph.72 下面北壁土層

I 調査の経緯と調査組織

九州大学統合移転に関する発掘調査は、用地の先行取得を行った福岡市土地開発公社（以下公社）による委託分と、九州大学が再取得を行った後に実施した九州大学による委託分がある。公社による委託分は平成8年度に本調査が開始されて以来、平成20年度に終了した。大学委託分は平成15年度に本調査を開始し、現在も調査中である。

統合移転地内の埋蔵文化財包蔵地は、元岡・桑原遺跡群の名称で一括し、同遺跡群は58次の調査を実施している。平成23年10月現在、福岡市土木局を原因とする2件と民間開発1件以外のすべてが統合移転に伴う調査である。

本書で報告する第43・48・49・50・51・54次調査は平成17年度から20年度に実施した。調査組織は次の通りである。

調査組織

調査委託 福岡市土地開発公社

調査主体 福岡市教育委員会

調査時 教育長 植木とみ子

大規模事業等担当課長 力武卓治

埋蔵文化財第2課長 田中壽夫

主査 米倉秀紀（前任） 常松幹雄（後任）

調査担当 池田祐司

調査庶務 文化財管理課管理係

整理時 教育長 酒井龍彦

埋蔵文化財第2課長 田中壽夫

調査第2係長 菅波正人

調査庶務 埋蔵文化財第1課管理係

II 立地と環境

元岡・桑原遺跡群は、福岡市の西方、玄界灘に突き出た糸島半島の東側基部の丘陵地帯に位置し、西区大字元岡地区と同桑原地区にまたがって分布する遺跡群の総称である。

糸島半島は花崗岩から成る山地・丘陵が大半を占め、広い平野はほとんど存在しない。丘陵には狭い谷が複雑に入り、平地は谷の開口部から海岸に狭い沖積平野が存在するのみである。元岡・桑原遺跡群が立地する丘陵も高さは標高100m前後を頂部として樹枝状の浸食谷が入る複雑な地形である。遺跡群の東～南側は現在広い水田耕地となっているが、中世までは今津湾が深く入り込み、遺跡近くまで迫っていた。これが近世以降の干拓事業により陸化している。

本遺跡は縄文時代の瓜尾貝塚（県指定史跡）と少数の群集墳などが知られているのみであったが、平成7年以降に開始した九州大学統合移転用地の事前確認調査の結果、新たに各時代に及ぶ多数の遺跡が発見され、旧石器時代の遺物、縄文～古代にかけての集落関連遺構、古代の官衙関連遺構・製鉄関連遺構、70基余りの後期群集墳や7基の前方後円墳等が認められる。

旧石器時代から縄文時代前半期の遺跡は主に山際の段丘面に分布する。ナイフ形石器、尖頭器、細石器等が点在的に出土するが、明確な遺構は検出されていない。縄文時代後半期になると、旧今津湾

と関わる貝塚遺跡が現れる。2次調査ではドングリ貯蔵穴を確認し、各地点で中期以降の遺物が散見できる。弥生時代では遺跡群の南西端にある第42次調査で弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が大量に出土し、また貨泉等の対外交流を示す遺物や小銅鋒や琴などの出土が注目される。その他に谷部の調査で中・後期の遺物が出土しているが少ない。

古墳時代になると丘陵頂部に塙除古墳、池の浦古墳、峰古墳など大型の前方後円墳が築造され、古墳時代後半期には石ヶ原古墳など大型の前方後円墳が引き続き築造されるとともに、群集墳の増加が著しい。この時期には遺跡群各地で本格的な開発が始まり丘陵の縁辺や谷部で集落が展開する。大規模な谷部の造成をおこなった7次・18次などでは6世紀後半から8世紀はじめまで、谷の開口部の20次では古墳時代から奈良時代を通じて遺構が継続する。

古代の糸島半島は鷦（志麻）郡に属し、登志、川辺、韓良、明敷、久米、加夜、志麻、鶏永の郷に分かれていたが、本遺跡群が該当する郷は不明である。日本書紀にみられる朝鮮半島への久米皇子と派遣軍の志摩都瀬在記録や、国内最古である大宝二（702）年の鷦郡川辺里戸籍の存在、古代鉄生産の記録などから本地域の重要性を伺うことが出来る。またこの地域では海岸で良好な砂鉄が得られることから製鉄遺跡が多く、12次、24次調査などで50基程の製鉄炉が発見され、8000箱以上の製鉄関連遺物（炉壁、輔羽口、鉄滓等）が出土した。遺跡群で見つかった製鉄遺構は大半が8世紀に位置付け



Fig.1 元岡・桑原遺跡群位置図 (1/100,000)



Fig.2 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15,000)

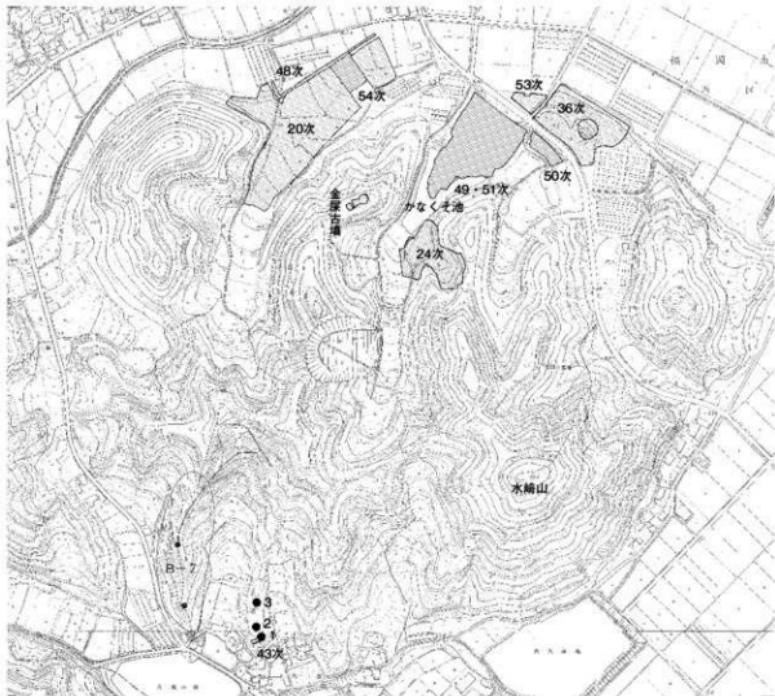


Fig.3 調査地点位置図 (1/7,000)

られている。この他、多くの文字資料が注目される。第7次調査では「壬辰年韓鐵□□」と記された荷札形式の木簡、第15次調査では古代の「解除（祓）」に関する木簡、第20次調査では「太賀元年」や「延暦四年」が出土し、官衙的様相を持つ20次調査は調査途中で保存されている。

今回報告する6次分の調査地点は、およそ3箇所にわかれれる。第43次調査（元岡古墳群A群）は石ヶ原古墳から南西に伸びる丘陵の末端で、古墳群の中ではもっとも古今津湾に近い位置にあたる。第48・54次は丘陵北側の第20次調査の補足調査的な位置であり、連続した遺構・遺物を検出した。第49・51次調査は北東に開口する谷内に位置する調査で一体のものである。旧石器時代から中世までの遺物が出土し、6世紀後半から7世紀代を主体とする遺構を検出した。上流では8世紀代の製鉄炉がまとまって出土した24次調査地点があり、20次とは丘陵を隔てて隣接する。第50次は第49・50次に隣接する丘陵上で近代墓と石器群が出土している。以下、次数は前後するが、調査地点のまとまりごとに上記の順で報告する。また49・51次調査については、区割りなどは調査時のものを使用するが、遺物と記録類は一括して第49次調査の調査番号で統一した。注記では整理方針の確定前に進めたため一部次数を生かしている。

III 43次調査の記録（元岡古墳群A群）

1. 調査の経緯

元岡古墳群A群は石ヶ原古墳から南に派生する幅30から40mの丘陵上に位置し大坂の池に近接する。九州大学用地造成に伴う踏査において新たに2基が確認され、合計3基が知られている。丘陵端部側から1号から3号墳と呼ぶ。

平成16年、大字元岡字石ヶ原631-2の消防署用地造成に伴い、文化財の有無の問い合わせが福岡市土地開発公社から出された。造成範囲が元岡古墳群A群1号墳に近接するため、埋蔵文化財課は試掘を行い、墓道と考えられる遺構を確認した。協議の上、引き続き用地範囲内についての本調査を実施し1号墳の墓道を確認した。調査期間は平成17年2月7日から3月8日である。その後の同年7月、造成工事において用地範囲外まで掘削が行われ、1号墳の石室に掘削がおよび斜面に石室の断面が現れていった（Fig.6-7）。協議の結果、この工事に係る経緯を互いに確認した上で、古墳の断面の観察のみの追加調査を行い、残りを現状保存とした。現地では削平によって石室床面が地表から6mの斜面上となっていたため、擁壁工事を先行し、調査し易い高さまで埋め戻しがなされた7月26日に追加調査を実施した。本調査は池田、追加調査は米倉が担当した。



Fig.4 第43次調査地点周辺図 (1/1,000)

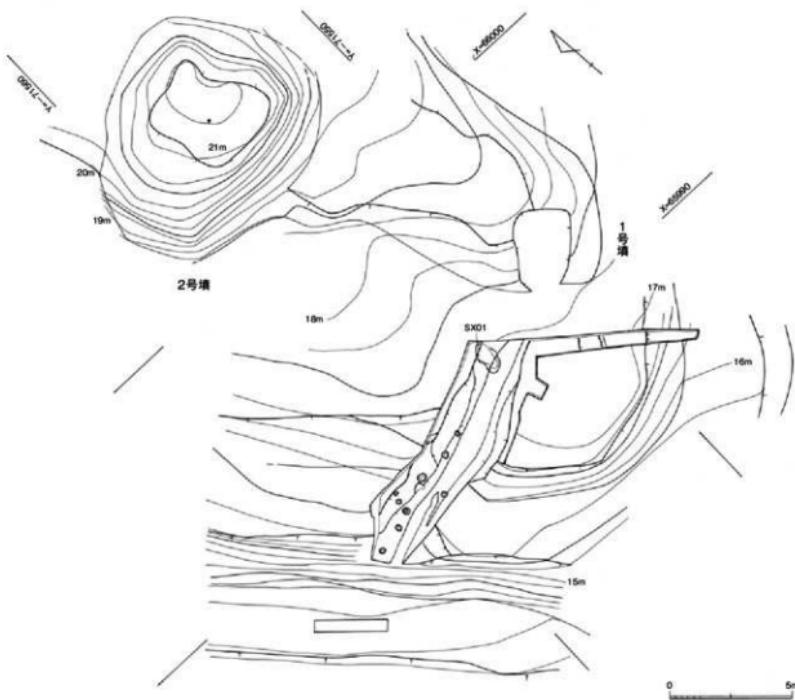


Fig.5 1号填測量図 (1/200)

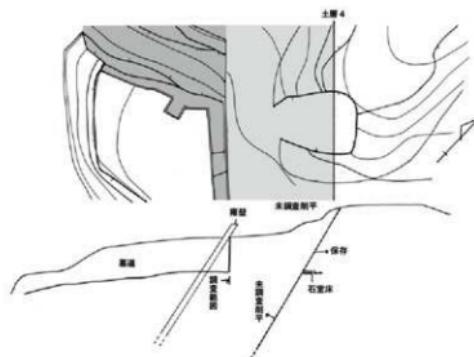


Fig.6 1号填削平状況断面図 (1/200)



Fig.7 1号填削平範囲 (1/800)

2. 調査の概要

調査地点は丘陵端部に近い標高17mの平坦部から西側の急斜面である。平坦部には高低差1mほどの高まりと、その中央に3×2.5mの範囲で石室部分が陥没した痕跡が残っていた。墳丘径は7mほどと想定される。周囲の竹等を伐採し、造成範囲の確定と試掘の後に本調査と周辺測量を実施した。調査時は斜面の下に住宅があったため、伐採した竹・草木、廃土を狭い範囲で処理する必要があった。このため調査・測量とも必ずしも十分なものとは言えない。測量は近接する2号墳を取り込んだが、竹等の間を縫ったもので狭い範囲となった。2号墳は墳丘径10m、高低差2.3mほどが確認できる。上部表面には10cm大の礫が散乱する。3号墳は2号墳から30mほど丘陵上部に墳丘の残存と考えられる高まりである。半裁されたような状況で残りは悪いと考えられる。

1号墳の本調査で確認できた構造は西側に伸びる墓道のみで、急斜面に消える範囲で延長10mに及んだ。追加調査は土層観察と遺物の採取のみであるが、敷石、石室掘り方規模等を確認できた。

3. 1号墳調査の記録

(1) 墓道 (Fig5-8)

1号墳は西側斜面に向かって開口し、ほぼ直線的に延びる墓道を検出した。斜面に途中で消えるまでの約10.5mの延長を確認した。斜面は段造成を受けている。築造時はさらに延び、やや北西に方向をかえて斜面を下っていたと考えられる。段造成された平坦面にトレントを設定したが墓道と関連するものは確認できなかった。石室側は、調査区間から2mで石室の陥没と考えられるくぼみとなるので、この間に渓道との境があったと考えられる。墓道の幅は3mから2mで深さは最大で1.3mである。断面形は逆台形に近いU字形を呈し、底は石室寄りで幅70cm前後、端部では30cmほどである。また石室寄り3mはほぼ平坦で西側端部に向かって下る。覆土は粘質の暗褐色土や灰褐色土に地山の花崗岩風化土が混ざる。土層2で見ると4層以下は細かに土層が分かれ、やや細かに埋もれていった様子が伺われるが、3層の暗褐色土は均一で短期間の堆積が想定される。

遺物はできるだけ出土地点を記録した。床面からやや浮いて出土するものがほとんどで土層2の3層下部、土層3の2層からの出土が多い。石室側では下部からの遺物の出土はほとんどない。

(2) 石室 (Fig8)

追加調査で断面観察のみであるが、石室を確認した。土層4の4層が石室覆土、5層が掘方埋土と考えられる。4層下面には5から7cm大の礫が見られ、敷石と考えられる。土層と敷石の範囲から石室床の幅は130cmほどと考えられる。また5b層は北側側壁の腰石の抜跡と考えられる。5cから5g層と5a層の境の形状も腰石の痕跡と考えられる。石材の多くがすでに抜かれているが、構築材と考えられる石材が一部残っており奥壁は残存している可能性がある。敷石付近、5b層などから須恵器を中心とした遺物が出土している。掘り方は上端の幅420cm、下端幅300cmで深さ160cmほどが残り、2段掘りの断面を呈す。また周溝は確認できていない。

(3) その他の遺構

SX01 (Fig8) 調査区の東端、墓道の北西側で不正形の堅穴を確認した。Fig8の個別図右のラインが土層1にあたる。平面形ははっきりしないが底で100×50cmほどの略椭円形を呈す。Fig8土層1の14~16層がSX01のもので墓道に切られる。壁は垂直に近く、下部でハンギングする部分がある。覆土はしまりのない黄灰色から灰褐色砂質土で墓道覆土とは異なり地山に近い。底から玄武岩片1点が出土した。時期は不明であるが、縄文期の落とし穴の可能性を考えておきたい。

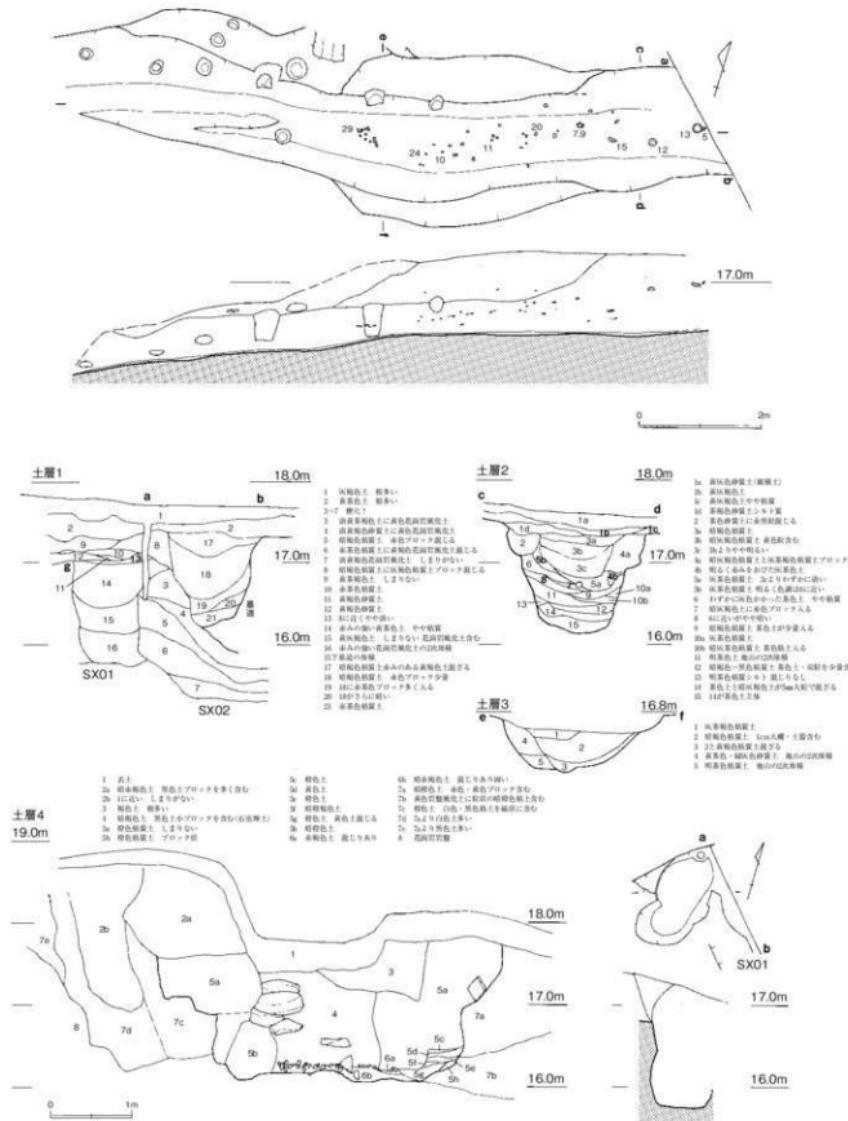


Fig.8 墓道・土層・土坑実測図 (1/60-80)

SX02 (Fig.8) 調査区の東端、土層1付近で墓道の底から南東へ高さ80cm、幅70cmほどの隋道を延長約4m確認した。隋道は奥ほど狭くなり、確認した奥では高さ67cm、幅20cmほどになる。土層1の3から7層がこれにあたり、SX01の図の東側の落ちがSX02の掘り方である。土層・平面からして竪穴から横方向に掘られたものと考えられる。土層1の5層は墓道の土に類似し、埋まる段階で墓道覆土が流入したと考えられる。他の堆積は花崗岩風化土の2次堆積である。人為的なものではないであろう。

(4) 出土遺物

石室内 (Fig.9) 1から3が追加調査時に石室内から出土した須恵器である。1は高台坏で器壁が厚手である。2は破片で坏としたが天地不確実。1・2とも復元口径10.2cmと小さい。3は提瓶で器壁は厚めで搔目が明瞭に残る。

墓道 (Fig.9・10) 4から32の須恵器が出土した。床面から浮いた状況で土層2の3層暗褐色土の下部からの出土が多い。完形品、大型片は少ない。Fig.9に出土位置がわかるものを示した。4から19が須恵器の坏蓋および坏身である。蓋の外面、身の内面にヘラ記号を持つものがある。身の口径が9.5cm以下、蓋の口径が10.5cm前後で全体に小振りである。おおむねIV期に位置づけられよう。10と19が暗灰色を呈す他は淡灰色を呈す。20は高台坏の底部で焼きが甘い。21は坏で天地不明。22は高坏の坏部で外面暗褐色を呈し、回転なで調整が顕著である。23は高坏の脚で透かしが入る。24は壺で焼きが甘い。25から27は壺である。28は同一個体の小片から復元的に作図した。壺である。29は西よりで出土した平瓶で小片を接合し復元できた。胴上部の4割を欠く。上部は暗褐色を呈し、下部は淡い。30は壺で大型品であろう。暗褐色を呈す。31は壺で淡灰色を呈し外面上に細かな搔目がある。32は壺または平瓶で同一個体と考えられるが接合しない。図示した以外に製錬炉内2点が暗褐色土（土層2・3層）から出土している。また須恵器の小片もある。

SX02 (Fig.10) 33が出土した。墓道覆土からの流れ込みと考えられる。須恵器の壺である。

表土 (Fig.10) 34から40は表土出土および表採品である。37までは須恵器である。34・35は小片で壺と考えられる。34は横なで顕著である。36は復元口径14cmを測り、胎土に3mm大の砂粒を含む。坏であろうか。37は高坏の脚と考えられる。38は土師器で高坏の脚部で器面は荒れている。39は黒色土器Aの椀で高台部は剥げた。外面口縁部も黒色で器面は荒れている。40は黒曜石製の石鎚で基部が欠損する。

4. 小結

墓道のみの調査で石室は保存する予定であったが、かなりの部分が破壊された。協議不足であったことを反省したい。1号墳の残りと2、3号墳は九州大学の緑地保存地区内にあたり保存される。特に2号墳は残りが良いと考えられる。

1号墳は南側側壁が抜き取られているものの、北側壁の一部と敷石が残っており、奥壁も残る可能性がある。堀方が深く、奥壁には巨石が用いられていることが予想される。

出土遺物のうち須恵器の坏はIV期のものがほとんどでIIIbに上るものでも新しい。6世紀末から7世紀はじめの築造と考えられる。石室堀方の特徴とも整合する。また、石室内からは高台付坏1が出土しており、7世紀末までの間に営まれたと考えられる。

また、土坑SX01は古墳より古いという以外に時期は不明であるが、形状から落とし穴の可能性が考えられる。表土からは石鎚も出土しており、縄文時代の活動も知ることができる。

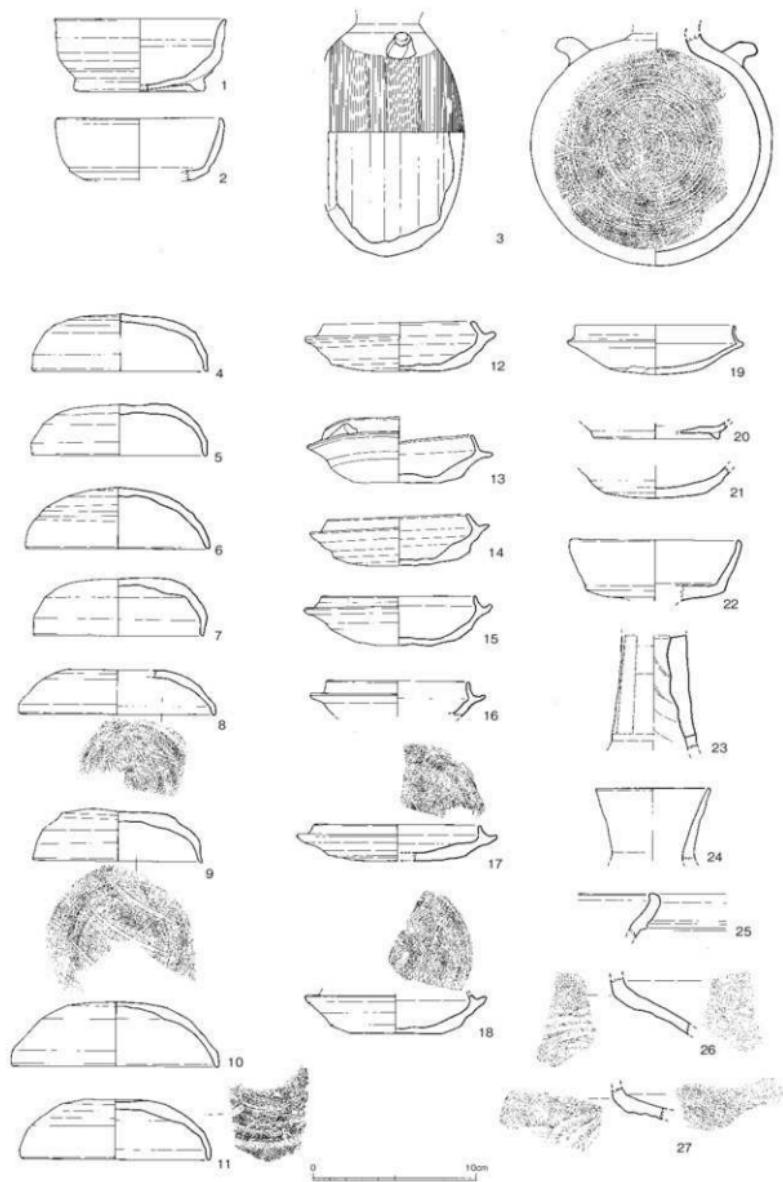


Fig.9 出土遺物実測図1 (1/3)

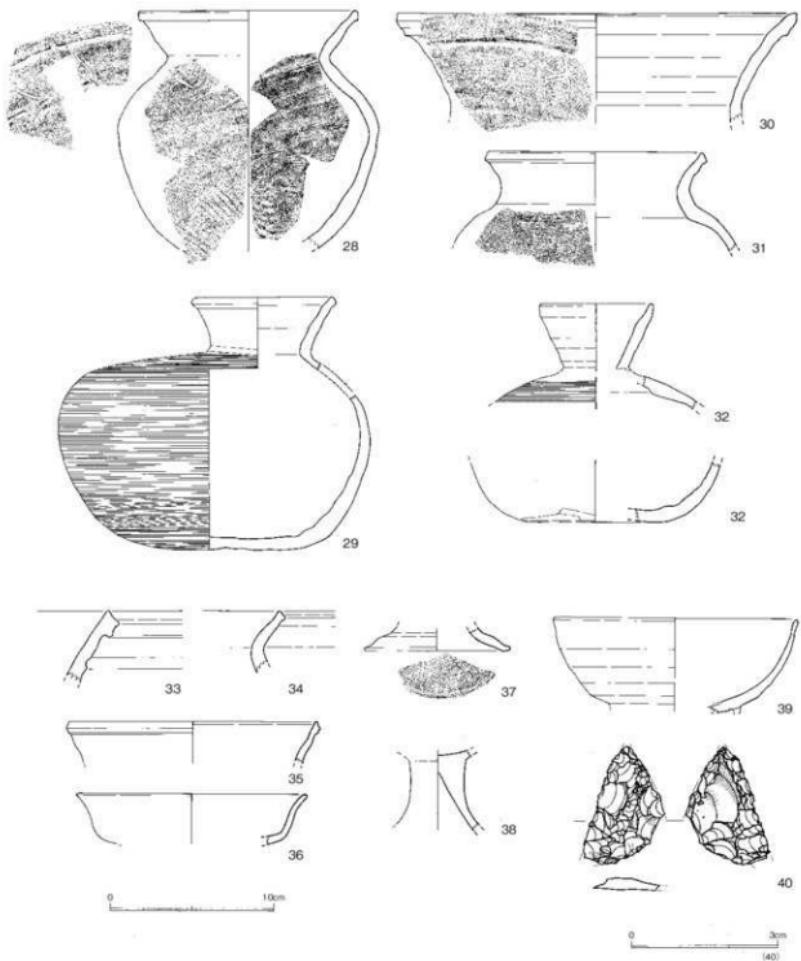


Fig.10 出土遺物実測図2 (1/3-1)



Ph.1 調査区遠景（工事中）



Ph.2 1号墳調査前



Ph.3 調査区全景・墓道（北東から）



Ph.4 石室削平断面（追加調査時）



Ph.7 墓道土層・SX01 (南から)



Ph.8 SX01 (北東から)



Ph.5 墓道 (南東から)



Ph.6 墓道土層

IV 第48次調査の報告

1. 調査の経緯

平成17年、福岡市土地開発公社より20次調査の北側に接する道路拡幅計画にかかる文化財の有無の照会があった。20次調査は平成12年から15年に実施され、木簡等が出土したことから保存が決定している。拡幅が予定された箇所は、20次調査時に道路から引きを取って調査区を設定していたため未調査であり、また遺構の広がりが20次調査の成果から確実であった。このため文化財部は本調査が必要との回答をした。九州大学との協議の結果、保存地区に近接するが調査に支障はないとの判断があった。これを受け平成18年1月10日から同年2月23日に本調査を行った。

調査終了後、調査区の西南端から北西に屈曲する部分についても調査が必要との依頼があり、急速追加して調査を行った。期間は平成19年1月24日から同2月3日である。

2. 調査の概要

調査区は現在の道路と20次調査との間、幅約4mの範囲で延長180mの範囲である。便宜的に1から4区と呼称する。1区と2区の間は観測機器を維持するため調査できなかった。1、2区は20次調査で道路から引きを取っていた部分にはほ重なり、調査区の南側は20次の調査区端に沿う。

1、2区では現地表下80~140cmの淡黄褐色粘質シルトの上面で遺構を検出した。遺構面までの堆積は客土および耕作土と考えられる粘質土で造成が繰り返されたようである。直上は近世から近代の水田土壤と考えられる青灰色~淡茶灰色粘質土でかなりの削平を受けていると考えられる。遺構は住居跡3棟、掘立柱建物6棟、溝、ピットを検出した。掘立柱建物は20次調査区へ広がるものもある。遺構は特に2区中央部分で集中し、その両側は薄くなる。東側はSC009の様に段落ちに切られ削平を受けているが、谷に向かって遺構面も下がり遺構の密度自体も薄くなる。地形的知見は20次と同様で、遺構も建物は20次で確認したもののは継続である。3区は谷地形を呈し、下層が弥生時代中期から古墳時代を主とする遺物包含層である。特に2区から谷への落ち際で遺物が多く出土しSX030とした。54次調査と重なる。3区についてはSX030の項で触れる。4区は追加調査を行った部分で住居跡1軒と落ちを検出した。北西側に落ちていることに加え、4箇所でコンクリートの溝など近年の搅乱が横断し、遺構面の残りが悪い。調査区北西端の落ちの堆積SX028からは木簡片が出土している。以下、遺構ごとに報告する。

3. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SC009 (Fig.13) 2区の中央東より直角に屈曲する溝を検出した。住居跡の壁溝と考えられる。溝は幅25cm、深さ13cmを測る。南北の延長は314cmで南側は調査区外に延びる。東西は165cmを測り東側は段落ちに切られる。溝の内側は外より5cmほど低く、溝と同様の土が部分的に残り、ほぼ床面と考えられる。柱穴や炉跡は確認できなかった。覆土はやや粘質の暗褐色土で遺物は数点の小片で、小型丸底壺・高杯脚・弥生土器の小片が出土した。遺構は古墳時代前期と思われる。

出土遺物 (Fig.14) 5は土師器の高杯の脚で焼成後の穿孔があり、外面に赤色顔料を施す。

SC010 (Fig.13) 2区中央東より検出した。平面長方形を呈し、518×408cmを測り、深さ10cm弱と残りが悪い。覆土は暗褐色粘質土を主体とする。北東側は調査区外に広がり、南西端は搅乱に削平を受けプランが確認できていない。SD002、003、SB022に切られ、SB021を切る。

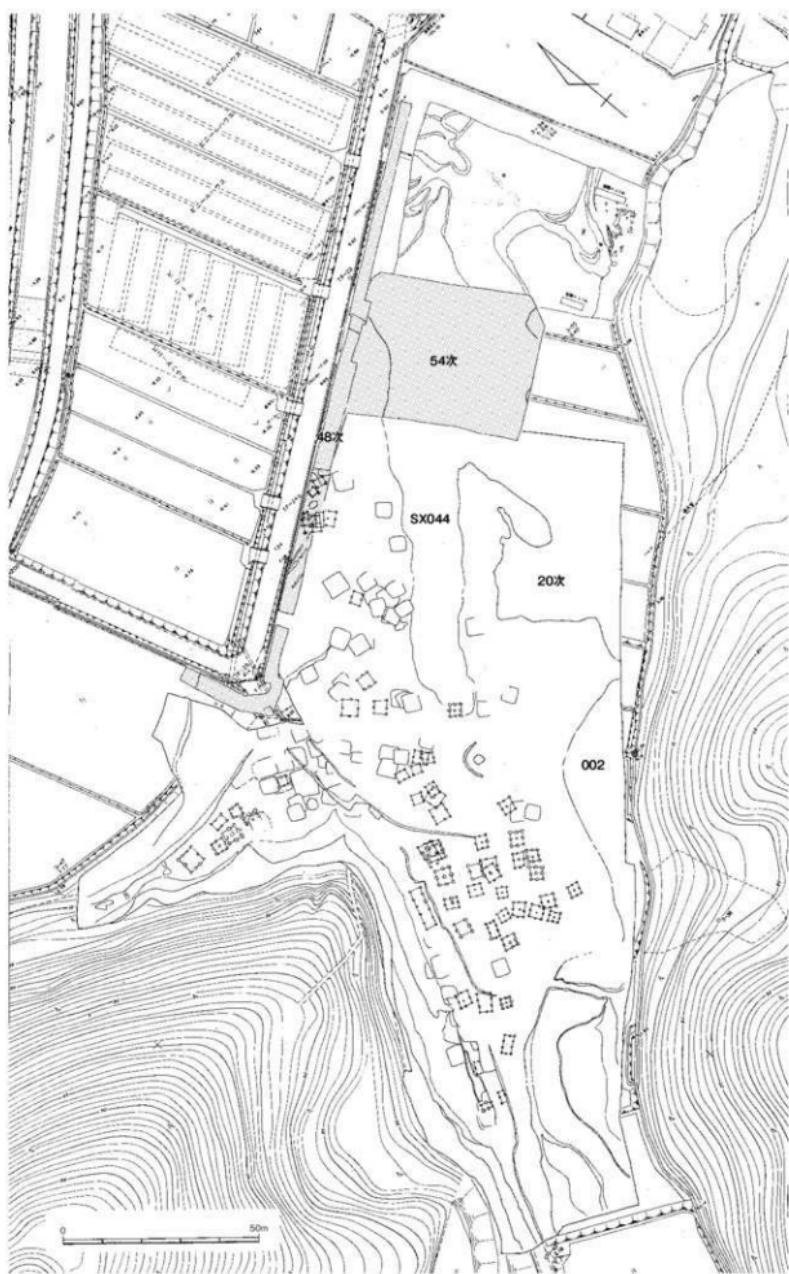


Fig.11 第20次・48次・54次調査地点遺構配置図 (1/1500)

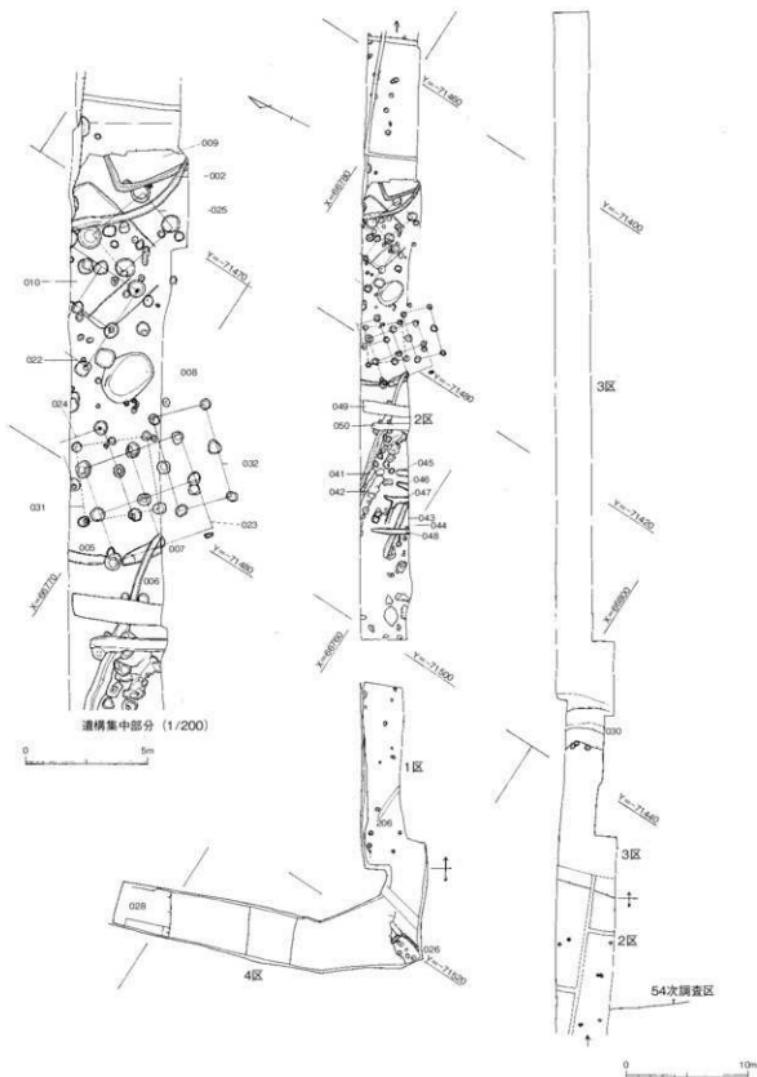


Fig.12 第48次調査地点遺構配置図 (1/400-200)

西側の壁に沿って幅1m前後に灰褐色粘質土に黄褐色土ブロックが入った堆積があり、他の覆土と明瞭な不整合を成す。貼り付けのベッド状遺構と考えられる。この差異は検出面で確認しており、ベッド状遺構の高さは不明である。また、ベッドを除去した床面はやはり帯状のくぼみとなる。平面を図示していないがa-b断面には示した。

炉は遺構の中央の同じ位置に面を違えて2基を確認した。炉1は遺構検出面（上面）で確認した径30cmほどの平面円形を呈し、深さ7cmを測る。覆土は炭粒、焼土粒を多く含む灰色粘質土で底の大部分が焼けて赤色を呈す。この面を床面とすると今回掘削した覆土のすべてが貼り床となる。炉2は覆土を除去した黄褐色粘質土上面（下面）で検出した。位置は炉1と重なるが層的に別である。径50cmほどの不整形を呈し、覆土は灰色、黄色の粘質土で下層に焼土、炭粒を多く含む。南側の壁上部は焼成により赤変する。2基の炉の存在から2面の床面が想定できる。硬化面は確認できていない。

ベッド状遺構を含めた覆土を除去した黄褐色土上面は西側、南東が下がり西側は溝状を呈す。主柱穴はFig.13のP1・2、P3と考えられる。P1は上面で、P2は下面で若干ずれるものの重なる位置で検出した。P3は下面で検出した。平面図ではSP110に切られるが、SP110掘削時に誤認した可能性がある。出土遺物（Fig.14）遺物は少ない。1から4は土師器で1は壺、2は壺の口縁、3は壺の頸部で外縁の叩きと内面刷毛目が残る。4は底部で若干の丸底があり小型の壺か。古墳時代前期と考える。

SC026 (Fig.13) 4区の屈曲部で確認した。重機による掘削時の掘り過ぎにより、遺構の立ち上がりと北側のプランを失った。南側は調査区外に広がる。北東隅は壁溝によりプランを知ることができる。南東側の土層b-cの6層がSC026の覆土であり、その北側の落ちが壁溝とすると東西幅275cmほどの方形プランが想定できる。ピットは断面に示したもの以外は浅い。南東側で土器がまとまって出土した。出土遺物（Fig.14）6から11は土師器である。6は壺で1/6からの反転。内面削り、外縁刷毛目調整である。7は小型の鉢で内面にまでの痕跡が見られる。8から11は精製の鉢である。古墳時代前期後半。

（2）土坑

SK008 (Fig.13) 2区中央で検出した平面楕円形の土坑で228×188cmを測る。断面逆台形を呈すが底がレンズ状となり下端ははっきりしない。覆土は暗茶褐色粘質土で遺物が比較的多く出土したが原位置を保つものはない。SP109に切られる。時期は遺物から6世紀代を考えている。

出土遺物（Fig.14）12から14は土師器の壺、15は生焼けの須恵器で高壺か。

（3）掘立柱建物

SB022 (Fig.15) 2区中央東よりに2×2間の総柱建物を想定した。北西半は調査区外である。SC010を切る。SP101の上端プランはややずれており切り合い関係にある別のピットの可能性がある。このピットの下端調査区間に確認した落ちがこの建物に伴うと考えている。方位はN-9°-Eで東西360cmを測り、南北は350cmほどと考えられる。柱穴堀方は径60cm前後の平面不整円形を呈し、SP102、104は小振りである。SP102、103、104では径15cmほどの柱痕跡を確認した。堀方の覆土は暗褐色粘質土を主体とし黄褐色粘質土がブロック、互層となって入る。

出土遺物（Fig.16）16は土師器の取手、17から19は須恵器である。

SB023 (Fig.15) 20次調査区に広がる2×2間の総柱建物を想定した。南端のピットが小型であるが、柱痕跡のみの掘削の可能性もある。

出土遺物（Fig.16）20と22が須恵器の他は土師器でいずれも小片である。

SB024 (Fig.15) SP113、115、120がほぼ等間隔で並ぶ。これにSP118を束柱として調査区外に広がる2×1件の建物を想定した。

出土遺物（Fig.16）26・30・31・32が土師器、27・28は弥生土器、29は須恵器の壺で小片である。

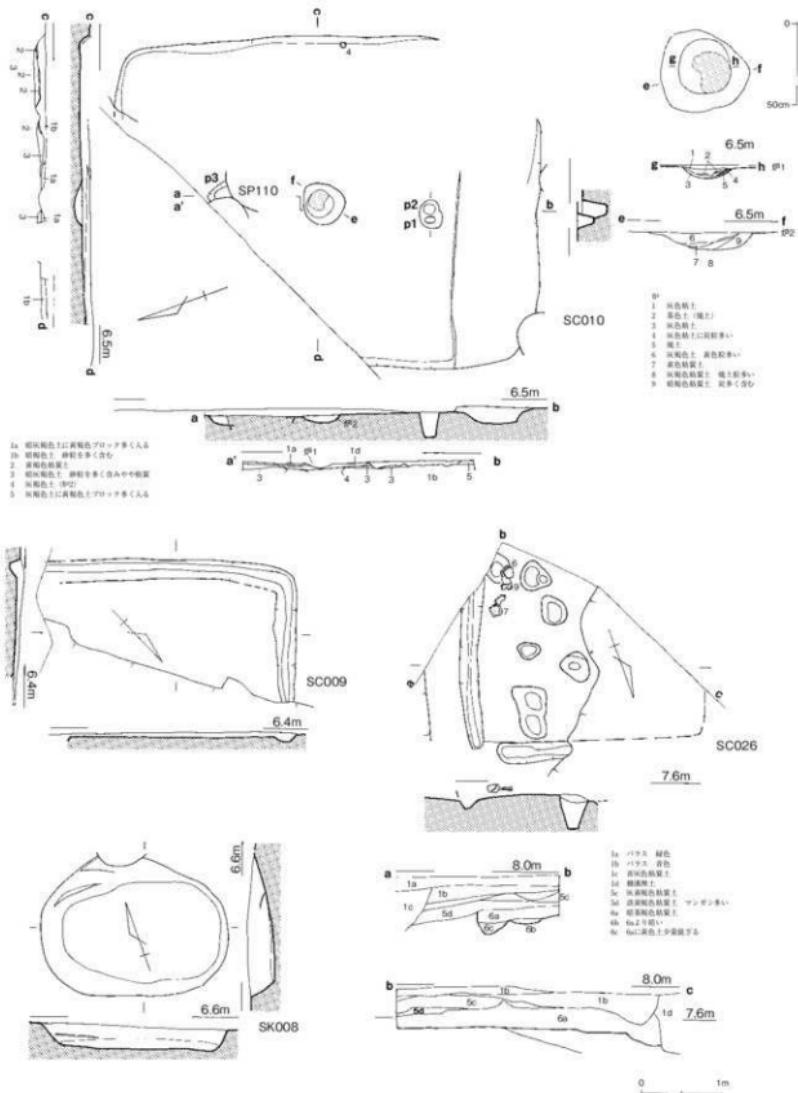


Fig.13 壇穴住居SC009-010-026、土坑SK008実測図 (1/60-30)

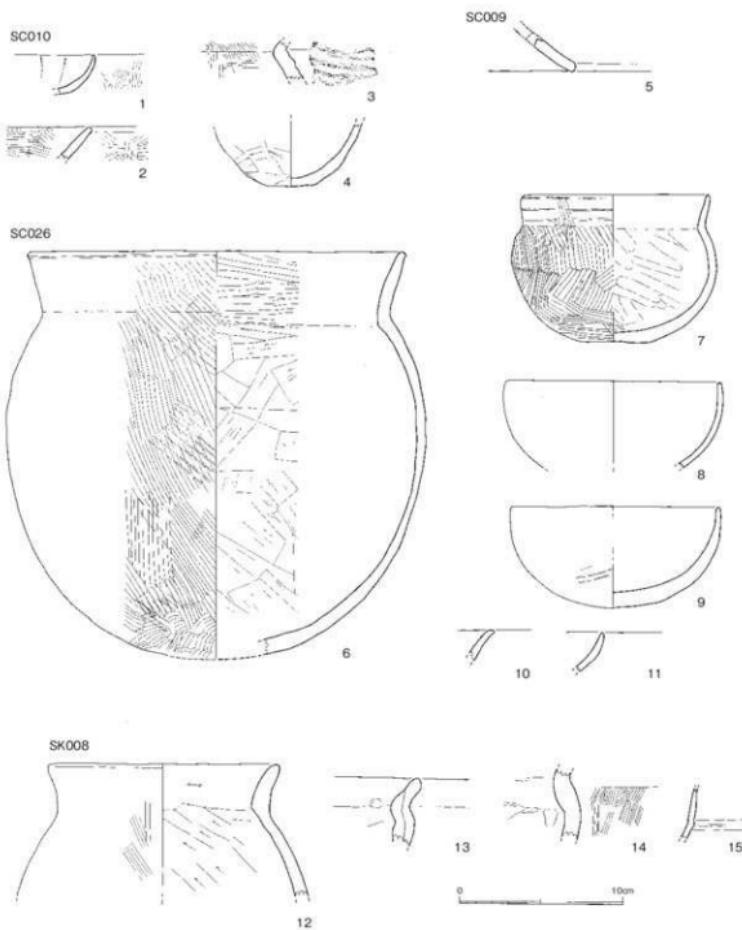


Fig.14 SC009-010-026、SK008、出土遺物実測図 (1/3)

SB025 (Fig.15) 2区中央東より検出した1×1間の建物で、周囲のビットとは規模、覆土を異にするためまとめた。方位はN-68°-Wで南北260cm、東西190cmを測る。SP108とSP158はSC010に、SP159はSC009に切られる。覆土は暗茶褐色粘土で他のビットより色調は薄い。遺物は小片で土師器、弥生土器が出土している。

SB031 (Fig.15) 1×1間の建物で柱間が300cmとやや長いが、間隔が揃い、ビットの底の深さもほぼ同じである。遺物は少なく土師器のみである。

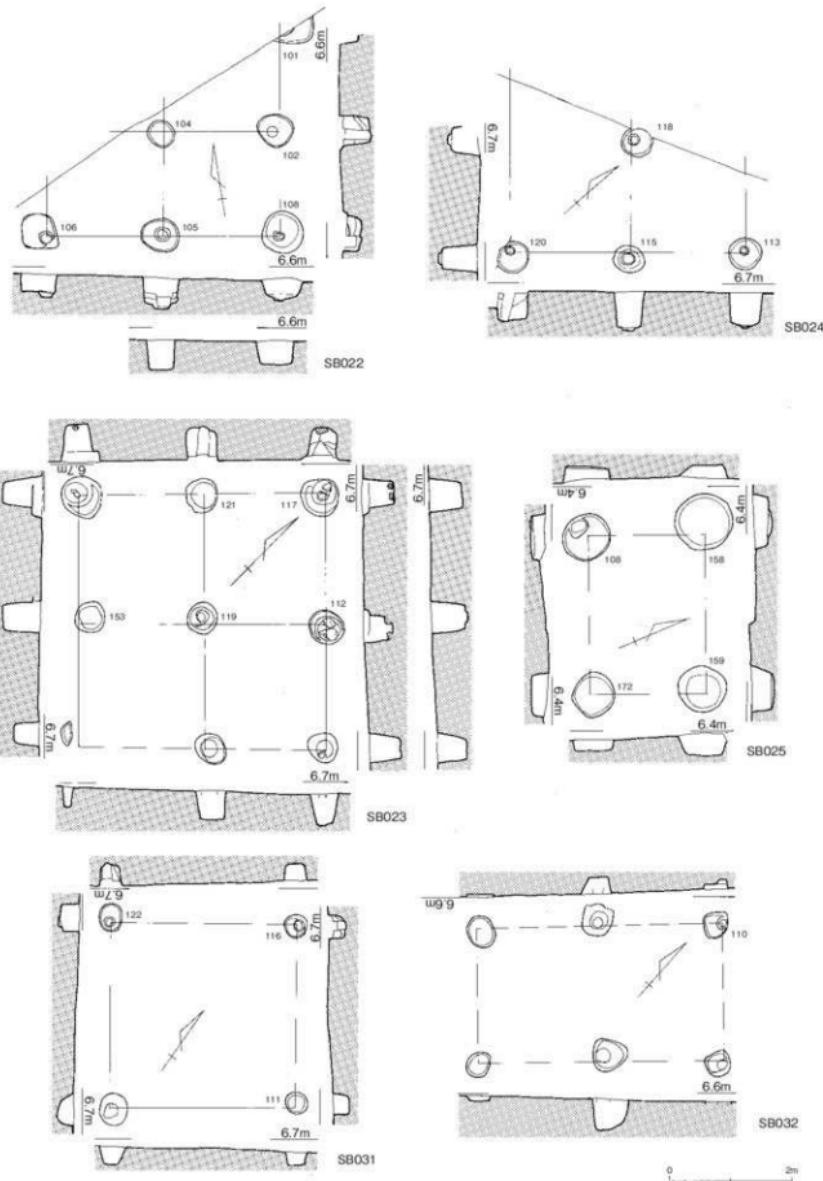


Fig.15 挖立柱建物SB022・023・024・025・031・032実測図 (1/80)

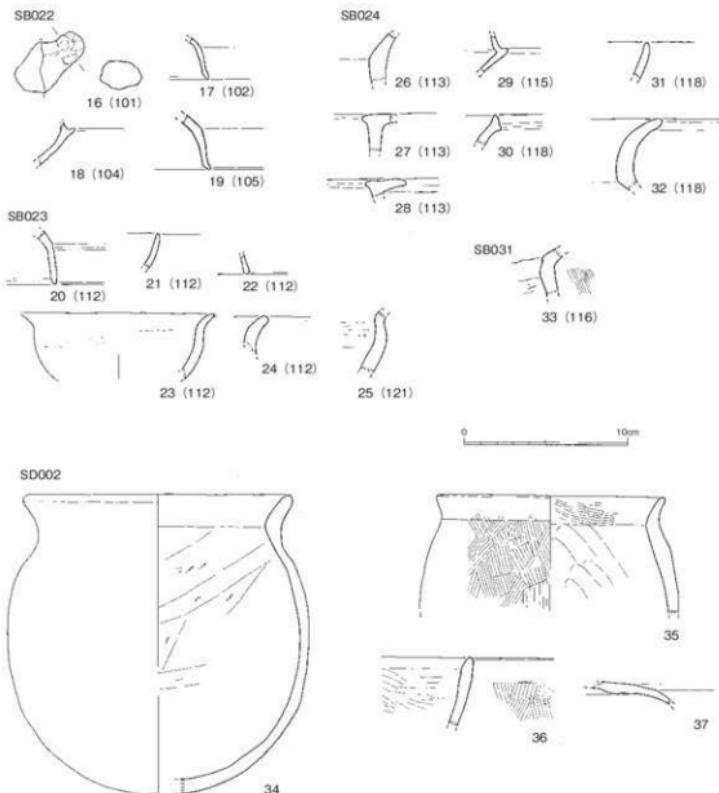


Fig.16 SB022-023-024-031、SD002出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.16）33は土師器の壺の頸部である。

SB032 (Fig.15) 20次調査区に広がる1×2間の建物を想定した。やや深いピットがあるが、平面的に並ぶ。

(4) 溝

以下に記述する溝はSD002・005を除いて水田耕作に伴う遺構と考えられる。特にSD045からSD048は近年の暗渠である。位置はFig.12に示した。

SD002 (Fig.12) 2区中央東よりを弧を描いて走り、北西方向に調査区外へ延びる。SC010を切る。幅32cm、深さ20cmを測り、壁は直に立つ。覆土は茶褐色シルト質粘土で底は粗砂となる。

出土遺物（Fig.16）34・35は土師器の壺、36は同じく壺か。37は須恵器の壺である。6世紀代か。他に148の砥石が出土している。

SD005 (Fig.12) 2区中央西よりを南北方向に走り、SD006、007を切る。幅34cm、深さ3cmを測り、

覆土は灰茶褐色土で砂粒を多く含む。須恵器、土師器の小片が出土している。

SD006 (Fig.12) 2区西側で東西方向に走る。幅56cm、深さ10cmを測り延長11mを検出した。覆土は砂粒を多く含む淡茶褐色粘質シルトで底は粗砂となる。SD007を切る。土師器小片2点が出土した。

SD007 (Fig.12) 2区西側で南北方向に走る。幅52cm、深さ10cmを測り、延長180cmを確認した。SP153を切る。覆土は暗茶褐色粘質土で砂粒を少量含む。土師器、弥生土器小片が出土している。

SD041、042 (Fig.12) 2区西側で溝底の深い部分が不整円形の浅いくぼみが断続的に列をなして並ぶ。深いところで10cmを測る。SD042は西半に溝底が残り幅80cm、深さ2cmを測る。SD006にほぼ並行しSD041がこれを切る。覆土は砂粒を含む茶褐色粘質シルトである。土師器片などを少量含み、以下の溝も同様である。

SD043、044 (Fig.12) 2区西側をSD006にほぼ並行する。幅45cm、深さ5cmを測る。覆土は淡茶褐色粘質シルトでSD047、048に切られる。

SD045～048 (Fig.12) 2区西側で南北方向に走る溝でいずれも北側が削平により途切れる。幅45～60cm、深さ3～5cmを測る。覆土は淡茶褐色粘質シルトである。

SD206 (Fig.12) 1区で東西方向に走る。幅30cm、深さ1cmと底のみが残存する。覆土は淡茶褐色粘質シルトである。

この他、下端を記載していない直線的な溝は近年の暗渠である。底にはSD049が貝殻を、他は竹を埋めている。

(6) 落ちおよび包含層

SX030 (Fig.17) 20次調査のSX044および谷部002から続く深い谷への落ち際で遺物が集中して出土した。この落ちをSX030と呼称し報告する。まずここで3区全体について触れておく。2区東端の造構面は東へ緩やかに下がり、3区からはやや傾斜を増して落ち、SX030の落ちからは古墳時代までの遺物包含層5層が堆積する。特に落ち際に弥生時代中期から古墳時代前期までの遺物が多く出土し、この部分をSX030とした。これより西では遺物の出土はわずかであったため、幅1.5mのトレンチを重機にて掘削し北壁土層の観察を行った。5層が広がる谷部分は常に水が湧く状態であった。また、後の54次調査では隣接した箇所を調査し、SX030周辺とは一部重なる。

Fig.17にSX030部分の北壁の土層を示した。1層から3層は耕作土および客土である。4層は青灰色の粘質土でよくしまる。水田または湿地状の堆積と考えられる。古代、古墳時代の遺物が少量出土し、近世陶器も混じる。図の西側に上面からの掘削と考えられる暗渠があるが、堀方が不明瞭である。5層は谷状地形の堆積である。底はSX030部分で落ちる以外はほぼ水平で落ち際SX030から東に64mで若干立ち上がる。6層は無遺物層で3区西側は粘質土、中央部では粘質シルト、東側では砂疊層となりいずれも淡青灰色を呈す。層位的に別であろうが遺構とは無関係と考え分離していない。

SX030での落ちの範囲は東西4mほどで約40cmの比高差がある。5a層は粘質の強いしまりのある堆積で、5b層は砂を多く含む粘質土でしまりはなく水気を多く含んだ状態であった。遺物は古墳時代前期の遺物がまとまって出土し、少量の須恵器と弥生土器を含む。SX030以外の東側では古墳時代の土器がわずかに出土し、下層の5b層の方がやや多い。

出土遺物 (Fig.18～20) SX030出土遺物の後に、それより北東側の3区5層出土遺物についてふれる。38から81がSX030出土遺物である。38から43は土師器の壺でつぶれた状態で出土した。44は平底の鉢で外側底に叩き明瞭である。45から67は各器種の土師器で古墳前期のものが多い。61・62は製塙土器の底部である。68から76は弥生土器で中期前半から末の小片である。77から79は須恵器の壺でいずれも小片である。80は土玉で穴が貫通しない。81は土製品で丁寧なまで仕上げる。底に小穴があき、

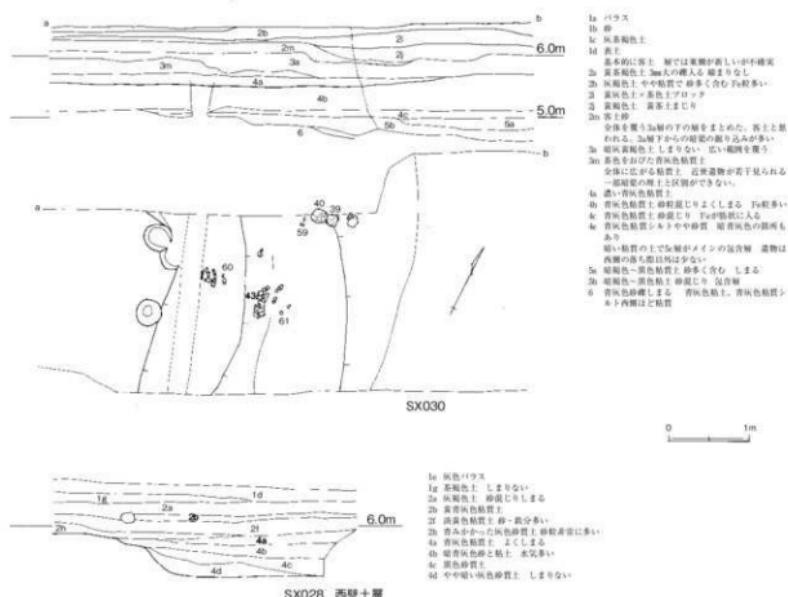


Fig.17 段落状構造SX028・030実測図 (1/60)

両端に側面との間に穿孔が見られる。47 gを測る。

82から107は3区5層出土遺物で、SX030と類似した時期幅である。82は須恵器の壺身、83から93は土師器の壺、94から102は弥生土器である。103から105は指押さえによる成形が顕著である。106、107は大型の壺の突端で刻みを施す。

SX028 (Fig.17) 4区は北西に向かって次第に構造面が下がり、SX028部分で顕著な段落ちを成し、落ち際に遺物包含層が堆積する。この段落ちをSX028とした。20次調査でも同様の落ちが確認されている。(Fig.11) また4区調査時には西側隣接地が調整池建築工事で深く掘削されており、その断面でも薄い遺物包含層が見られた。

段落ちは比高差60cmほどで、さらに北西に向かって落ちている。Fig.17の土層で1層は客土、2層は青灰色の粘質土で水田層と考えられる。図は4区全のものであり、3層はこの部分には広がらない。4層がSX028に堆積した土壤で4層に分けた。遺物は4b、4c層に多い。4b層は暗い青灰色の砂質土で水気が強い。白磁・黒色土器Aなど古代末までの遺物を含み、甕片などの須恵器が比較的多い。4c層は黒色の砂質土で土色が異質である。須恵器、瓦器、黒色土器など古代末までの遺物を少量含むが、古式土師器、弥生土器が主体である。4b・c層は木片などの有機物を含み、4b層で木片として取り上げた中に木簡134例があった。4c層はしまりのない砂質土で遺物は見られなかった。この下は砂礫層である。

出土遺物 (Fig.21, 22) 108から110は4b層出土遺物である。108・109は白磁IV類で玉縁口縁である。

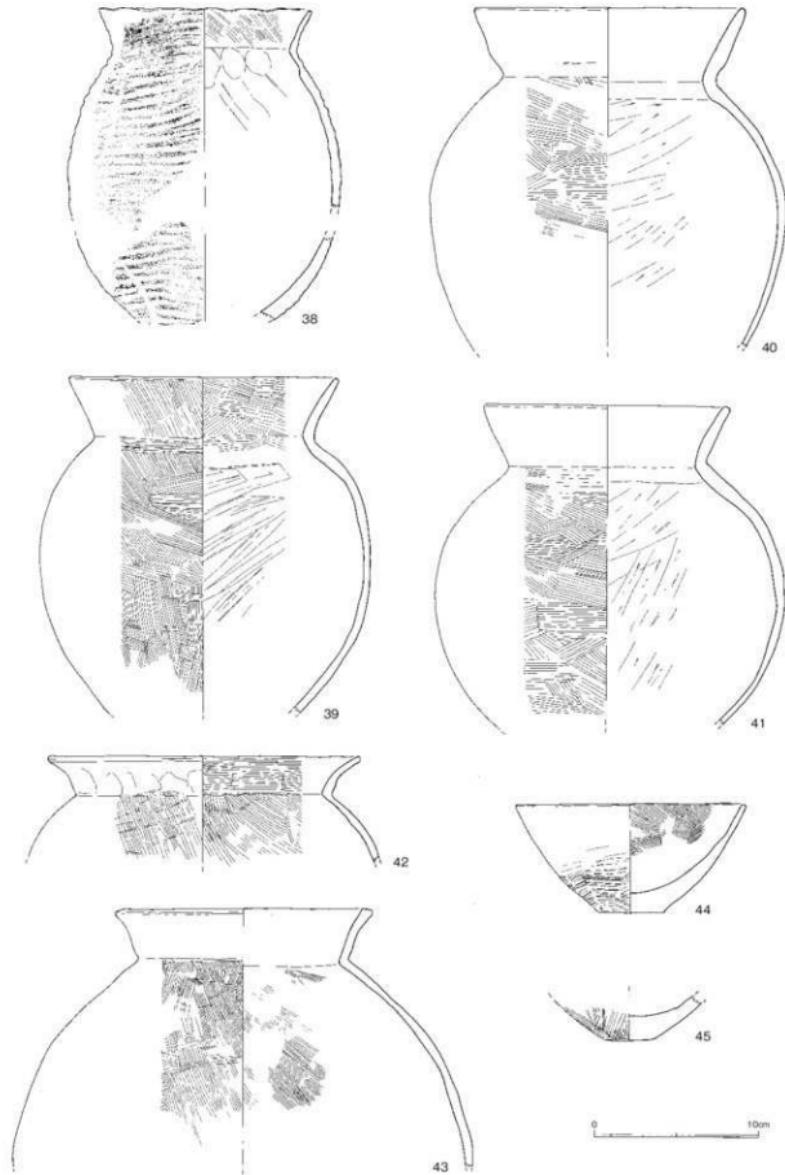


Fig.18 SX030出土遺物実測図 (1/3)

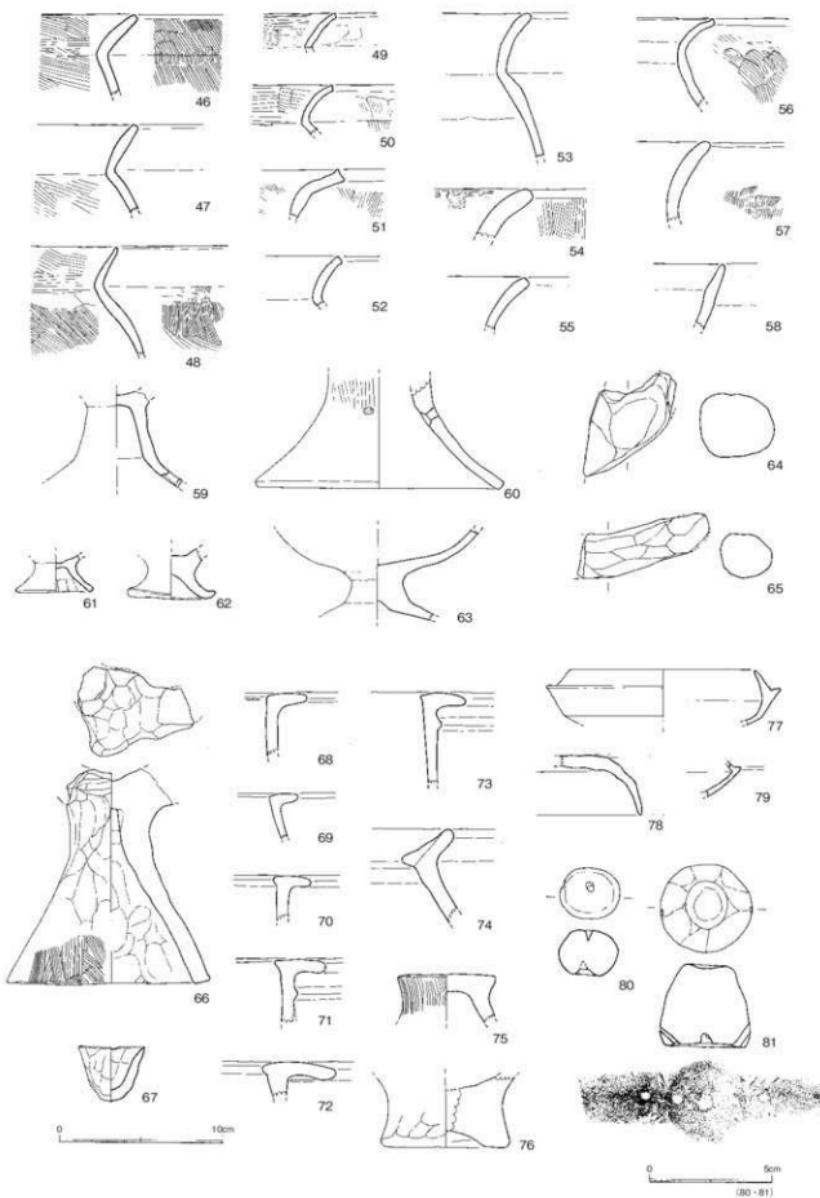


Fig.19 SX030出土遺物実測図 (1/3・2)

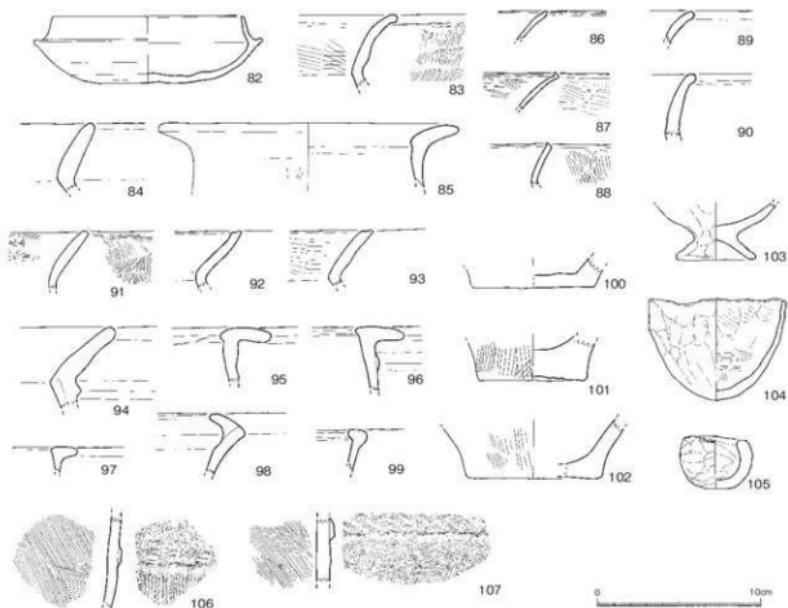


Fig.20 3区出土遺物実測図 (1/3)

110は黒色土器Aの椀、111は須恵器の坏で高台が付くと考えられる。112・113は須恵器の坏身、114から118は土師器である。119は弥生後期の器台で口唇部に刻目を施す。

120から133は4c層出土遺物である。120は黒色土器Bの椀、121は瓦器か。123から130は土師器、132は弥生中期の甕である。4b層より古墳時代の遺物が多い。133は指頭圧痕が顕著な粘土塊で接合面からとれたものかもしれない。134・135は木簡である。枝等の有機質と一緒に出土した。頭部に抉りが入り、いざれも端部が破断する。134は頭部に抉りが入表面は平滑に仕上げられ墨書状の痕跡が片面に見られる。135は表面に年輪の凹凸が顕著である。136は表面が未調整で木簡であるかは不明である。137は表面が平滑に仕上げられ片側の短辺が欠損する。2つの穿孔が見られる。138・139は幅狭の木片で加工が見られ、関連するものと考えられる。

(7) 縄文土器 (Fig.23)

各地点出土の縄文土器をまとめて報告する。140から145はSX028から出土した深鉢で条痕調整が見られる。141はSC026出土でリボン状の突帯を添付し、黒川式の深鉢片と考えられる。142は2区出土の底部で晚期と考えられる。

(8) 縄文時代早期以降の石器 (Fig.24)

146は黒曜石製の石鎌で全体に風化が著しい。147は安山岩製の尖頭器である。148は縦長薄片に調整剥離を施す。スクレーパーまたは石錐の可能性がある。149は安山岩製のスクレーパーである。146

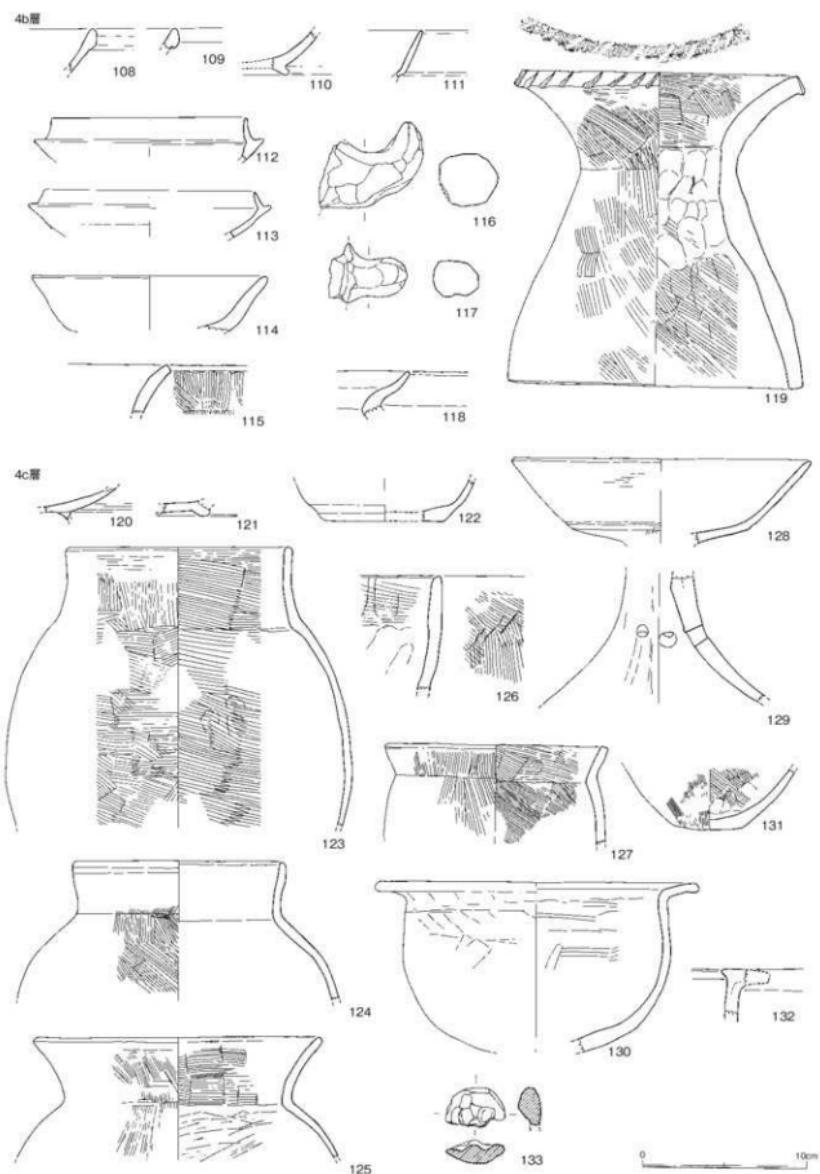


Fig.21 SX028出土遺物実測図 (1/3)

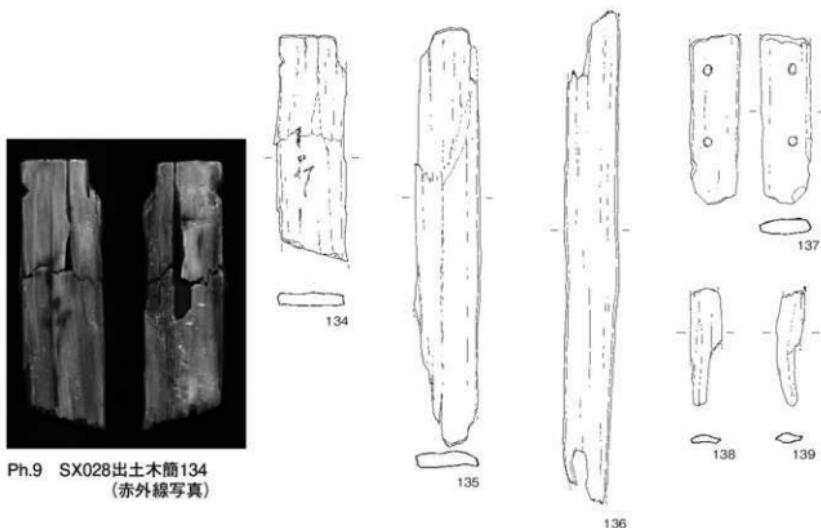


Fig.22 SX028出土木器実測図 (1/2) 0 5cm

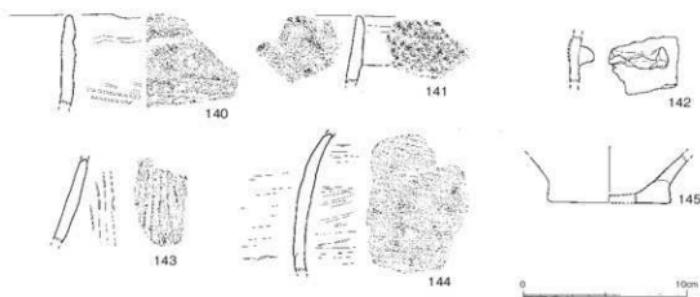


Fig.23 縄文土器実測図 (1/3)

から149は早期または前半期のものであろう。150は片岩系の石斧でSX030出土である。151はSD002出土の砥石で2面が残る。152、153は玄武岩製の磨石である。

48次調査では竪穴式住居3棟、掘立柱建物6棟等を確認し、20次調査地点の遺構の広がりに加えることができた。またSX044から続く落ちのプランを確認した。遺構面は北西の大原川に向かって広がり、いずれか落ちていくと考えられる。4区のSX028で出土した木簡は注目される。狭い調査範囲で時期を特定することは難しいが、北側に続く落ちに遺物の分布も広がる可能性がある。

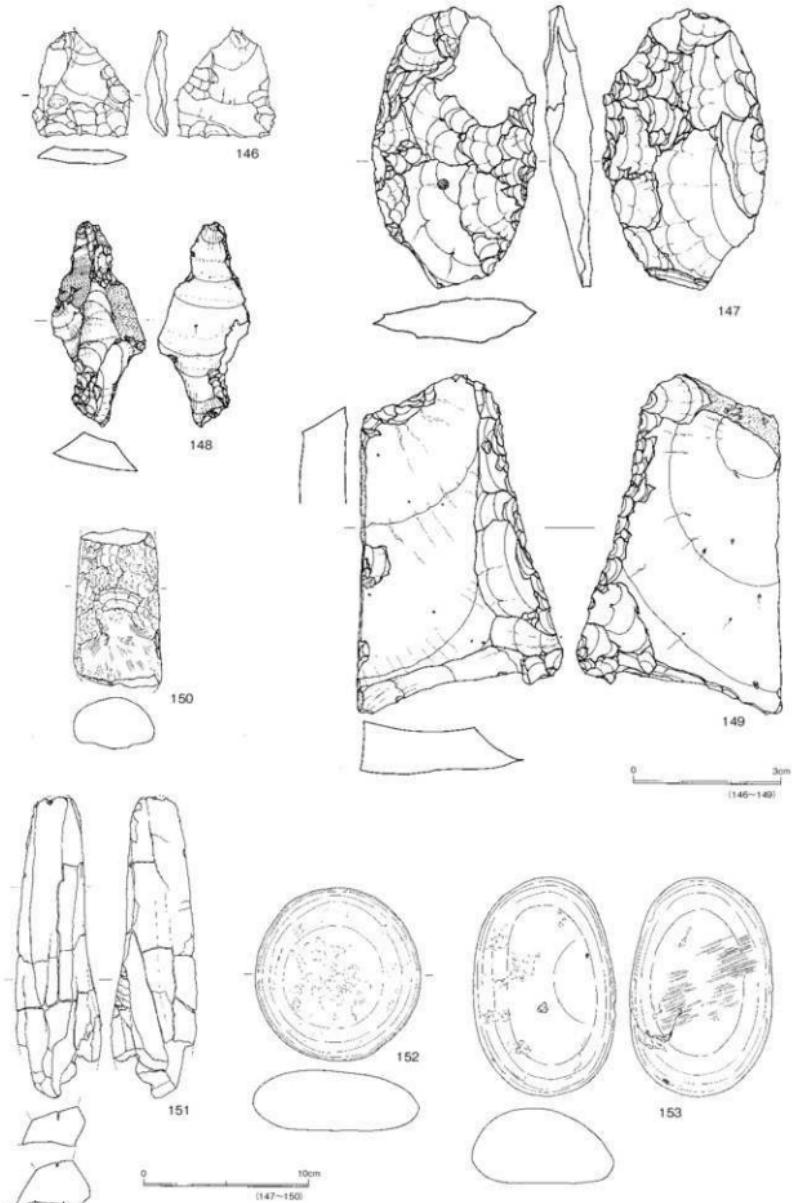
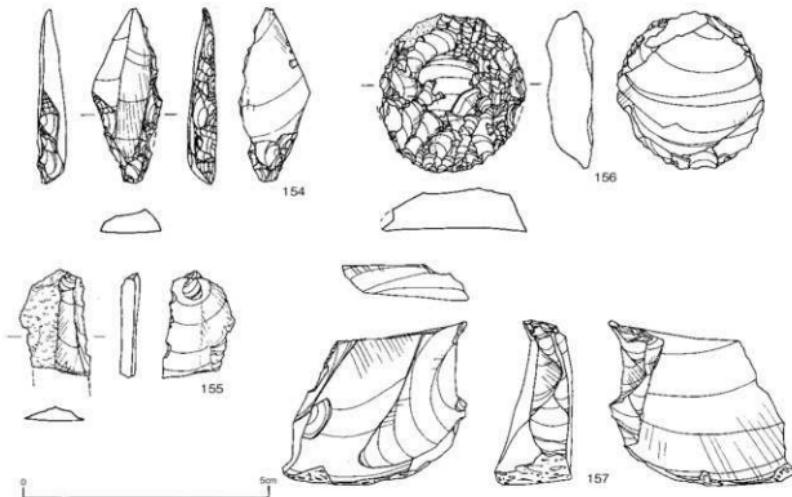


Fig.24 出土石器実測図 (1/1·3)



(9)48次調査の旧石器資料出土した多数の剥片石器類の中から旧石器時代に所属する資料が6点抽出された。石材は何れも良質な黒曜石であり、円礫素材面と強い風化面の状況から、従来「牟田産」とされる西北九州産出の石材である。154はナイフ形石器で縦長剥片の基部を先端とし、右側縁全体と左側縁基部の二側縁にプランティングを施す。また裏面基部に平坦剥離がある。全長約3.5cmと小型であるが端正な「九州型」ナイフ形石器である。155は縦長剥片であり、背、裏面共に一方向からの単設打面である。背面に大きく礫面を残すことから剥離作業初期の作業面調整剥片とも見られる。156は搔器であり、背面の一部に礫面を残すものは円形に仕上げられた小型のラウンド・スクレイバーである。157~159は石核である。何れも厚さ1.5~2cmの分割礫もしくは板状素材を利用している。157は板状素材の端部から厚めの縦長剥片を剥離しているが、階段状剥離の発生で中断している。158、159は分割礫の主剥離面や礫面を作業面として、縦長剥片を剥離している。石核調整は裏面側に僅かに認められるが、158はガジリが大きく判然としない。形態そのものは「磯道技法」の延長上あると考えるが、著しく粗雑、簡略化された形態と見るべきであろう。

Fig.25 旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図（1/1）



Ph.10 2区全景（東から）



Ph.11 2区遺構集中部分（南から）



Ph.14 SC010 (東から)



Ph.15 SC026 (東から)



Ph.12 3区全景 (南西から)



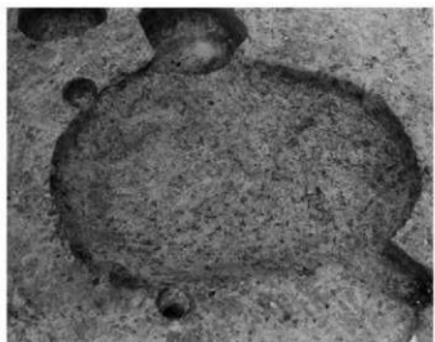
Ph.13 4区全景 (南東から)



Ph.16 SC009・SD002 (東から)



Ph.19 SC023 (東から)



Ph.17 SK008 (南から)



Ph.20 SX030 (東から)



Ph.18 SC010検出時・SB022 (南から)



Ph.21 SX028土層 (東から)

V 第54次調査の記録

1. 調査に至る経緯

第20次調査地点は古代の建物群や「大寶元年」などの紀年銘木簡などが出土し、調査途中で保存が決まり埋め戻されている。調査区は西側の1区と、間をおいて東側の2区とからなる。

その後、平成20年、造成計画をもとに20次調査区の保存範囲を再確認したところ、保存予定地は建物などの遺構が多く確認された1区部分のみであり、2区や調査時駐車場等として使用していた未調査部分は含まれないことが判明した。このため20次調査の1区と2区の間を54次調査として、平成20年10月16日から平成21年1月9日の日程で本調査を実施した。調査面積は1872m²である。またこの間、調査途中で保存が決まった36次調査地点の経塚古墳と近世墓の範囲の埋め戻し作業を行った。

2. 調査の概要

調査地点は北側に開く谷の下流に位置し、標高7.3mほどで水田として造成されていた。調査範囲は東西を第20次調査1・2区（第1013集で既報告）、北側を48次調査で開まれた範囲で、54次調査では各調査区の端を確認した（Fig.11・26）。南側は工事用の道路として使用されており、顯著な遺構が確認できなかったため調査を行っていない。また調査区中央には造成工事に伴って設置された排水管が横断しており、これを残したままでの調査となった。便宜的に排水管の北側を1区、南側を2区とした（Fig.26）。土量が大きいため調査から反転を繰り返しての調査となった。

客土、旧耕作土等を除去した後、標高5m前後で遺構面に達する。1区（Fig.26）の北西には20次1区、48次から続く黄褐色粘質土を地山とする高まりがあり若干の遺構がある。南東隅にも20次2区の続きで淡黄褐色土を地山とする高まりがある。その間に20次調査のSX044と谷002の下流にあたる浅い谷の堆積となっている。谷部については、数本のトレンチ調査を行った後、大きく上下層を確認し記録を行った。上層は暗褐色の粘質土の堆積で弥生時代以降・古墳時代を中心とした遺物を含む。下層は粗砂・有機質土壤が幾重にも重なり、上部で若干の縄文時代の遺物を採集した。以下1区の遺構、谷部、出土遺物の順で報告する。

3. 遺構と遺物

（1）1区の遺構

北西隅の標高5.8mを頂部として黄褐色粘質土の面が南東に向かって緩やかに落ちる。これを覆う暗灰褐色の粘質土を標高5.3m付近まで重機で下げ、以下を手掘りで確認した。標高5m付近から若干傾斜が強まり、黄褐色土が途切れ、下層の青灰色粘土層が広がる。黄褐色粘質土の面では、くぼみ状の溝などを検出したが明瞭な遺構は見られない。西側を中心に5cmから10cm大の浅い小ピットを密に確認した。暗褐色の粘質土がたまっており、上層での耕作に伴うものと考えられる。標高5mの黄褐色が途切れた付近で溝、杭列、ピットを検出した。以下これについてふれる。

SK001 (Fig.27・28) 100×80cm、深さ5cmほどの略円形のくぼみ状の遺構で弥生中期の土器がややまとまって出土した。くぼみの周辺にも弥生土器が散らばる。破片のみで形になるものはない。遺構は青灰色粘土に掘り込み、暗褐色粘土に砂を多く含む覆土であった。1、2は鋤形口縁の甕、3は鉢、4は高壺の脚、5は器台で中期中頃と考えられる。

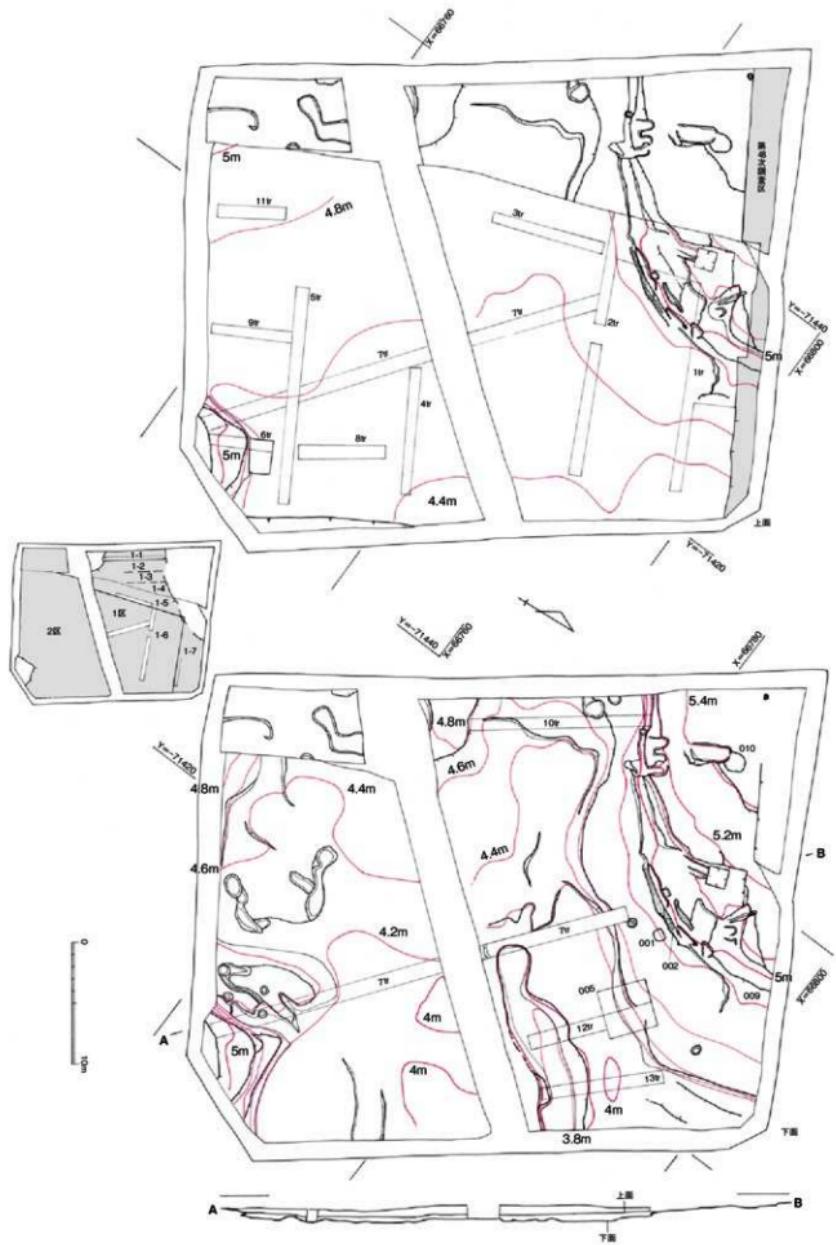


Fig.26 第54次調査区全体図 (1/400)

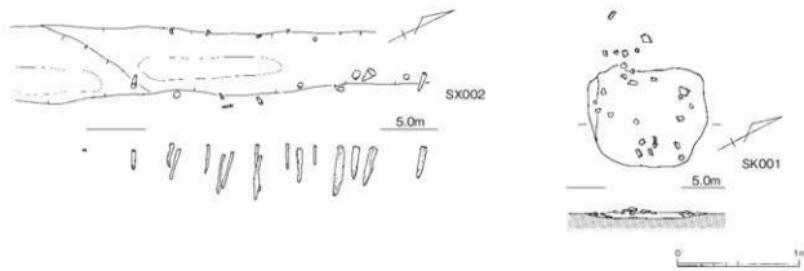


Fig.27 土坑SK001、杭列SX002実測図 (1/40)

SX002 (Fig.27) SK001に接する浅い溝で、等高線に沿って弧状にめぐる。この溝に重なるように2列の杭列を確認した。溝の幅は50cmで深さ2、3cmと浅く不明瞭で、底の部分のみを確認したものと考えられる。覆土は暗褐色粘質土で時期は不明である。杭は径3cmほどの丸い材や、径10cmほどの材を1/2、1/4に割ったものがある。谷側の列に太めの杭を使用している。杭と溝との関連は確実ではないが、位置関係から伴うと考えている。時期は不明だが、覆土は谷部の4層に近く古墳時代後半か。

SX009 (Fig.26・28) 48次調査に接する斜面で弥生土器がやまとまって出土した。層位的は後に触れる4層である。6が逆L字形口縁で中期前半、9が外反口縁で前期、他は鋤形口縁で中期中頃のものである。8は無頭壺で穿孔が見られる。11は鋤先、15は広口口縁の壺でいずれも内面上部から外面に赤色顔料を施す。16は壺の蓋、17は壺、18は壺の底部である。

SX010 (Fig.26・28) 北西の高まりで検出した径160cm、深さ8cmほどの円形のくぼみである。暗褐色粘質土を覆土とし、土師器、須恵器が出土した。19は提瓶の胴部、20は土師質の脚、21は土師器の壺、22は須恵器の壺蓋である。

(2) 谷部

Fig.26の全体図に上下2面の図を示した。上面のコンタは後に述べる4層の下面、下面是5層の下面である。Fig.26の下に谷部を横断する7トレンチの断面略図を示した。

層序 Fig.29の1、3、7トレンチの土層で基本層序に触れておく。1、3トレンチの土層は、北西の同じ点から南東、北東方向のラインの層序である。1層は灰褐色粘質土で砂粒を多く含みよくしまる。遺物は少なく古代末を下限として出土している。2層は淡灰褐色粘質土で1層よりやや明るく粘性が強く砂粒は少ない。遺物は少なくやはり中世までを含む。3層は暗灰褐色粘質土で砂粒をほとんど含まない。古墳時代を中心とした遺物を少量含む。4層は暗褐色～黒色粘質土で砂粒を多く含み、標高5m付近でやや傾斜が急になった付近から堆積する。古墳時代から弥生時代中期の土器を中心に出土するが北西側の高まりに近い部分に集中し、谷の中央部ではほとんど出土しない。3、4層の下面是黄褐色・青灰色の粘土で、河川部内では5層である。5層は4層以下に堆積する粗砂を中心とした堆積で有機質を多く含む粘質土やシルトなどの細かな重なりを一括した。厚いところで40cmほどである。河川といふべき流れに伴うもので、7トレンチの断面でも幾つかの流れの単位がみられ、時期差があると考えられるが確認できていない。遺物はごく少なく、北西部付近の上部で若干の繩文土器が出土したほか、2区では底の堆積から弥生土器が出土している。のことからも、堆積に時期差が想定される。

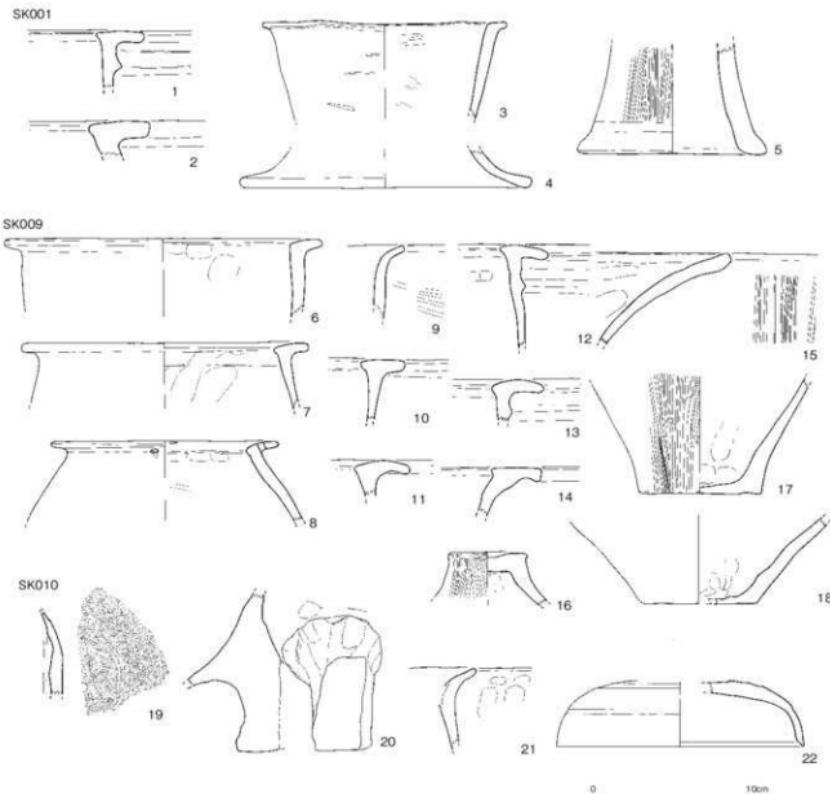


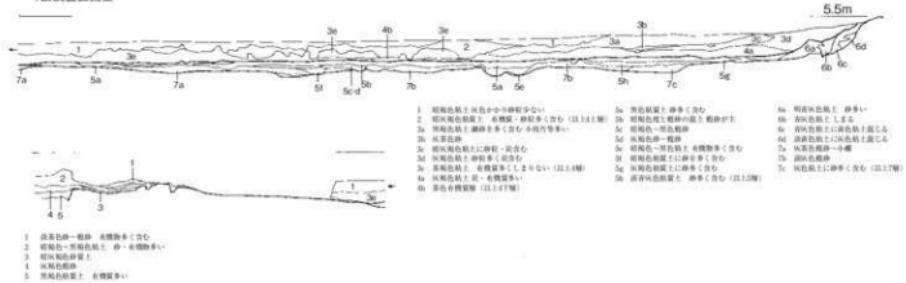
Fig.28 SK001・009・010出土遺物実測図 (1/3)

床は青灰色の粘土で、大枠で北西隅の高まりの青灰色土の地山と同じである。土層図は場所によっては異なった層名を付したものもあるが、遺物の注記は上記の層名で行った。以下の報告でもこの名称を基本層序として使用する。また以上の層序のうち4層と5層の間に不整合面があり、4層から上を上層、5層から下を下層とし、その略図をFig.26下に示した。

48次調査の層序との対応は1層が48次3区SX030土層 (Fig.17) の2b層下部、2層が同じく2c層、3層が同じく5a層、4層が同じく5b層である。48次で古墳時代の遺物がまとまって出土したSX030は4層に対応すると考えられる。20次調査では1013集Fig.28セクション3の8・9層が4層に相当すると考えられる。

上層の調査 1層上部まで重機で掘削し、1から9までのトレーニングを掘削し土層の記録を行った。5、7、10トレーニング以外は4層までの掘削である。遺物は4層を中心に出土したが、1区、2区ともに高まりに近い部分に多く、谷中央部からはほとんど出土しない。このため包含層の掘削は遺物が多い部分に限り、1区では標高5m付近から弧状に10mの範囲、2区では、高まりから3mほどの範囲である。

1区調査区西壁

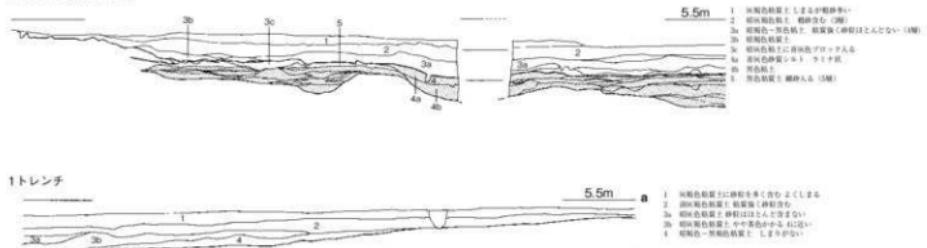


1. 黒褐色粘土・有機質多く含む
2. 黒褐色粘土・有機質・砂多く含む (13.1付)
3. 黒褐色粘土・有機質・砂多く含む
4. 黑褐色粘土
5. 黑褐色粘土・有機質多く含む (13.1付)
6. 黑褐色粘土・有機質多く含む (13.1付)
7. 黑褐色粘土・有機質多く含む (13.1付)
8. 黑褐色粘土・有機質多く含む (13.1付)

3トレンチ



アトレンチ東側 (II区)



1トレンチ



a

1. 黒褐色粘土上に砂多く含むが砂多く含む
2. 黒褐色粘土・有機質多く含む (2層)
3. 黑褐色粘土・有機質多く含む (2層)
4. 黑褐色粘土
5. 黑褐色粘土上に有機質多く含む (2層)
6. 黑褐色粘土・有機質多く含む (2層)
7. 黑褐色粘土

遺物が少ない部分については重機で掘削した。1区についてはトレンチを境に不規則ながら1-1から1-7の7区にわけて遺物を取り上げた。上流である1-1区ほど遺物は多い。

1-1～1-3区については4層の堆積が厚く上下層に分けて取り上げた部分がある。その状況をFig.29の調査区西壁土層断面に示した。図示した部分の上層は20次調査時に失われている。また1-1付近は南側にわずかに立ち上がりがあり、20次調査のSX044と谷部002の合流点と考えられる。1区の落ち際の遺物は20次調査SX044の統計と考えられる。

2区の層序については1区と若干異なっていたため、7トレンチの土層名称の後に1区で対応すると考えられる層位名を示した。

下層の調査 上層の記録の後、この時点で12、13トレンチを設定し、落ちを確認した。これはFig.26のコンタに現れている。また12トレンチの北西端部分では黒曜石の薄片が集中して出土する箇所があり、4m×4mの範囲を25cmメッシュで区切り土壤を水洗し遺物を採集した。この集中部をSX005と呼称している。今回、Fig.42に大型の黒曜石コア355を図示した。他の遺物については縦長薄片を中心とした分析を行った。

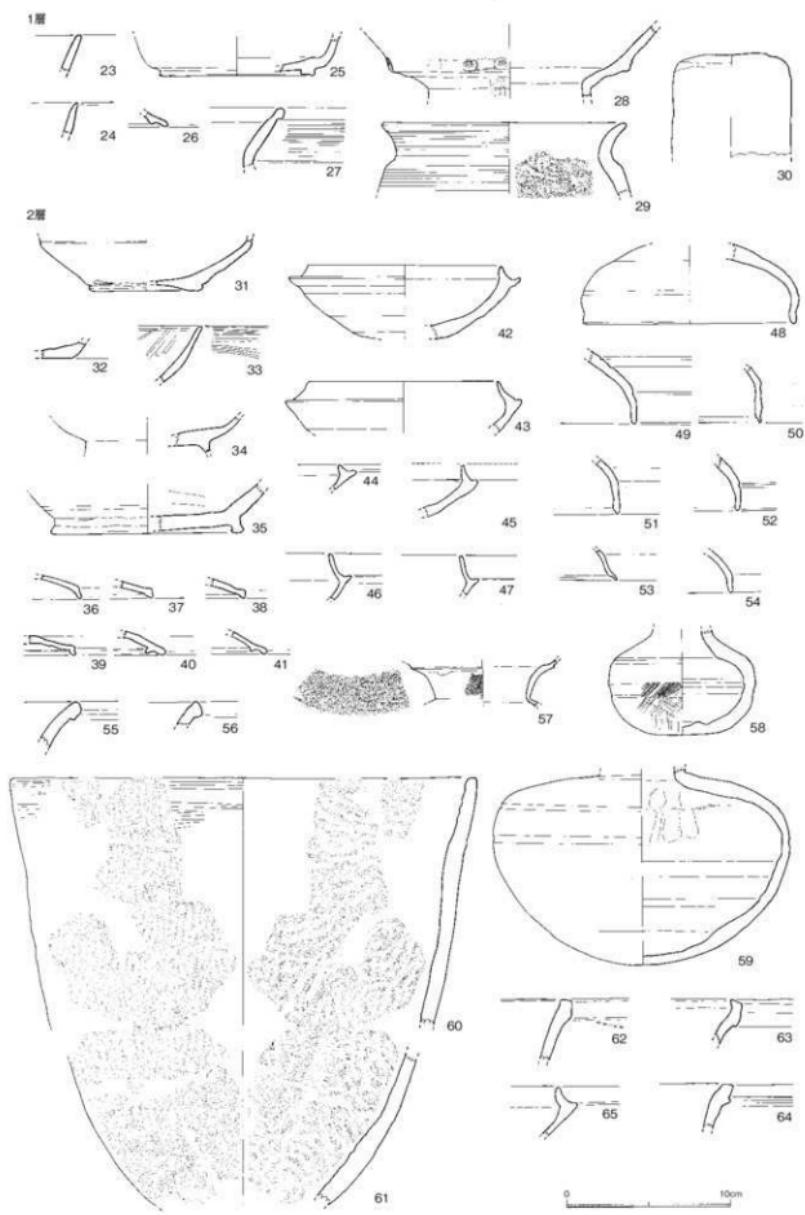


Fig.30 1区1・2層出土遺物実測図1 (1/3)

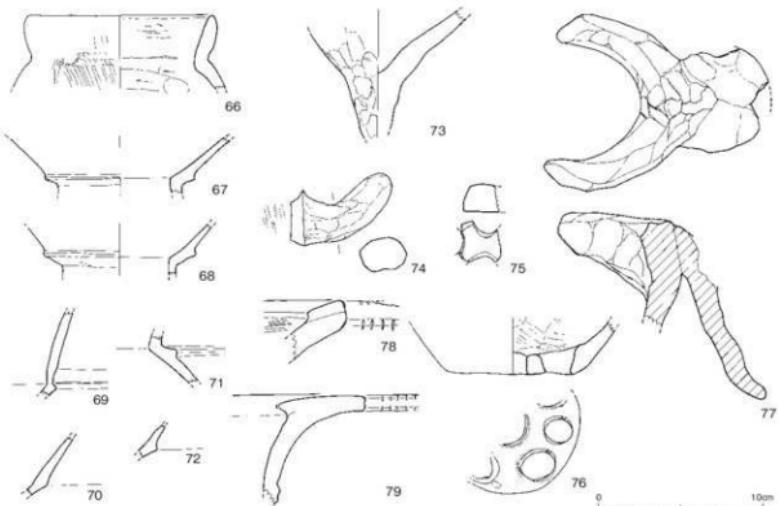


Fig.31 1区2層出土遺物実測図2 (1/3)

心に、未使用の薄片が多く出土しているが整理が完了していない。別の機会に報告したい。

5層については5、7、12、13トレンチで土層を確認し、若干の縄文土器・石器が7トレンチ1区とその周辺で出土した以外はほとんど遺物を確認することができなかった。本片などの有機物もあったが人工物は見当たらない。後で5層出土として報告する縄文土器は4層との境付近で主に1区で採集したものが多い。また5層は上流では堆積が薄く、調査区北西壁土層では厚さ20から30cmほどで下面の青灰色粘土に達する(Fig.29)。トレンチ調査の後は重機で青灰色粘質土の面まで下げ、Fig.26下の5層下面のコンタ図を作成した。

出土遺物 (Fig.30～38) 1区の弥生時代以降の土器についてを層ごとに、2区と土製品・木製品はそれぞれ一括して図示する。縄文時代の土器、石器については別項目で触れる。4層出土遺物は層序で触れた細分に際だった違いがないため一括する。

1区1層 (Fig.30) 23は青磁碗で龍泉窯系か。34は白磁で皿。25から27は須恵器。28は土師器で円形の浮文を添付する東海系の壺、29、30は土師質である。

1区2層 (Fig.30・31) 31は越州窯系の青磁、32は土師皿、33は黒色土器碗、34は土師器碗である。35から59は須恵器で6世紀後半から8世紀代を含む。60は土師質の壺で叩き・搔目が見られる。62から77は土師器である。67から72は鼓形器台で数個体がある。73は製塙土器に類似するが特に2次焼成は受けていない。78、79は弥生時代前期、中期の壺である。

1区4層 (Fig.32～37) 3層については図示していないが、小片が多く内容は4層に近い。80から

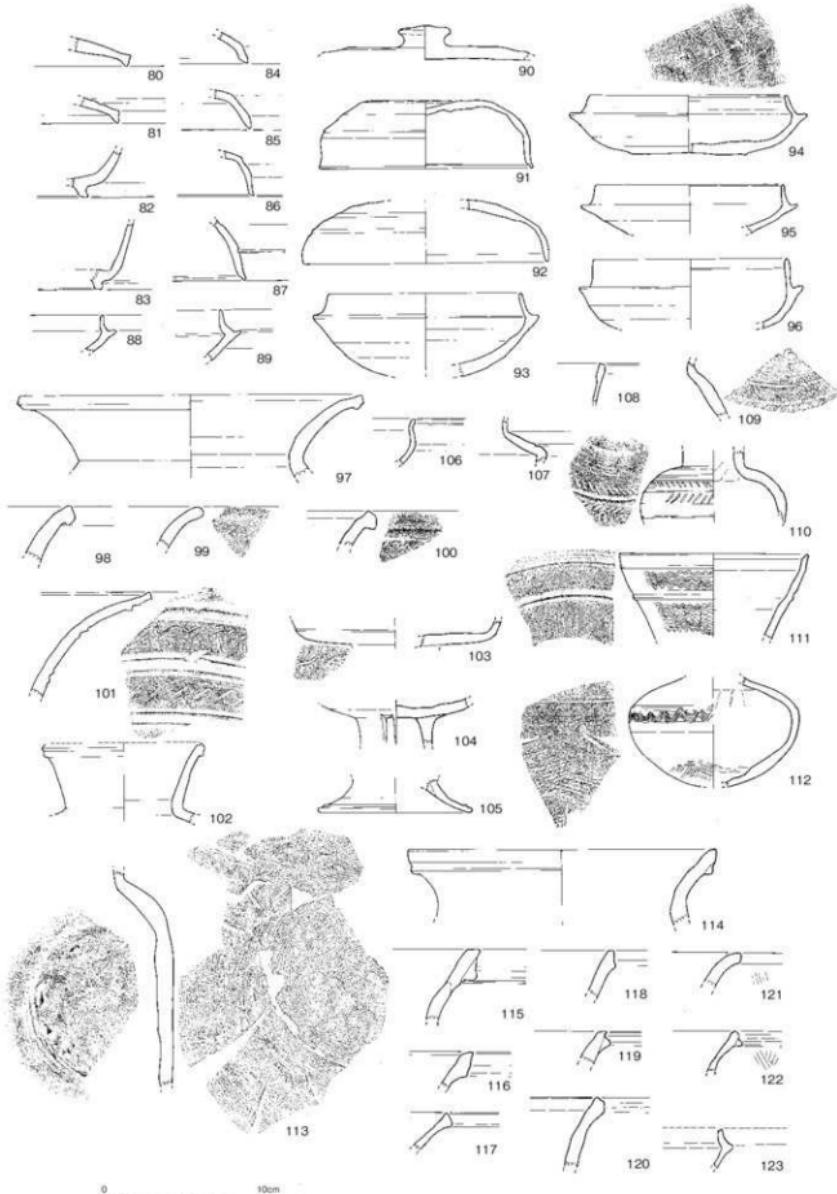


Fig.32 1区4層出土遺物実測図1 (1/3)

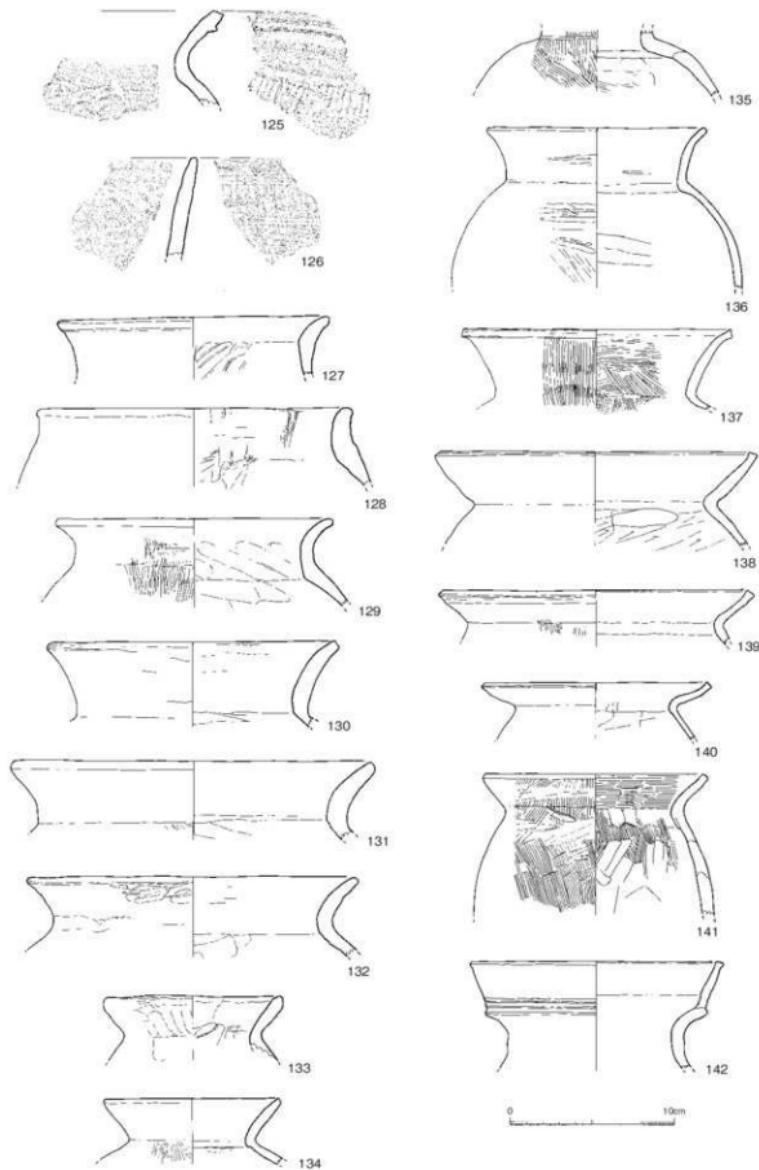


Fig.33 1区4層出土遺物実測図2 (1/3)

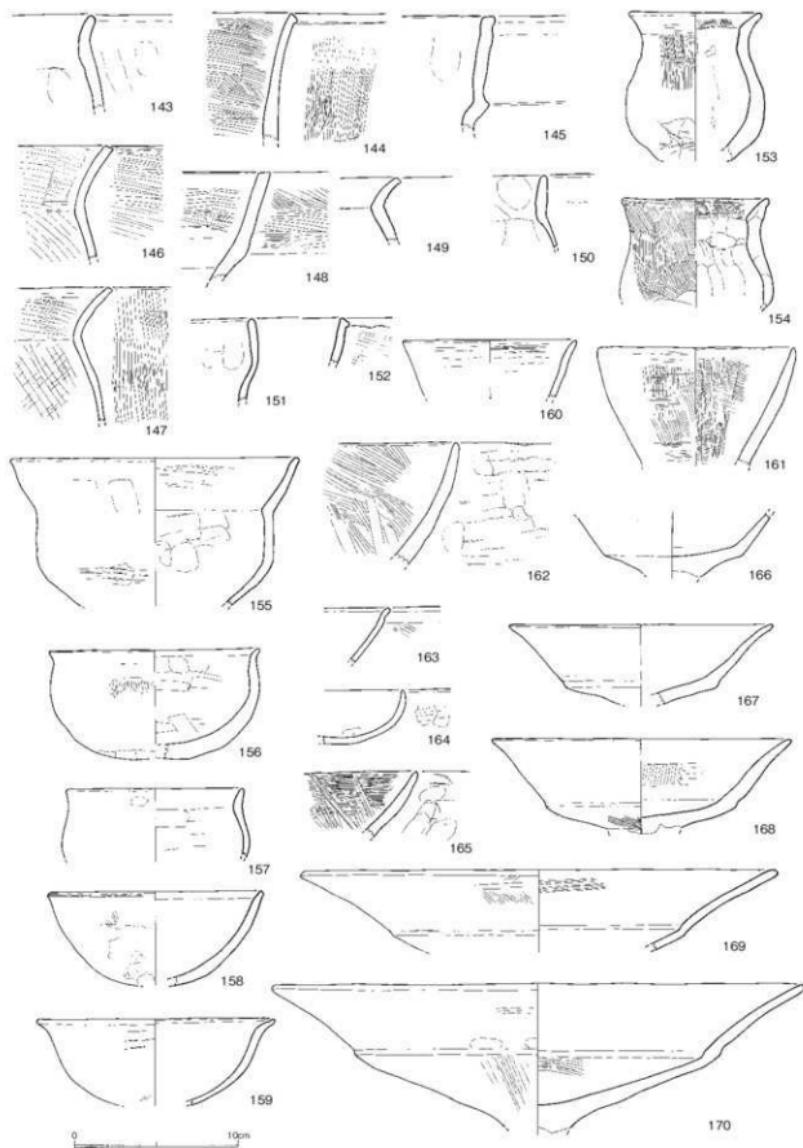


Fig.34 1区4層出土遺物実測図3 (1/3)

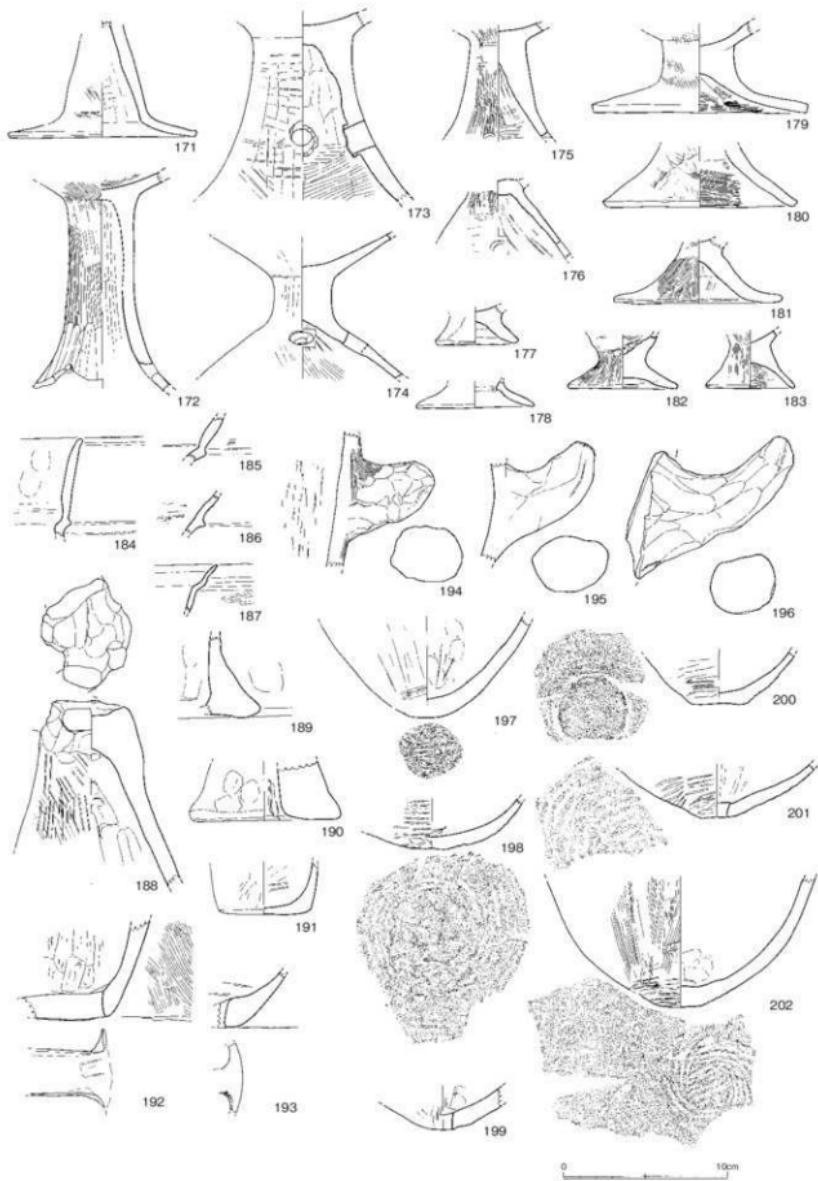


Fig.35 1区4層出土遺物実測図4 (1/3)

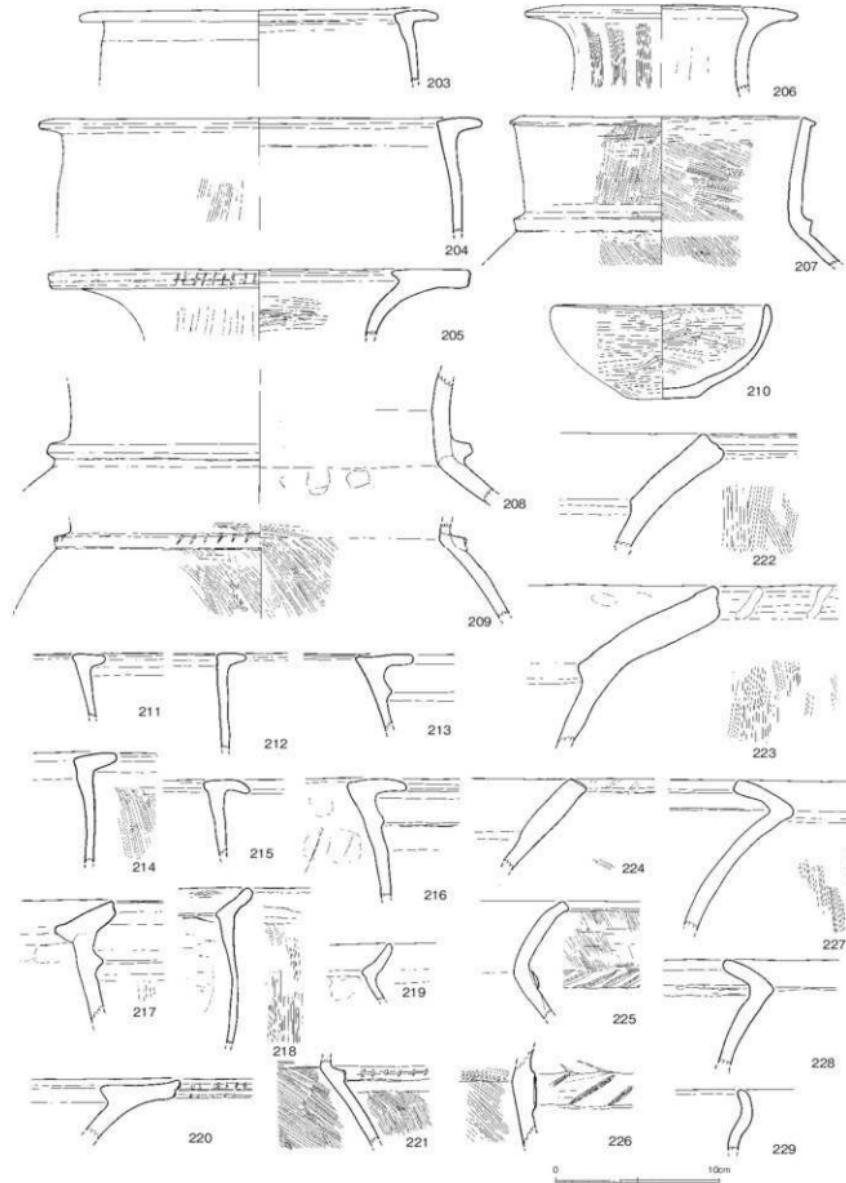


Fig.36 1区4層出土遺物実測図5 (1/3)

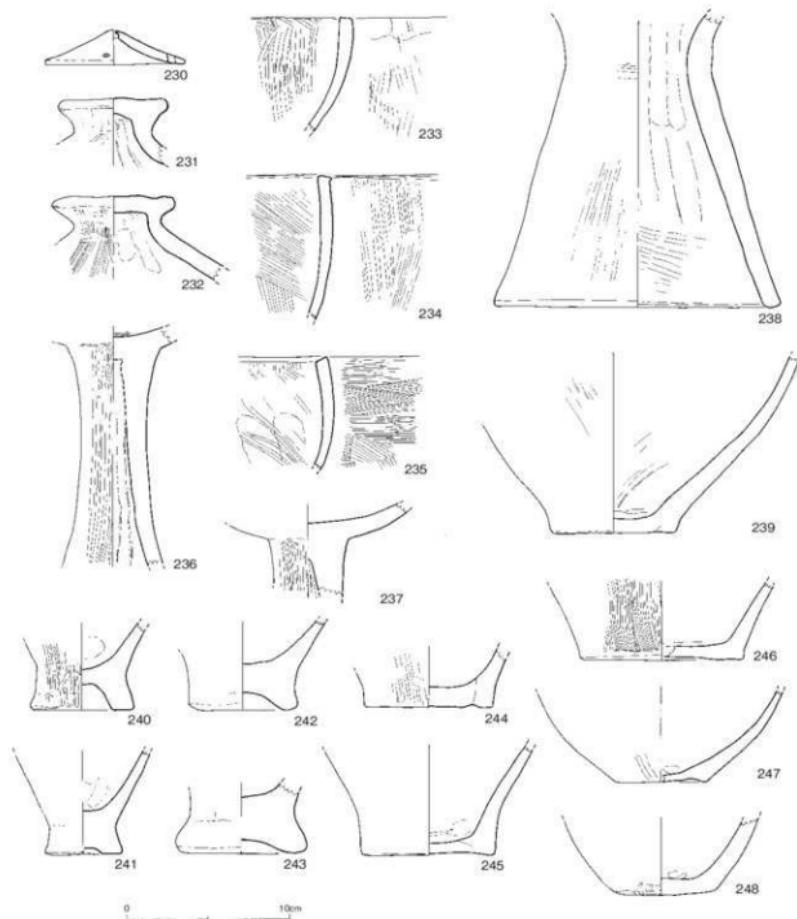


Fig.37 1区4層出土遺物実測図6 (1/3)

113は須恵器で6世紀後半から8世紀までのものを含んでいる。114から126は土師器で焼きが比較的よい。127から202は土師器で甕、壺、丸底の鉢、高坏などがあり、布留式以降のものが見られる。177、178、182、183は製塙土器の底部、184から186は鼓形器台である。191は丁寧なまで仕上げる。器種不明。197から202の底部は5様式的なものを取り上げた。203から248は弥生土器である。中期のはじめ以降のものが出土している。2層までと比べ古式土師器や弥生土器など古いものが多く出土している。また須恵器を模した土師器が目立つ。

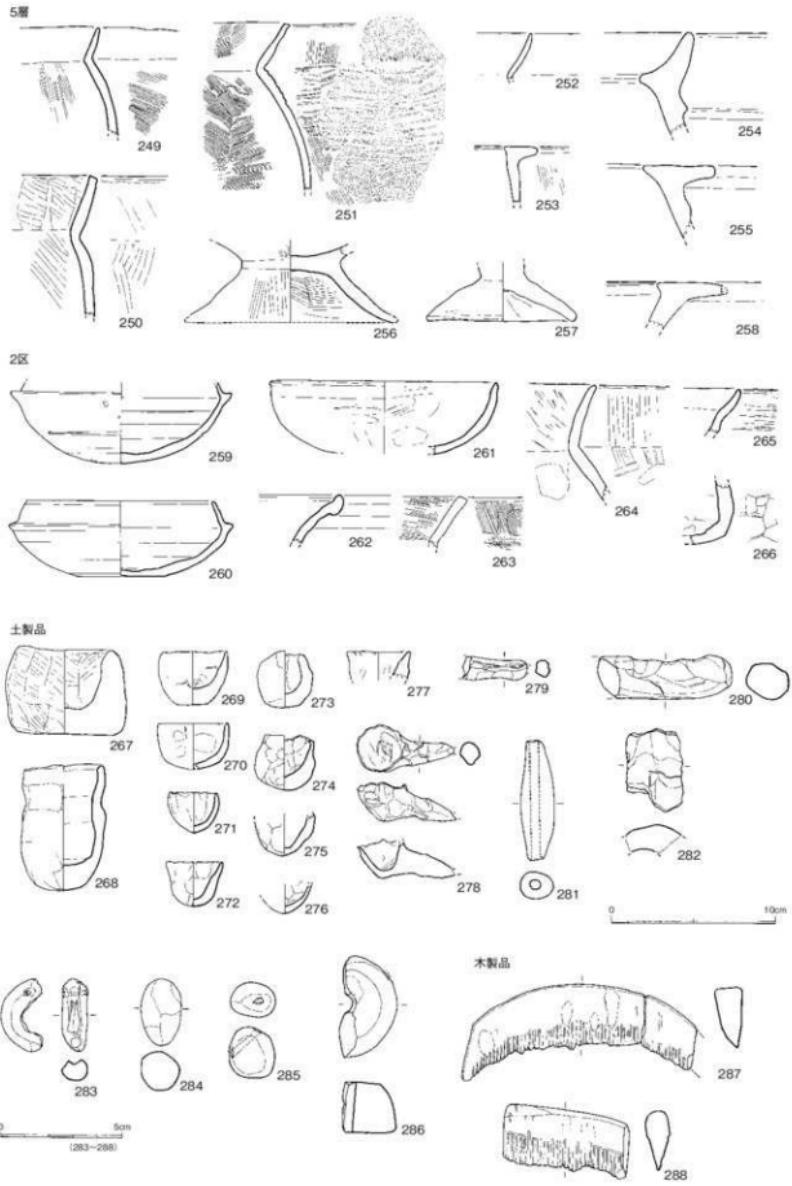


Fig.38 1区5層他出土遺物実測図 (1/3・2)

2区 (Fig.38) 主に東側の高まり周辺からの出土である。1区と比べると量が少ない。また底まで暗褐色粘土がたまり、Ⅲ b の須恵器が出土し、1区で見た堆積とは別の可能性がある。253から255と258が弥生中期の甕、259・260が須恵器の坏身、262は土師質で甕か。それ以外は265まで土師器である。266は滑石製の容器で出土位置、層位不明である。

土製品・木製品 (Fig.38) 267から286は土製品である。267から278は手すくねのミニチュアでいずれも4層出土である。1-1区からの出土が目立つ。279は棒状の土製品でピットからの出土。280は甕の取手か。281は土鍤で2層出土。282は4層出土の羽口で外面が灰色を呈す。283から285は4層出土で勾玉、投弾、土玉である。286は2層出土で紡錘車である。287・288は木製の櫛で1-7区4層で出土した。

(3) 縄文土器 (Fig.39)

谷部の5層上部を中心に縄文土器が出土した。阿高系と後晩期を主体とする。301は口唇部を浅く刻み、外面に連続する刻目が3条見られる。302から310は胎土に滑石を混入する阿高式系の土器である。311、312は滑石が入らないが阿高式系である。313は削り状の条痕を深く施す。314は外面は斜め、内面横方向の条痕の後の指押さえが顕著で器壁が薄い。315から328は条痕、削り状の調整を施す深鉢の口縁部である。329は刻目突宍文土器で大振りの刻目を施す。330は精製の浅鉢で内外面に研磨調整痕が残り外面下部には接合痕が見られる。上部は黒色、下部は茶色を呈す。331は外面削り状、332は条痕調整の破片。336から342は底部辺で後晩期を主体とする。343は土製円盤で内面に条痕が残る。

(4) 縄文時代早期以降の石器

谷の堆積を中心に石器が出土した。鋸等で掘削することが多く、剥片石器などは見落としたものも多いと考えられる。SX005では剥片が集中したため水洗を行った。整理が不十分なため今回は大型の石核の図示にとどめる。

剥片石器 (Fig.41・42) 344は黒曜石、345は安山岩製の石鎌。346、347は安山岩、348は黒曜石製の尖頭器で早期のものである。349は黒曜石製のくさび形石器。350は安山岩で石鎌と考えられる。351は黒曜石製のスクレーパーで縦長剥片を加工する。353・354は安山岩製のスクレーパーである。355はSX005出土の黒曜石製の石核である。剥片剥離作業半ばの状態で、周辺からは縦長の剥片が多く出土している。別の機会にまとめて報告したい。356・357は安山岩製、358は玄武岩製のスクレーパーである。

弥生時代磨製石器 (Fig.42) 359は安山岩製で石包丁未製品、360は安山岩製の石剣、361は玄武岩製の扁平両刃石斧、362は柱状片刃石斧、363は砂岩製の砥石である。363は時期不明だが、ここに掲載した。

礫石器 (364～392) 364から374は玄武岩製の石斧で未製品がほとんどである。1区からの出土が多く、玄武岩の剥片・破片も多く出土している。373は剥片を素材とする薄手で摩耗が著しい。縄文時代の可能性がある。375は弥生前期と考えられる抉入柱状片刃石斧で凝灰岩ホルンフェルス製か。376、377は石棒で376は安山岩、377は頁岩製と考えられる。378から385は叩き石である378から380は扁平の端部に使用痕がみられる。379が花崗岩、384と385が片岩系で他は玄武岩である。386は川原石、387は玄武岩の石鍤。389は花崗岩のくぼみ石、390は軽石である。388・391・392は砥石で砂岩製である。

(5) 旧石器時代から縄文時代草創期の石器 (Fig.45～51)

54次調査区は20次調査区の北東側に隣接し、同じ沢谷の下流部にあたる。南東側は中位段丘で既調査地区的27次、北西側は幸川に面する低位段丘面の48次がある。地形は幸川の南側山塊を樹枝状に侵食して形成された丘陵尾根が、河床低地に接する付近で小規模な中、低位段丘を生じた部分にあたる。中位段丘面上の遺跡が27次、低位段丘面上の遺跡が20、48、54次である。低位段丘面にも複数の浸食面、浸食谷があり、27次と20、48、54次とは二つの浸食谷で地形上区分される。既に隣接する20、27

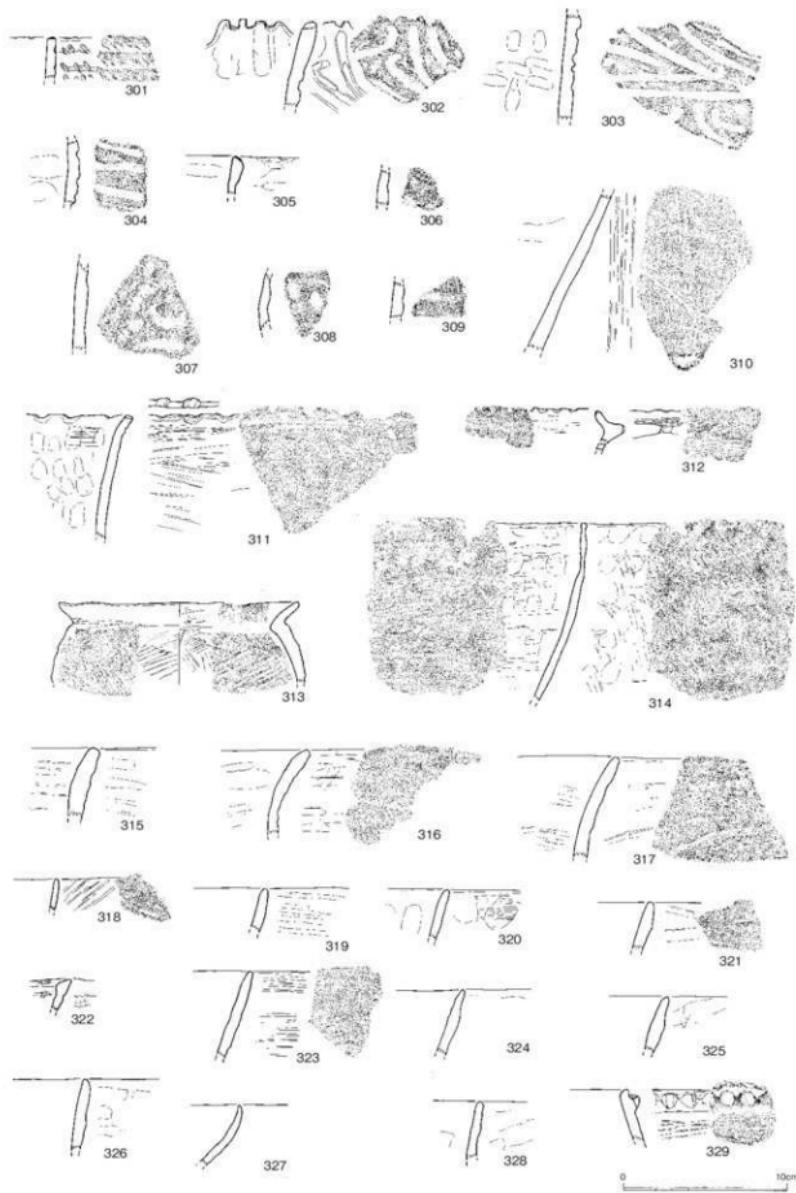


Fig.39 繩文土器実測図1 (1/3)

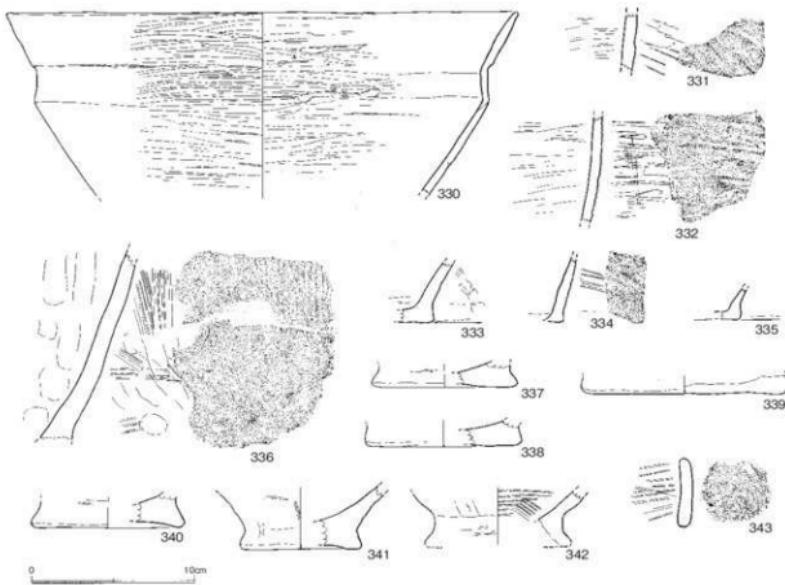


Fig.40 繩文土器実測図2 (1/3)

次調査の旧石器時代～縄文時代草創期石器群が報告されている。

調査では旧石器時代から縄文時代に及ぶ多量の剥片石器類が出土した。その多くは縄文時代後期の鉈桶技法に関わるものであった。旧石器時代～縄文時代草創期の石器類は約100点が抽出できたが、ここでは碎片などを除いた61点について報告する。

401はナイフ形石器である。先端を欠損し全周の調整のように見られるが、右上部側縁の剥離は浅く、本来左側縁と右側縁基部に背済しを行うナイフ形石器であると判断した。402は台形様石器である。背面に疊面を残し、両側縁に粗い調整剥離を施している。27次調査でも同じ形態、大きさの例があり、何れも「日ノ岳」型台形石器と考えたい。403、404は台形石器である。403は「百花台型」と考えている。両側縁の調整は入念であるが、形態が不整形であり、疑問も残る。404は両端に明らかな折断を見るが二次調整は少ない。405は尖頭状石器である。406は横長の不定形剥片、407～410、416～423は大型の縦長剥片である。目的剥片と共に背面に疊面を残す石核調整剥片(416～418)や打面再生剥片(423)もある。411～415は厚い不定形剥片であり、小型剥片石核類の板状素材とみられる。424～432は小型の縦長剥片である。側縁に微細剥離を認めるものが多く、ナイフ形石器類の素材となるとともに直接利器としての使用も想定される。424、432の背面には疊面が残り、作業面調整剥片でもある。433～441は横長の不定形剥片である。背面に疊面を残すものが目立つことから、石核調整に伴うものが多い。

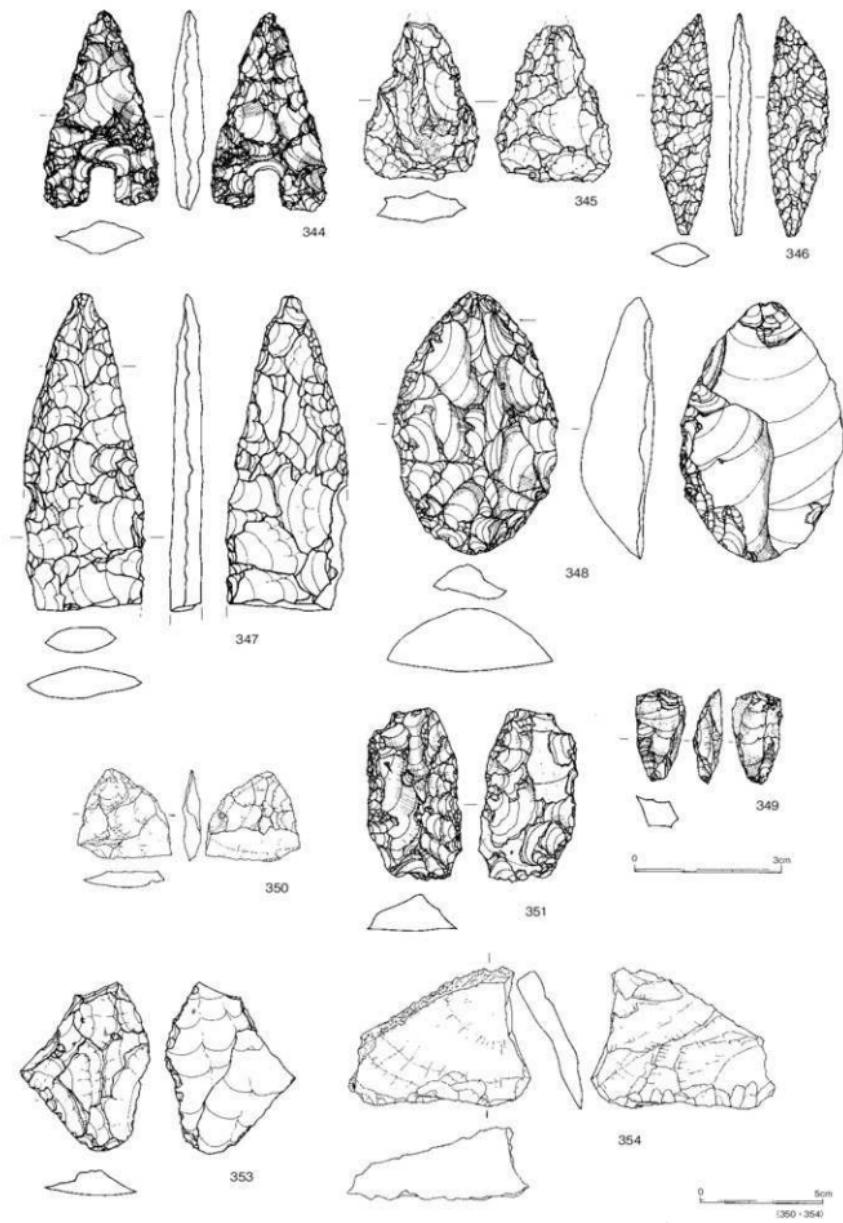


Fig.41 縄文時代石器実測図 (1/1・2)

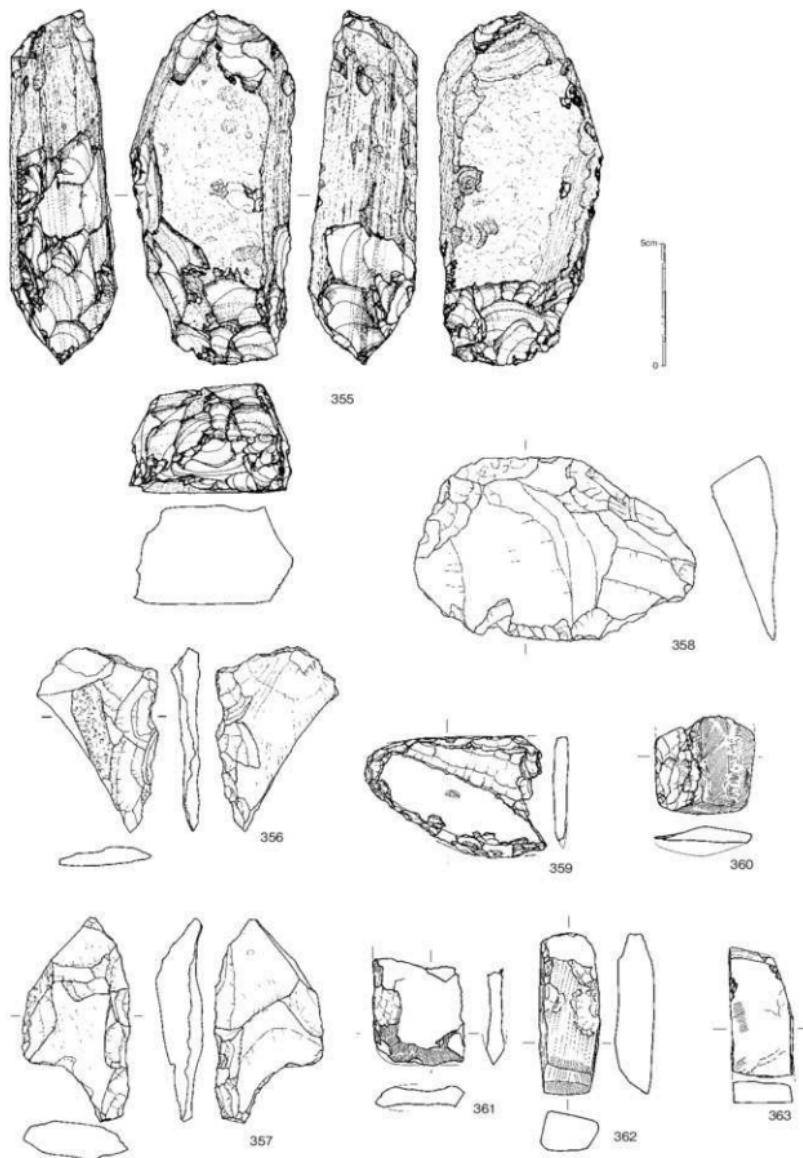


Fig.42 繩文・弥生時代石器実測図 (1/2)

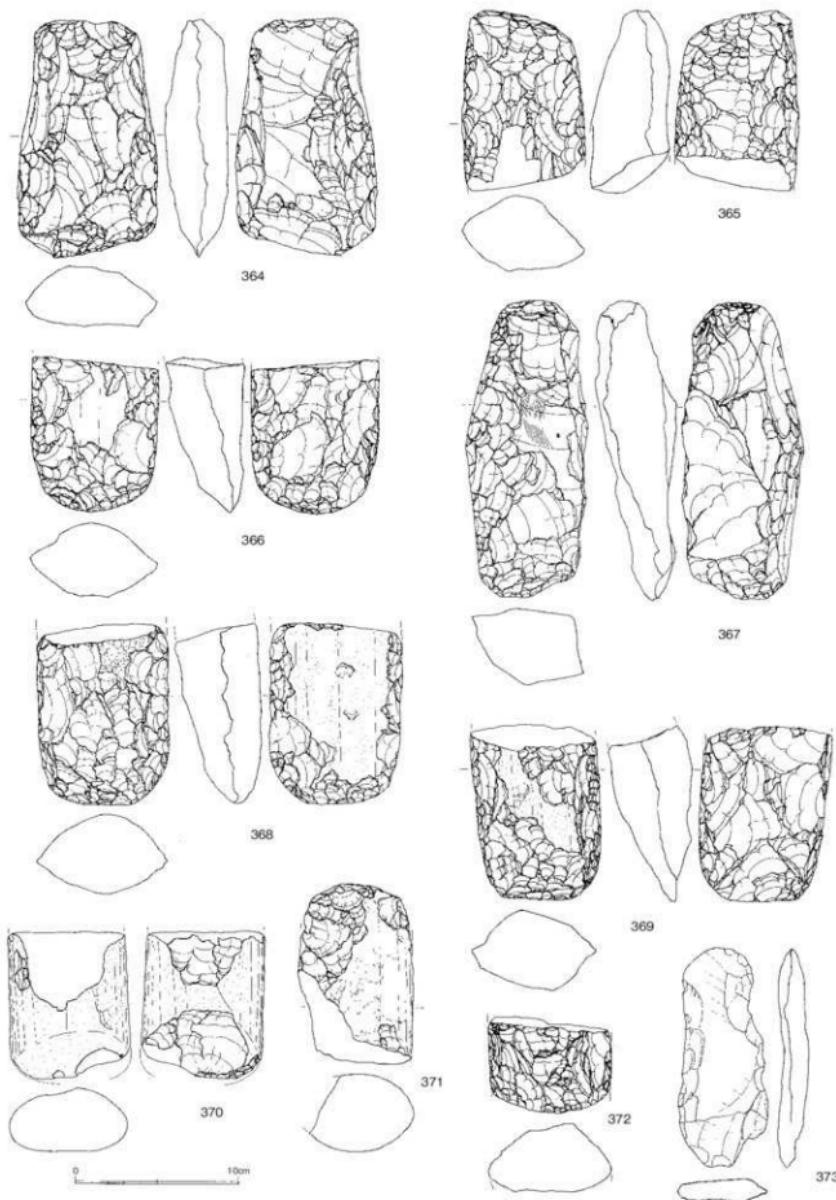


Fig.43 石斧実測図 (1/3)



Fig.44 磚石器実測図 (1/3)

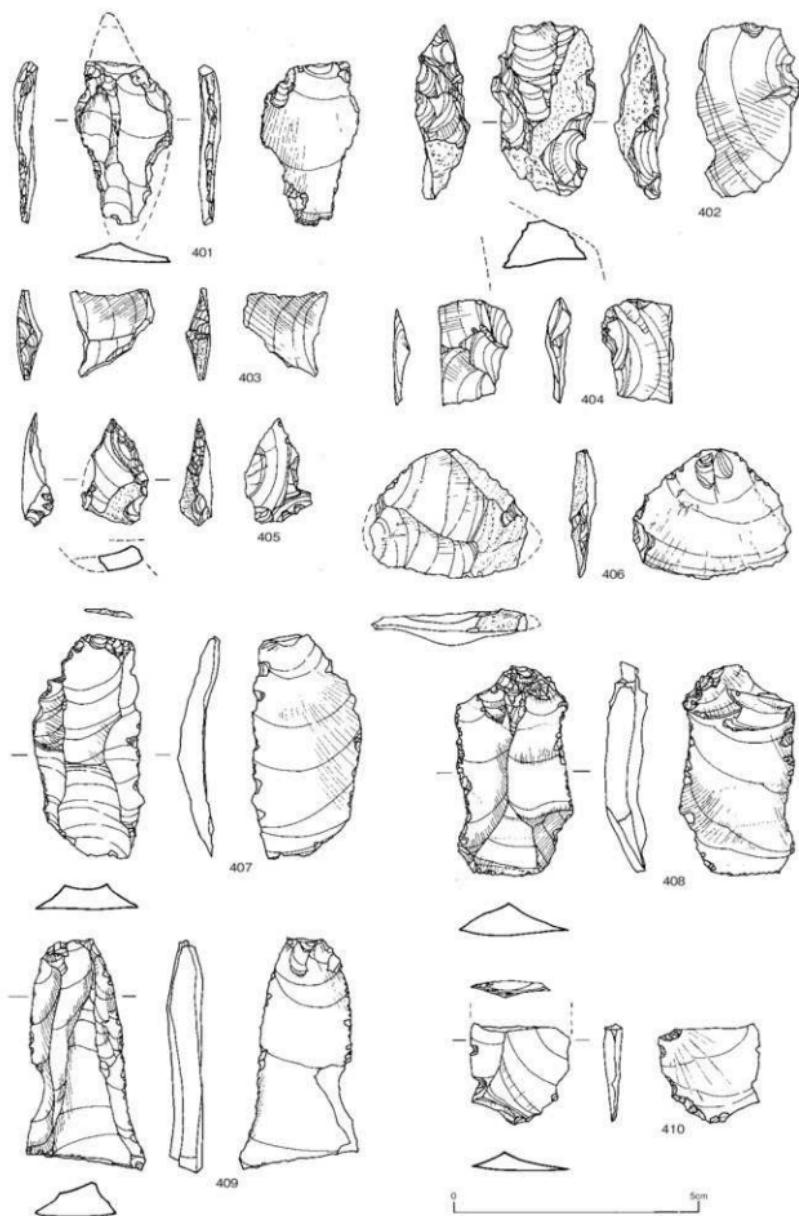


Fig.45 旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図1 (1/1)

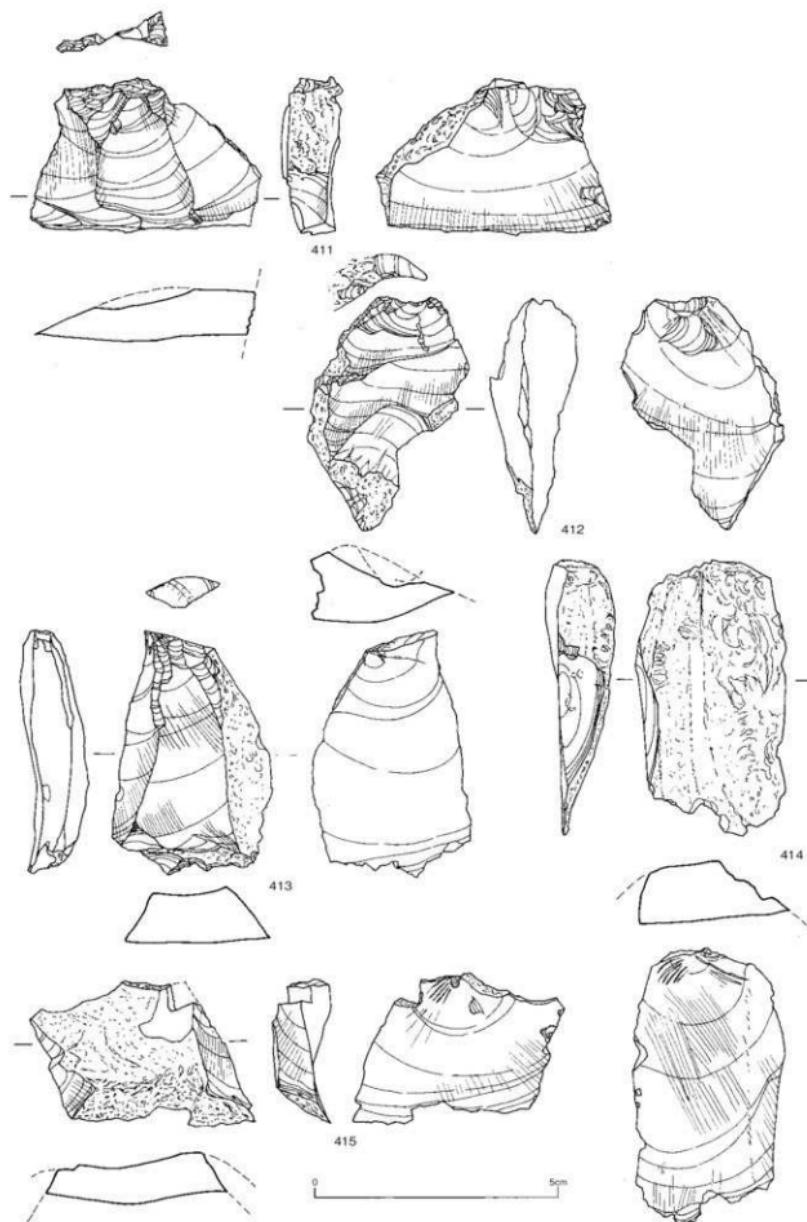


Fig.46 旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図2 (1/1)

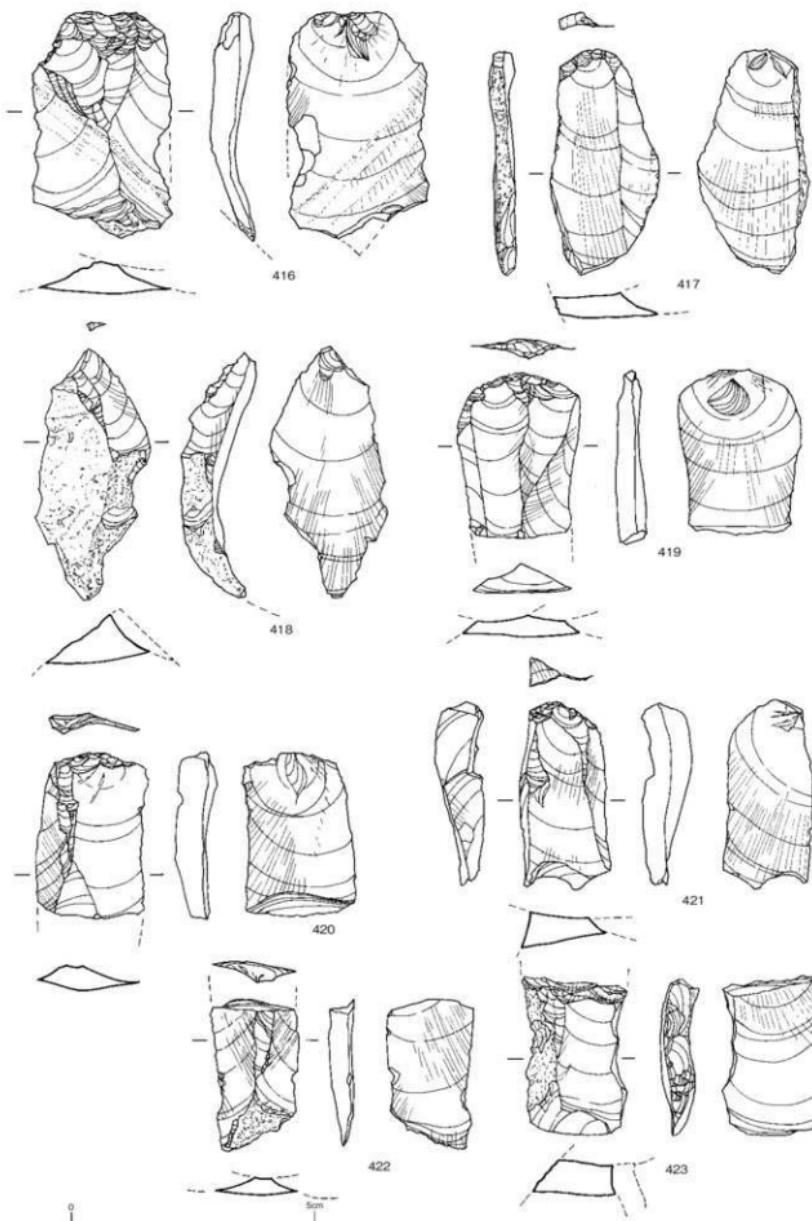


Fig.47 旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図3 (1/1)

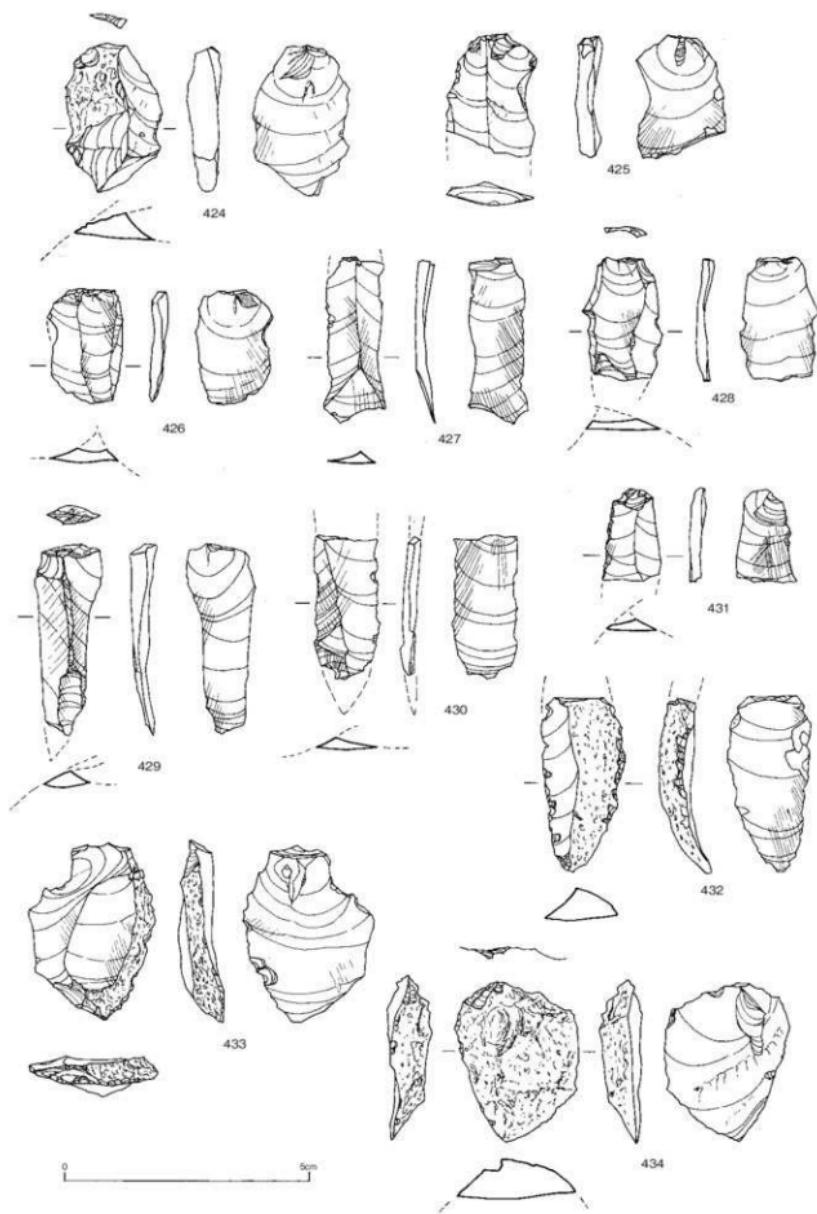


Fig.48 旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図4 (1/1)

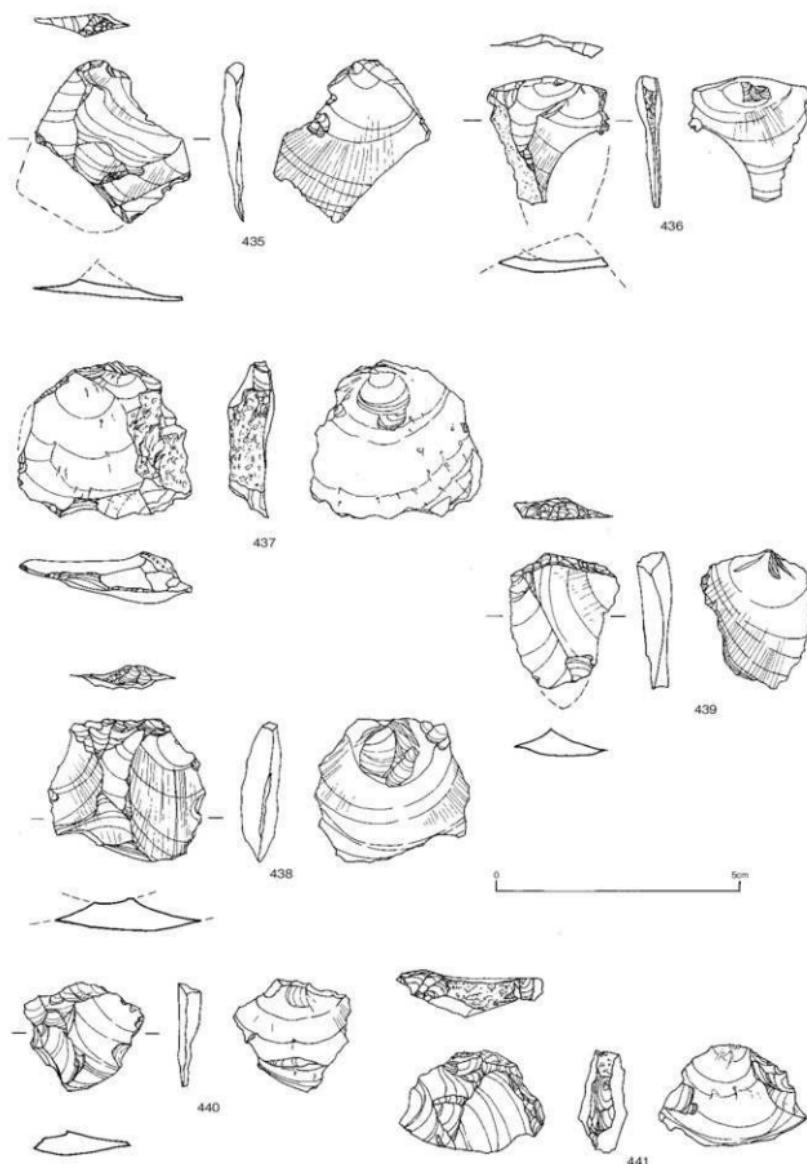


Fig.49 旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図5 (1/1)

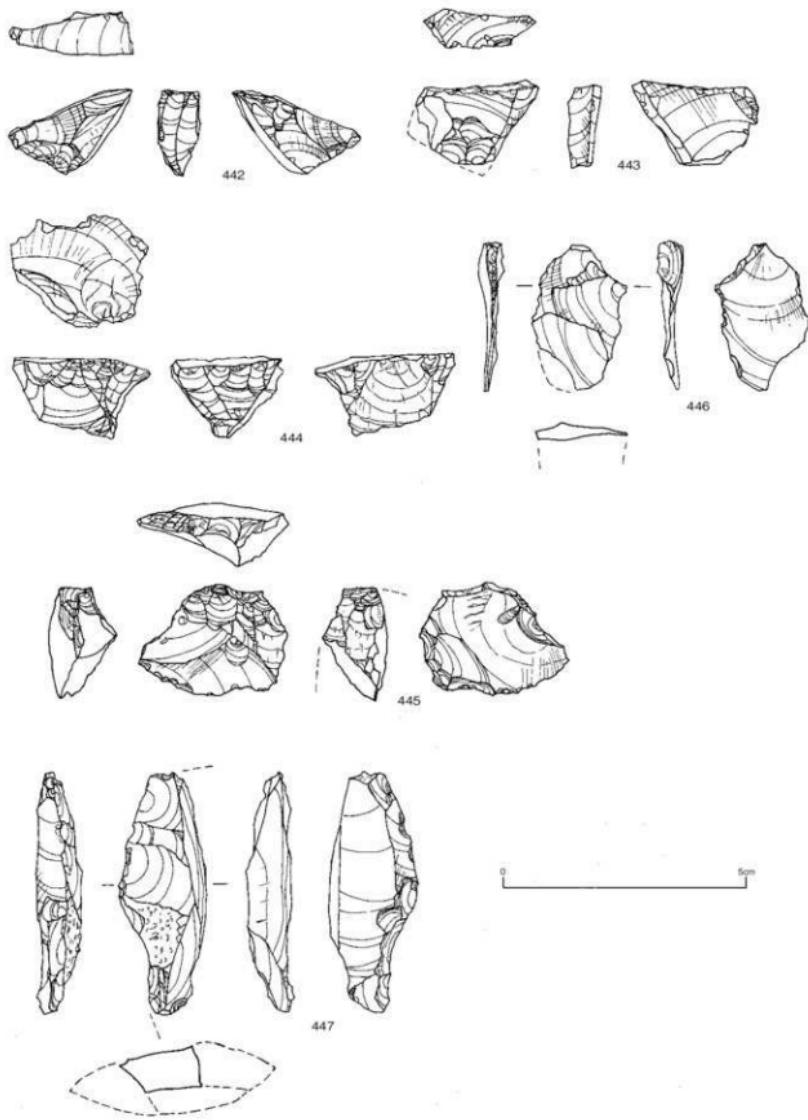


Fig.50 旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図6 (1/1)

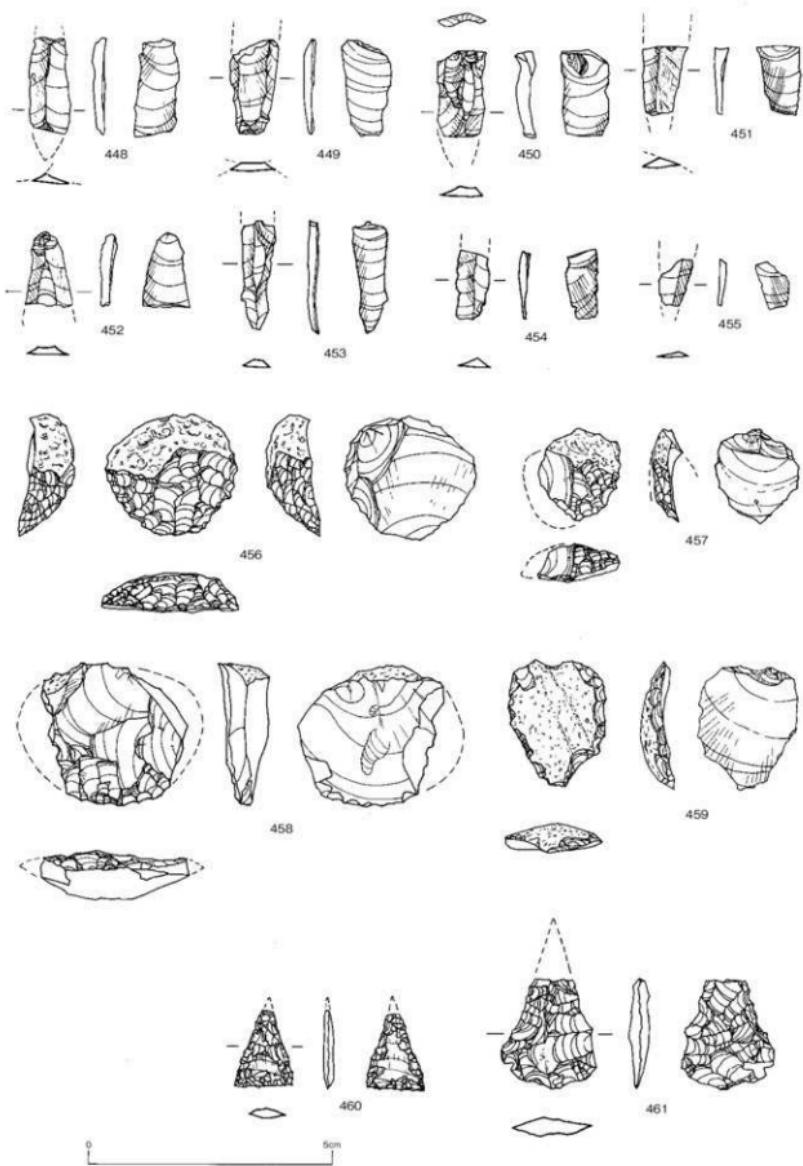


Fig.51 旧石器時代～縄文時代草創期石器実測図7 (1/1)

二次調整や微細剥離が認められるものがあり、これらも利器としての利用があったと考えられる。

442～444は細石刃核である。442、443は削片系細石刃核であり、いわゆる福井型の範疇とみられる。444は船野型である。445～447は石核調整剥片である。445は打面再生時の削片であり、445は作業時点での分割、破碎品か。446は打面形成に伴う二次削片とみられる。448～455は細石刃である。451の背面には擦痕が認められる。456～459は搔器である。何れも背面に礫面があり、原石礫の初期剥片を用いている。460、461は石鏃である。460は1cm強の小型三角鏃であり、461は基部が僅かに突出する中型の三角鏃である。

以上の石器類の時期的位置づけを推定したい。最も古い一群は402の「日ノ岳」型台形様石器やその素材となりうる横長の不定形剥片の一部である。同時期の石器類には20次の「九州型」を含むナイフ形石器(401,403)、27次の台形様石器(403,404)、48次調査のナイフ形石器(154)などがある。次の段階は1のナイフ形石器や「百花台型」類似の台形石器、多数の剥片、石核類がある。この段階の資料は20、48次でも多い。これらナイフ形石器段階の二時期は何れも後期旧石器時代後半期であり、定型器種レベルでは明瞭に区分されるものの、剥片レベルではなお明瞭にし難い。剥離技術の解明などが待たれる。細石刃段階以降では複数の細石刃核型式があり、少量の石鏃も含まれている。削片系と船野型細石刃核の並存は問題なく、石鏃も組成中の少なさと底面に抉りを持たないなどの特徴などから、本地域で最も古い形態を保持している。27次の細石刃核(5)は打面再生が横打ちであるが、形態から近似した時期と見られる。こうした点から本次の細石刃段階は単一時期と考えられ縄文時代草創期初頭に位置付けられる。

(6) 小結

周囲を第20次、48次調査で囲まれた調査区で谷状の地形を検出した。ある程度予想された内容ではあるが、地形のつながりを確認し、20次とはやや異なる遺物も見られた。

谷部では1区とした西岸斜面で遺物が多く出土した。20次との地的つながりからみればSX044の続きではあるが(Fig.11)、出土遺物に若干の違いがある。SX044は谷002との接合部に堰を設けた池状遺構で、4世紀から6世紀代を主体とし、池の埋没後の8世紀に整地されたと考えられている。54次調査では4～6世紀代が主体を占めることは同様であるが、青磁、黒色土器といった古代末から中世の遺物を上層に含み、弥生時代中期からの遺物を一定量含む。より下流にあたり、削平が小さいことでより上層に新しい時期の遺物が入ったのであろうか。堰の外でもあり、谷部002の影響も考えられる。弥生時代の遺物は、20次で北東部の54次に近い位置で中期以降の包含層が一部確認されており、この周辺に弥生時代の居住域が想定できる。54次では刻目突帯文・前期・中期前半の甕が少量であるが出土し、継続した営みが見られる。また、玄武岩の剥片類がコンテナケース6箱出土しており、20次調査SX044で北側にまとめて出土したものと連続したものと考えられる。

54次では旧石器時代、縄文時代の遺物も注目される。旧石器時代の遺物は弥生時代以降の谷の堆積に混入したものである。縄文時代の遺物は河川堆積の上層と下層の境付近に比較的多く出土し、SX005では黒曜石の大型のコアと薄片がまとめて出土した。石器制作の場と考えられ、晚期の面が残っていると考えられる。



Ph.22 1区上面（南西から）



Ph.23 1区下面（北東から）



Ph.24 1-1区（東から）



Ph.25 2区下面（北から）



Ph.26 7トレンチ土層



Fig.52 第49・50・51次調査区周辺図 (1/1500)

VI 第49・51次調査の報告

1. 調査の経緯と経過

経緯 事業地東端の金屎池が位置する谷では、平成7年の事業当初の試掘時には既存建物等のために試掘は一部に限られていた。このため平成17年に谷の全域で試掘を行い、金屎池下流の南側で遺構を確認した。この結果を受け平成18年4月1日から平成19年3月22日まで49次調査として本調査を実施した。調査面積は2723m²である。また調査過程で金屎池堤防の下と工事用調整池へ遺構が広がることが判明したため、平成19年8月29日から20年10月3日に51次調査を実施した。

経過 49次調査は廃土置き場の確保のため3区に分けての調査となった。この間に、保存が決まっていた金屎古墳の調査区の埋め戻し作業を4月12日から5月15日に人力で行った。

51次調査にあたっては、金屎池と工事調整池を撤去することから、流域の雨水等の処理のために新たな調整池が土地開発公社によって金屎池上流に築かれた。この工事後に調整池と金屎池の水抜き、追加試掘を行い8月に調査を開始した。49次調査終了からそれまで間には、南東側に隣接する丘陵上で50次調査を4月8日から8月27日に実施した。さらに前年度に埋め戻した金屎古墳の覆土が流出したため、復旧作業を5月8日から5月22日に実施し、土地開発公社が緑化工事を行い古墳の保全を図った。51次調査においても廃土の量は大きく、金屎池下流部分では3区にわけての調査となった。さらに金屎池堤防掘削には時間を使し、池内の粘土の処理には手間取った。この間、近接する九州大学の再取得地で遺構を確認し、53次調査として平成20年2月15日から4月9日に実施している。またこの間、継続して用地内の伐採・造成・土砂搬出工事が行われ、未試掘であった尾根斜面を伐採が終了した地点から順次試掘を行った。対象地城は水崎山から北・北東方向に伸びる尾根の周辺であったが、未試掘域は尾根筋、急斜面、狭い谷で遺構、遺物を確認できず本調査に至ることはなかった。

3. 調査の概要

立地 調査地点は水崎山(標高95m)から北方に派生する丘陵に挟まれた谷部に位置する。谷は北東に向かって開口し、開口部で幅90mを測る。谷の両側は小谷が數カ所見られるほかは急斜面で、遺構の広がりは谷部に限られる。小谷では24次調査地点で古代の製鉄炉などが確認されている。丘陵に挟まれた一帯が字金屎であり、そのやや北寄りに金屎池が築かれている。金屎池は元岡村誌によると文政12(1829)年の築造とあり、堤の断面から重ねて補修が行われたことがわかる。奥の谷部は段造成されて農地として利用されている。調査開始時の金屎池の下流域は、昭和50年前後に建設された谷開口部を横断する道路で区切られ、この道路から谷の中央東寄りに進入路があった。調査時にあった工事用調整池はこの進入路から西側である。

調査の方法 経緯で触れたように、調査は49・51次に分かれるが継続したものである。調査時に廃土繰りの都合で49次を3区、51次を6区に分けて調査・記録を行った。今回、統一的な区の呼称で煩雑を廃すべきであるが、注記、全景写真の単位等ですべて調査時の区を使用しているため、これを使う。ただし49次地点の区名をローマ数字でⅠからⅢ区と表し、51次と区別した。さらに51次では各区を3区に分けて-1のように示している。また、調査区全体について地形に沿って設定した軸をもとに10mメッシュのグリッドを設けており(Fig.53) 遺構等の位置は先の区とグリッドで表す。

調査区内は、両側の丘陵からの急斜面が急に緩やかになった中央の谷部への緩斜面に主な遺構が分布する。谷底には河川320が走り、谷の中央から北に蛇行して北側丘陵裾を沿い、調査区東端のやや北よりを抜けていく。調査区内は削平が大きく全く遺構が見られない範囲もある。削平は調整池があつ

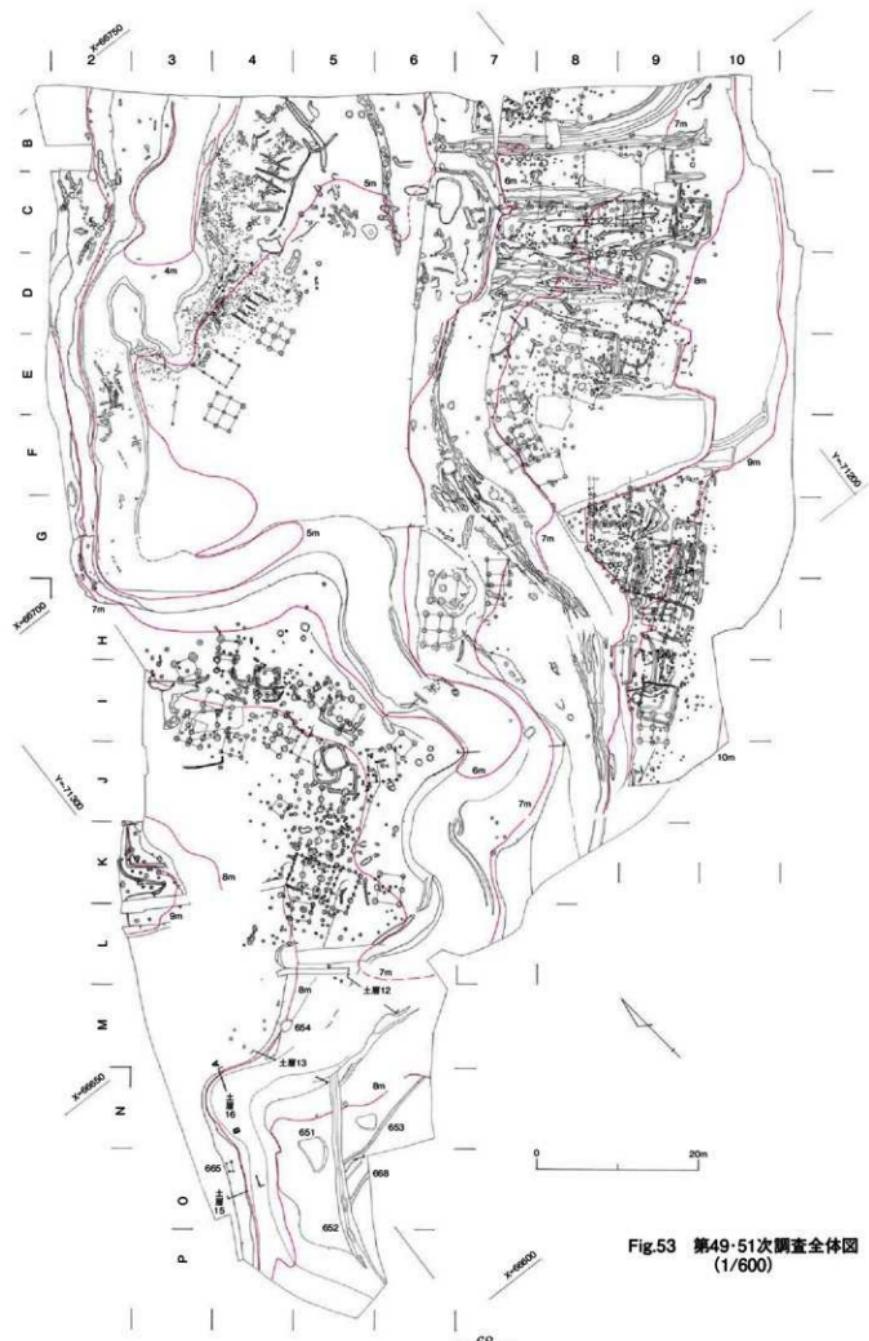


Fig.53 第49・51次調査全体図
(1/600)



Fig.54 I・II区遺構配置図 (1/200)

た2、3区、金屎池底の5-3区丘陵側で特に大きい。

検出遺構・遺物 繩文時代早期から古代末の遺構・遺物を検出し、旧石器時代、中世前期、近・現代の遺物が出土した。遺構は6世紀後半から7世紀代のものが大半を占める。繩文時代ではⅢ区でくぼみ状の遺構1基、5-3区で突帯文期の土坑1基を確認した。弥生時代では、Ⅲ区で後期の土坑2基を検出している。古墳時代では6世紀後半から7世紀初めの堅穴式住居跡を14棟、8世紀はじめまでと考えられる掘立柱建物72棟が谷の東西斜面に広がる。斜面に段造成は確認できないが、遺構を囲う溝が各所で見られる。Ⅱ区では鎌先などの鉄器が集まつたSX089があった。8世紀代ではI区などで谷に向かって走る溝などがあるが遺構は激減する。古墳時代の遺構を覆う包含層上では鍛冶炉、焼土坑、土坑、柱列を検出した。河川では弥生時代中期・後期から7世紀代の遺物が出土し、特に6世紀後半から7世紀が多い。河川からはこの時期の柱材、鍾、鋤などの木製品が出土している。古代以降の堆積は河川堆積と周辺の遺構面を覆っているが、削平等のため広がりは不明である。

次項では調査区のまとまりごとに概要に触れた後に、各遺構、河川について報告する。旧石器・繩文時代についてと石器・木器については、次の機会に追って報告したい。

3. 遺構と遺物

各遺構の報告をする前に、調査区のまとまりごとに概要に触れておきたい。

I・II区 (Fig.54) 北東向きの緩斜面で南側の丘陵沿いは造成で削られる。丘陵裾からの斜面は急である。BC9、EF9では攪乱で遺構面が大きく削平され、Ⅲ区との境は段差を成す。遺構面は砂粒を多く含む黄灰褐色土である。C~E7・8と9の北半には淡橙色から淡茶色粘質土(以下1層)が広がり、さ

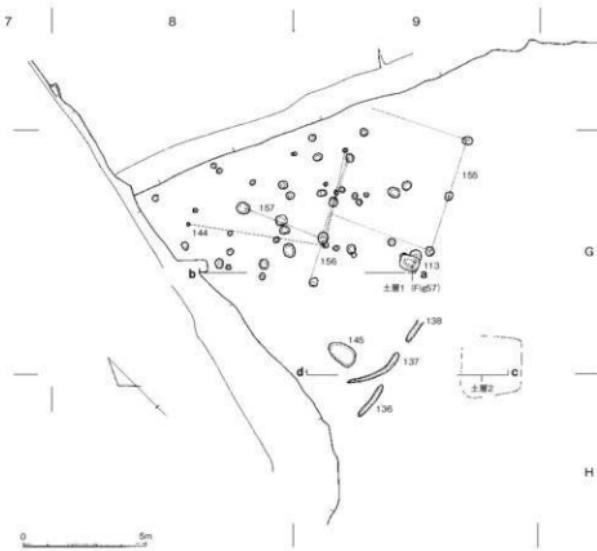


Fig.55 Ⅲ区上層遺構配置図 (1/200)



Fig.56 III区・5-1区遺構配置図 (1/200)

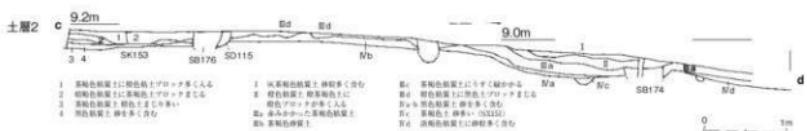


Fig.57 III区土層図 (1/60)

らにDE7・8・9ではしまりのない黒褐色土粘質土(2層)が広がる。1層は8世紀までの遺物を若干含み、この上面で鍛冶炉SX056、溝SD028などを検出した。2層ではほとんど遺物は出土しない。この上面で掘立柱建物等を検出した。2層を除去した面で検出したものもあるが、2層上からの堀込みと考えている。確認した遺構は6世紀後半から7世紀初めの堅穴住居、近い時期から8世紀はじめまでと考えられる掘立柱建物、周溝状の溝である。これらの遺構を切って、谷の中央方向に走る溝がこの区では見られる。CDでは1層に近い淡橙色粘質土を覆土とするSD009などの細く浅い溝がやや西側に向かい、これを切って古代末までの遺物を含むSD028などが掘られている。さらに北側の調査区端では等高線に沿って現代と古代末以降の溝が走り段を成す箇所もある。

III・5-1区 (Fig.55-56)

III・5-1区は東側をII区の攪乱、西側を水路の削平で大きく削られる。多くの遺構が削られたと考えられるが遺構面の残りは比較的良い。谷側へ緩やかな段をもって下がりFig.57の灰茶褐色土I層がひろがる。この上で検出した遺構を上面としてFig.55に示した。II層の広がりは一部のみである。次にIVa層の上面で大型掘立柱建物などの遺構を検出した。丘陵側ではII層の橙色粘質土が薄く断続的に広がり、この上面から堅穴住居、ピット等を検出した。ここでは等高線に沿った方向の浅い溝を多く確認し周溝状遺構のなかで報告している。これらの溝や掘立柱建物の一部を6世紀末の堅穴住居SC120が切っている。

西側の削平段下部には現代の溝が走りII区北西際の段差へ続く。このすぐ谷側には、現代溝に沿って8世紀、古代末から中世の遺物を含む溝が断続的に数条見られ、II・I区の調査区西北側へ続いている。現代の段落ちに継続する可能性がある深い溝の底と考えている。

1・2・3・4区 (Fig.58)

工事用調整池の跡地で、深い下流域に8世紀以後と考えられる遺構面が残るが、上流ほど削平を受け遺構が失われたと考えられる。西側の丘陵際を河川032が流れ、建築材などの木器が出土している。南東丘陵側で調整池での削平を免れた高い部分を-1区、中央の谷部を-2区、河川より西を-3区と小分けしている。最下流域の1区では住居等の遺構ではなく、溝や耕作の痕跡と考えられる浅い溝・くぼみが広がり、遺物から古代のものと考えている。2・2区では掘立柱建物と6世紀後半の土坑があり、II、III区から遺構が続いていると考えられる。4区は金庫池の堤と調整池の間で、大きく屈曲した河川032と重なる。

5・2・3区 (Fig.59)

5・2区は河川032部分である。5・3区は西側丘陵からの緩斜面で堅穴住居と掘立柱建物を中心とした遺構を検出した。遺構面は砂質の灰褐色土である。丘陵側のJKL3・4付近は金庫池の構築補修のために大きく削平を受け遺構が失われている。K3には住居跡などが堤の縁辺部に当たるために削平を免れ残っていた。これより西の丘陵側に遺構が若干伸びるが、排水用パイプが設置してあり調査できなかった。ただし丘陵裾は近接しており、間もなく急斜面になる。

6区 (Fig.53)

金庫池内にあたり粘土の除去に手間取った。河川032が中央を流れ、谷部分で溝等を検出した。河川西岸は池の削平で遺構は失われている。南東側は試掘で池底粘土を除去すると砂礫層となり、削平を受けていた。



Fig 58 1-2-3区遺構配置図 (1/300)



Fig.59 5-3区遺構配置図 (1/250)

(1) 壁穴式住居

14軒いずれも方形4本柱でSC632以外は壁溝がめぐる。カマドが残るものはすべて北辺である。

SC007 (Fig.60-62) I区C9 撥乱と溝に大きく削られ、SC008を切る。壁溝は途切れる箇所がある。主柱穴は3基を検出した。一辺4.4mほどの方形プランが復元できる。南壁際床面には径40cmの範囲に焼土がみられる。床面は覆土と全く違う黄褐色土で貼床される。また苔状のくぼみが床下にあり東西断面と土層断面に示している。遺物は少ない。土師器壺1と須恵器坏2を示した。

SC008 (Fig.60-62) I区C9 撥乱、SD003、SC007等に切られ、北・東側を欠く。SC017を切る。覆土は暗灰色粘質土を主とする。深めの壁溝がめぐる。貼り床は確認できなかった。遺物は少ない。3・4は須恵器坏、5は土師器。3・5は壁溝出土である。

SC010 (Fig.60-62) I区C9 SD009に切られ、SC017を切る。コーナー部は明瞭で、暗褐色から黒色の粘質土を覆土とする。1段下げる段階で壁溝の一部を確認した。浅い暗褐色粘質土を覆土とする壁溝が巡る。内側との比高差は5~8cmと浅い。北西側に壁溝は見られず、削平されたと考えられる。南東側の壁溝と壁との間に隙間があるが、SD009による撥乱ではつきりしない。床面を出した段階でSC017の周溝を検出した。北西壁中央には粘土混じりの土がみられ、カマドの痕跡の可能性がある。遺物は小片ばかりで土師器は薄手のものが多い。須恵器を模した土師器があるが摩耗している。6から10は須恵器である。

SC011 (Fig.61) I区D9 比較的の残りがよい。SD028、SB101に切られる。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、北側、南側壁中央付近に灰白色粘土が広がる。床面では径15cm前後の柱痕跡を検出し、貼床を除去した掘方の面でピットの輪郭を確認した。カマドの粘土は流れて構造は残っていない。中央部床面上に幅60cmほどの焼土面があり、その下にも焼土を含む堆積と焼土面がみられ、上下面上の土器23が接合した。周溝はカマドの下にもめぐり、その部分の覆土はカマドのものと考えられる淡黄色粘土である。遺物は須恵器が少ない。11・12・13が須恵器で11は壁溝出土。14から23は土師器である。23は完形に復元できた。外面平行叩き、内面當て具痕が残り、2次焼成を受ける。

SC017 (Fig.61-62) I区C9 SD019、SC008-010に切られる。残りが悪く東側は床面が削平を受ける。北側には2本の壁溝が見られる。また南側周溝の床には40cmほどの範囲に焼土が広がる。暗褐色粘質土に黄色ブロックが混じる覆土を主体とする。主柱穴は4本柱と考えられ図に復元したが、他にも相当するピットがあり組み合わせが異なるかもしれない。遺物は少ない。24から26は須恵器で24は壁溝南側で出土した。土師器は小片ばかりである。

SC118 (Fig.63-62) III区H9 前平により床面は南西側に若干残るのみで、壁溝でプランが確認できる。中央を現代の溝が縱断し多くのピットに切られる。遺物は土師器壺の破片が主で2次焼成により橙色・桃色のものがある。27・28・29は須恵器、30から33は土師器である。

SC120 (Fig.67-64) III区G9 比較的の残りがよい。SB170以外には切られず、床面で建物のものと考えられる柱穴を検出した。SB173・174を切ることになる。北側、南側に淡黄色粘土が広がる。北側では両袖のカマドを検出した。袖内面に焼土面がある。南側の粘土は1.5mほどの範囲に広がり壁溝を覆い、床面との間に間層が入る。カマドの東側に遺物がまとまって出土した。34・35・37から41は須恵器である。36は土師器の坏。42から50は土師器で43・44は叩きが、45・46は刷毛目が見られる。49は壺、50は土玉である。

SC167 (Fig.63-65) III・5-1区H9 壁の残りがよく、深さ70cmを測るが、北側は大きく削平され幅1mのみの残存である。南側壁溝中央で遺物がまとまって出土した。52から64は壁溝出土で61までが須恵器、ほかは土師器である。66から73は覆土中・上層出土で68までは須恵器、他は土師器である。

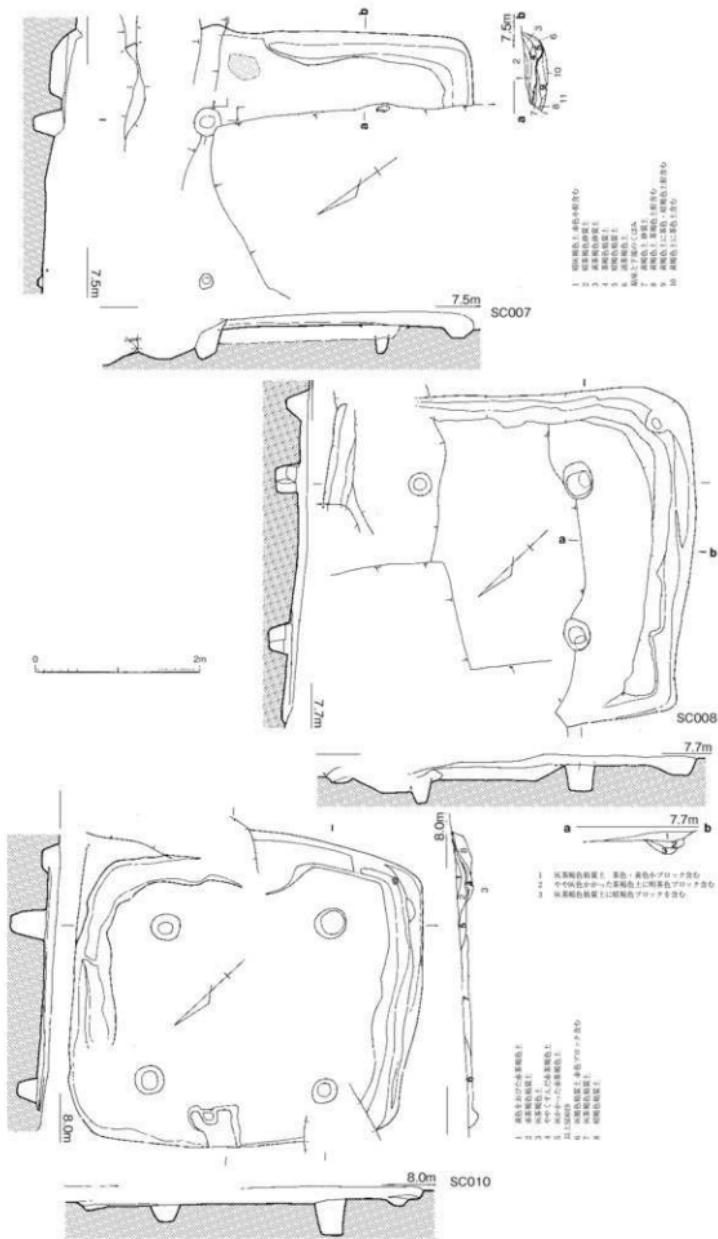


Fig.60 竪穴住居跡SC007・008・010実測図 (1/60)

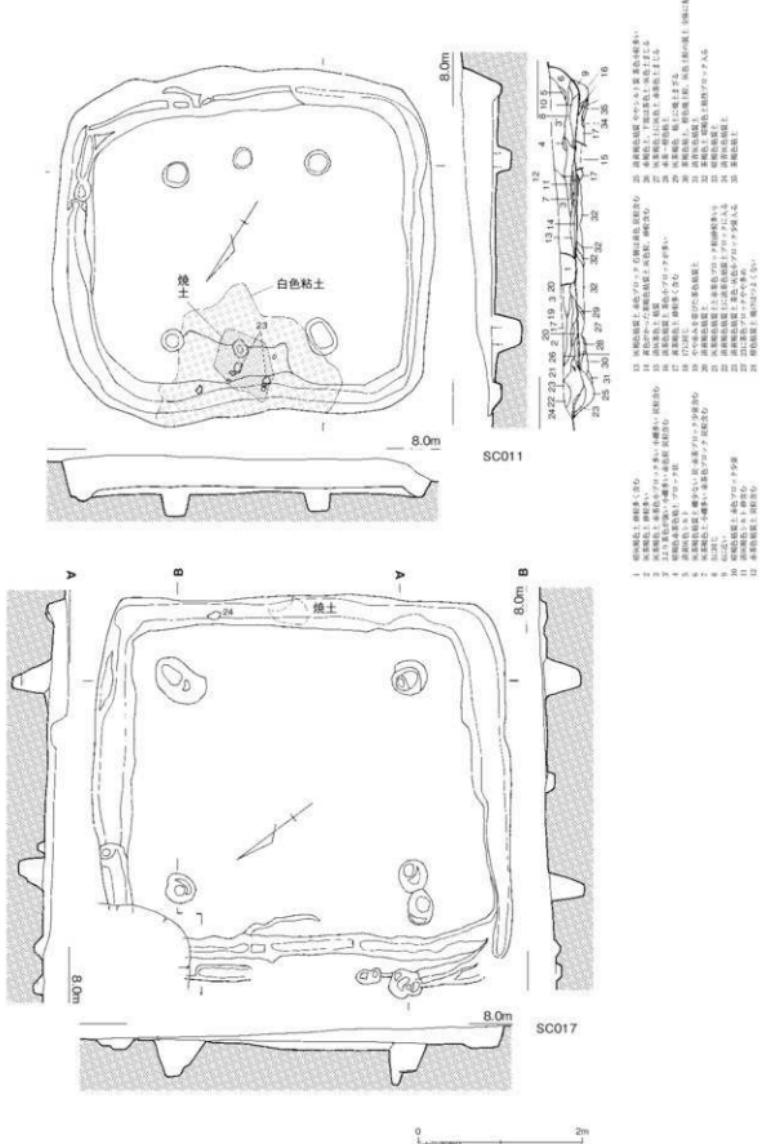


Fig.61 竪穴住居跡SC011・017実測図 (1/60)

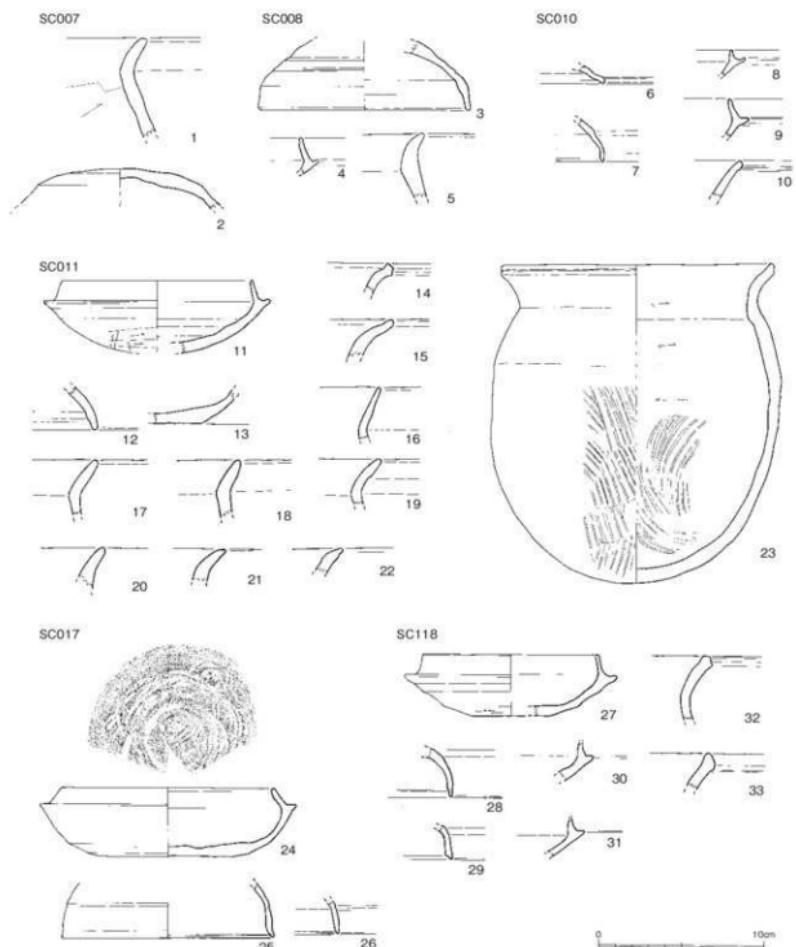


Fig.62 SC007-010-011-017-118出土遺物実測図 (1/3)

同じ図に周溝状造構SX528 (Fig.63-67) を示した。ちょうどSC167を開くようにめぐり伴う可能性がある。層の上で矛盾はない。86から101が出土し、93までと99が須恵器、他は土師器である。両者の間には暗灰褐色系の暗い土が溜まり、これを除去した面はIV層 (Fig.57) の黒色土である。この上面で溝SD533、562、焼土の広がりを検出した。SD563 (Fig.73) はさらにIV層を除去した面での検出である。

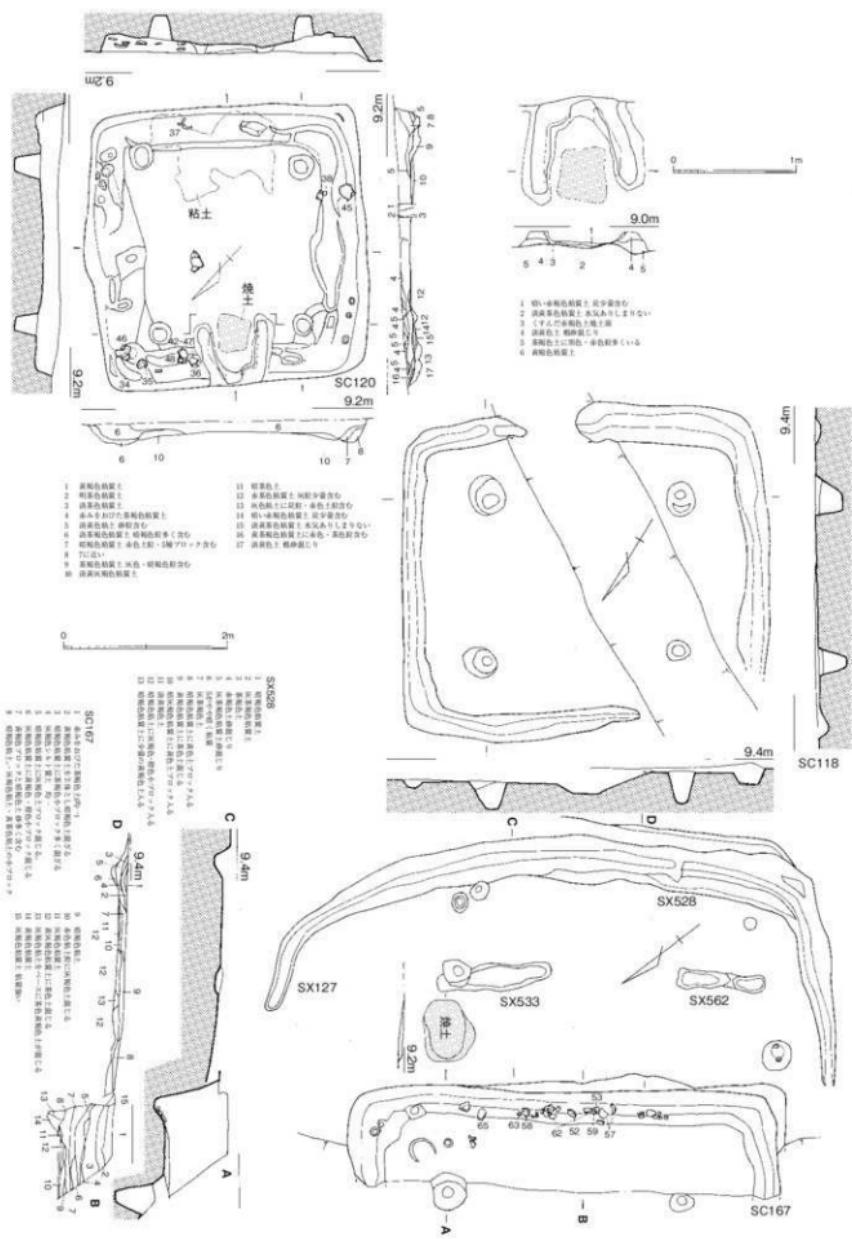


Fig.63 積穴住居跡SC118-120-126-167実測図 (1/60-40)

SC120

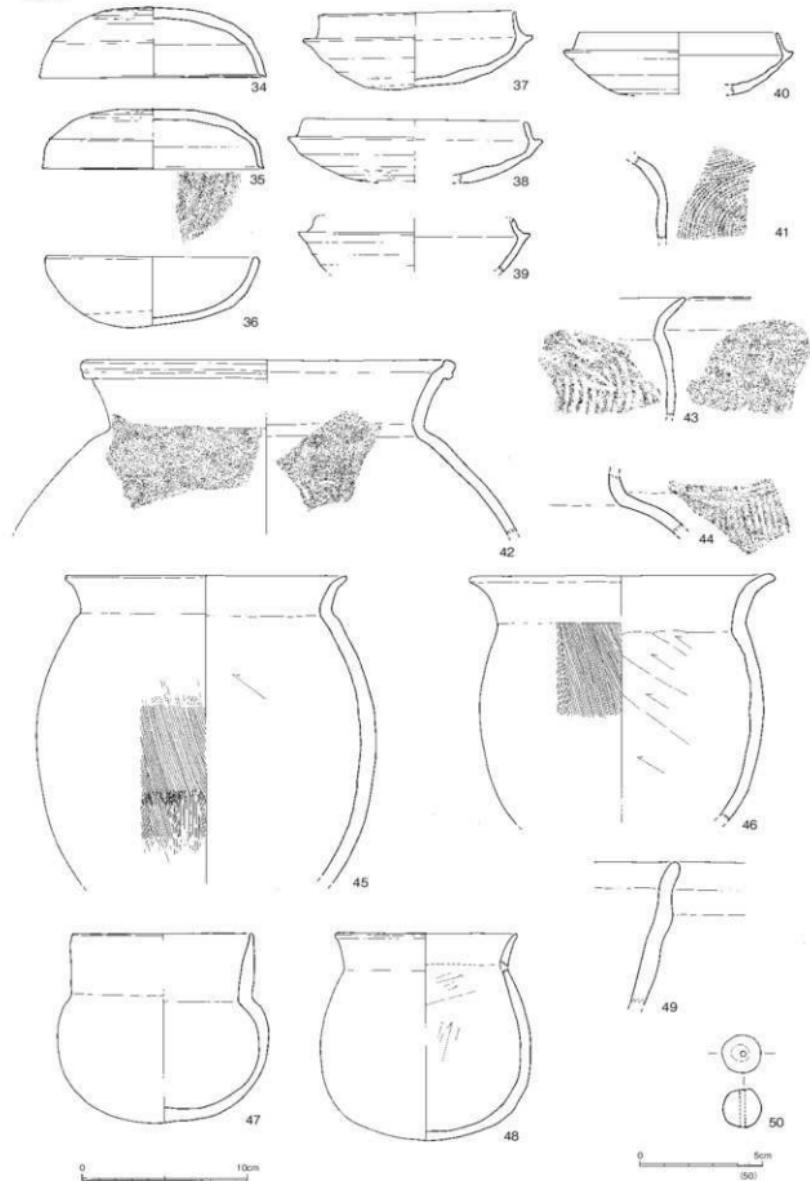


Fig.64 SC120出土遺物実測図 (1/3・2)

SC167

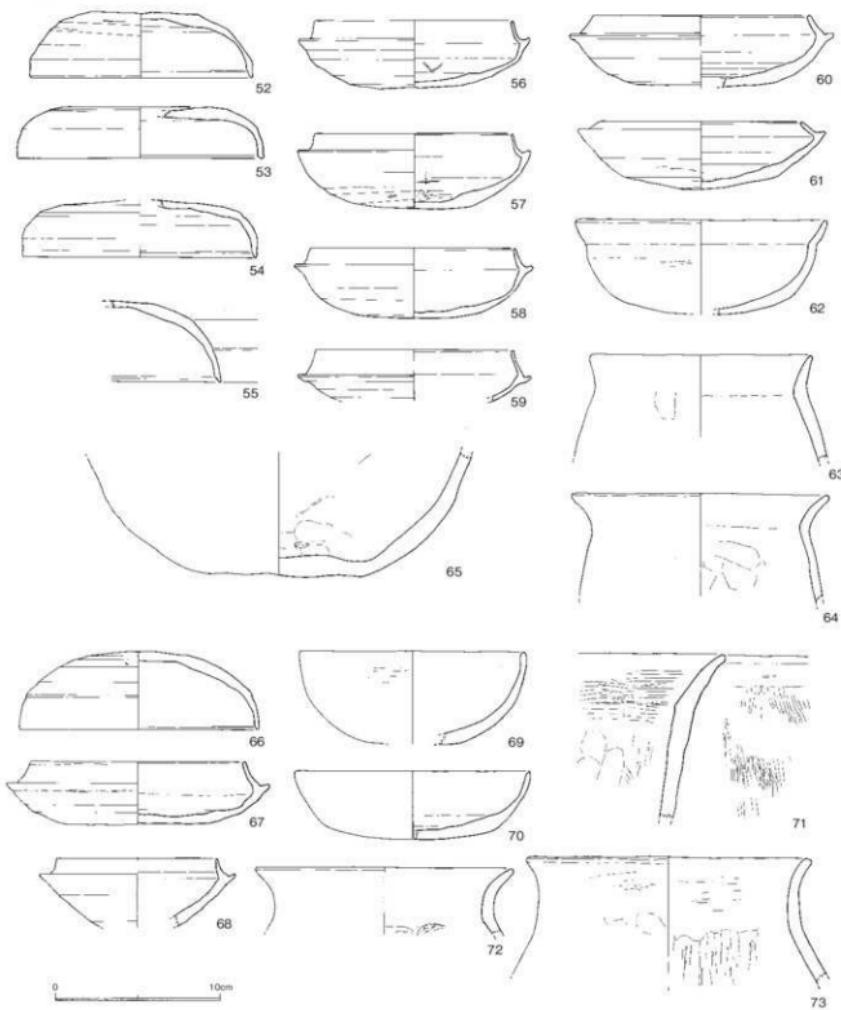


Fig.65 SC167出土遺物実測図 (1/3)

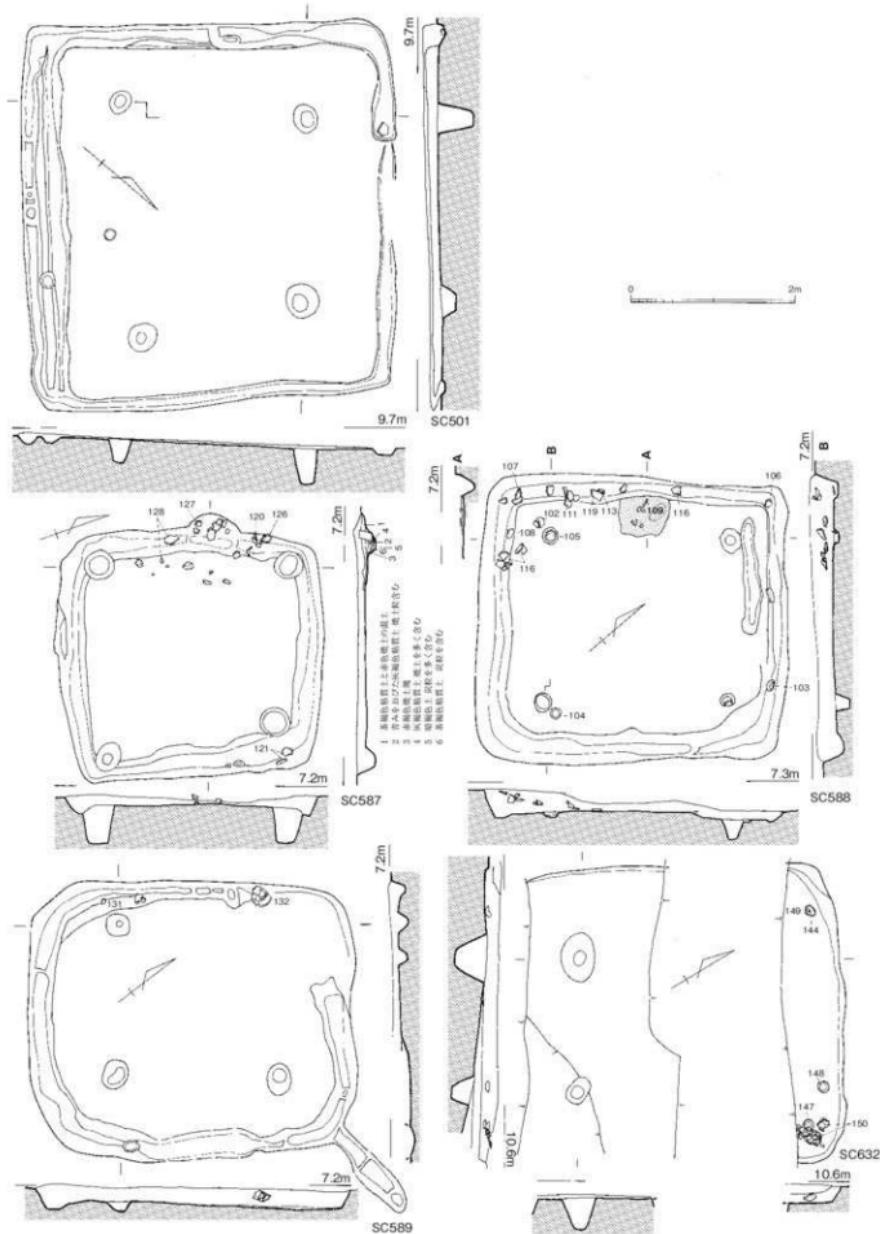


Fig.66 竪穴住居跡SC501・587・588・589・632実測図 (1/60)

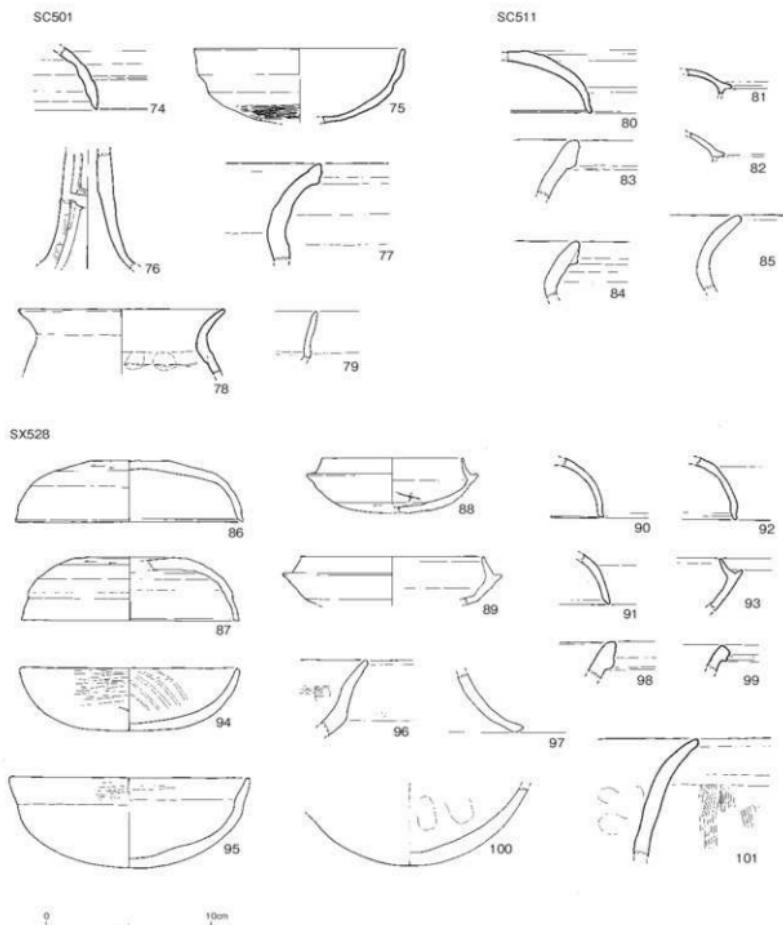


Fig.67 SC501・SX528出土遺物実測図 (1/3)

SC501 (Fig. 66-67) 5-1 I9 削平により床面が一部残るのみで、壁溝で方形プランを確認できる。南東側では壁溝が2条見られ、SC017と共に通する。壁溝の覆土は暗褐色粘質土である。SX526・528、SK564を切り、SB515・514に切られる。74・75・76は須恵器、77～79は土師器である。79には刷毛目が見られる。

SC511 (Fig.55-67) III区J9 浅く暗褐色土を覆土とする直線的プランを検出した。削平で広がりは不明。住居跡の可能性もある。80～82は須恵器、83～85は土師器である。

SC587 (Fig.66-69) 5-3区J5 SC588・589・587の3軒が切合い、この順序で構築されている。いずれも残りが悪く、切合の判断はわかりにくい。SC587は北辺にカマドの痕跡がある。壁から張り出した

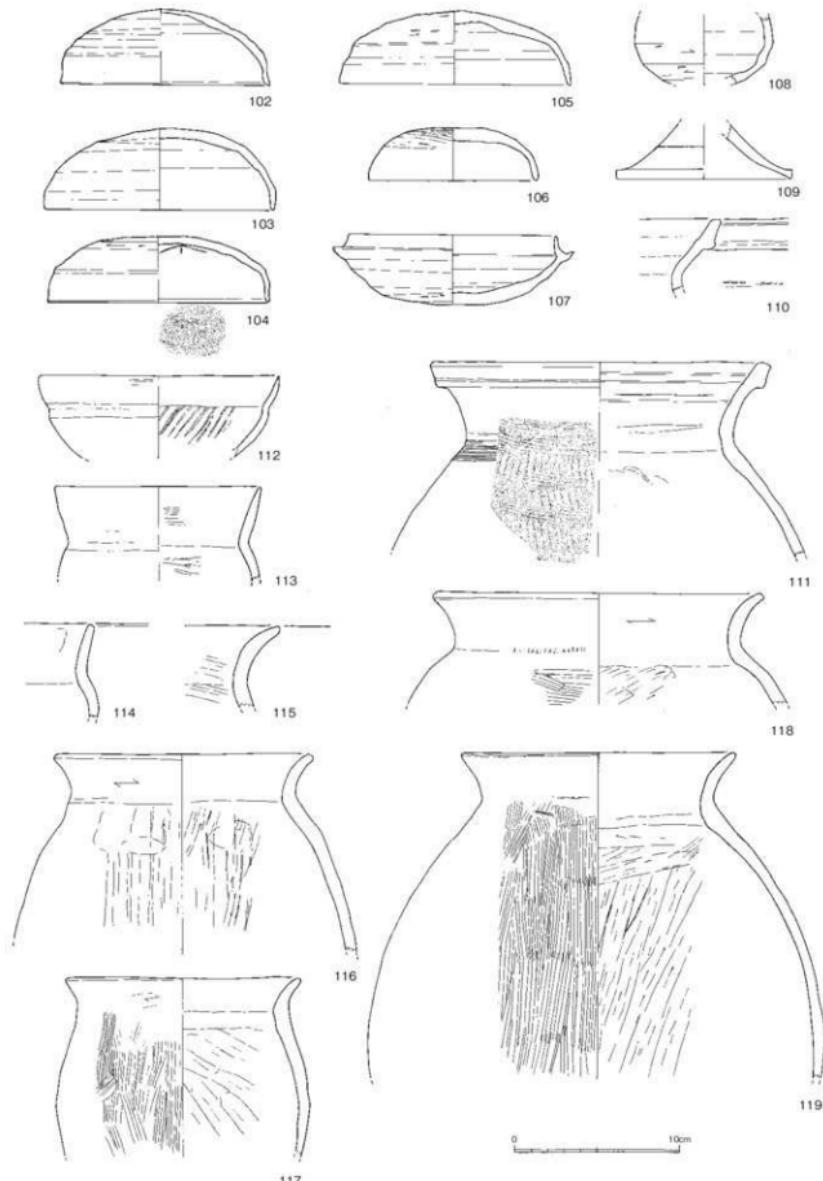


Fig.68 SC588出土遺物実測図 (1/3)

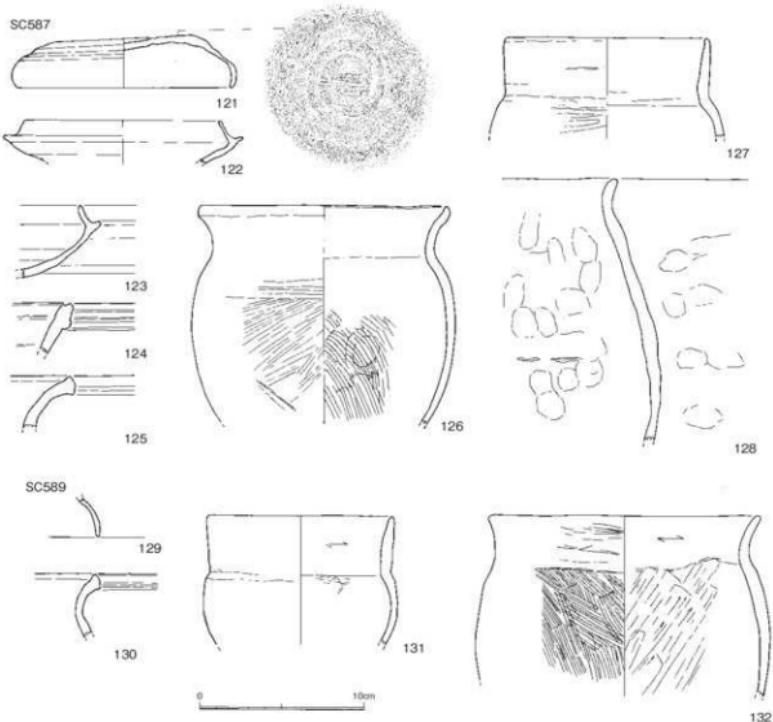


Fig.69 SC587・589出土遺物実測図 (1/3)

範間に茶褐色土と赤色焼土の混土が壁溝に被る状態で広がり、中央には長さ20cmほどの礫が立って出土した。その東側の壁溝内には焼土混じりの炭層が広がる。121から123は須恵器の壺で121の外面天井部には叩きが残る。124から128は土師器である。

SC588 (Fig.66-68) 5-3区J5 SC587・589に切られる。東辺には壁溝に沿った溝が見られる。東側はSC589との切り合いがわかりにくく全体と一緒に下げた。北辺には焼土が薄く広がり、カマドの痕跡と考えられる。北西隅で床面より浮いた位置で遺物が多く出土した。102から109は須恵器、110から119は土師器である。106は壁溝上面出土でSC287の可能性もある。

SC589 (Fig.66-69) 5-3区J5 SC587・588に切られる。北東隅は掘りすぎたのか壁溝を確認することができなかった。4本柱と考えられるが、北西側の1基を確認できていない。ちょうどその位置に住居跡を切るピットがあり、重なっている可能性もある。カマドは確認できなかった。南側は切り合いがわかりにくく、SC588の床まで下げてわずかに残る壁溝の痕跡を確認した。遺物はすくない。129は須恵器、130から132は土師器である。

SC631 (Fig.70-71) 5-35区K3 やや高い位置で検出した。金屎池の削平により西側半のみが残存する。削平がおよばない部分の残りは良く壁高70cmを測る。南西側には低いベッド状の遺構を作り出して

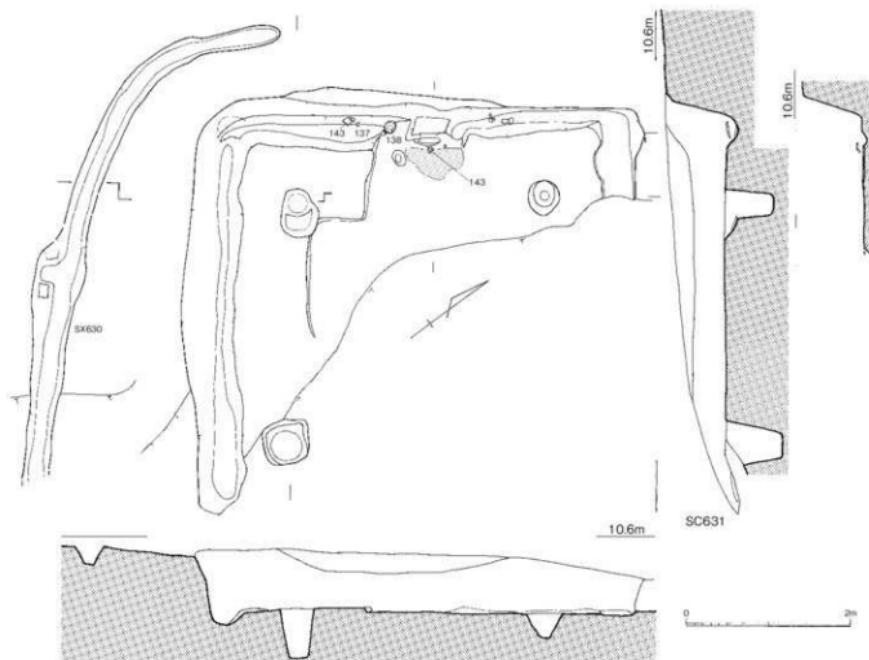


Fig.70 壁穴住居跡SC631実測図 (1/60)

いる。北辺中央には焼土があり、カマドの痕跡と考えられる。また遺構の西側には深さ20cmほどの溝が弧状に巡る。プランを追って調査区を拡張して掘削したが図のように途切れた。遺物は少ない。133から136は須恵器の壺で137から141・143は土師器、142は弥生土器で器台である。143はカマドと壁溝出土片が接合した。138は須恵器の模倣品である。

SC632 (Fig.66-71) 5-3区K3 暗褐色土を覆土とする方形のプランを確認した。中央を金庫池の施設にともなう攪乱が縦断し南北側は削平によりプランは不明で床は削られる。主柱穴は4本と考えられ2基を確認した。壁溝は確認できない。遺物は東隅に集中する。144・145は須恵器で146から150は土師器である。

(2) 周溝状溝

「コ」の字状または等高線の方向に走る溝を検出した。壁穴住居の壁溝とは弧を描く、立ち上がりが緩い等の点で異なる。II区、III区に多く、全てにふれない。また、性格は同じとは限らないが周溝状溝として一括する。住居跡・建物に伴うと考えられるものは、その項でふれる。遺物は多くないが、およそⅢ b・Ⅳ期の須恵器と土師器片である。特に触れていない場合は同様である。

SX054 (Fig.72-74) II区E8 L字状プランにめぐる。橙茶色土を覆土とし立ち上がりが急である。SB100を開く可能性がある。151から154は須恵器ではかに土師器の壺片が出土している。

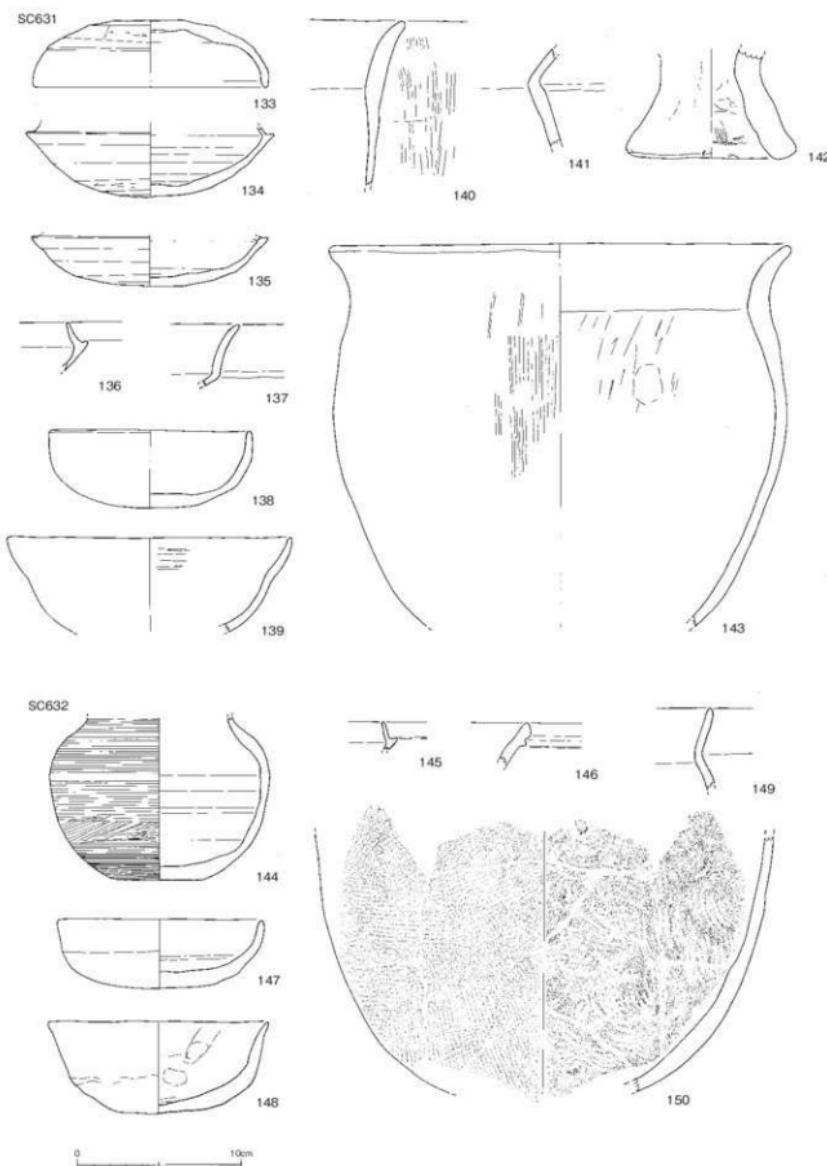


Fig.71 SC631・632出土遺物実測図 (1/3)

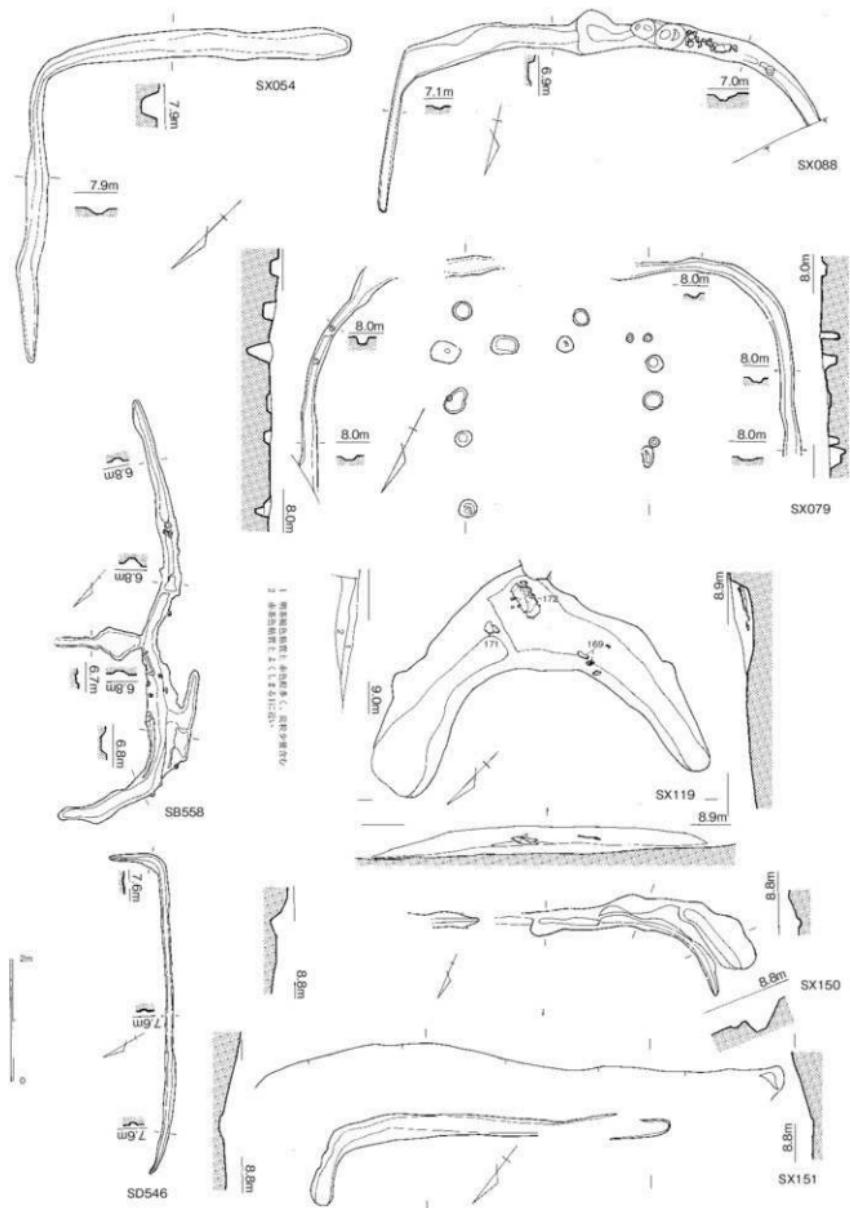


Fig.72 周満状満SX079・088・119・150・151・546・558実測図 (1/80)

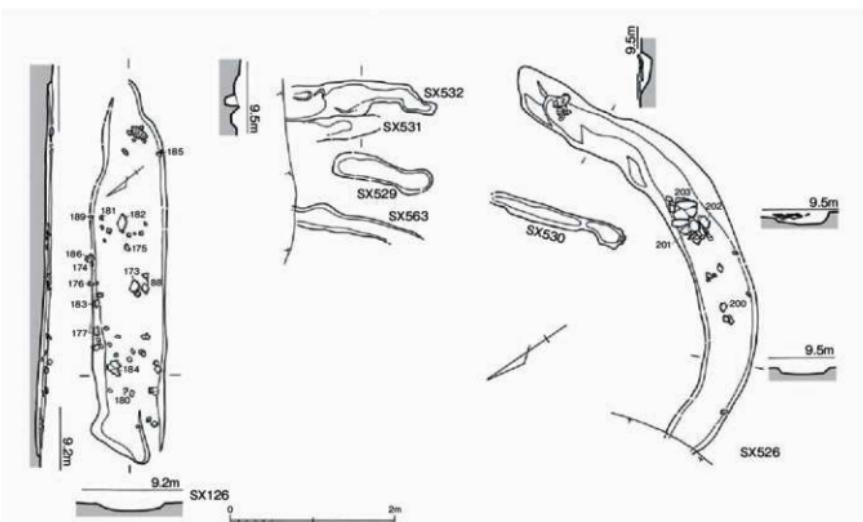


Fig.73 周溝状遺構SX126・526実測図 (1/60)

SX079 (Fig.72) II区DE9 弧状にめぐる溝で暗褐色粘質土を覆土とする。建物の可能性があるピットを拾ったが描わず不確実である。土師器壺小片、須恵器坏天井部小片が出土している。

SX070・081・082・083 (Fig.54) II区E8 1層淡橙茶色土を覆土とし立ち上がりが緩く浅い。

SX088 (Fig.72・74) II区DE7 コの字プランにめぐる溝の一か所に土器が集中する。155は須恵器の壺蓋、156は土師器の壺で外面は刷毛目、内面は削りである。

SX114・115・116・117・134・146・147 (Fig.56) III区GH9 淡赤茶色粘質土を覆土とする浅い溝で、直線的な一辺だけだが断面形態、覆土がコの字状の溝と類似する。遺物は少なく7世紀代までである。

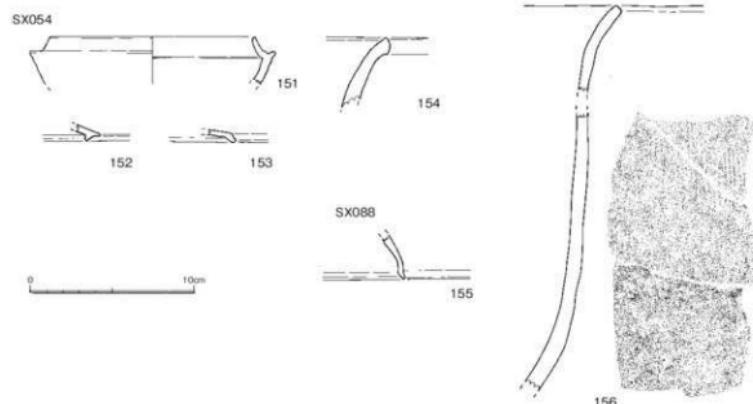


Fig.74 SX054・088出土遺物実測図 (1/3)

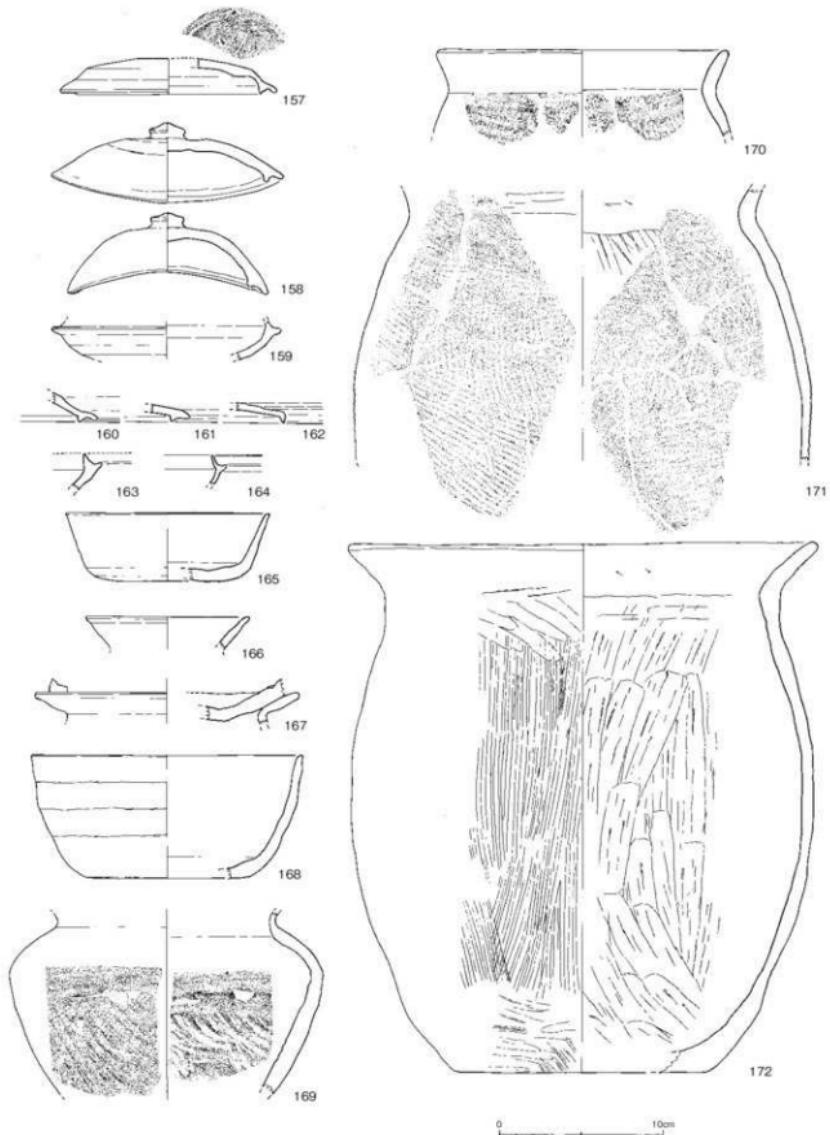


Fig.75 SX119出土遺物実測図 (1/3)

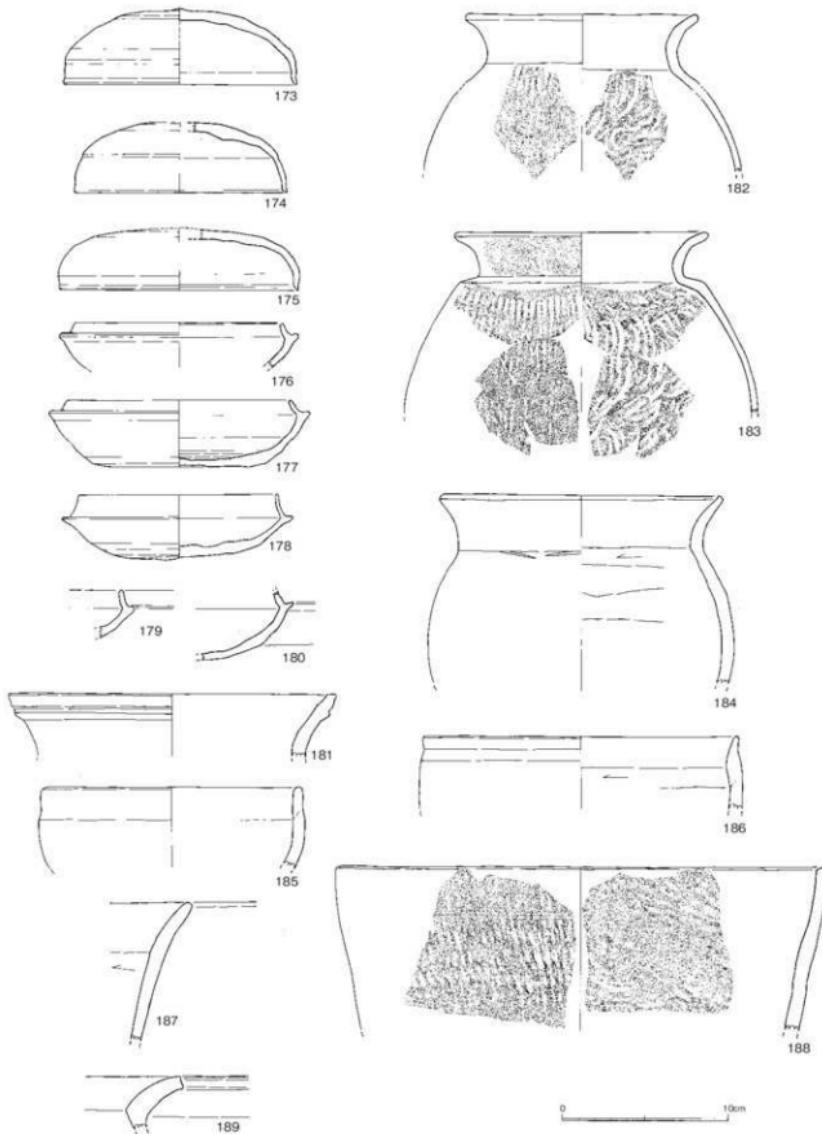


Fig.76 SX126出土遺物実測図 (1/3)

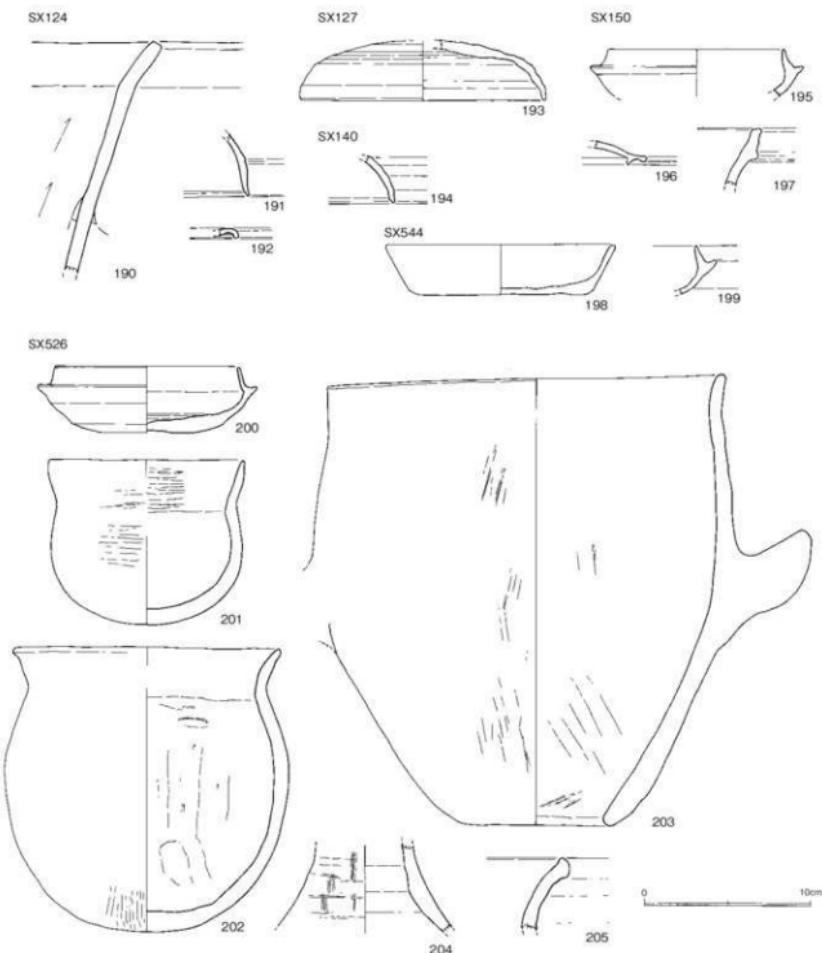


Fig.77 SX124-526出土遺物実測図 (1/3)

SX119 (Fig.72-75) III G9 L字形プランのコーナーを丘陵側に配し他と異なる。コーナー部分に遺物が多く出土した。淡橙茶色土を覆土とする。157から169は須恵器、171・172は土師器で171は叩きを施し172は平底で刷毛目調整である。

SX123・124 (Fig.72-77) GH10 直線的に傾斜に直行する。立ち上がりは明瞭で暗褐色土を覆土とする。190は土師器の瓶、191・192は須恵器である。

SX126 (Fig.73-76) III区H9 傾斜に方向に走る浅い溝で幅65cmと広く、暗褐色粘質土に赤茶色小ブ

ロックが入りしまりがない。遺物が比較的多く出土した。173から180は須恵器、他は土師器である。叩きを施す土師器壺片が多い。

SX127 (Fig.63-77) Ⅲ区H9 SX528に続く同じ溝。193は須恵器の壺蓋である。

SX136・137・138 (Fig.55) Ⅲ区GH9 淡灰褐色土を覆土とする。北西端は上面で確認した。

SX140 (Fig.55-77) Ⅲ区G9 SC120に切られる。黒褐色粘質土を覆土とし異質。194は須恵器。

SX150 (Fig.72-77) Ⅲ区G9 段落ち下にSX151と横に並ぶように位置する。淡茶色粘質土を覆土とする。195-196は須恵器、197は土師器ではかに土師器壺片などが出土している。

SX151 (Fig.72) Ⅲ区GH9 段落ち下に位置しSB180を囲む可能性もある。Fig.56土層2に見られる。砂を含む茶褐色土を覆土とし、周りに小さなくぼみが多く見られる。土師器小片が出土した。

SX526 (Fig.73-77) 5-1区I9 SC501に切られる。弧を描く浅い溝で橙色かった淡茶色粘質土を覆土とし、遺物を多く含む。200は須恵器の壺、201から205は土師器である。

SX544 (Fig.59-77) 5-3区IJ4 傾斜に直交する。周囲の溝と同じく暗褐色粘質土を覆土とするが土師皿198が出土した点が他と異なる。199は須恵器。

SX546 (Fig.72) 5-3区J3 細く浅い溝で暗褐色粘質土を覆土とする

SX558 (Fig.72) 5-3区I4 二つの溝のつながりが。丁度対応する建物はない。遺物は少ない。

(3) 堀立柱建物

72棟を復元し示した。中には不確かなものもある。柱穴から出土した遺物は、須恵器を中心に図示した。小片がほとんどで出土遺物だけで時期は決めがたいが、ほぼ6世紀後半から7世紀を主体とし、一部8世紀代まで含むと考えられる。遺物はこれに外れるものを中心に記し、位置と概略を示す。

SB042 (Fig.78-91) I区C8 底に石を敷く。2×3間で北に延びるかは不明。209は須恵器。小片で不確かだが210が土師器碗である。他の建物と比べて規模など異質である。

SB043 (Fig.78) I区B8 1×1間。柱穴の堀方が大きく須恵器片1点と土師器片を多く出土した。

SB044 (Fig.78) I区B8 2×3間以上を想定したが南西隅の柱穴を検出できず建物として不確かである。211は須恵器、212は小片ではっきりしないが黒色土器か。213は土師器の甕である。

SB045 (Fig.78-91) I区D9 2×2間。8世紀以降の溝SD022に切られる。須恵器壺214は混じりの可能性もあるう。

SB046 (Fig.78) I区D8 1×2間。西側はSD022の底に残る。須恵器と土師器の小片のみ出土した。

SB047 (Fig.79-91) I区BC8 2×4間の大型を想定したが混乱のため不確実。SD013に切られる。碗の可能性がある土師器片が出土している。215は須恵器の壺身。

SB049・058 (Fig.79-91) I区C9 SK029上のピットをまとめたが不確か。216は須恵器壺蓋である。

SB048 (Fig.79) I区D8 1×2間。SD022に切られる。遺物は弥生土器のみ。

SB093・094 (Fig.79-91) II区DE8 2×3間と1×1間が並ぶ。2層黒色土上で検出した。遺物は少ない。SX054に切られる。217から220は須恵器でいずれも小片である。

SB095 (Fig.80-91) II区E8 1×2間。2層を下げる検出した。221～223は須恵器、224・225は土師器。

SB096 (Fig.80-91) II区E7 2×2間の総柱。226から231は須恵器。232は瓦質土器で混入であろう。

SB097 (Fig.80-91) II区F7 1×1間。233から235は須恵器の壺。

SB098 (Fig.80) II区F7 2×2間の総柱。遺物は取り上げ時のミスで不明。

SB099 (Fig.80-91) II区E9 2×3間に張り出しを想定した。2層黒色土上での検出で茶褐色系の粘質土を覆土とする。236から240は須恵器、241は土師器である。

SB100 (Fig.81-91) II区E9 1×3間が南に延びると考えるがはっきりしない。丁度SX054が囲む。

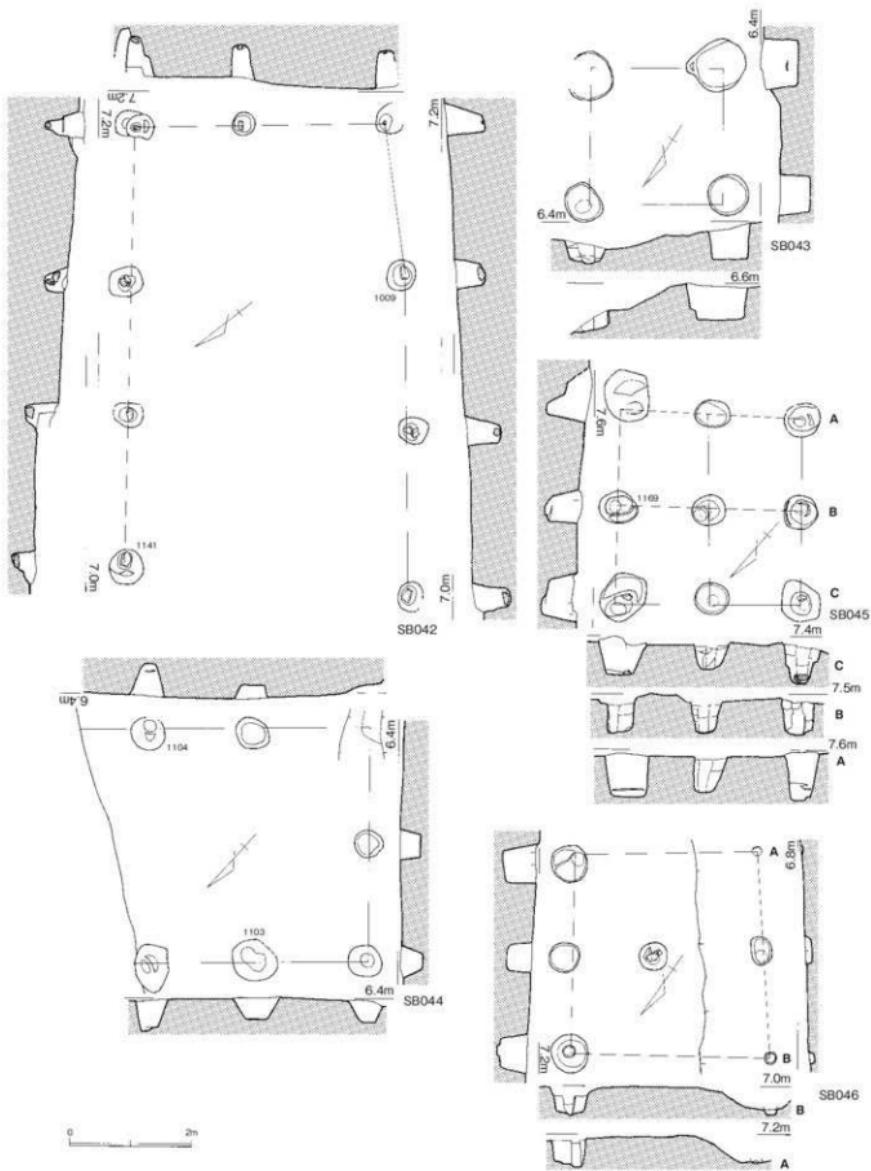


Fig.78 挖立柱建物SB042・043・044・045・046実測図 (1/80)

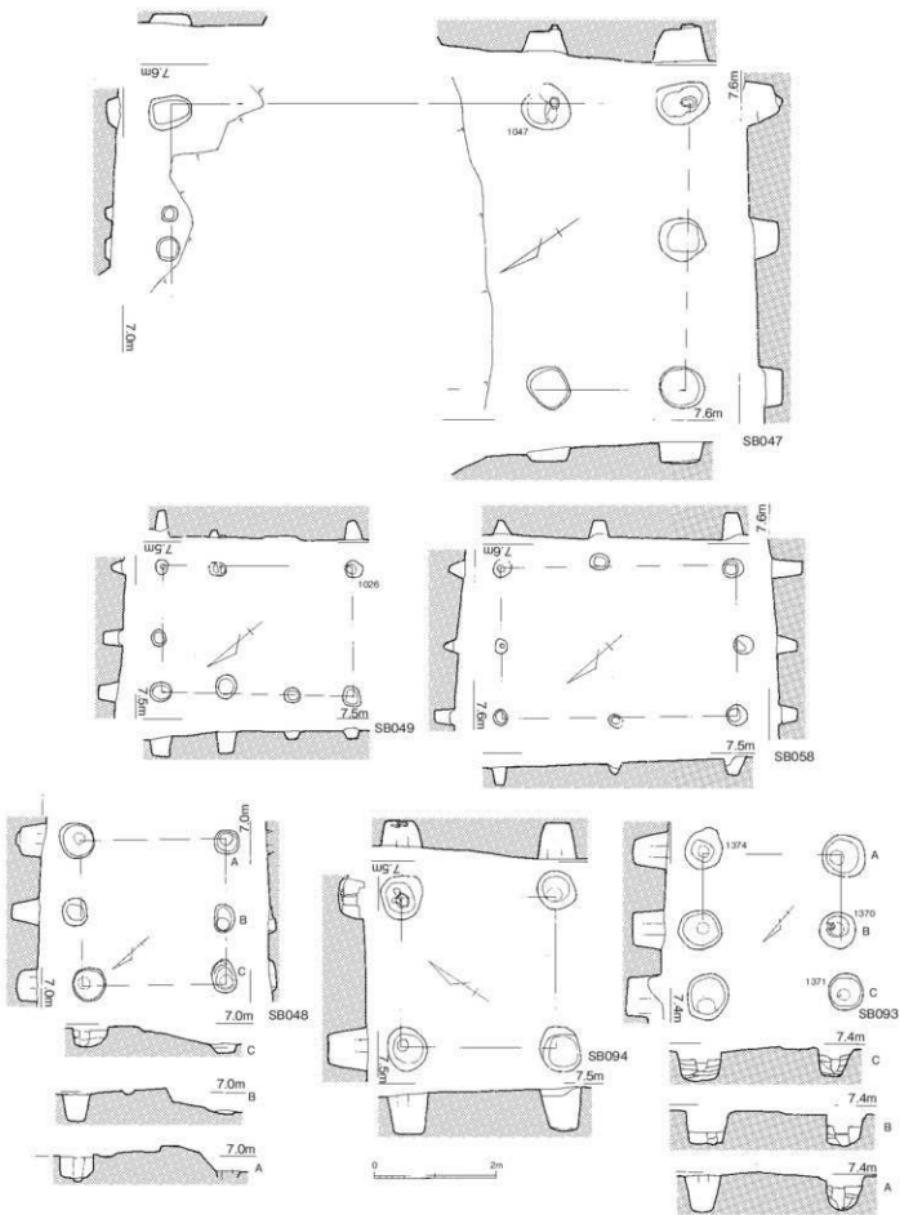


Fig.79 挖立柱建物SB047・048・049・058・093・094実測図 (1/80)

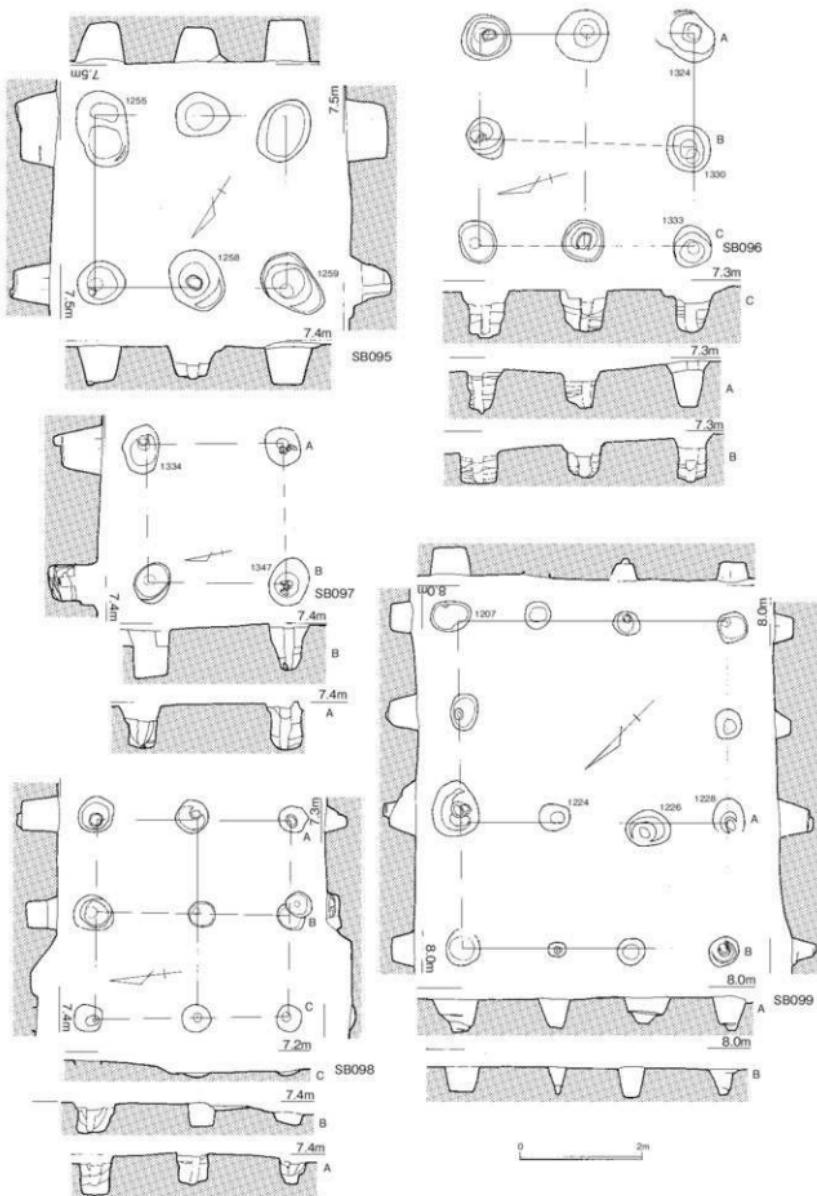


Fig.80 挖立柱建物SB095・096・097・098・099実測図 (1/80)

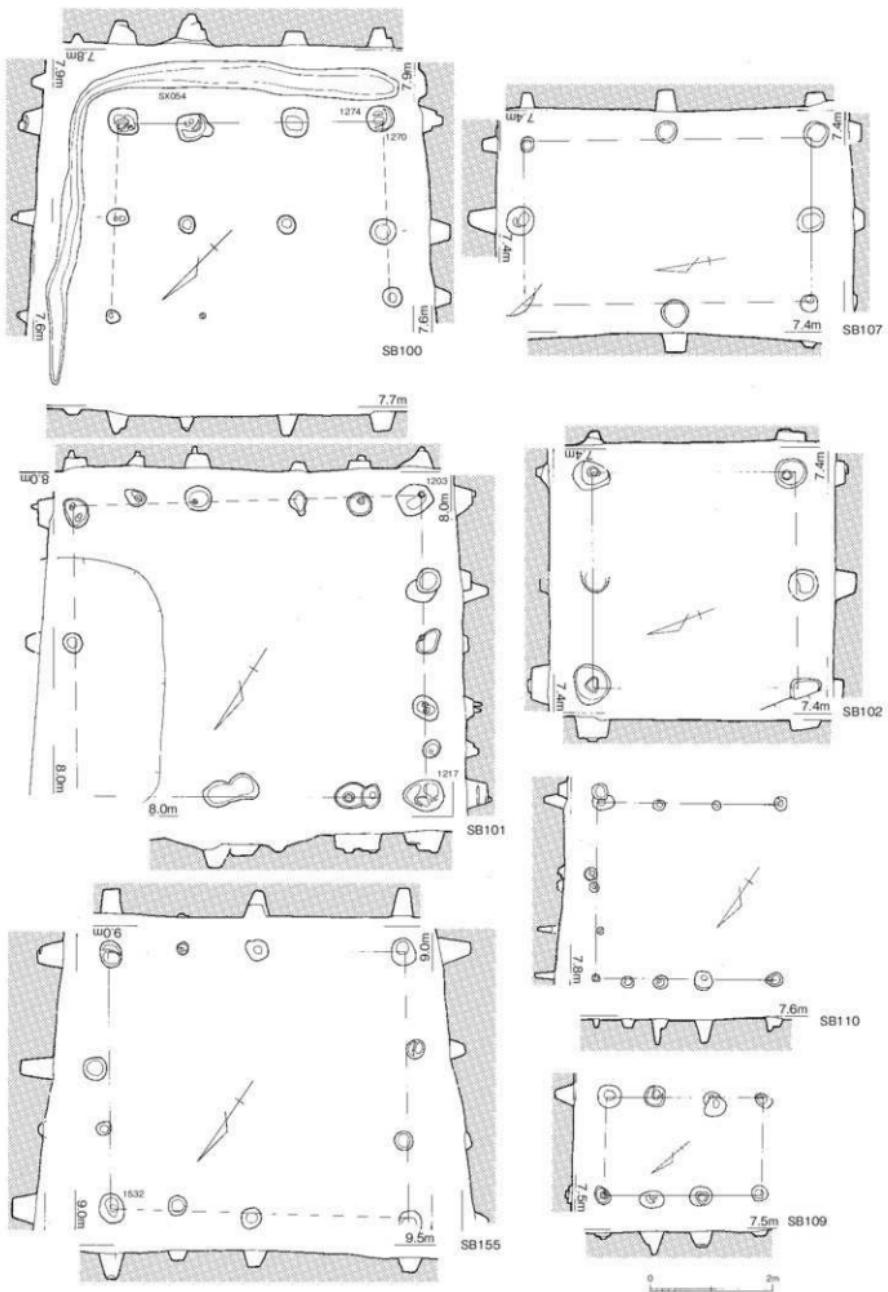


Fig.81 掘立柱建物SB100・101・107・108・109・110・155実測図 (1/80)

- 242・243は須恵器の甕、244は土師器、245は土玉で細い穿孔がある。南側のピットがはっきりしない。
- SB101** (Fig.81・91) II区D9 間隔の狭いピットが並ぶ。SC011を切るが北東隅を確認できていない。遺物は少なく土師器椀状の小片が1点ある。246は土師質、247・248は須恵器坏身の小片。
- SB102** (Fig.81) II区E10? 1×2間で遺物は土師器片のみである。
- SB107** (Fig.81) II区F7 2×2間を想定した。北西隅の柱穴が攢乱と他の柱穴と重複し不確定。
- SB109** (Fig.81) II区E8 1×2間を復元した。浅く不確かな柱穴もある。土師器小片が出土。
- SB110** (Fig.81) II区E8 小ピットが集まつた箇所で2×3間を復元したが不確かである。
- SB144** (Fig.82) III区G9 上面検出の小ピットがならぶ。不確実。
- SB155** (Fig.81・91) III区FG9 上面検出ピットを中心に想定した。251は須恵器。他は土師器椀である。
- SB156** (Fig.82) III区G9 上面のピットが並ぶ。黒色土器片が出土している。
- SB157** (Fig.82・92) III区G9-10 上面のピットで復元した。253は土師器椀、254は黒色土器椀、255は土師器甕、256・267は土師器坏で256はヘラ切り痕が残る。
- SB170・171** (Fig.82・91) III区FG9-10 SC120を切る。上層の遺構に対応すると考えられる。258は黒色土器Aの椀である。
- SB172** (Fig.82・91) III区GH9 南側の柱筋が当初から目立ち2×4間を想定した。覆土は淡赤茶色土でSX126を切る。259から262は須恵器。
- SB173・174** (Fig.83・92) III区GH9 南側の2列が当初から目立ち、その間隔から南北筋の重なりを想定し2間を復元した。1間にまとまることも考えられよう。SB173の北西隅から二つ目のピットはFig.58の土層断面に見える。覆土は淡茶褐色系の粘質土である。調査時の観察ではSC118と120が切るに判断した。263・264は須恵器である。
- SB175** (Fig.83) III区GH9 淡橙茶色粘質土を覆土とする。南側の柱間隔が攢わず、北側は段落ちで失われていると判断した。遺物は少なく須恵器・土師器片が出土している。
- SB176** (Fig.84・92) III区GH9-10 1×2間の建物で溝SX115に切られる。遺物は少ない。
- SB177・178** (Fig.84・92) III区FG8・9 径80cmまでの大型で深い柱穴がならぶ。重なりから立て替えと考えられる。内側のSB177が切る。遺物は少なく7世紀代で収まる。268が土師器で他は須恵器。
- SB180** (Fig.84・92) III区GH8-9 3×4間分を確認した。大型の建物になる。SB177などとともに包含層をすべて外した淡黄茶色砂質土上面で確認した。遺物は少なく土師器小片のみである。273は土師器甕。
- SB181** (Fig.85) III区GH8-9 削平の落ち際で1×1間以上を想定して。遺物はわずかである。
- SB182** (Fig.85) III区G8-9 1×1間を想定した。落ち際で不確実。遺物は小片で274・275は須恵器。
- SB186** (Fig.85・93) III区H9 1×1間を復元した。SX126を切る。覆土は淡橙茶色土である。276は須恵器坏蓋で他に土師器小片がある。
- SB187** (Fig.85) III区H9 2×2間を想定したが削平により北東側が不明である。
- SB190・191** (Fig.85) III区GH7 段落ちの下で2棟を復元した。覆土はいずれも暗褐色で砂が多い。SP1170でやや多く遺物が出土した。277・281は土師器である。
- SB420** (Fig.86) 3-2区D4 2×2間の総柱建物で柱材が出土している。遺物は土師器甕片1点。
- SB430** (Fig.86) 3-2区E4 2×2間の総柱建物で柱材が残る。遺物の出土はない。
- SB440** (Fig.86) 3-2区E4 2×4間の建物で繩文土器片が1点出土している。
- SB462** (Fig.86) 3-2区D4 1×1間の小型の建物である。遺物はない。
- SB463～466** (Fig.86) 3-2区D4 河川の落ち際に柱痕跡が残るピットが並ぶ。橋であろうか。

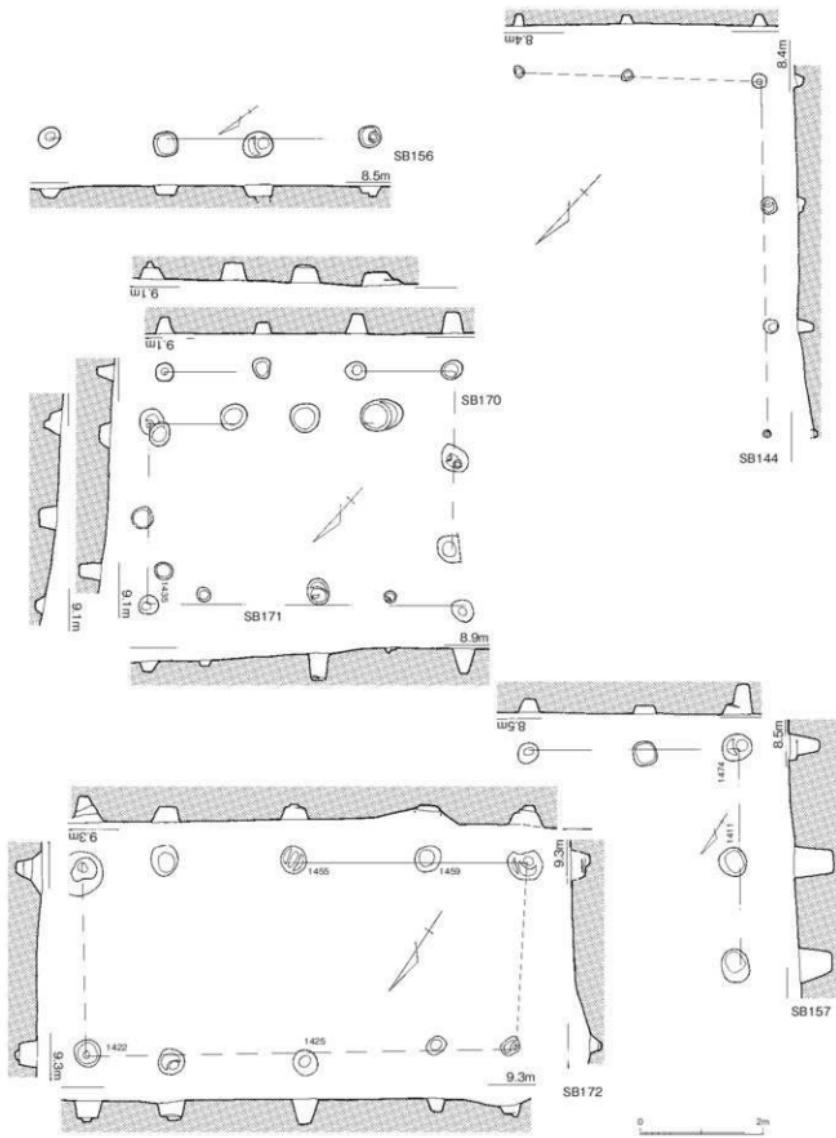


Fig.82 掘立柱建物SB144・156・157・170・171・172実測図 (1/80)

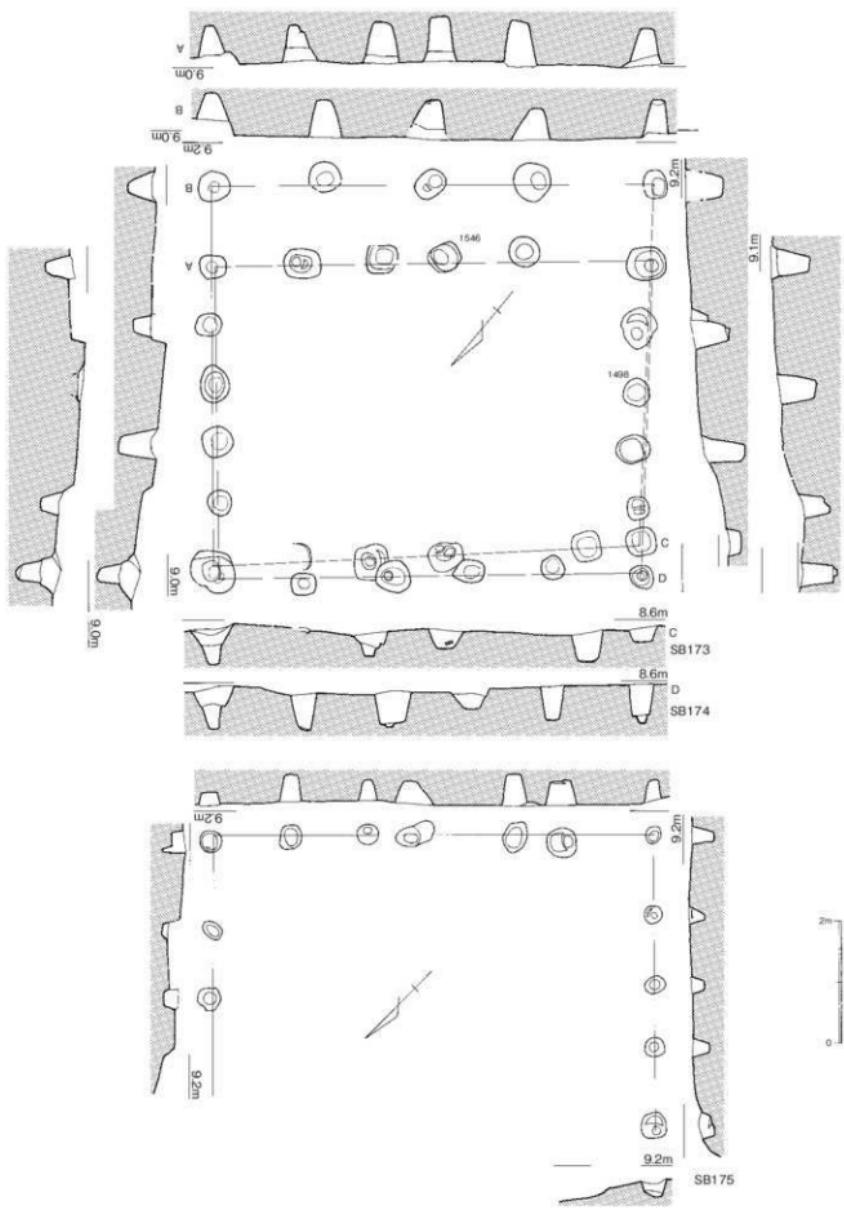


Fig.83 据立柱建物SB173・174・175実測図 (1/80)

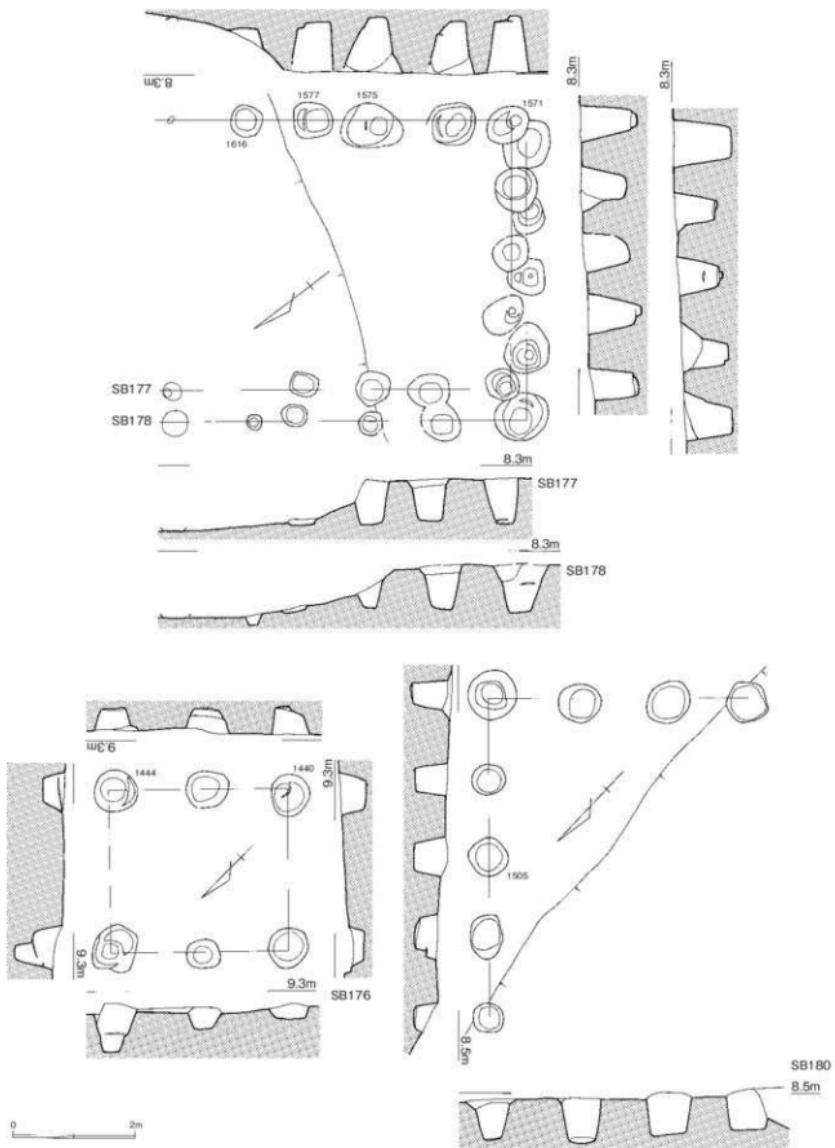


Fig.84 据立柱建物SB176・177・178・180実測図 (1/80)

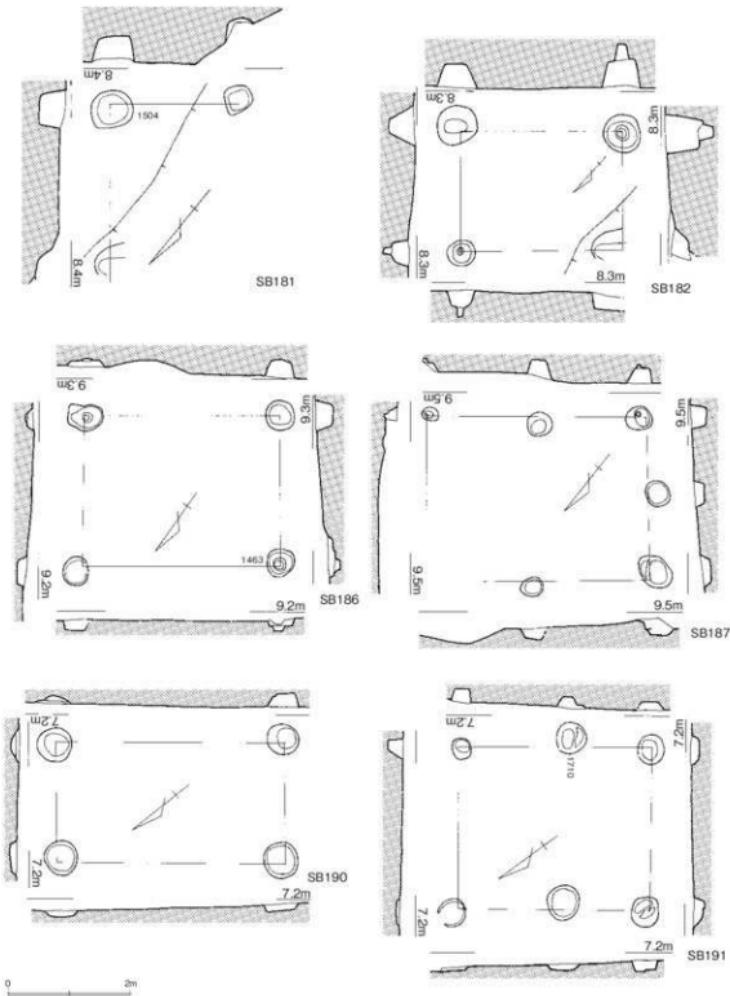


Fig.85 挖立柱建物SB181・182・186・187・190・191実測図 (1/80)

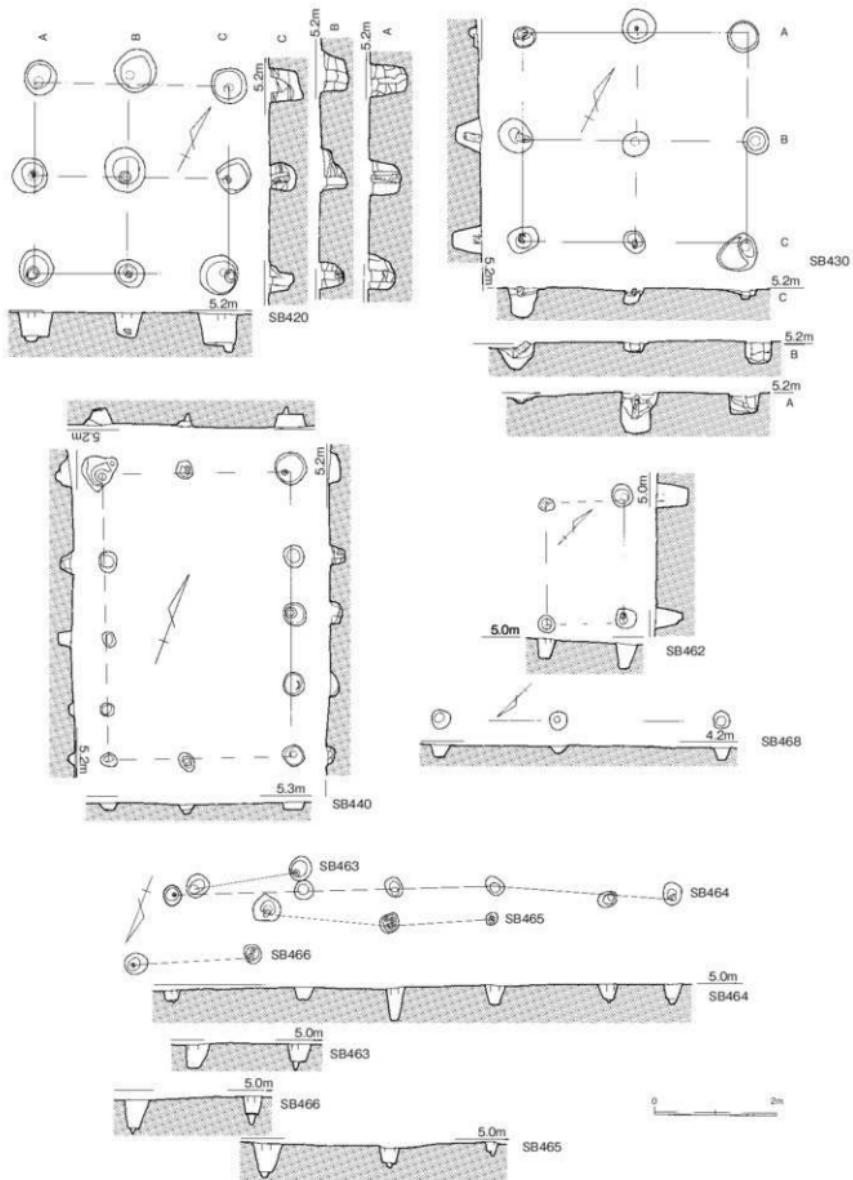


Fig.86 挖立柱建物SB420・430・440・462・463・464・465・466・468実測図 (1/80)

- SB468** (Fig.86) 3-2区E3 SB464から少し離れてピットが並ぶ。遺物はない。
- SB515** (Fig.87-92) 5-1区I9 2×2間の総柱建物でSC501を切る。282・283は須恵器で他に土師器片、羽口片が出土している。
- SB545** (Fig.87) 5-3区I3 2×2間。攪乱が入る。総柱の可能性がある。遺物は少ない。
- SB547** (Fig.87) 5-3区I4・5 1×1間を想定したが、不確実である。
- SB566** (Fig.87) 5-3区I4 1×1間。遺物は少ない。黒色土器の可能性がある小片がある。
- SB567** (Fig.87-92) 5-3区I3 1×1間。柱穴は深い。284は須恵器壺蓋。
- SB568・569** (Fig.87-92) 5-3区H4 いずれも1×1間でSB569が切る。SB568は区画溝SX558に切られる。遺物は少ない。285・286は須恵器である。
- SB570** (Fig.87-92) 5-3区J4 2×1間で残りが悪い。遺物は少ない。287・288は土師器である。
- SB571** (Fig.88-92) 5-3区I4 1×1間でSB582を切る。289・290は須恵器壺である。
- SB572** (Fig.88-92) 5-3区I4 2×1間で柱穴には重複があり立て替えか。遺物は少ない。292は土師皿か。
- SB573** (Fig.88-92) 5-3区I4 2×1間で中央に棟持柱がある。293は須恵器で他は土師器。
- SB574** (Fig.88) 5-3区I4 大型ピットで1×1間。遺物は小片のみである。
- SB575** (Fig.88-92) 5-3区J4 1×2間。土錐が別のピットから3個と1個出土した。301は土師質。
- SB576** (Fig.88-92) 5-3区I5 1×2間でSX541がコの字状に埋む。302、303は須恵器、304は土師器。
- SB577** (Fig.88-92) 5-3区I5 1×2間で遺物は少ない。305は土師器の瓶の底である。
- SB578** (Fig.88-92) 5-3区I4 小型のピットで2×4間。両側の柱間が狭い。遺物は少ない。306は須恵器。
- SB595** (Fig.89-93) 5-3区J5 1×2間でSC588を切る。307は須恵器壺身である。
- SB596** (Fig.89-93) 5-3区K5 1×2間。310は土師器で他は須恵器である。
- SB597** (Fig.89-93) 5-3区K5 1×2間。SB600に切られる。遺物は多め。313から315、320・321は土師器ではかは須恵器。317は高坏か。
- SB598** (Fig.89) 5-3区K6 1×2間。土師器・須恵器片が出土している。
- SB599** (Fig.89-93) 5-3区K5 2×3間のやや大きめのピットの間に小ピットが入る。322から325は須恵器で324は高台壺の可能性がある。325は壺か。
- SB600** (Fig.89-93) 5-3区K5 小降りのピットが特に北西側に並ぶ。326から339は須恵器、329・330は土師器である。
- SB611** (Fig.90-93) 5-3区I3 1×1間で棟持柱を持つと考えられる。東隅の柱穴は攪乱で欠く。土師器壺が少量出土している。331と332は精製の丸底鉢である。
- SB612** (Fig.90) 5-3区J4 1×2間で北隅を攪乱で欠く。遺物は土師器の小片のみである。
- SB613** (Fig.90-93) 5-3区I5 1×1間を復元した。333・335-336は須恵器、334は土師器である。
- SB614** (Fig.90-93) 5-3区J5 2×2間の庇付建物を復元した。SC587-579を切る338は土師器。
- SB615** (Fig.94-93) 5-3区J6 1×1間。須恵器壺片、土師器壺片が出土している。339は土師器。
- SB616** (Fig.90-93) 5-3区I6 小型ピットで2×2間を復元した。342は土師器、他は須恵器。
- SB617** (Fig.94) 5-3区J4 1×1間。土師器壺片が少量出土している。
- SB618** (Fig.94-93) 5-3区L5 1×2間。343は土師器、344・345は須恵器である。
- SB627** (Fig.90) 5-3区H6 2×2間の総柱建物でSB628と柱筋をそろえて並ぶ。遺物は壺身片と土師器壺が出土している。
- SB628** (Fig.90-93) 5-3区H6 1×2間に棟持柱を持つ。SK620を切る。346・347・350・352が須恵器、他は土師器である。

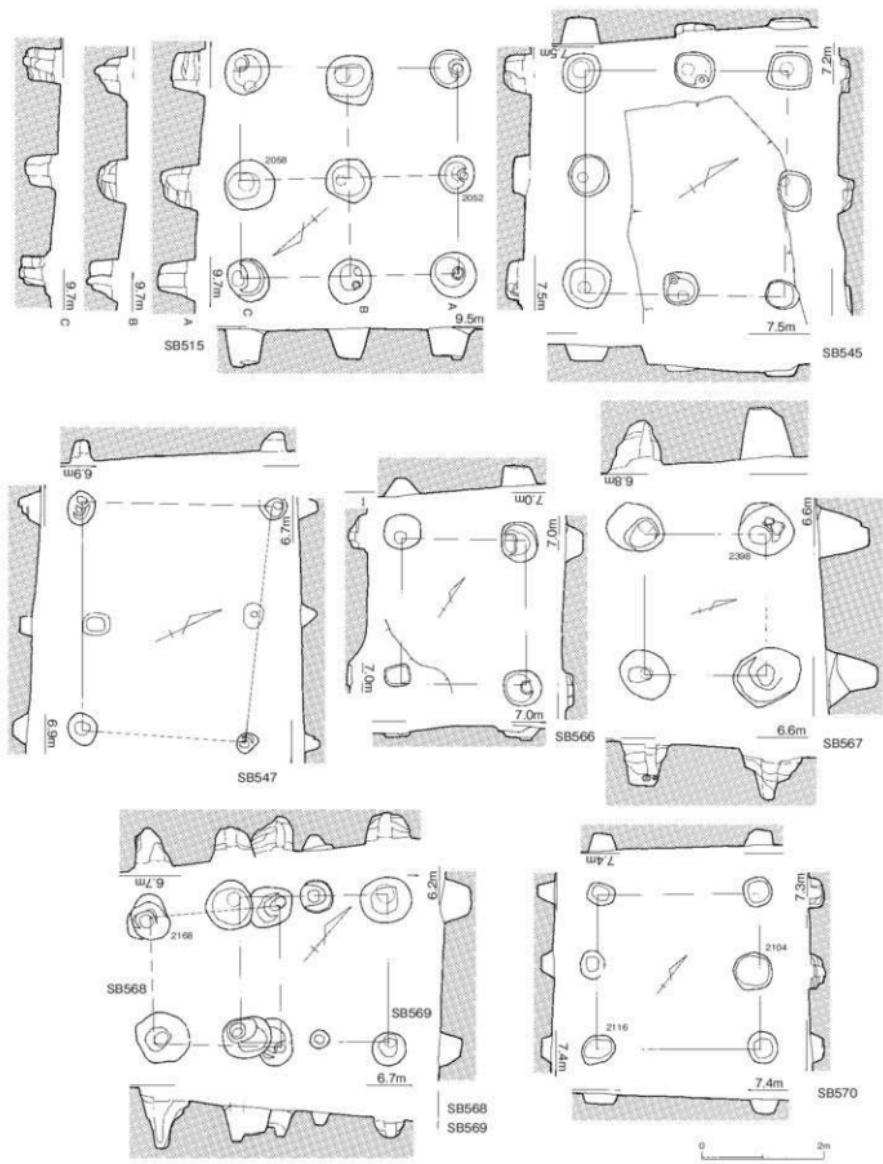


Fig.87 挖立柱建物SB515・545・547・566・567・568・569・570実測図 (1/80)

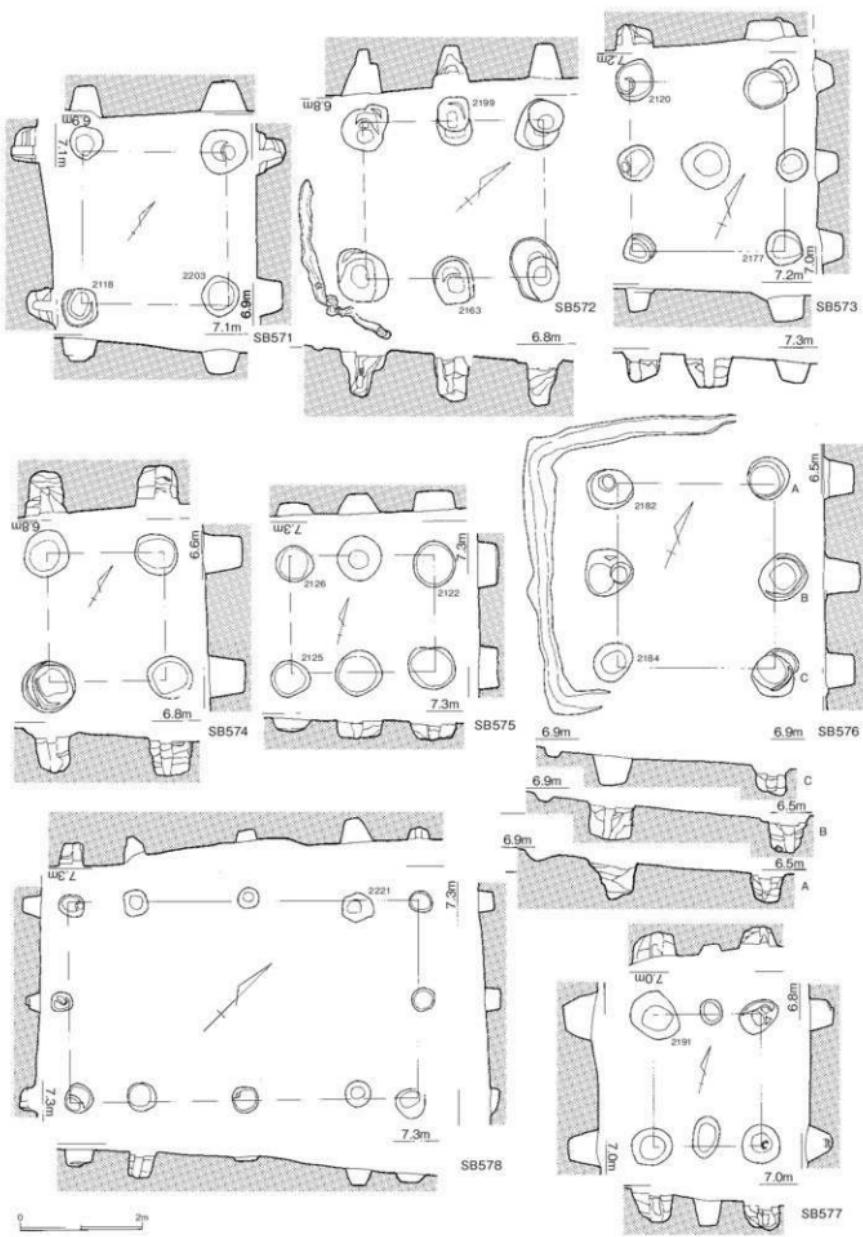


Fig.88 据立柱建物SB571・572・573・574・575・576・577・578実測図（1/80）

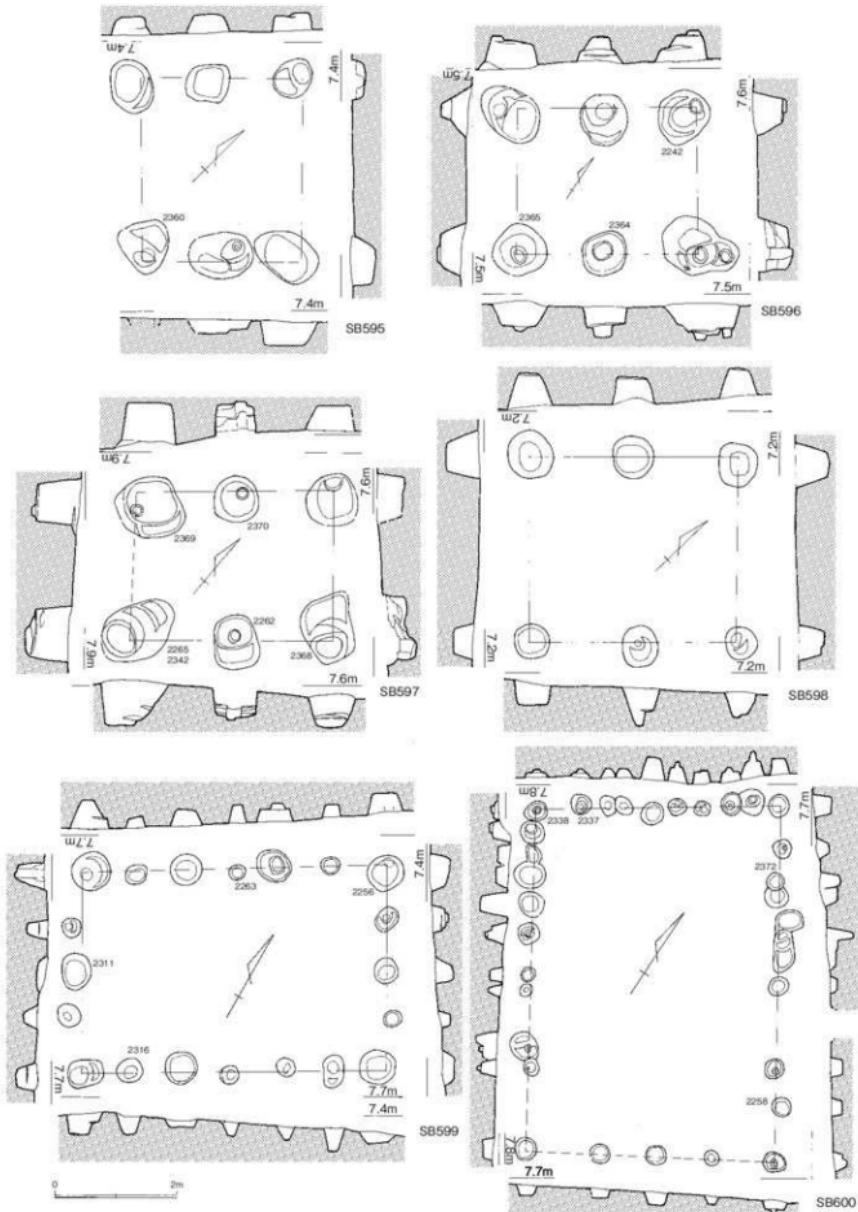


Fig.89 掘立柱建物SB595・596・597・598・599・600実測図 (1/80)

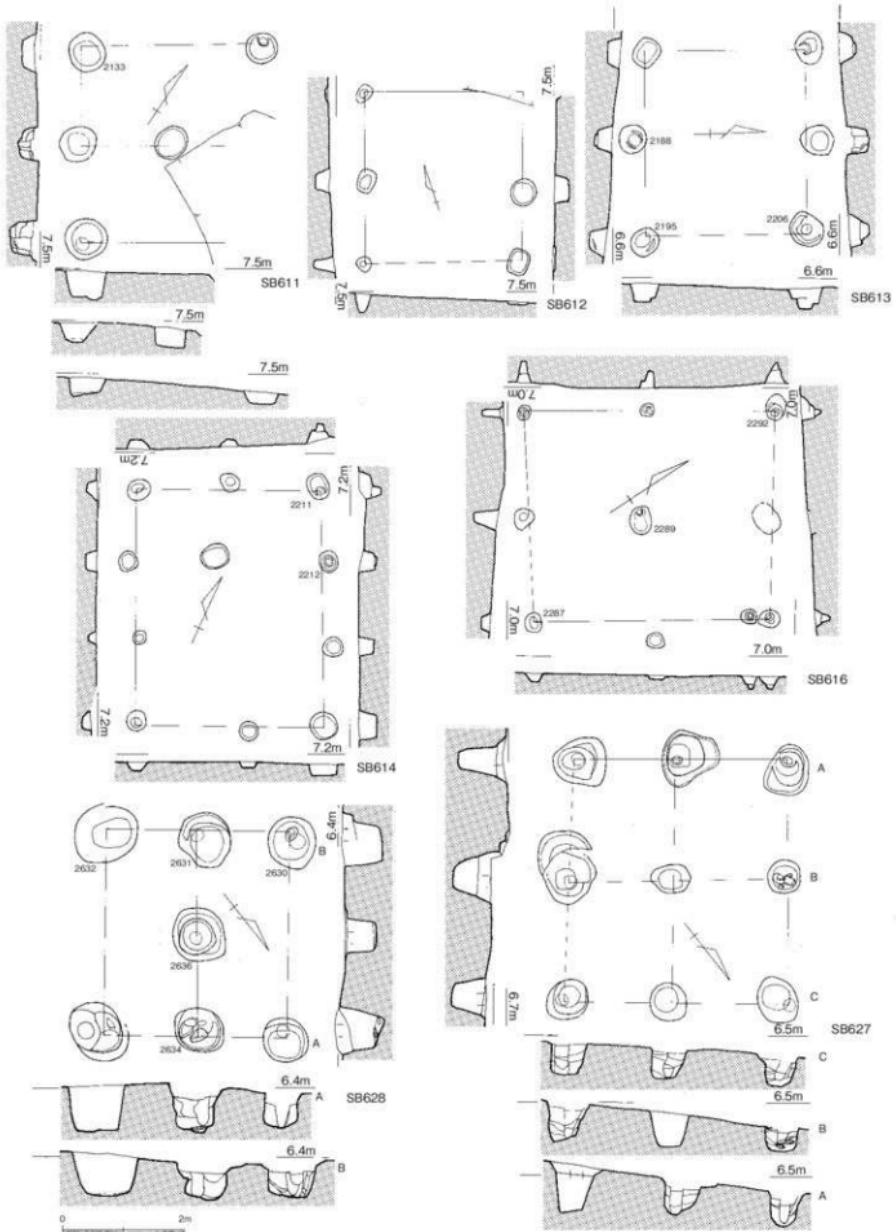


Fig.90 据立柱建物SB611・612・613・614・616・627・628実測図 (1/80)

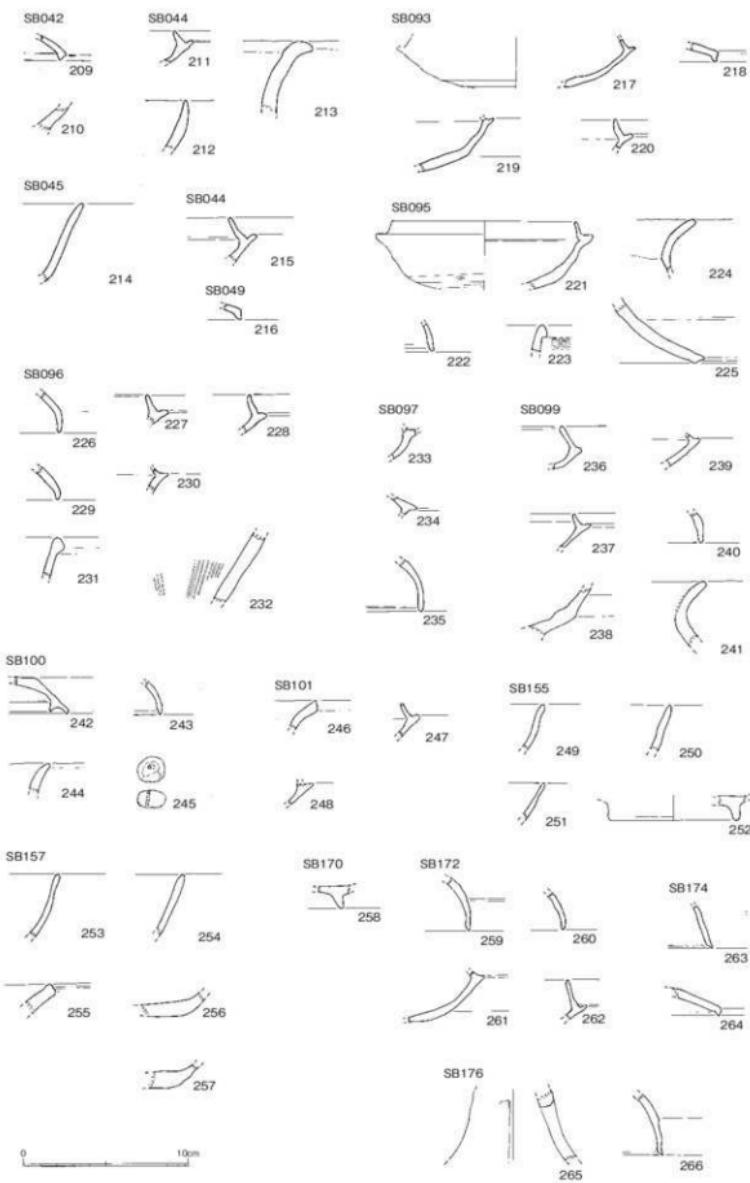


Fig.91 挖立柱建物出土遺物実測図1 (1/3)

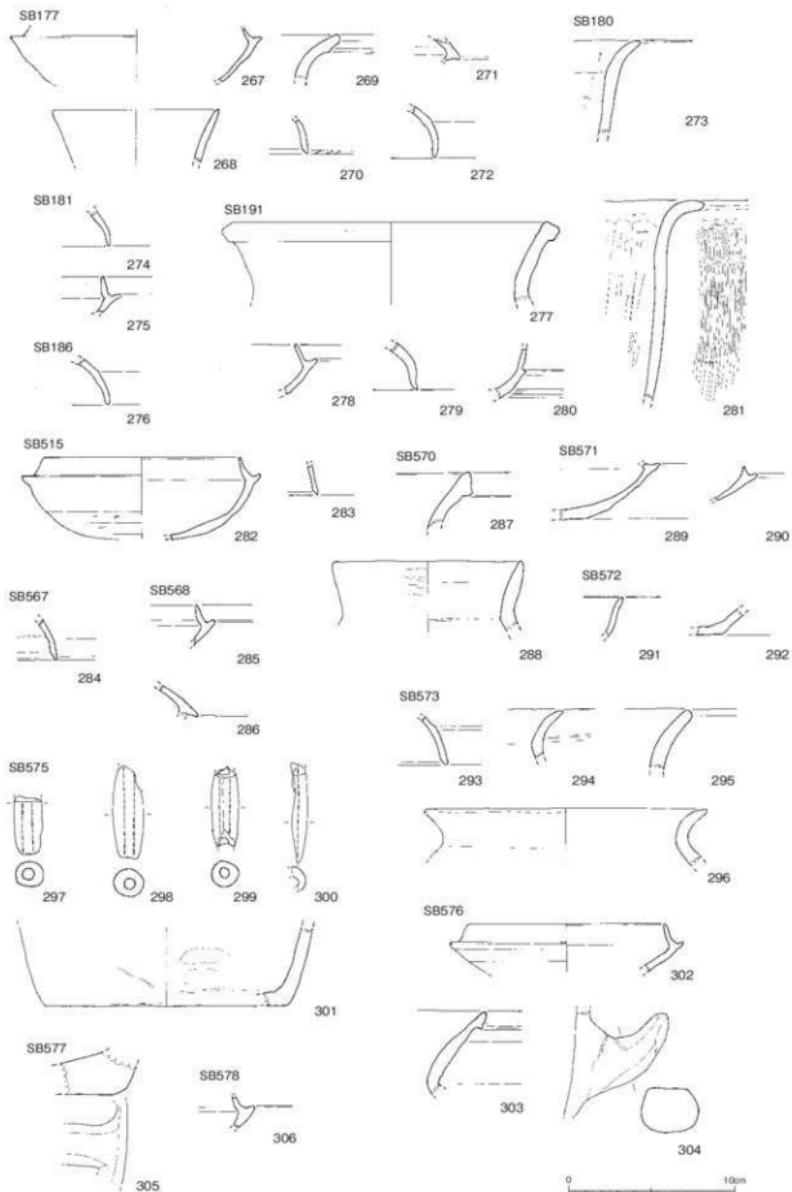


Fig.92 掘立柱建物出土遺物実測図2 (1/3)

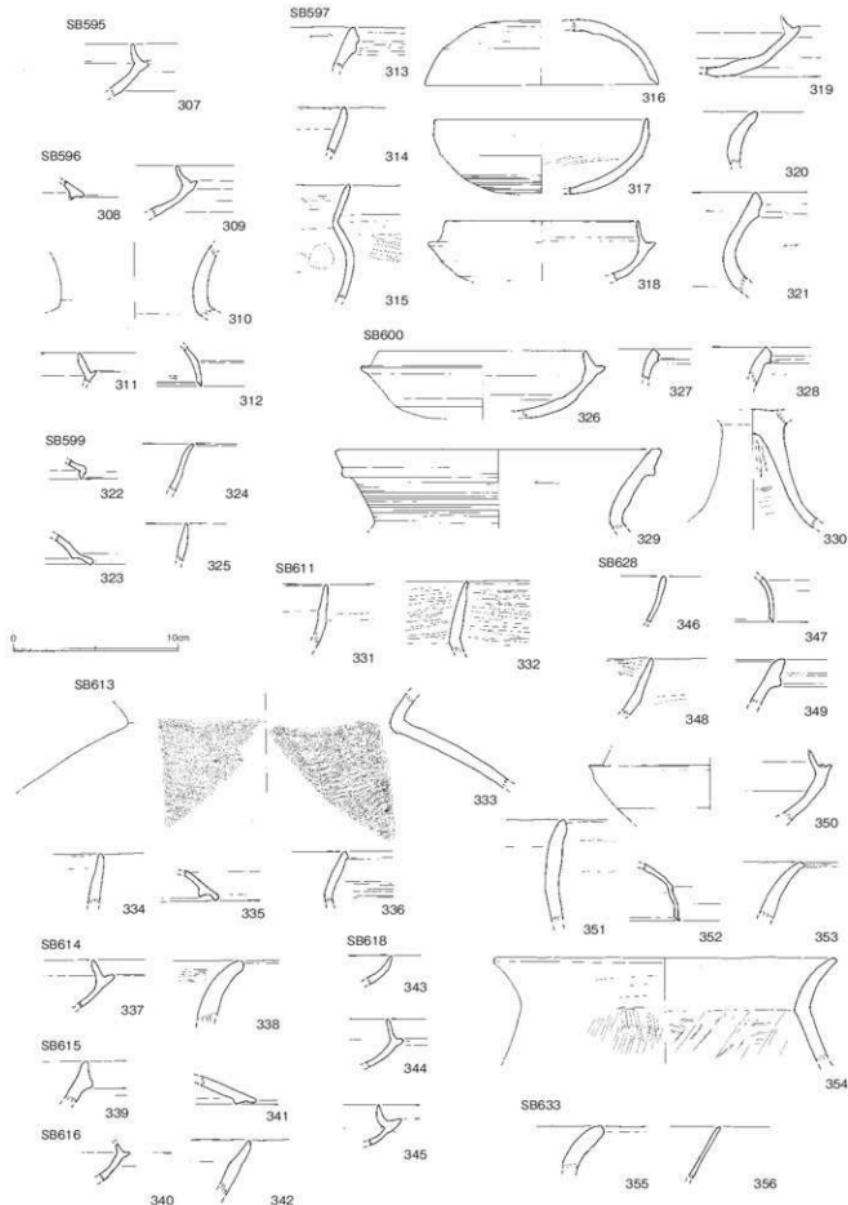


Fig.93 掘立柱建物出土遺物実測図3 (1/3)

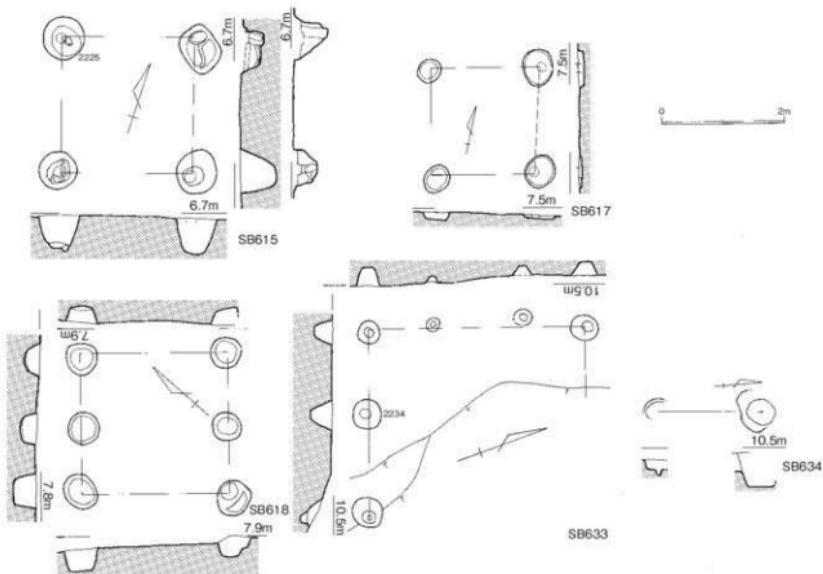


Fig.94 挖立柱建物SB615・617・618・633・634実測図（1/80）

SB633 (Fig.94-93) 5-3区K3 南側の列から展開したが不確実。355は土師器、356は黒色土器A。

SB634 (Fig.94) 5-3区K3 調査区外に広がる大きめのピットを拾った。

(4) 土坑

不整形なくぼみ状を含めて各種の掘り込みを一括する。遺物は多くがⅢb・Ⅳ期の須恵器と土師器の小片を含んでおり、その場合は特にふれないとある。それ以外は記載した。

SK023 (Fig.95-96) I 区D8 茶褐色粘質土を覆土としSD018-SB045を切る。浅いくぼみ状である。365は須恵器の皿で板状圧痕が残る。

SK029 (Fig.95-96) I 区C8 不正形のくぼみ状を呈しSD004・SB049に切られる。366・367は須恵器。

SK035 (Fig.95) I 区C8 浅い溝状を呈す。SD012-013に切られる。須恵器の高台坏、蓋が出土した。

SK1102 (Fig.95) I 区7b 円形の土坑で土師器の小片と搔目を施す須恵器片が出土している。

SK113 (Fig.95-96) Ⅲ区G9 上面で検出した数少ない遺構である。円形の浅い堀込みに土師皿が配置された状態で出土した。379が須恵器、380が黒色土器Aで他は土師器である。378は高台が外れた痕跡がある。371の口径12.7cmを測る。9世紀後半。

SK122 (Fig.96) Ⅲ区F10 浅いくぼみ状で覆土は黒色粘質土。382・383は須恵器の坏蓋である。

SK125 (Fig.95-96) Ⅲ区G9 円形の土坑で上面での検出。遺物は少なく黒色土器A片が出土した。

SK129 (Fig.95) Ⅲ区H9 淡赤茶色粘質土を覆土とする。土師器とⅣ期の須恵器片が出土した。

SK145 (Fig.95) Ⅲ区G9 焼土坑。床面に炭層がたまり、壁が一部焼ける。Fig57土層1層で検出した。SK113と近い時期か。

SK131 (Fig.95) Ⅲ区F9 暗褐色粘質土を覆土とする。土師・須恵器と黒色土器Aが出土した。

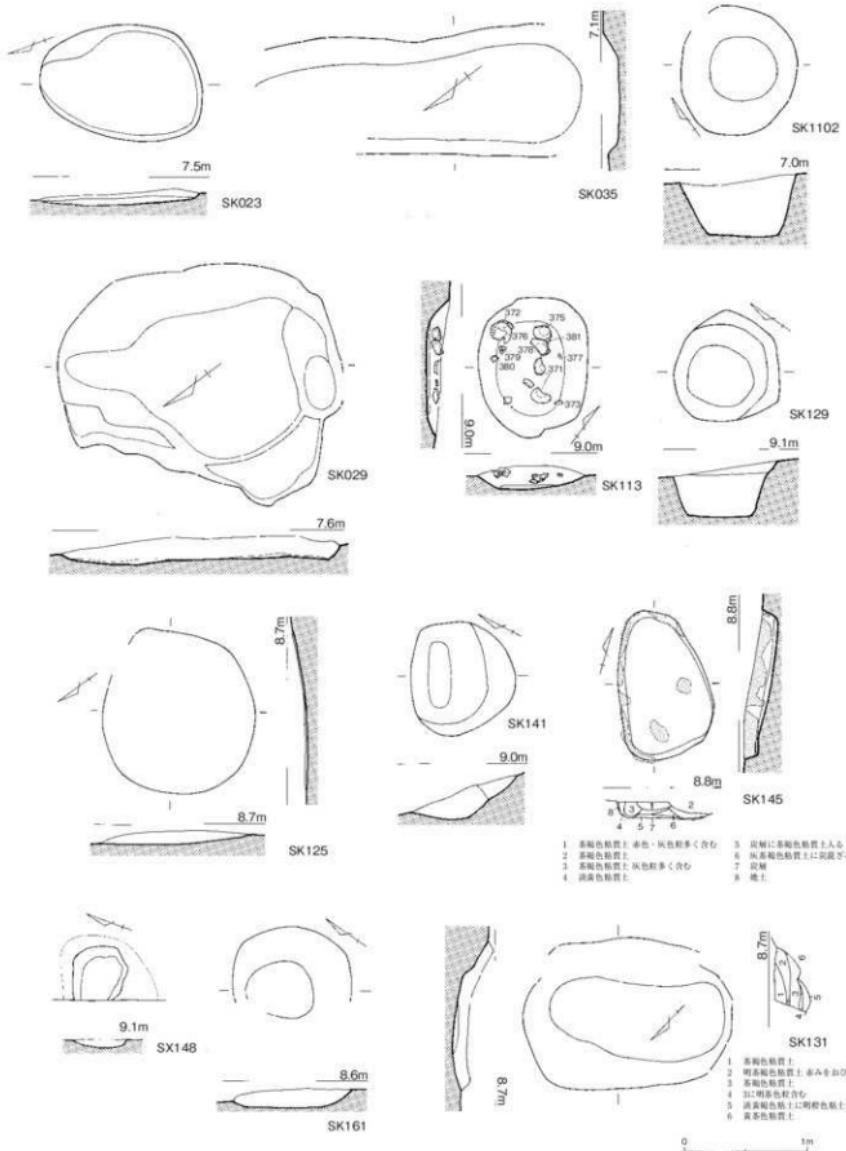


Fig.95 土坑実測図1 (1/40)

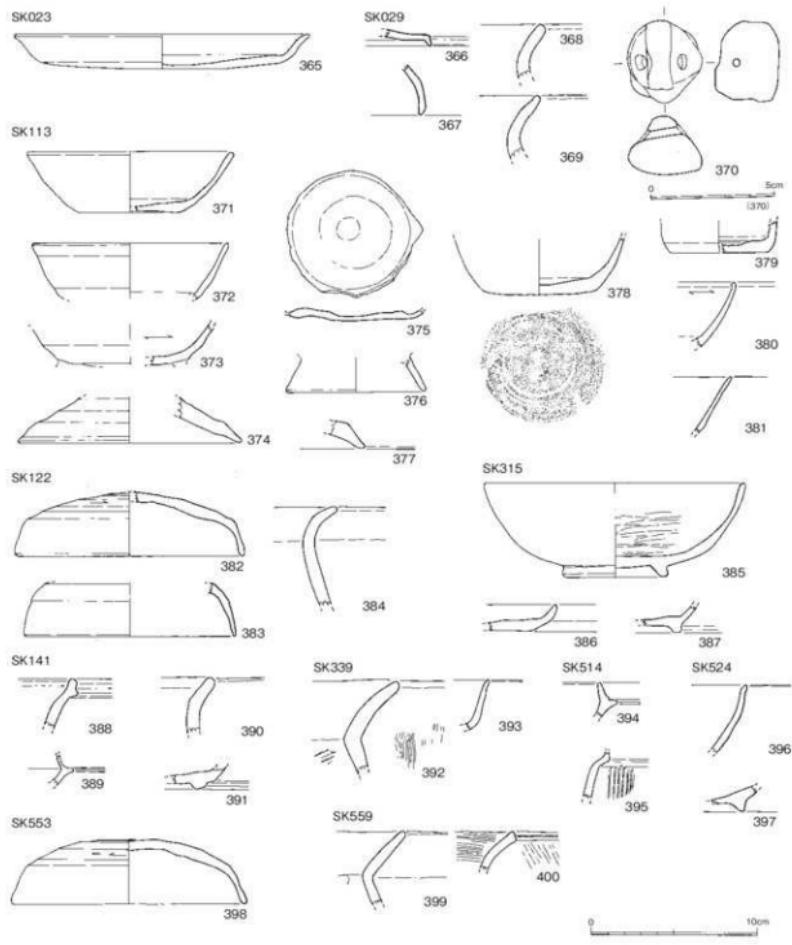


Fig.96 土坑出土遺物実測図1 (1/3-2)

SK141 (Fig.95・96) Ⅲ区G9 SX119を切るくぼみ状の土坑。淡赤茶色粘質土を覆土とする。391は須恵器の壺で8世紀代。

SK148 (Fig.95) Ⅲ区G9 焼土がくぼみにたまり周囲が焼ける。

SK161 (Fig.95) Ⅲ区G9 円形のくぼみ状を呈す。淡茶色粘質土が覆土で遺物は小片。

SK303 (Fig.95) 1区C7 溝状の土坑で砂混じりの暗茶色土を覆土とし須恵器の折蓋が出土した。

SK309・319 (Fig.97) 円形ピット状土坑が並ぶ。暗茶褐色土を覆土とする。小片のみ。弥生か。

SK315 (Fig.97・96) 1区C5 円形の土坑。下層は黒色粘土がたまる。下層から瓦器碗385、土師皿386

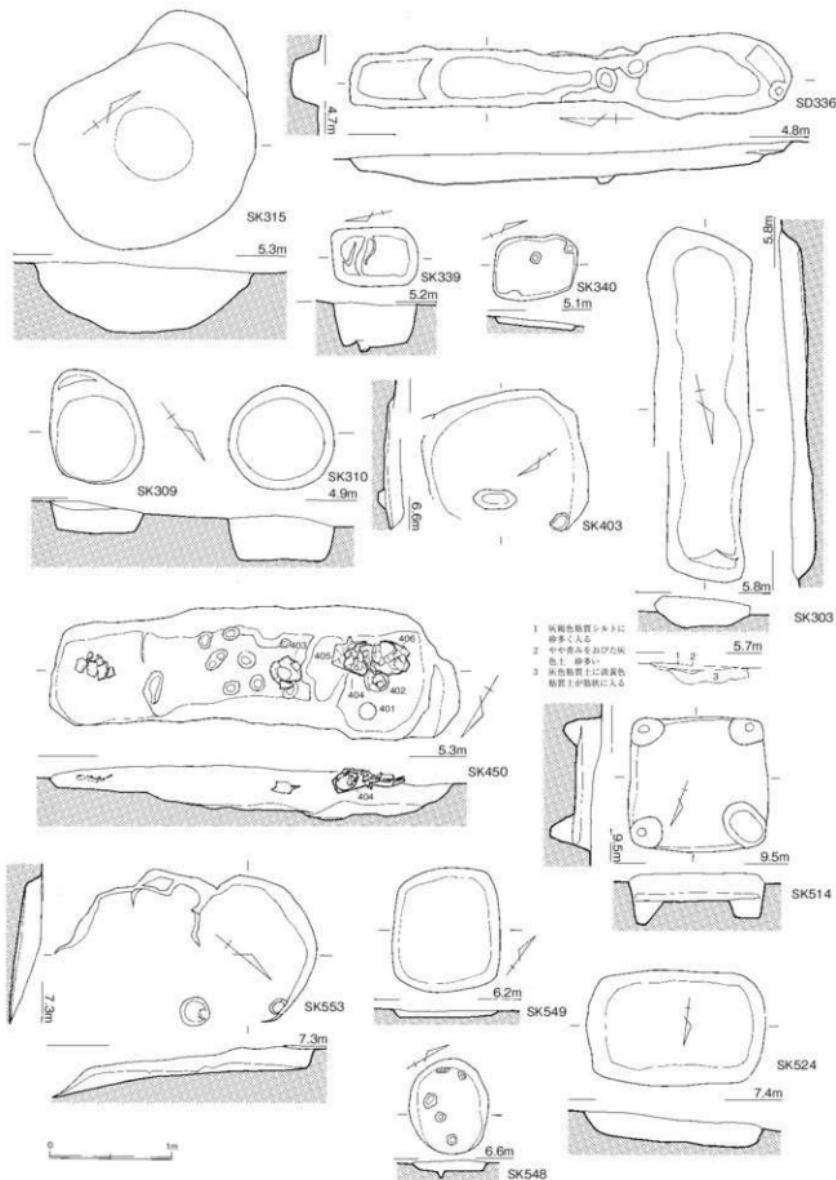
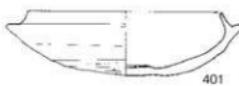
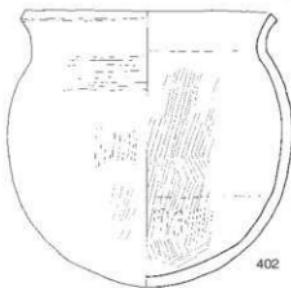


Fig.97 土坑実測図2 (1/40)

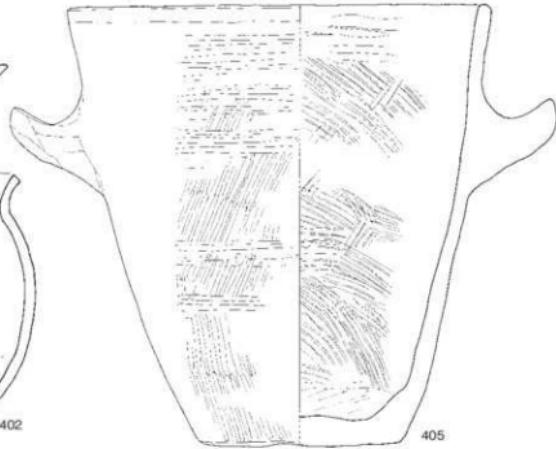
SK450



401



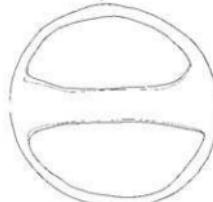
402



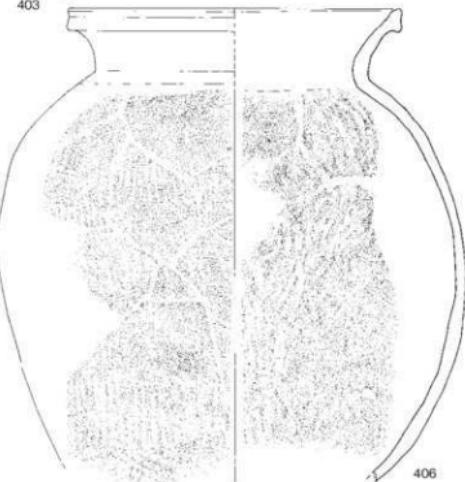
405



403



404



406

0 10cm

Fig.98 土坑出土遺物実測図2 (1/3)

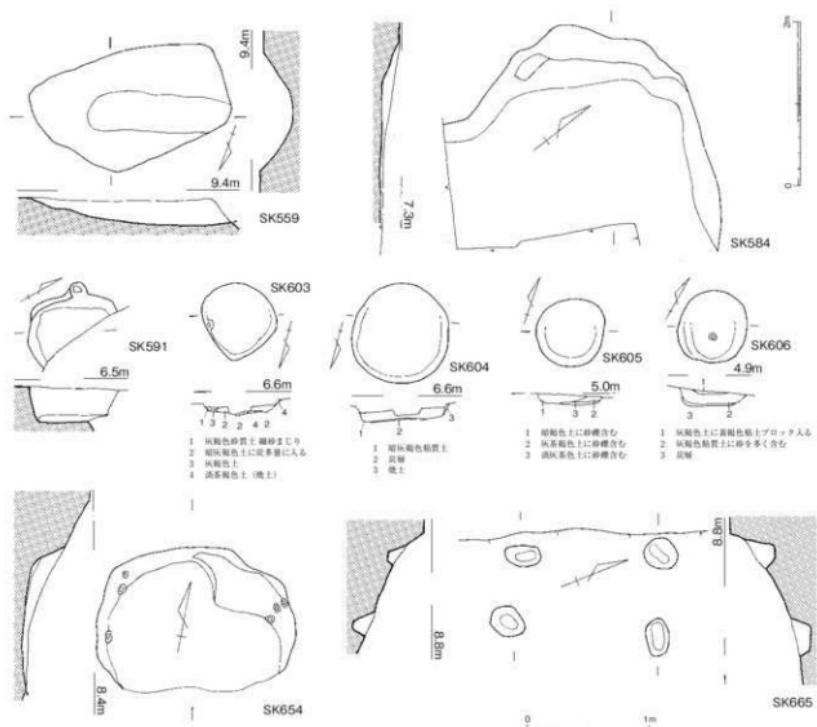


Fig.99 土坑実測図3 (1/40-60)

などが、上層には須恵器高台坏387などに入る。11世紀代か。

SK336 (Fig.97) 1区C4 溝状の土坑で粗砂混じりの暗茶褐色土が覆土。土師器の壺片が出土した。

SK339 (Fig.97-96) 1区C5 小型の方形土坑。392は土師器壺、393は須恵器の高台坏。

SK340 (Fig.97) 1区C5 339に似た方形土坑。須恵器並行叩き壺、土師器壺小片のみ出土した。

SK403 (Fig.97) 3区F6 溝の間の浅いくぼみ。越州窯系青磁片が出土している。

SK450 (Fig.97-98) 2区D4 溝状の断面レンズ状の造構でやや浮いた位置で遺物がまとまって出土した。401は須恵器坏身の完形品。他は土師器で叩き成形痕が残るが器面が荒れ残りは悪い。壺404は壺405の中に入った状態だった。

SK514 (Fig.97-96) 5-1区I9 方形プランの底四隅にピットがある。橙色かった淡茶色粘質土を覆土とする。394は須恵器の坏身、395は土師器頸部に拂目状が入る。壺片も出土している。

SK524 (Fig.97-96) 5-2区H7河川上部で検出した長方形プランの土坑で灰褐色粘質土を覆土とし、黒色土器396-397の他はIV期の須恵器坏身や土師器壺片が出土している。11世紀代のものか。

SK548 (Fig.97) 5-3区J6浅いくぼみ状で底に小穴が見られる。

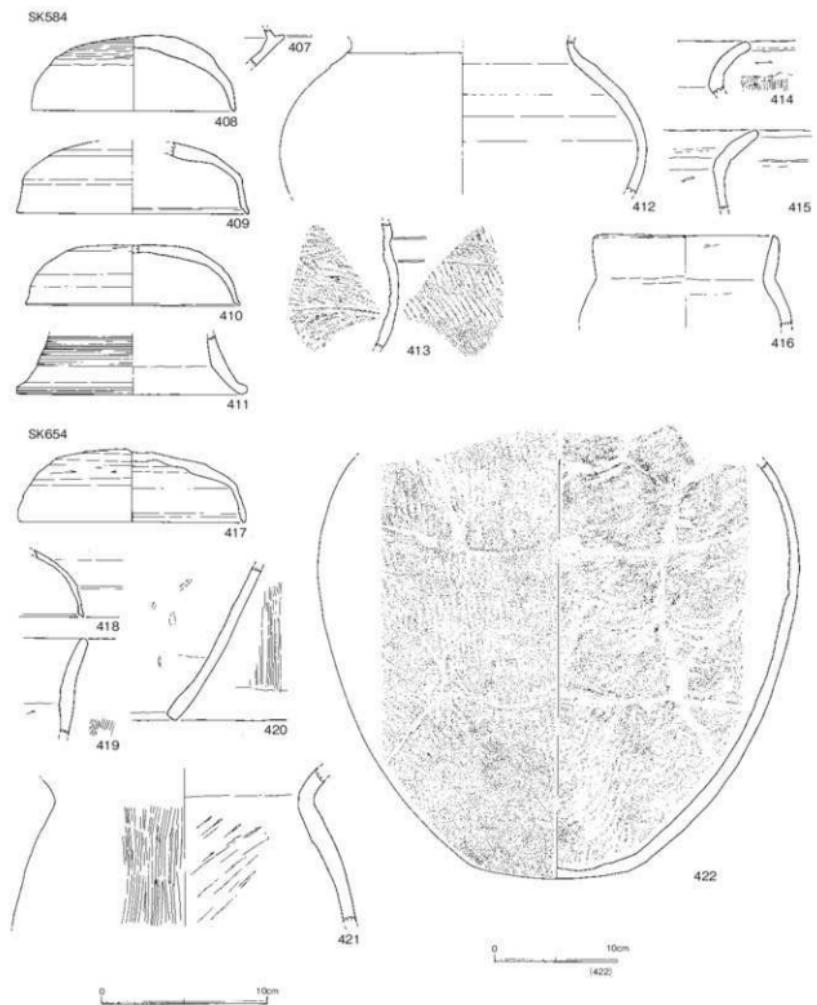


Fig.100 土坑出土遺物実測図3 (1/3・4)

SK549 (Fig.97) 5-3区H5方形の浅い土坑である。

SK553 (Fig.97-96) 5-3区I3 不正形土坑で斜面でプランは途切れる。暗茶褐色砂質土を覆土とし須恵器壺蓋398、土師器片が出土した。

SK559 (Fig.99-96) 5-1区I9 淡黒色土を覆土とするくぼみ状の土坑で壁がはっきりしない。須恵器小片1、土師器甕が出土した。

SK584 (Fig.99-100) 5-3区L4 不整形の竪穴状を呈し搅乱でプランは不明。遺物は少量。

- SK591 (Fig.99) 5-3区I5 焼土坑。底に炭が薄く溜まり壁が焼ける。須恵器坏身、土師器甕。
- SK603 (Fig.99) 5-3区J6 焼土坑。覆土に炭粒を多く含み、壁がわずかに焼ける。遺物の出土はない。
- SK604 (Fig.99) 5-3区J6 焼土坑。炭層は薄く壁が若干焼ける。遺物は出土していない。
- SK605 (Fig.99) 5-3区H5 焼土坑。底に炭が溜まる。壁の焼けはみられない。遺物は出土していない。
- SK606 (Fig.99) 5-3区H6 焼土坑。底は炭層で覆土にも炭を多く含む。遺物は出土していない。
- SK651 (Fig.53-100) 6区O5 不整形のくぼみ状の土坑で河川堆積に近い暗褐色粘質土を覆土とする。北隅に土器だまりがあり須恵器、土師器が出土した。422は須恵器の甕で平行叩き痕が残る。
- SK654 (Fig.99-100) 6区M4 河川の斜面で検出したくぼみ状で人為的なものか不明。10cmほど浮いた位置に遺物がまとめて出土した。417・418は須恵器の坏蓋、他は土師器の甕と甕である。
- SK665 (Fig.99) 6区O5 河川斜面で小ピット4個を確認した。河川に作られた施設であろう。

(5) 溝

SD001 (Fig.54-102) I区B10 赤茶褐色粘質土を主な覆土とする。現代瓦と7~9世紀代の遺物が出土した。現代の可能性がある。423と424は須恵器、425は土師器の椀である。

SD002 (Fig.54-102) I区B9 赤茶褐色粘質土が覆土とし2本の溝の集まりか。426は青磁碗、427から430は須恵器、432は備前の攝り鉢である。中世後半か。

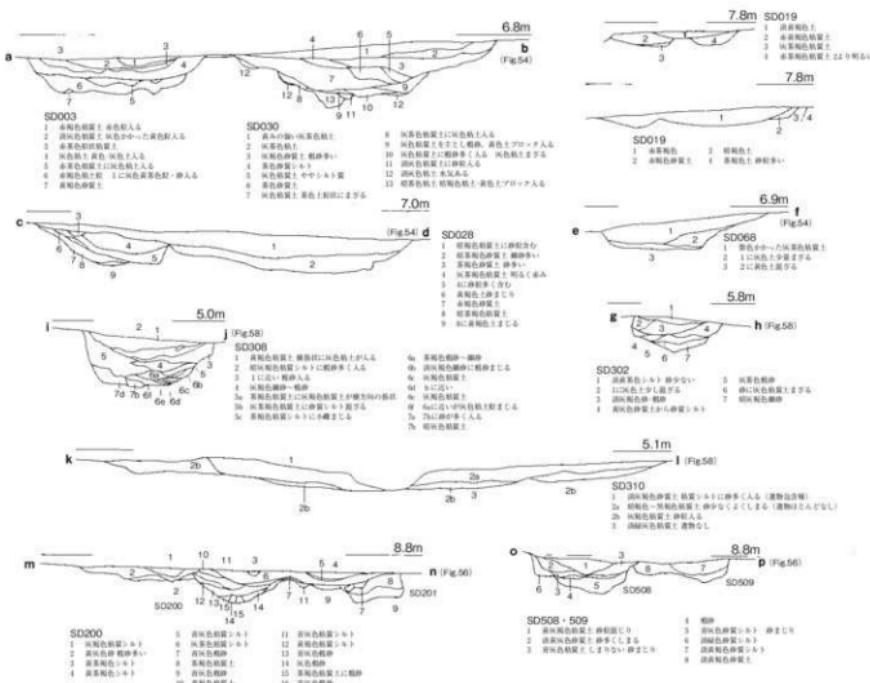


Fig.101 満SD003-019-028-030-068-200-201-302-308-310-508-509
土層実測図 (1/40)

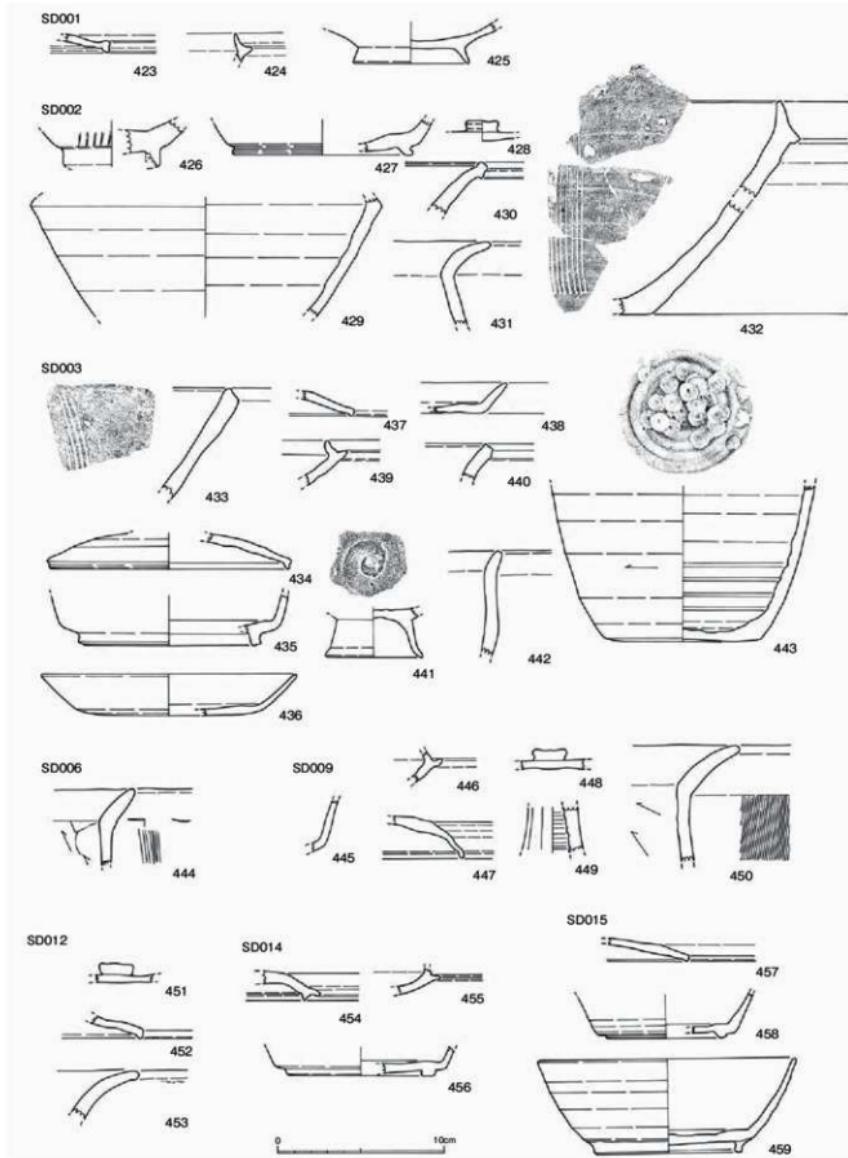


Fig.102 SD001·002·003·006·009·012·014·015出土遺物実測図 (1/3)

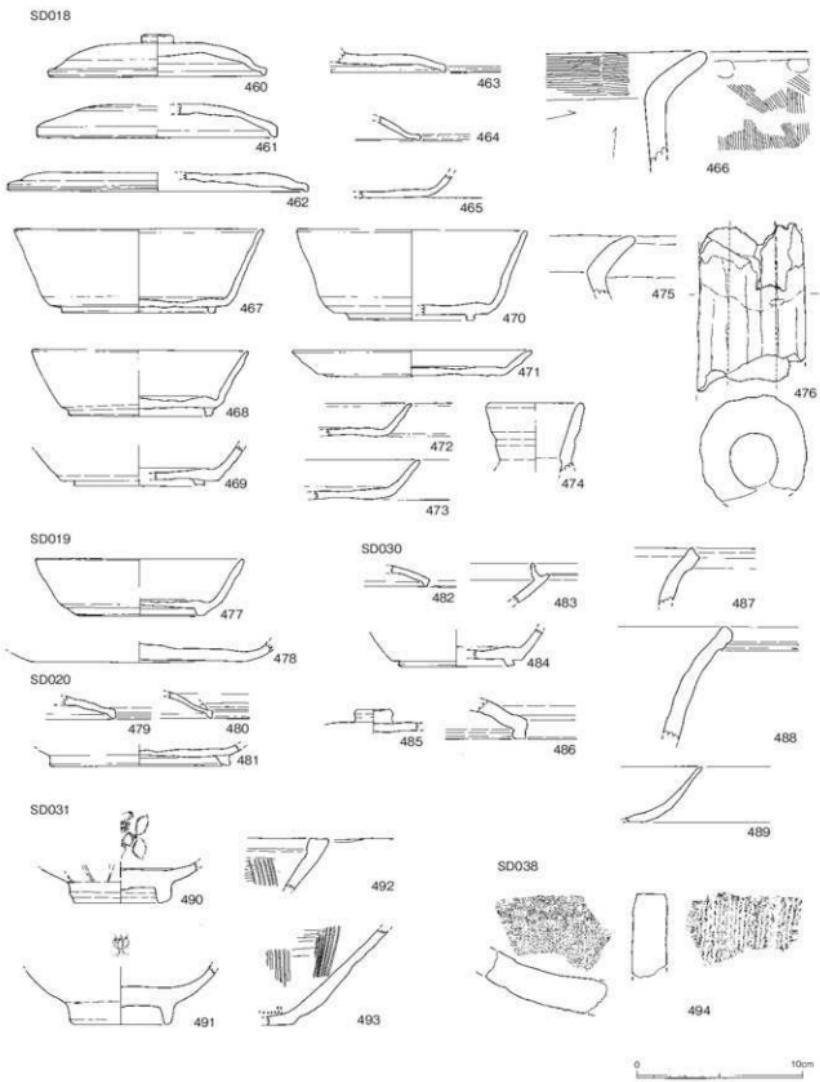


Fig.103 SD018・019・020・030・031・038出土遺物実測図 (1/3)

SD003 (Fig.54・101・102) I区C9・8 直線的に延びる溝で赤褐色粘質土を覆土とする。遺構中もっとも赤みが強い。断面は深めのレンズ状を呈す (Fig.101)。433は上層出土の瓦質拂り鉢。436はへら切りの土師器壺で復元口径、442は土師器。他は須恵器である。拂り鉢から13世紀以降か。

- SD004・013** (Fig.54) C8・9 浅く淡茶色粘質土を覆土とする。遺物は少なく7世紀までの須恵・土師器。
- SD006** (Fig.54・102) C8・9 SD004に近い覆土で細く深い。遺物は少ない。423は土師器甕。
- SD009他** (Fig.54・102・103) CD8・9 調査区北西側に広がる淡赤茶色粘質土を覆土とする。SD012・013・014・015・016・018・019・020・026・027も同様である。溝018はこれらを検出する際に下がった遺物で上部では鉄滓が目立つ。SD014はSD021に切られD7に続く。SD009の土層をFig.に示した。遺物は8世紀代のものがいずれの溝にも見られ9世紀のものもある。445から481のうち甕口縁と坏465・478、椀481が土師器で他は須恵器である。476は羽口で一部ガラス化が見られる。
- SD028** (Fig.54・101・104) CD7・8・9 北側ほど幅広となり土層部分では2本の溝が見られる。建物・他の溝を切る。上層が暗褐色、下層が茶褐色の粘質土で5箱分ほどの遺物が出土した。495から511が上層出土で495から500が黒色土器、501・510が土師器、511が白磁I類で他は須恵器である。512から540は下層出土で516までは黒色土器、535までは須恵器、540までは土師器。536は糸切りのようだがはつきりしない。復元口径10.0cm。538は羽口片で他にも数点ある。この他上層から青磁片が3点。全体に須恵器の甕は少ない。土師器は少なく他に甕片、鉄滓がある。上層をSD021・022とした。
- SD030** (Fig.54・101・103) C7・8・9 覆土は灰褐色粘質土を主に粗砂が混じる (Fig.101)。上層に龍泉窯系青磁碗が1点、黒色土器皿片が出土した。他は須恵器・土師器である。489は土師器の坏で摩耗する。488までは須恵器である。9世紀代
- SD031** (Fig.54・103) B7・8・9 SD032と平行して弧状に走る。SD002他すべての遺構を切る。490・491は青磁碗、492・493は瓦質の擂り鉢で他に白磁片、須恵器など少量の遺物が出土した。14世紀以降。032からは黒色土器A椀が出土している。
- SD038** (Fig.54・103) C8 くぼみ状の浅い溝で須恵器、土師器片と共に494布目瓦が出土した。
- SD067** (Fig.54) D7・8 赤茶色粘質土を覆土とし底は疊混じり砂質土。SD068に切られる。IV期までの須恵器、土師器が出土した。7世紀。
- SD068** (Fig.54・101・105) D7・8・9 直線的に谷へ走る。紫がかった茶色粘質土の覆土が特徴的。遺物はコンテナ3箱。541・542は白磁碗、543は越州窯系青磁、544は土師器、545は瓦質土器、546・547は黒色土器A、548はB。549はへら切りの土師皿で復元口径9.5cm。550から557は須恵器、558は土師質のイト瓦で布目が見られる。559は土師器の丸底鉢。他に石鍋片がある。11世紀代か。
- SD072** (Fig.54・105) D7・8 浅く赤茶色粘質土を覆土とし、緩やかに蛇行する。560から566は須恵器である。遺物は7世紀におさまる。
- SD077** (Fig.54・105) D8 赤茶褐色土を覆土とする浅い溝でSD067を切りSD068に切られる。567・568は須恵器である。
- SD139** (Fig.56) G9 幅20cm、深さ10cmほどで傾斜方向に走る。暗褐色粘質土を覆土とする。SC120に切られる。取手が出土した。
- SD200** (Fig.56・101・106) III区GH78 段落ち下の溝で上流のSD508・509からの続いでSD401・494等を経て302・301に至る。これらの溝は断続的でそれぞれの関係は不明。織統的に近い位置を流れた溝の底であろう。以下SD200群として触れる。SD200は灰色シルトや粗砂を覆土とし遺物の量は少ない。569は白磁碗、570は綠釉陶器、571は黒色土器A、571から574は須恵器、575土師器の椀、576は土師質の擂り鉢。他に羽口、土師器甕片などがある。11世紀くらいか。
- SD201** (Fig.56・101) III区G7 灰色粗砂などが覆土でSD200を切る。遺物は少ない。
- SD210** (Fig.56・106) III区FG7 SD200とは別の流れ。577は須恵器、578は須恵器の擂り鉢。黒色土器片も出土している。

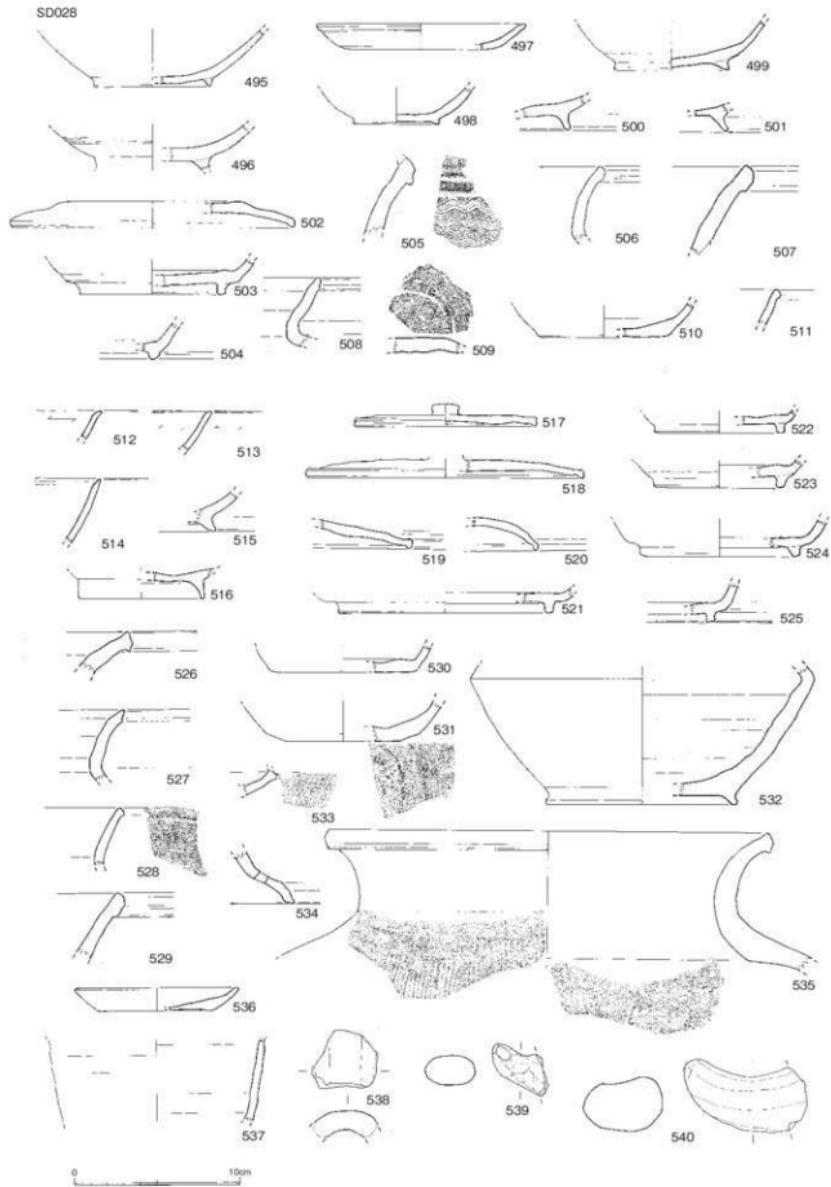


Fig.104 SD028出土遺物実測図 (1/3)

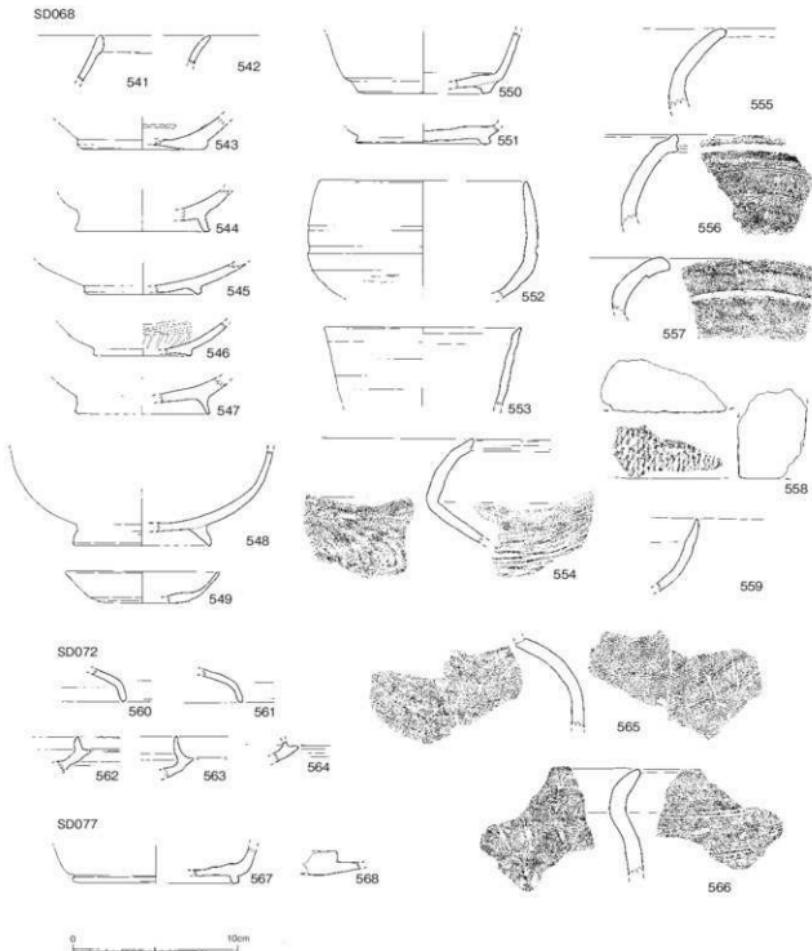


Fig.105 SD068-072-077出土遺物実測図 (1/3)

SD212 (Fig.56-106) 位置的にSD201の続きか。579は系切皿、580は須恵器、581は黒色土器A。

SD218 (Fig.106) 1区C7 SD200群である。582は白磁碗、583は龍泉窯系青磁碗。他に須恵器、土師器皿・壺片がある。

SD301 (Fig.59) I区BCD7 I区調査区北隅を等高線沿いに走り北へ曲がる。SD003-028などを切りSD301に切られる。茶色粗砂を覆土とする。SD200などの一群の続きと考えられる。龍泉窯系青磁碗、瓦質摺鉢、8世紀までの須恵器や土師器が出土した。13世紀以降か。

SD302 (Fig.101-106) 東西方向から谷側へ抜ける。SD301と同様にSD200などの続きと考えられる。

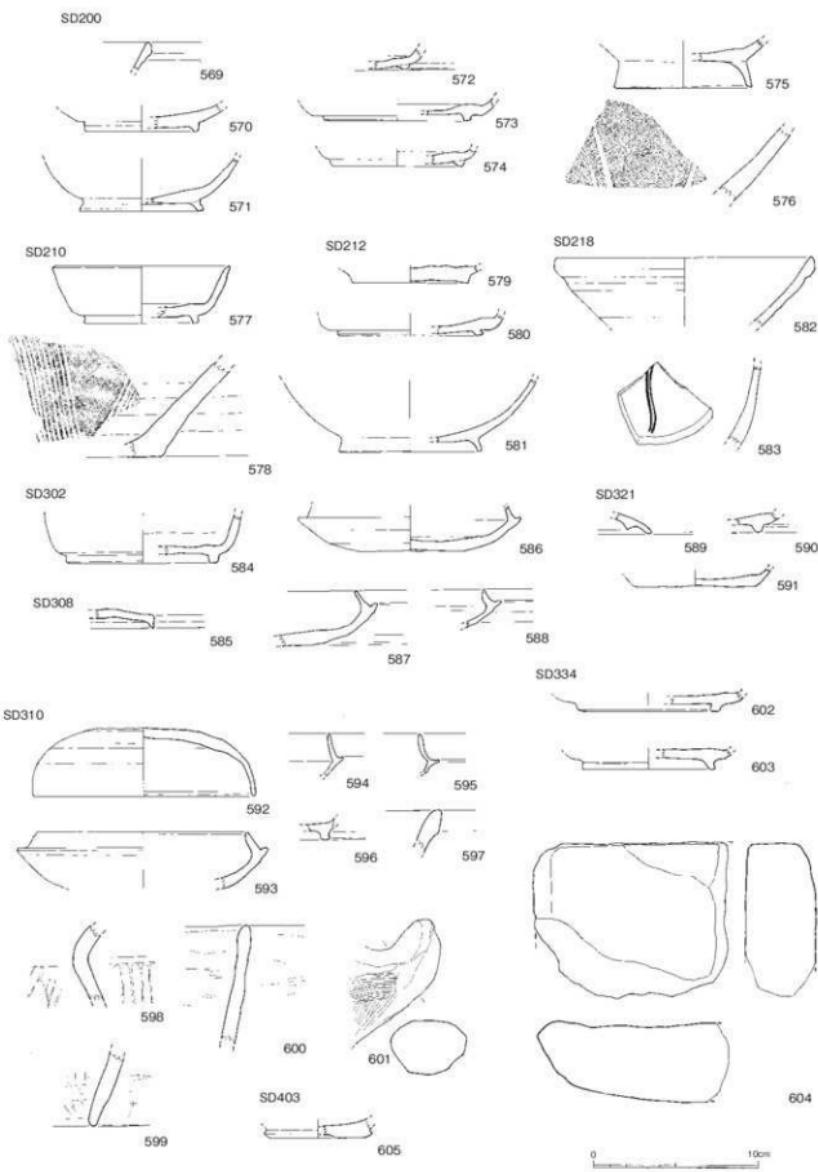


Fig.106 SD200·210·212·218·302·308·310·321·334·403出土遺物実測図 (1/3)

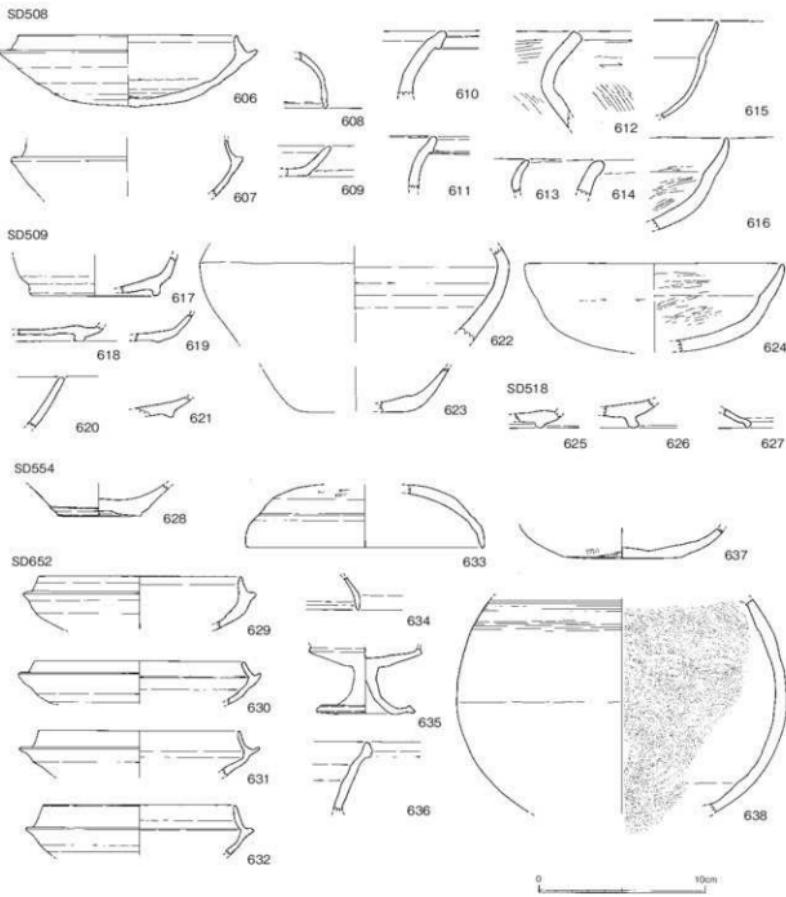


Fig.107 SD508・509・518・544・652出土遺物実測図 (1/3)

584は須恵器で他に黒色土器A椀・土師器椀が出土している。10・11世紀くらいか。

SD308 (Fig.101-106) 1区AB5・6 粘質土と粗砂層が細かく入り底に凹凸がある。緩い斜面から平地への変換点に走り取水・排水口様の張り出しがある。耕作に伴うものか。IV期までの壊身が多い。585から588は須恵器。土師器は甕類小片が多い。

SD310 (Fig.58・101・106) 1区BC5 浅く広がるくぼみ状。SD306にきられる。上層の茶褐色から1箱分出土した。592から596は須恵器、597から599は土師器である

SD311・312・318 (Fig.58) 1区BC4・5 平行または直交する幅狭の溝で底に凹凸が多い。暗褐色土を覆土とし周囲に広がる小穴群 (SD334) と近い。耕作に伴うと考えられる。

SD321 (Fig.58・106) 1-3区C2 西側斜面の浅いくぼみ状で粗砂混じりの茶褐色土を覆土とする。

589・590は須恵器、591はへら切りの土師皿である。

SD322 (Fig.58) 1-3区C2 斜面に残り黒褐色土を覆土とする。IV期までの須恵器が出土した。

SD323・328・329 (Fig.58) 1-3区CD2 斜面に断続的に残り、粗砂混じりの茶褐色粘質土を覆土とする。IV期までの須恵器を含む。耕作に関わる水路か。

SD334 (Fig.59・106) 1-2区B4 平地で多数の小穴が溝状なりに暗褐色土が溜まる。遺物には内面に緑の釉があるものがあり越の可能性もある。602・603は須恵器の壺、604はイト瓦である。

SD398 (Fig.58) 3-3区G2 Ⅲ層斜面で検出した溝で淡橙灰色粘質土を覆土とする。

SD403 (Fig.59・106) 3-1区F6 SD200群の一部で円形くぼみ状を呈し粗砂を覆土とする。605は越州窯系青磁の底部である。

SD407 (Fig.58) 3-1区F7 地形に沿って弧を描く。茶褐色砂質土を覆土とする。SD200群の続きでSD405・495などが平行して走る。これらは7、8世紀代の須恵器が少量出土し黒色土器や緑釉陶器などに入る。8世紀から古代末のものと考えられる。

SD508・509 (Fig.56・101・107) 5-2区I8 SD200の上流。SD508が509を切る。606から611は須恵器、612から616は土師器である。617、618、622は須恵器、619は土師質の椀、620・621は黒色土器A、623・624は土師器である。古代末までの遺物を含む。

SD518 (Fig.107) 5-2区KH7 河川の落ち際の溝で粗砂混じりの茶褐色土を覆土とする。625から627は須恵器である。8世紀代か。周辺のくぼみは8世紀代の須恵器が目立ち、黒色土器も見られる。

SD554 (Fig.107) 5-3区I3 不整形で粗砂が溜まる。溝の底か。越州窯系青磁628が出土した。

SD652 (Fig.107) 6区NOPS 暗灰色粘質土を覆土とする。蛇行する河川を直線的に結ぶ。派生する細い溝SD653・668などがあり、取水溝と考える。IV期までの須恵器を含む。629から638は須恵器。

(6) 錫冶炉

SX056 (Fig.108) II区E9 2層淡橙色土上面の建物等より上の面で検出した。125×100cmほどのブランで、深さ13cmの断面は深いレンズ状を呈す。よくしまる鉄滓層、黄褐色系のしまりのない土が交互にたまる。3層の鉄滓層が特に焼けた状況で硬化していた。壁の一部が覆土は水洗し鍛造剥片約2kgを採集している。出土遺物は土師壺の小片が数点である。

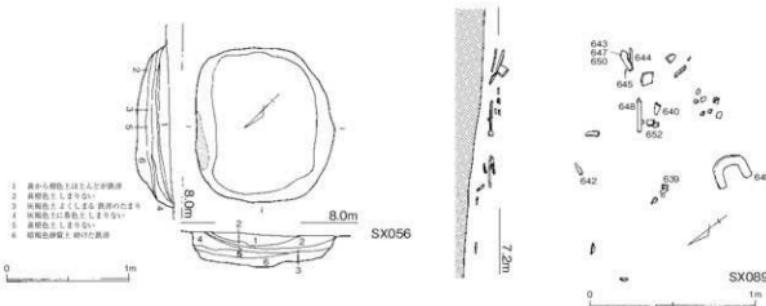


Fig.108 錫冶炉SX056、鉄器集中部SX089実測図 (1/40・30)

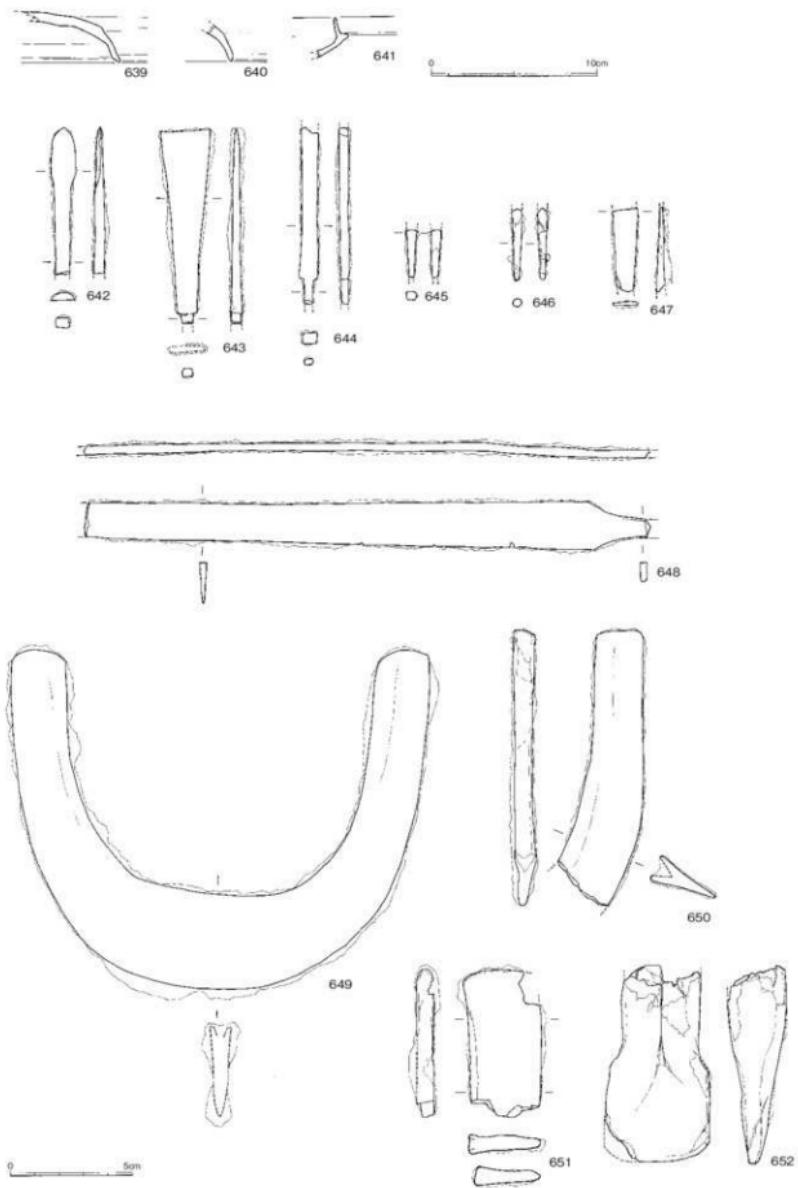


Fig.109 SX089出土遺物実測図 (1/2-3)

(7) 鉄器集中遺構

SX089 (Fig.108・109) II区E7 建物等の遺構集中部から北西に外れた位置で暗褐色土の包含層掘削中に鉄器がまとまって出土した。掘り込み等は確認できなかった。周辺で須恵器・土師器が出土し古墳の副葬品の構成に類似する。祭祀跡とも考えられる。須恵器、鉄器から6世紀終わりから7世紀初めと考えられる。639から641は須恵器の坏で他に膺の胴部片、土師器片が出土している。鉄製品は鉄鎌、刀子、U字形鍬鋤先、袋状鉄斧が出土している。642～646は鉄鎌である。643は茎の端部が欠損している方頭鎌で、角闘である。642・644は長頭鎌の破片である。642は鎌身部から頭部にかけての破片で、鎌身は三角形で刃部断面は片丸造である。鎌身部はナデ闘で、頭部断面形は方形を呈する。644は頭部から茎部分の破片で、断面形は頭部・茎とともに方形で、闘は角闘である。645、646は鉄鎌の茎片で、645は端部を欠損している。647は長さ3.5cm、幅7～10mm、厚み2mm～3.5mmの鉄製品で、一方が薄く広がるような形状を呈しており、片刃形の鉄鎌の破片である可能性を指摘する。648は鋒と茎尻を欠損した刀子である。残存長は23.2cmで、刀身の残存長は20.9cm、最大幅は2cm、背の幅は3.5～4mmである。刀身は鋒に近くなるに従い細くなる形態である。一部、埋没中の影響か刀身が曲がっている。茎は両闘で不均等ナデ闘である。649・650はU字形鍬鋤先である。649は完形品である。耳幅は1.9～2.2cm、刃先の最大長は約4cmで、刃先長が耳幅を上回る。650は耳部分の破片で、649と同様に刃先長が耳幅を上回るU字形鍬鋤先であると思われる。649・650のいずれも着柄部V字溝に銷が固着しており、着柄の痕跡は観察できなかった。溝の深さは透過X線撮影を使用して計測を行った結果、649・650ともに約6～9mmの深さであると思われる。651はほぼ扁平な長方形の鉄製品の破片である。長軸方向の一方に溝があり、この資料もU字形鍬鋤先であると考える。652は小型の有肩袋状鉄斧である。袋の端部や刃先が欠損しているほか、鉄斧表面全体には細かい亀裂が生じており、一部は剥離している。残存長は8.1cmで、袋部幅は3.1cm、推定刃部幅は約4.5cmである。652のほかに1個体分の有肩袋状鉄斧の破片も出土しているが、劣化著しく図化は行っていない。

(8) 弥生時代の土坑

SK153 (Fig.110) III区GH9 方形プランを呈し黒褐色粘質土を覆土とする。北側隅付近の床に焼土面が見られる。土層はFig.56左端の4層が対応する。多くの遺構に切られる。遺物は少なく須恵器・土師器の小片があるが、覆土がSK564と類似し弥生時代の可能性を考えている。

SK458 (Fig.110・111) 2-2区D3 河川への落ち際で弥生後期初めの土器が集中して出土した。掘り込みは確認していない。膺654は同一個体破片があるが荒れて接合しない。他に膺部突堤をもつ壺がある。

SK564 (Fig.110・112) 5-1区I9 不整形を呈すが南側は方形に近い。方形土坑で北側を掘りすぎた可能性がある。南側の床面で弥生後期の土器がまとめて出土した。土器群の下にはピット状の掘り込みがある。

SK620 (Fig.110・112) III区H6 不整形のくぼみ状の土坑で49-51次調査区に位置し、49次調査時は谷頭と考えていた。最下層の7層砂混じりの暗褐色土で完形品を含む弥生後期の遺物が出土した。7層上部からはIIIb・IV期と思われる須恵器片と土師器が出土するが遺構の覆土がくぼんで入ったものと考えられる。7層上面からの遺構はSB628のSP632である。これにかぶる6層からはIIIb・IV期の須恵器・土師器を主体とし黒色土器が1点出土している。5層はIIIb・IVの遺物、4層は8世紀の遺物が入る。

(9) 河川032・谷部包含層

河川032は谷部を流れる自然流路で、調査区を縦断し下流の調査区外へ抜ける。上流の6区から5区は小さく蛇行し、3・4区では大きく屈曲して北西側の丘陵沿いを流れる。ただし3区は工事用調整池による削平で東岸は底のみが残存し、河川の肩はやや広がると考えられる。3区より下流では、河川の

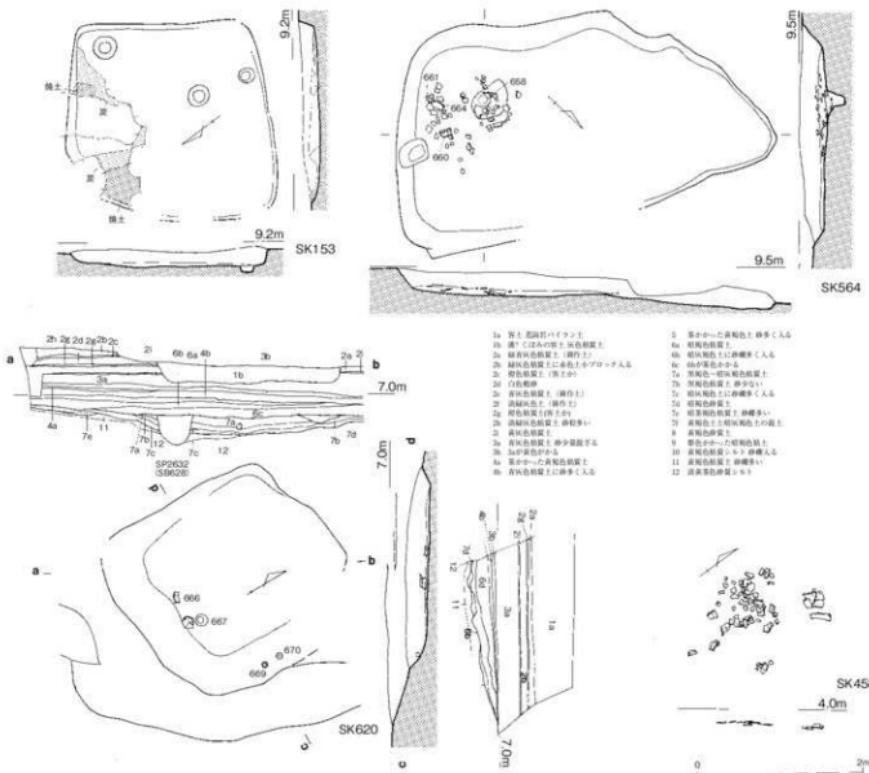


Fig.110 弥生時代の遺構SK153・458・564・620実測図 (1/60)

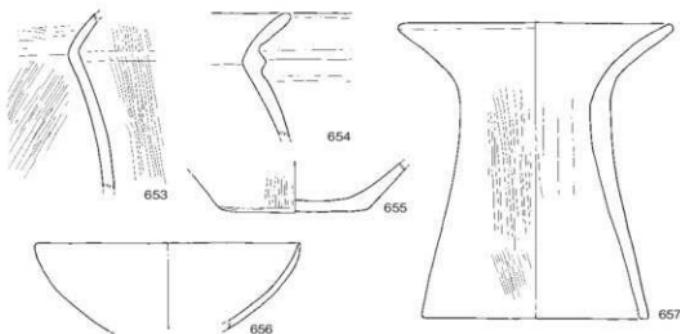
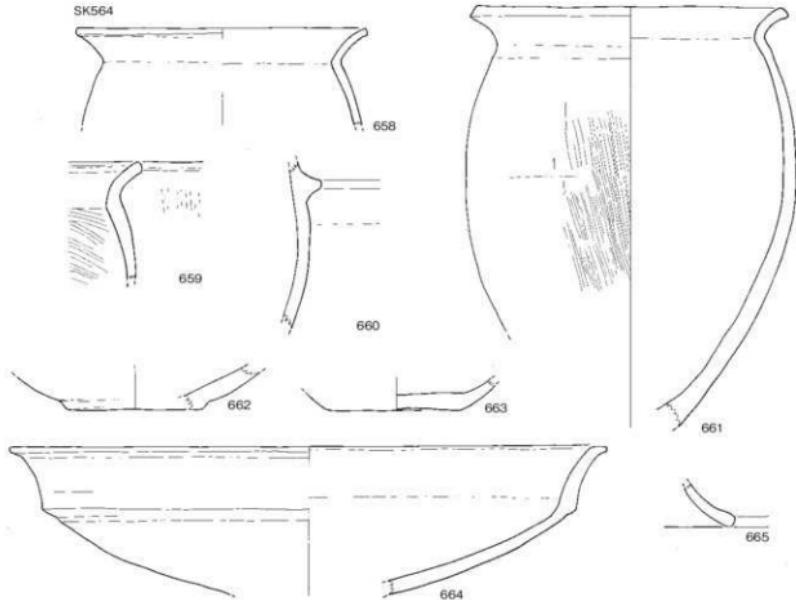


Fig.111 SK458出土遺物実測図 (1/3)

SK564



SK620

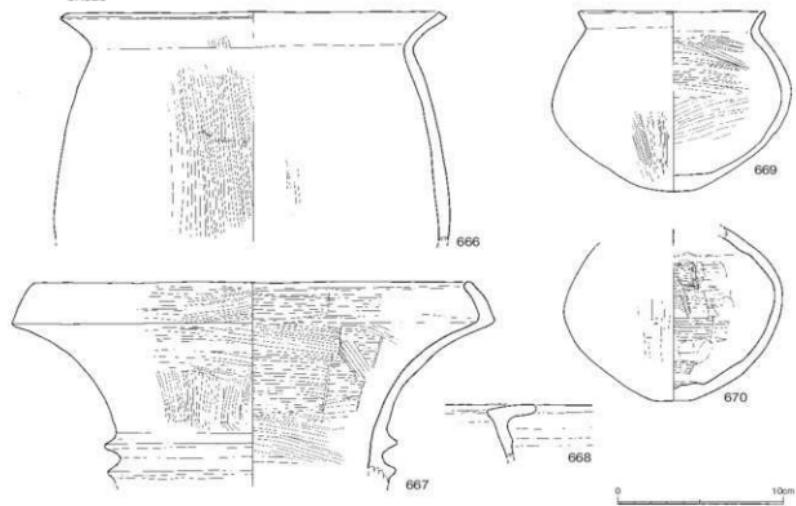


Fig.112 SK564・620出土遺物実測図 (1/3)

プランは主に7世紀までの遺物を含むⅢc・Ⅳ層以下が堆積する。これより上層はさらに広い範囲に広がり、顕著な河川堆積ではない。1～3区が削平を受けているため詳細はわからないが、I区北東壁土層（未掲載）や残存する流路から推測すると、5区SD200から1区SD302の流路などを掘削し流路の付け替えを行ったのではないかと考えられる。

土層 (Fig.113) 河川032の16カ所で土層図を作成し特徴的な箇所について図を掲載した。堆積土層については各土層図の土層名称に示したが、土層4でのIからV層を他の土層図作成部分でも可能な限り当てはめ、層名称の後の()に示した。土層4・5の一部削平を免れた部分で現地表からの堆積をたどることができる。以下土層4で代表した各層の特徴について触れる。

I層 黄色をおびた粘質土を主体とし全体にしまりがある。ほぼ水平堆積を示し水田耕作土と考えられ、鉄分・マンガンを多く含む。層単位の下端に鉄分が沈着する床土と考えられる層もある。手掘りで遺物を確認したのは土層4の幅1mほどの土層ベルト部分のみで、出土した磁器から近世から現代のものと考えられる。

II層 やや暗い茶褐色土を主体とし、赤みが強い部分もある。粘質土または粘質シルトで砂粒は少ない。特に上層は水平堆積であり、水田耕作土と考えられる。2・2区の一部、3・3区、4区トレーニングで手掘りによる掘削を行った。古代までを主体とし、若干の龍泉窯系青磁などの中世の遺物が出土している。越州窯系青磁・白磁黒色土器・石鍋など古代末の遺物は少ないが一定して出土している。須恵器・土師器は8・9世紀代の壺・碗がⅢ層以下より多い。またⅡa層では土師器の碗が目立ち須恵器が少なく、Ⅱd層では土師器碗・黒色土器が少なくなりⅣ期の須恵器が増加し弥生土器が若干加わる。

III層 Ⅱ層に比べて色調が淡いが筋状の鉄分を多く含み赤みが目立つ。Ⅲa層は赤茶褐色粘質土で特に赤みをおび、周辺土層の連続をとらえる上で鍵となる。Ⅲc層は鉄分を多く含む青みを帯びた灰色粘土で特に粘質が強い。Ⅳ層以下の河川堆積の一部と捉えるべきかもしれない。Ⅲd層は2・3区の北側斜面にみられる堆積で、3区では赤茶色粘質土や砂粒を多く含む粘質土などが細かな層をなす。遺物は7世紀後半までを主体とし、土師器碗・8世紀代の須恵器を一定量含む。越州窯系青磁・黒色土器などの古代末のものも若干含む。対応する層に遺物の集中SX114などⅣ層があり人為的なテラスの造成と堆積の可能性がある。

IV層 暗褐色の粘質土・砂からなる河川堆積である。Ⅳa層は淡い青灰色粘土で粘質が強くよくしまる。Ⅳb層は暗褐色粘質土で砂粒を含みしまりはない。有機物を含む。上面から踏み込んだようなくほみが多くみられ、Ⅳa層または砂・シルトが溜まる。Ⅳc層は細砂・砂層で粘土・シルトと互層になる部分もある。Ⅳd層は粗砂層でⅣ層の下部にある場合が多い。Ⅳe層は暗褐色から黒色の粘質土で有機物を多く含む。河川底の端にみられる、南岸側のほうが黒色が強い。Ⅳ層の層厚は地点で異なり、3・3区部分が最も厚い。ⅢbからⅣ期までの須恵器と土師器が主体で上部では7世紀後半の須恵器、特に下部で弥生土器を含む。建築材等の木製品が2・3・5区のⅣb層より下で出土している。

V層 Ⅳ層以下の砂礫層である。1・3区ではさらに下に青灰色粘土層を、6区では砂礫混じりの黄色・青灰色粘土層を確認した。砂礫の下部は南側で遺構面がのる層にもぐる。弥生後期の土器が5層上部と河川立ち上がりの地山に入り込んだ状況で弥生土器が出土している。

3区を中心に各層で出土する土器の時期を見てきたが、層と明確には対応しない。しかし漸移的ではあるが、Ⅳ層を7世紀初め以前特に6世紀後半、Ⅲ層をおよそ7世紀特に後半代から8世紀を主とし、Ⅱ層を8・9世紀から10世紀くらいの幅でとらえることができよう。

各区の概要 河川内も調査区の区分けを使用し、注記ではさらに細分した。

1区 東西調査区端でトレーニングを開いたが、遺物が少ないとⅣ層下部まで重機で掘削した。砂礫層

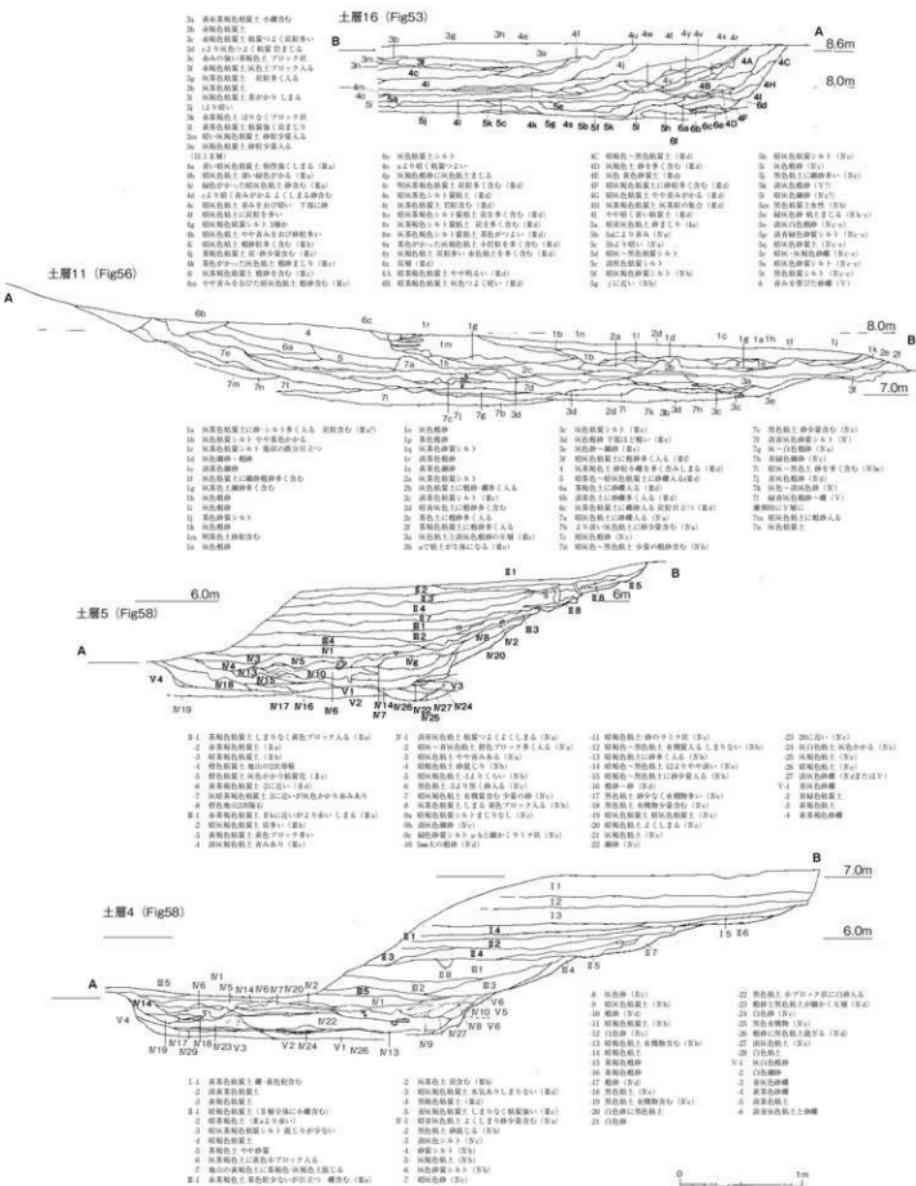


Fig.113 河川・谷部土層実測図 (1/80)

上部まで手掘りし、主に弥生後期の土器が出土している。杭列SX343を確認した。

2区 3層下部から手掘りし、IV層では建築材がまとまって出土しSX417として取り上げた。3上流ほほ遺物が多い。南東に入り込む部分2-4区はIV層が溜まるが遺物は少ない。

3区 土層ベルト部分は全て、他は3層以下を人力で掘削した。各層とも遺物が多い。III d層で丘陵沿いに遺物が集中する箇所SX412・415を検出し、さらにIV層では2区から続く建築材が集中しSX413として取り上げた。

4区 東側のG5グリッド周辺のII層で鉄滓を多く含む層が広がる箇所があったが遺構は確認できず、上流からの堆積と判断した。上流の24次調査で8世紀後半の製鉄炉が調査されており、その影響の可能性がある。II層であれば時期的に相当する。このレベルで3本のトレンチを入れ、5-3区からの落ちを確認した。遺物が少ないと重機で下げ、IV層下部を手掘りした。遺物は3区等と比べて少ない。

5区 河川と重なる位置にコンクリート製の金庫池底からの取水施設があり、これを除去したIII層下部に相当するレベルで3本のトレンチ設けた。遺物が比較的多く出土した南側の一部を手掘りし、ほかはIV層上面まで重機で下げ、それ以下を全面手掘りした。遺物は土層11周辺に多く、特に南岸沿いにまとまって出土した。上流のK6グリッド付近では少なくなる。ここでは河川底に近くを走る溝SD607や須恵器壺の集中箇所SX610などがあった。また所々に杭を確認したが、まとまりはなく打ち込み面は不明である。

6区 金庫池内にあたり、池の泥土を除去した赤茶褐色粘土から調査を行った。3区の土層4とはやや土質・土色が異なる。土層16の5層群が黒褐色の粘土と粗砂であることからIV層に対応すると考え、灰褐色系の4層群をIII層に対応すると想定した。赤茶褐色粘土の3層群をII層としたが、土層4との対応はとれていない。3層からは比較的の残りがよい須恵器・土師器が多く出土し、7世紀後半から8世紀の遺物が多い。4層群も遺物は多く、3層群より古手の須恵器がしめる割合が高くなり、III b・IV期も多く含む。5層群はIII b・IV期の須恵器が主体で量は上層より少ない。さらに下の砂礫層では弥生土器やIII b期の須恵器が出土している。遺物は6-1・2区中央付近に多く、南西側の調査区端と北西端6-3区では少なくなる。

以下、河川内と周辺で確認した遺構について触れ、3、5、6区を中心に河川および谷部包含層出土遺物を紹介する。

SX343 (Fig.114) 1区B3 調査区際の河川中央で杭列を確認した。IV層以下に残存し、打ち込みはそれ以上であろう。

SX412 (Fig.114・115) 3-3区H2 テラスの遺物集中部。III d層に相当すると考えられる。671・674・675は土師器で他に大甕片もある。他は須恵器で須恵器の壺576は外面平行叩きの後にベルト上に搔目を施す。他に坏身片がある。

SX415 (Fig.114・115) 3-3区G2 土層5・6間のテラスで遺物が集中した。やはりIII d層か。677が須恵器でほかは土師器の甕・壺が主体である。6世紀終わりから7世紀初め。

SX413 (Fig.114) 3-3区F2 IVb層の北側丘陵沿いに木材が集中して出土し、建築材が多くみられた。およそ2.5×3mの範囲を開むように杭が打たれ、材を支える状況であった。木器については別の機会に追って報告する。

SX417 (Fig.114) 3-3区E2 SX413に連続して建築材を中心とした木器がまとめて出土した。材の間などに杭が打たれているが開むではない。すぐ下流に河川を横断する杭列があるが、時期およびSX417との関連は不明である。

SD607 (Fig.59・116) 5-2区H6 河川底際に沿う。覆土はIV b層に近い。IV期までの須恵器・土師器、

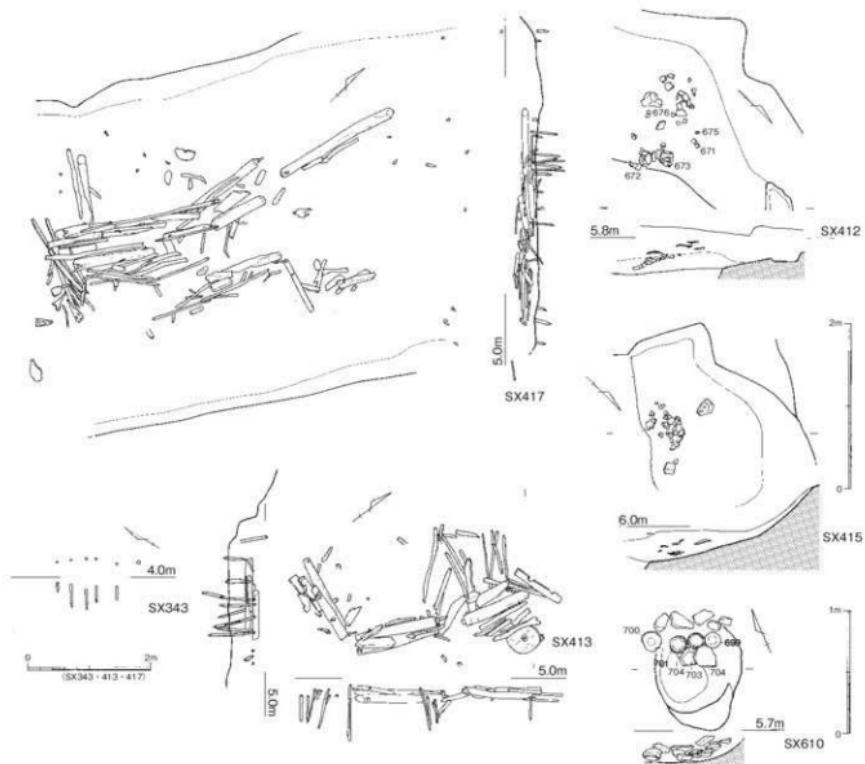


Fig.114 河川内検出遺構SX343・412・413・415・417・610実測図 (1/60・40・80)

羽口が出土した。686・687は土師器、他は須恵器である。

SX610 (Fig.114・116) 5-2区I6 河川底際の50cmほどのくぼみ際に完形の須恵器の壺3、蓋2個と土師器壺の底704が出土した。701と702は蓋と受け部に残った粘土が接合し焼成時のセットである。

SX608 (Fig.59・116) 5-2区I6 北西岸よりに木材と土器が集中する箇所があった。木は特に加工は見られない。土器のうち696から698は土師器で他は須恵器である。

SX622 (Fig.56・116) 5-2区I9 南岸底際で土器が集中しネズミ返しが出土した。705・707は土師器で706は手すくねの小型品である。

SD626 (Fig.59) 5-2区K7 暗褐色土に砂礫を含む。土師器の壺が出土した。

河川032および谷包含層の遺物 (Fig.117~135)

II層以下をまとめて掘削した3区と遺物が多い5、6区の遺物を層位ごとに掲載した。1、2区は3区とほぼ同じ内容である。

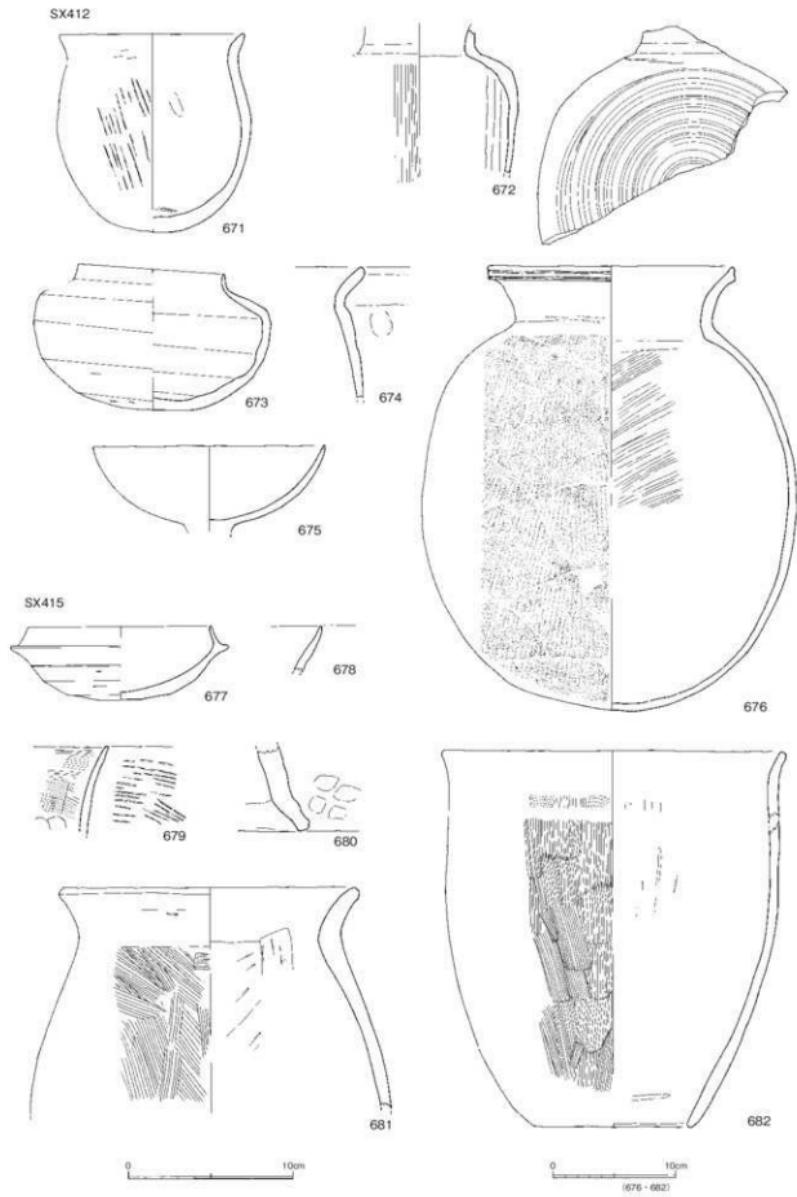


Fig.115 SX412-415出土遺物実測図 (1/3・4)

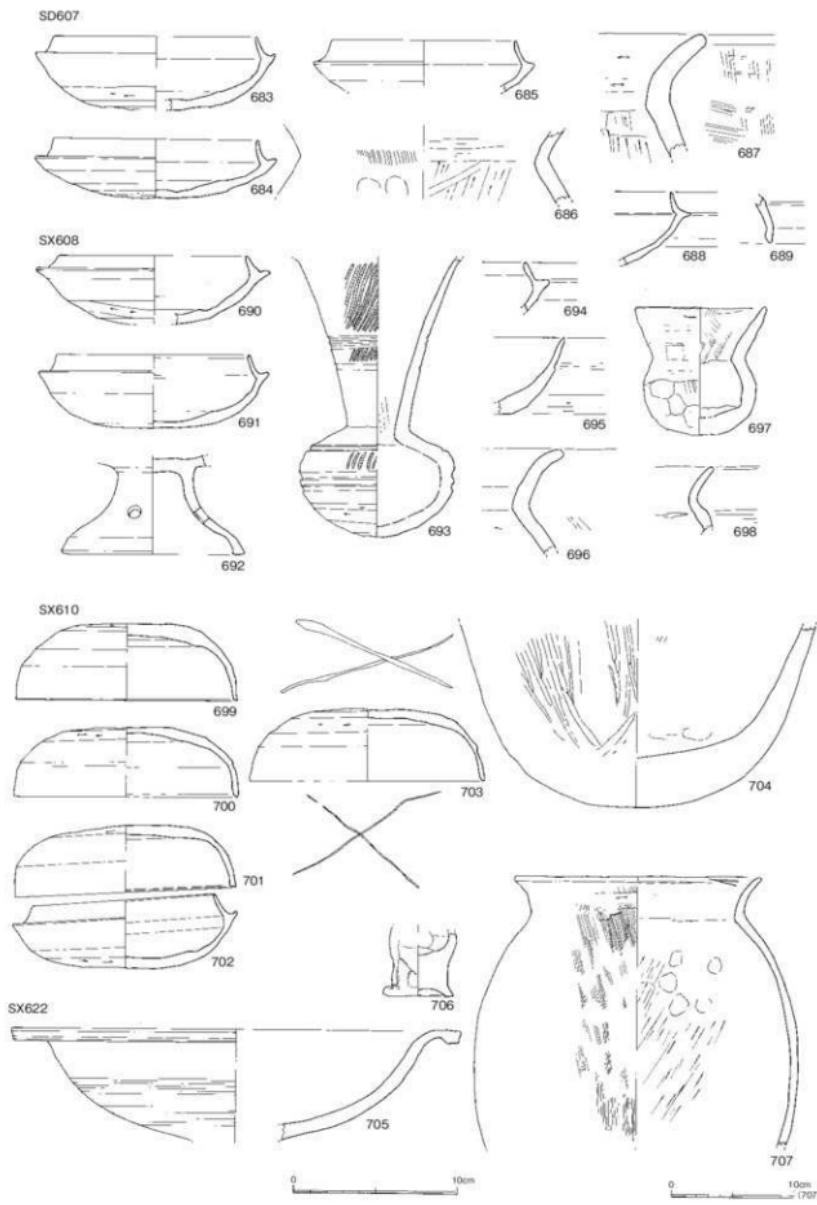


Fig.116 SD607・SX608・610・622出土遺物実測図 (1/3・4)

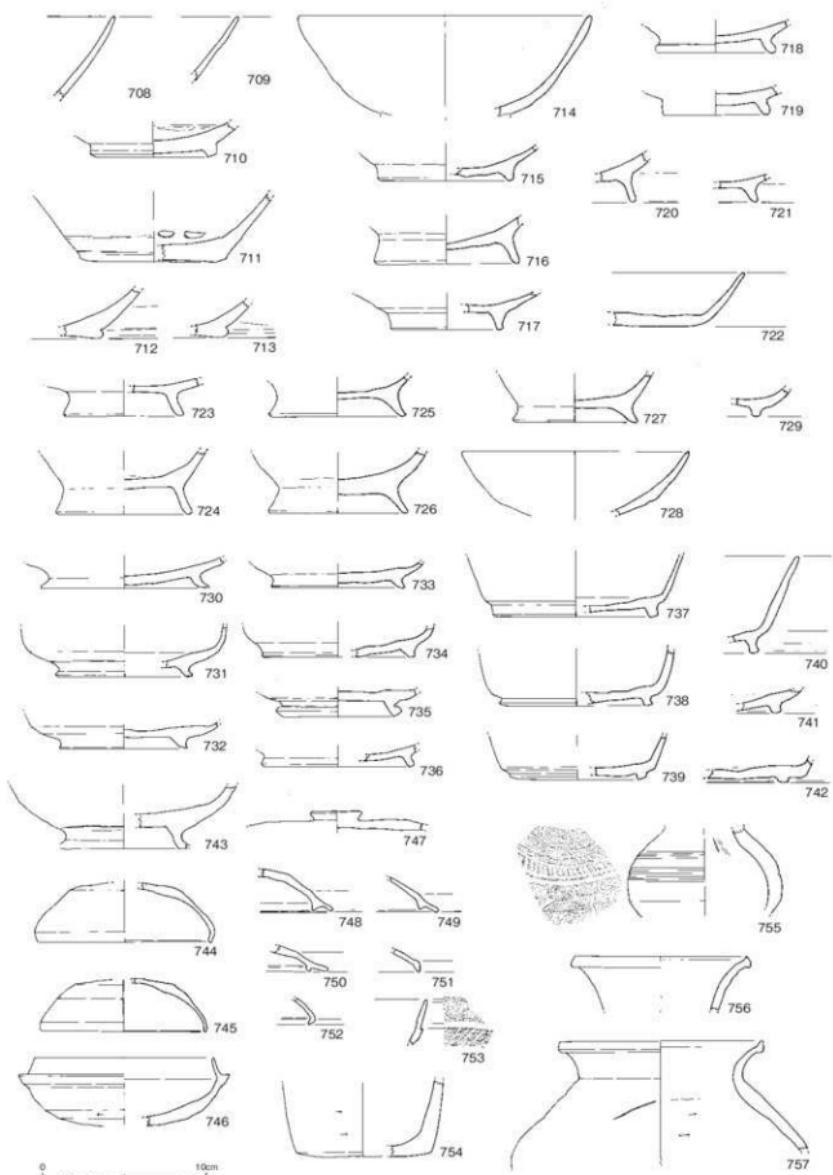


Fig.117 3区Ⅱ層出土遺物実測図1 (1/3)

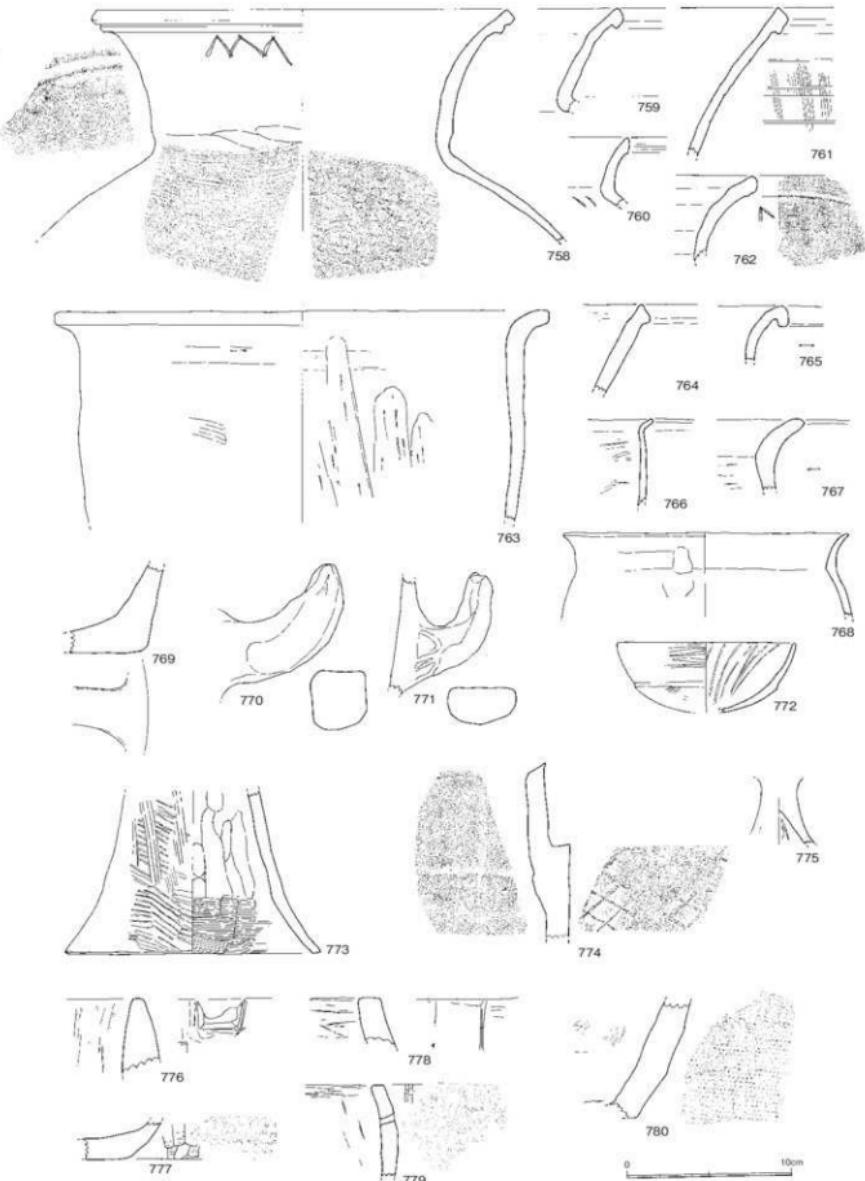


Fig.118 3区Ⅱ層出土遺物実測図2 (1/3)

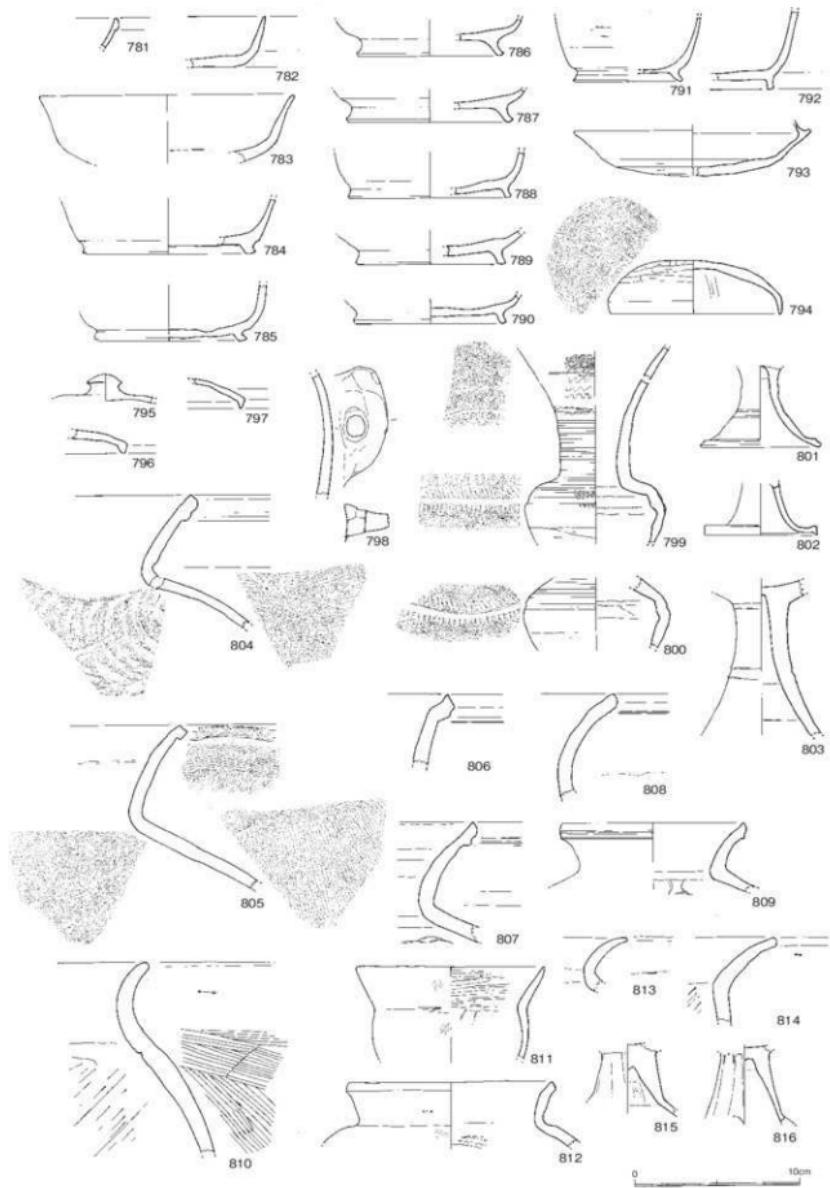


Fig.119 3区Ⅲ層出土遺物実測図 (1/3)

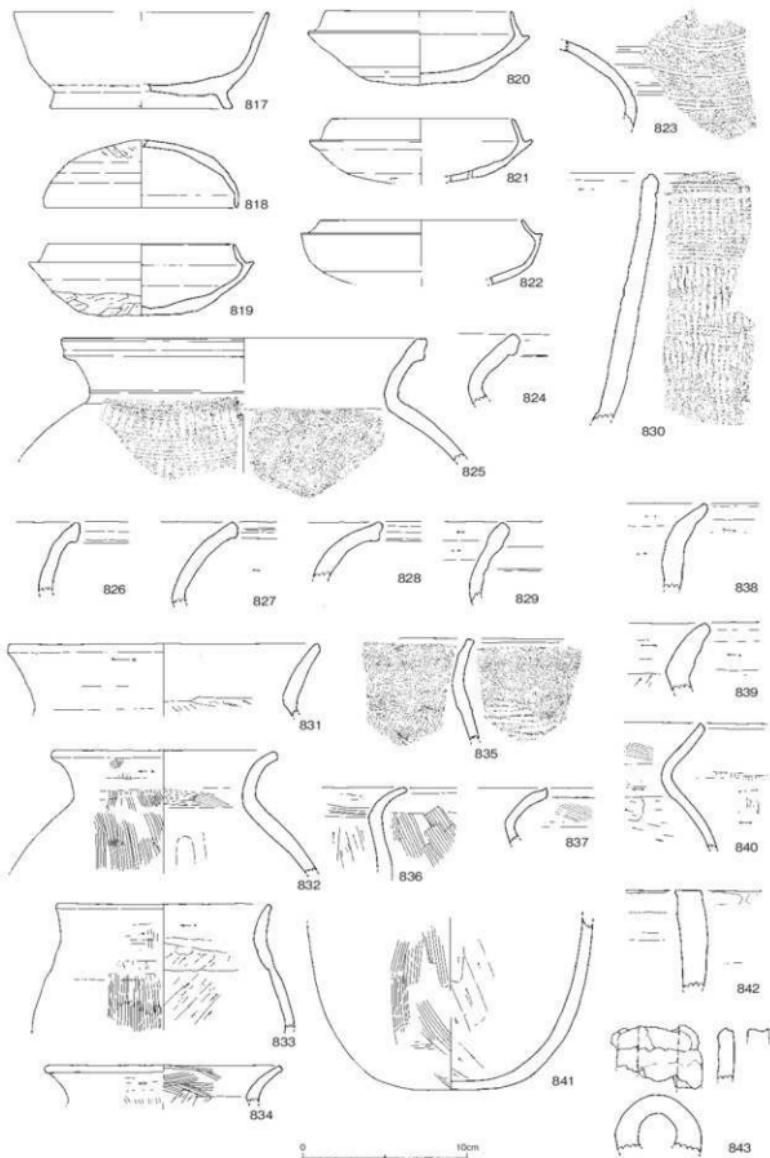


Fig.120 3区IV層出土遺物実測図1 (1/3)

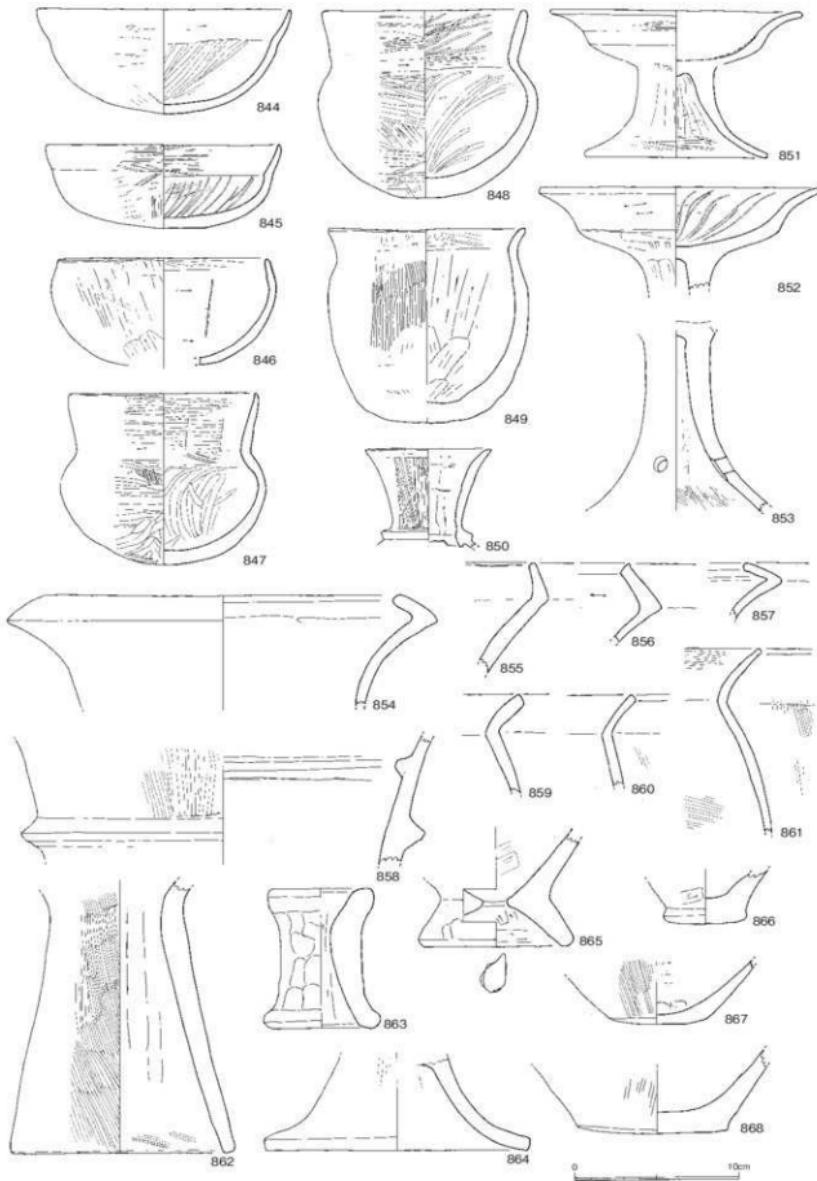


Fig.121 3区IV層出土遺物実測図2 (1/3)

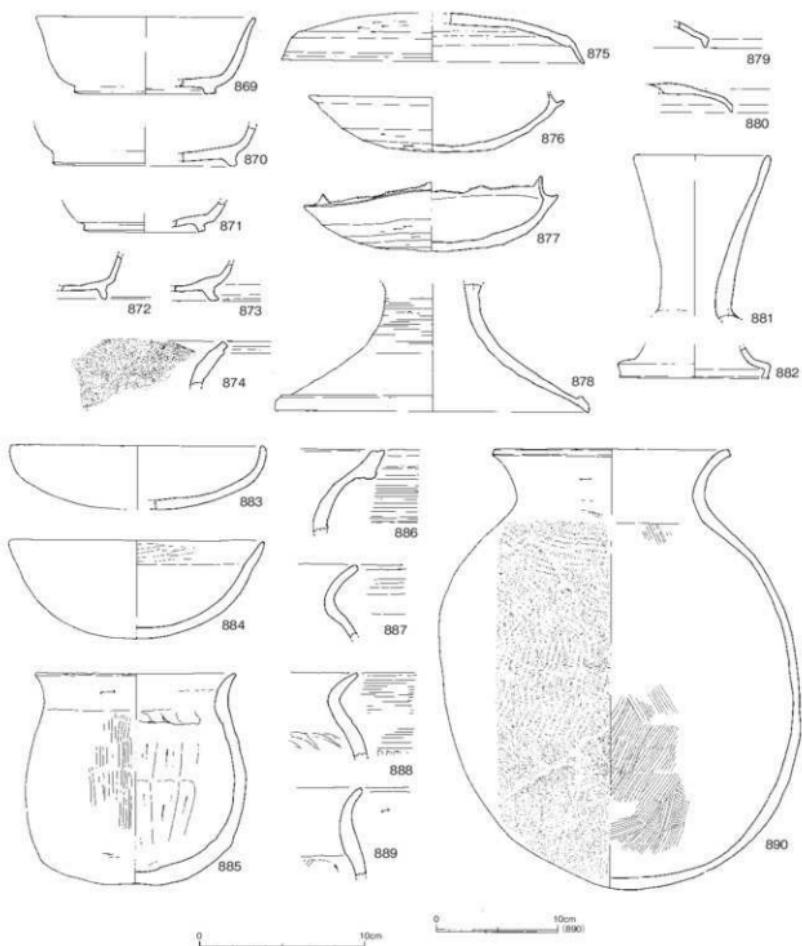


Fig.122 5-2区Ⅲ層出土遺物実測図（1/3・4）

3区Ⅱ層 (Fig.117-118) 708から713は越州窯系青磁。714から721は黒色土器の椀。722は土師器ヘラ切り底の坏。723から729は土師器の椀。730から762は須恵器。763から773は土師器。774は須恵質の瓦。776から780は滑石製石鍋。

3区Ⅲ層 (Fig.119) 781は白磁椀。782は土師器坏。783から809は須恵器。810から816は土師器。

3区Ⅳ層 (Fig.120-121) 817から824は須恵器。825から842は土師器。842は移動式カマドか。843は羽口で先端がガラス化する。844から853は土師器。850は頸部研磨。854から868は弥生後期。

5区Ⅲ層 (Fig.122) 869から882は須恵器。883から890は土師器。

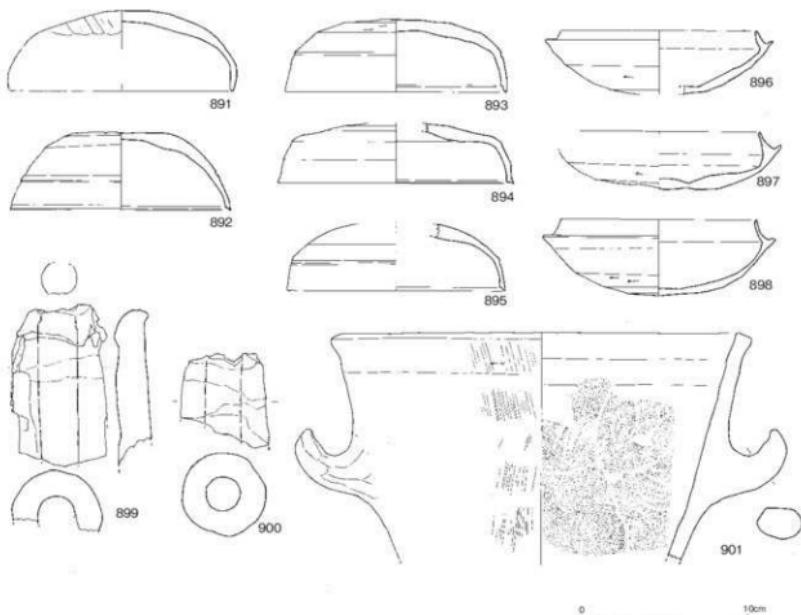


Fig.123 5-2区IVa-b層出土遺物実測図 (1/3)

5区IVab層 (Fig.123) 891から898が須恵器。899・900は羽口、901は土師器。

5区IVe層 (Fig.124～127) 902から918は須恵器。919から933は土師器。934から942は弥生土器。943から948は土師器の瓶。949から953は土師器の甕。

5区V層 (Fig.127) 954は弥生後期の甕。

6区II層 (Fig.128～130) 955から991は須恵器。992は黒色土器A。993は緑釉陶器。994から1013は須恵器。1014から1030は土師器。

6区III層 (Fig.131・132) 1031から1055は須恵器。1056から1071は土師器で1067・1068はカマド。

6区IV層 (Fig.133・134) 1072から1080は須恵器。1081から1086は土師器。1087から1089は弥生土器。1090・1091は羽口。1098は土師器の瓶。1099は土師質の甕。1100は土師器甕。1101から1103は弥生土器である。

6-3区 (Fig.133) 1092～1094は黒色土器A。1095は須恵器坏。1096は土師質の送風管で2次焼成なし。1097は須恵器の皿。

土錐・土玉 (Fig.135) 河川・包含層出土の土製品をまとめておく。一部他の遺構出土を含む。1104から1131は土錐でやや細身のものと太めのものがある。3区II層下部からIII層に多い。1132から1142は土玉で1137以外には小さな孔があく。これはIV層に多い。1135・1142は中央をつまんで縦長になる。

河川からは、この他に石器、木器、鉄滓、若干の鉄製品等が出土している。

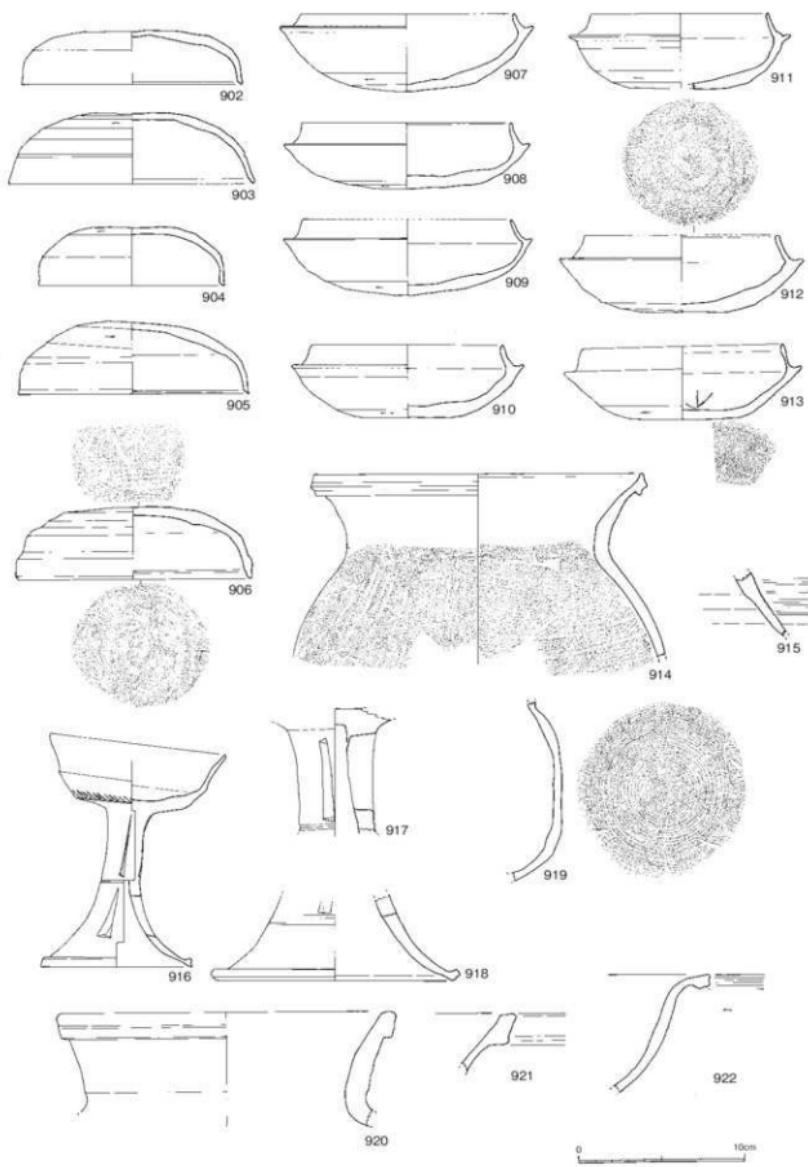


Fig.124 5-2区IVe層出土遺物実測図1 (1/3)

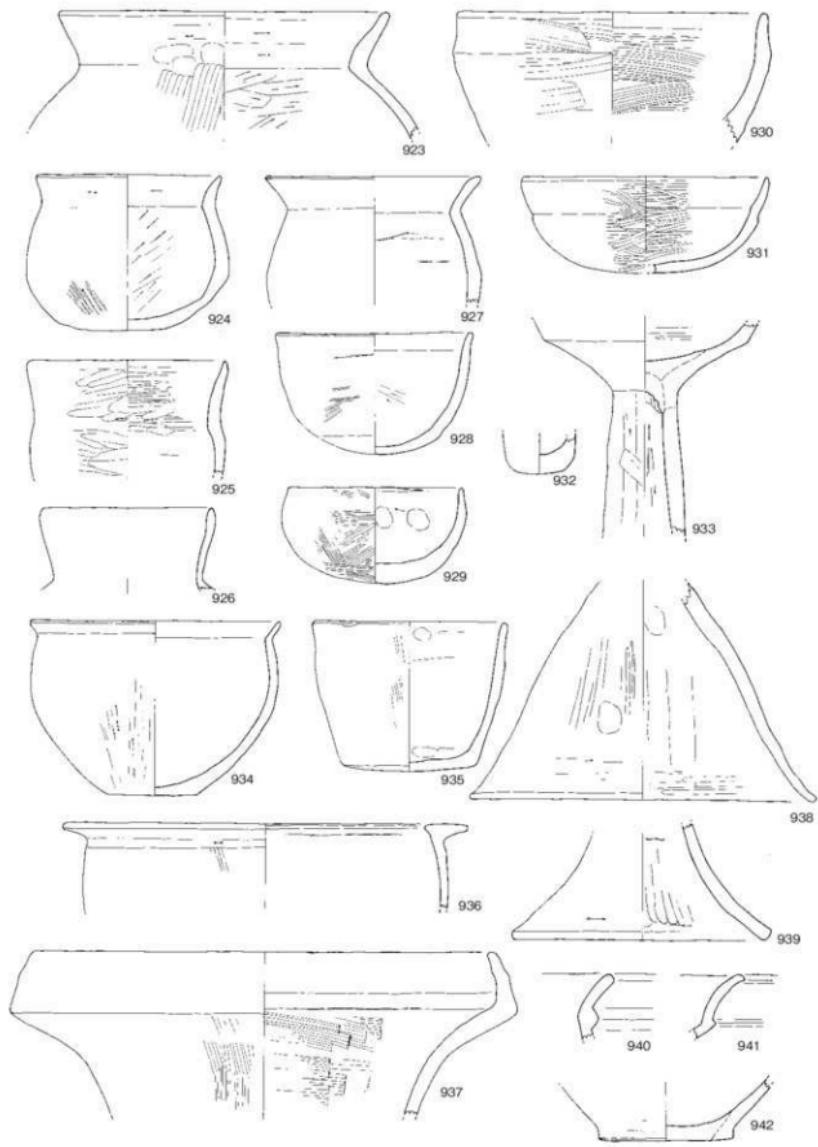


Fig.125 5-2区IVe層出土遺物実測図2 (1/3)

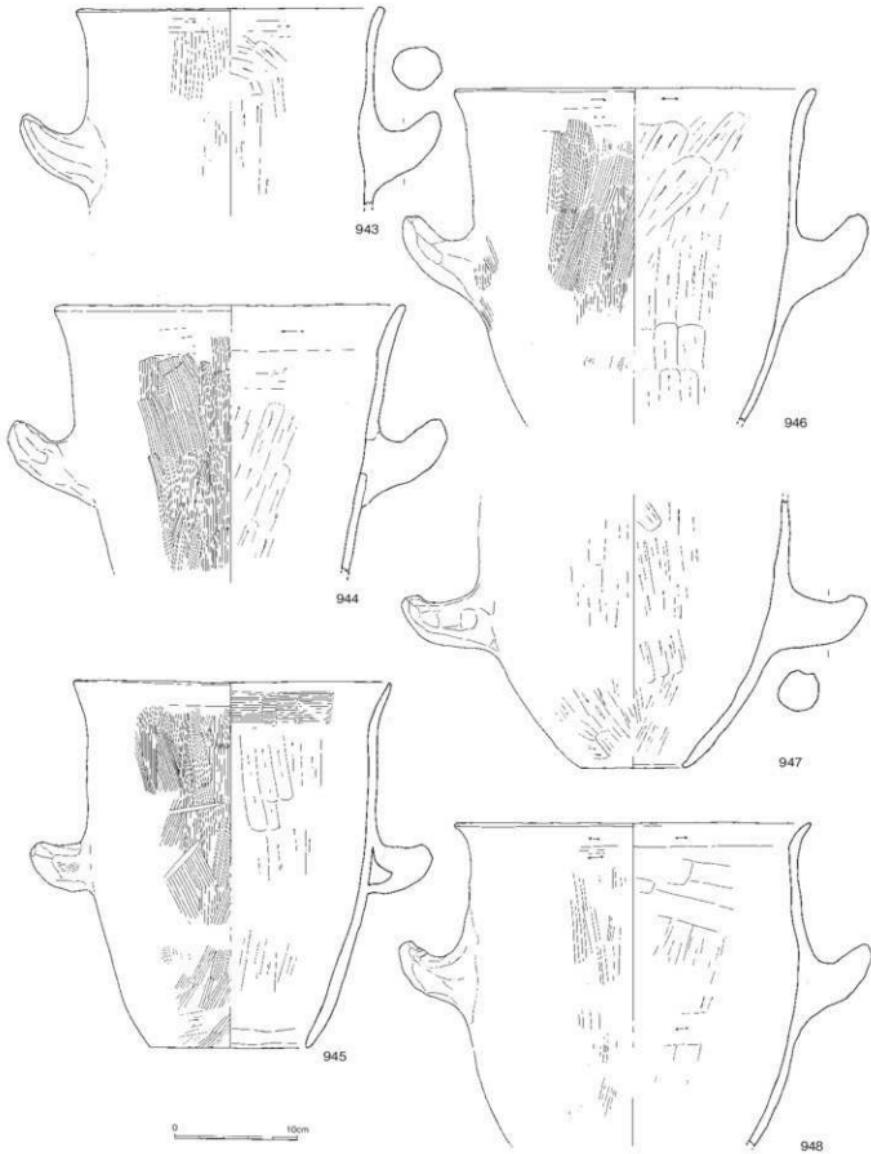
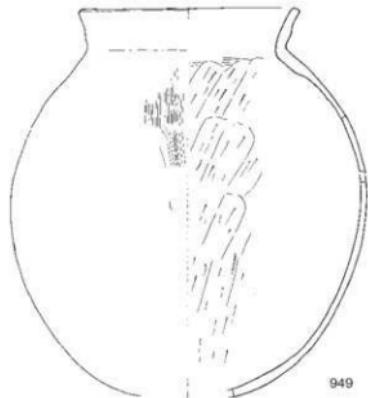
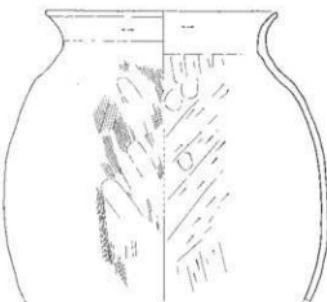


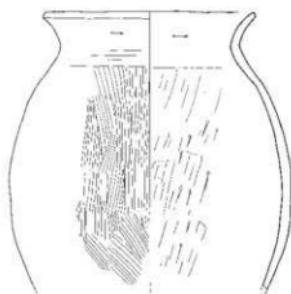
Fig.126 5-2区IVe層出土遺物実測図3 (1/4)



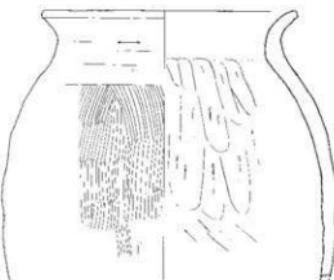
949



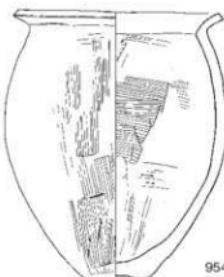
951



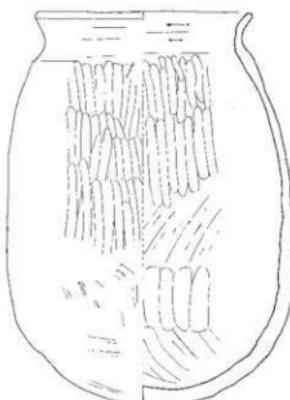
950



952



954



953

0 10cm

Fig.127 5-2区Ne·V層出土遺物実測図 (1/4)

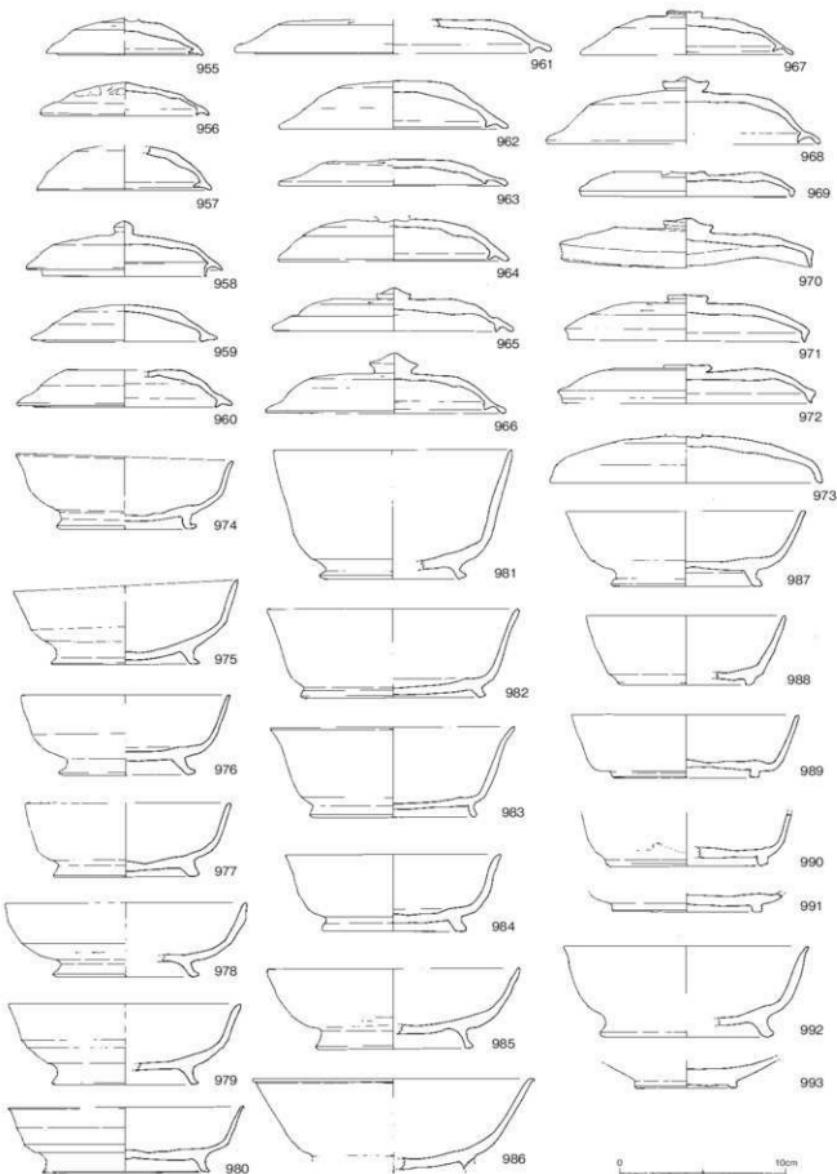


Fig.128 6区Ⅱ層出土遺物実測図1 (1/3)

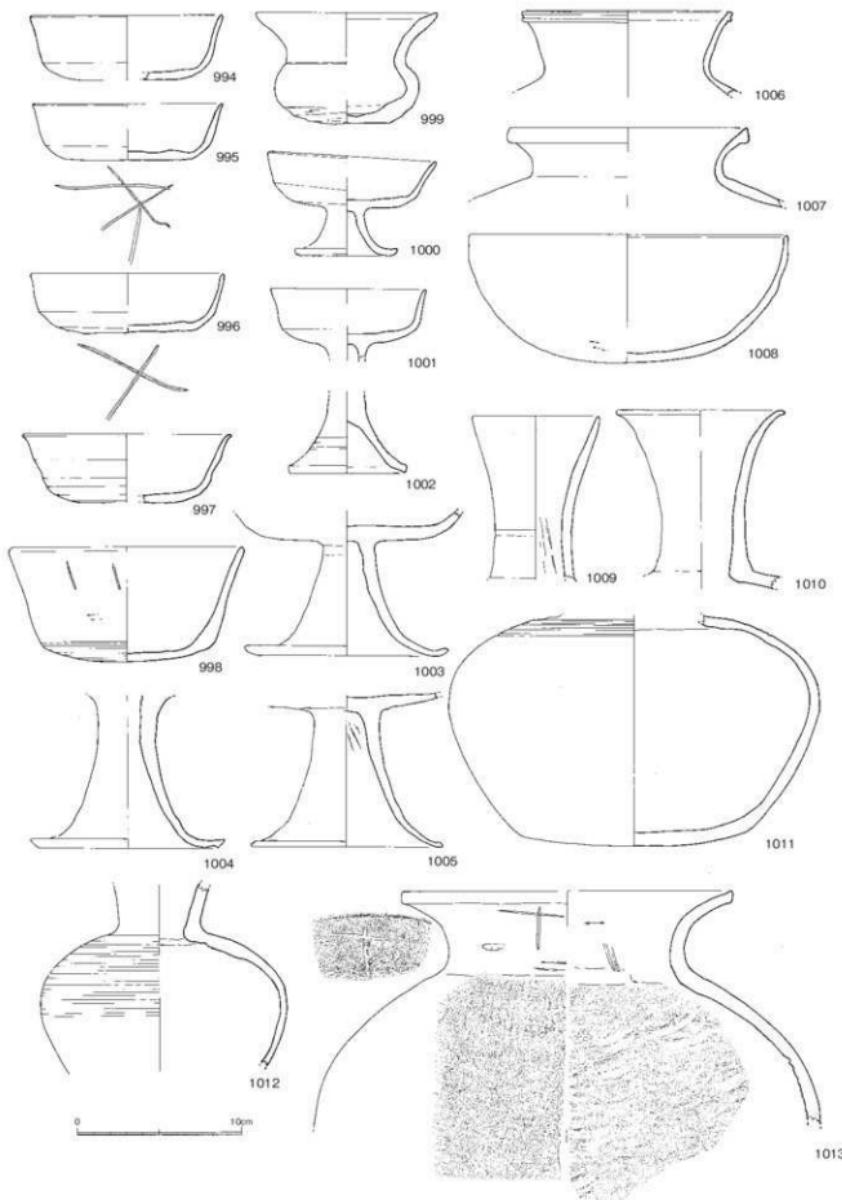


Fig.129 6区Ⅱ層出土遺物実測図2 (1/3)

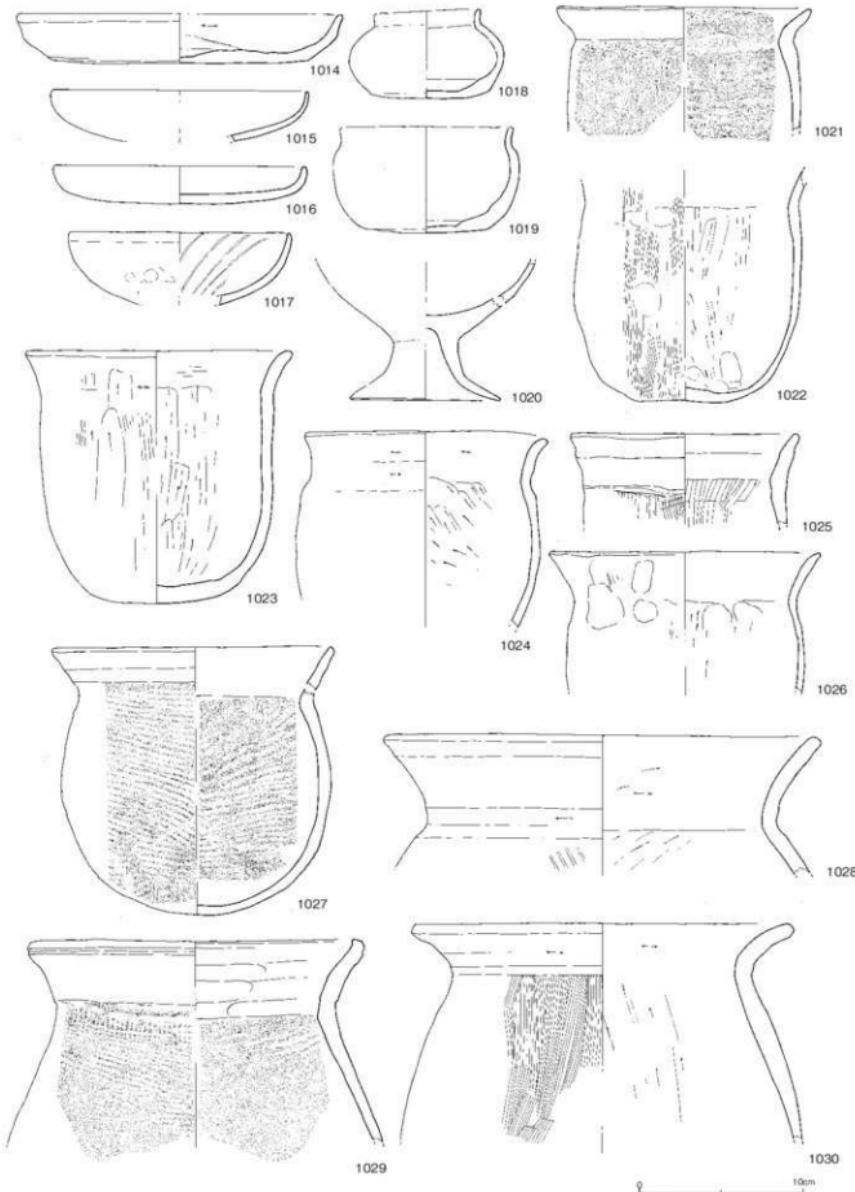


Fig.130 6区Ⅱ層出土遺物実測図3 (1/3)

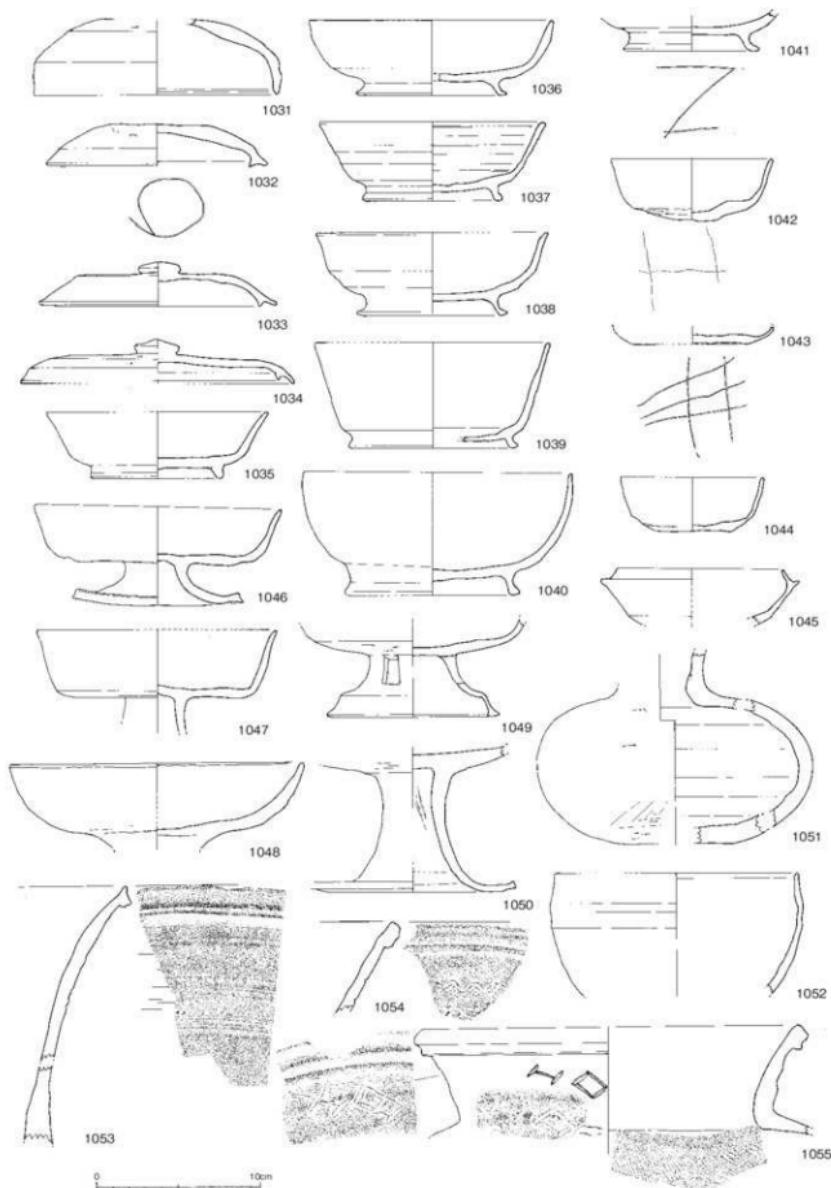


Fig.131 6区Ⅲ層出土遺物実測図1 (1/3)

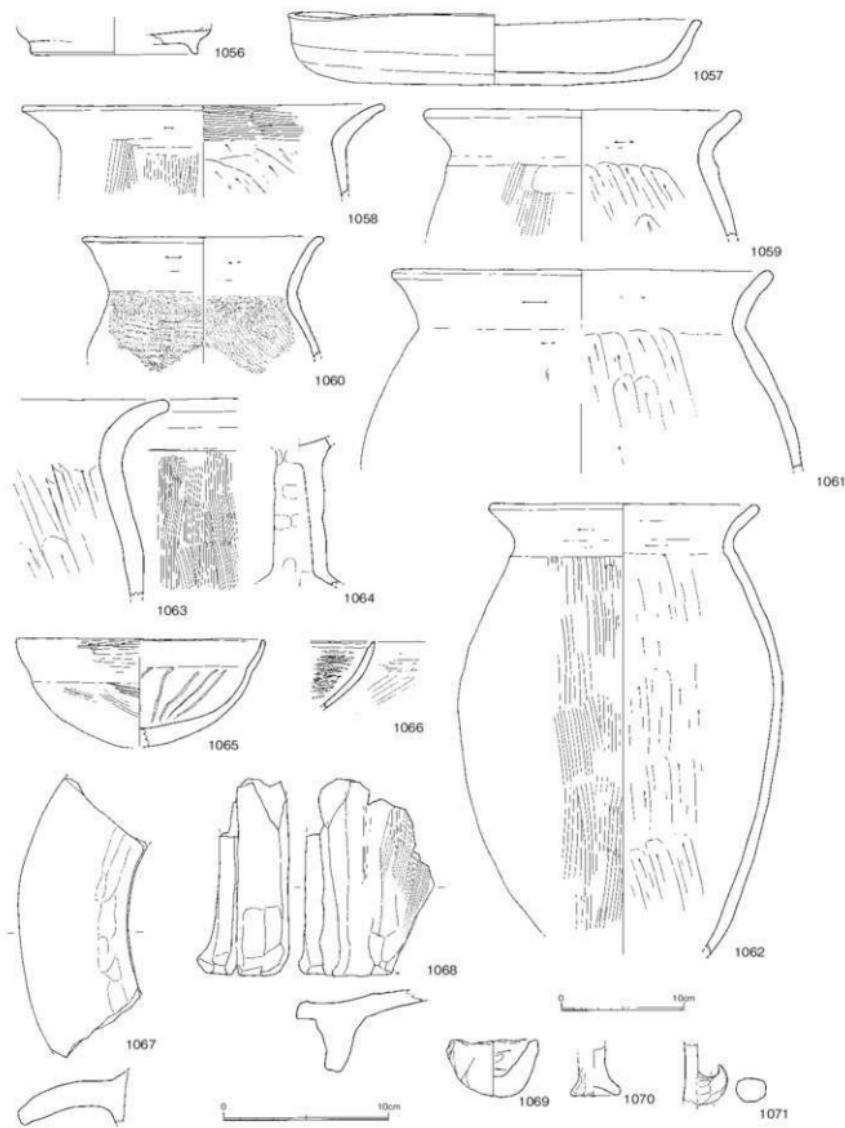


Fig.132 6区Ⅲ層出土遺物実測図2 (1/3・4)

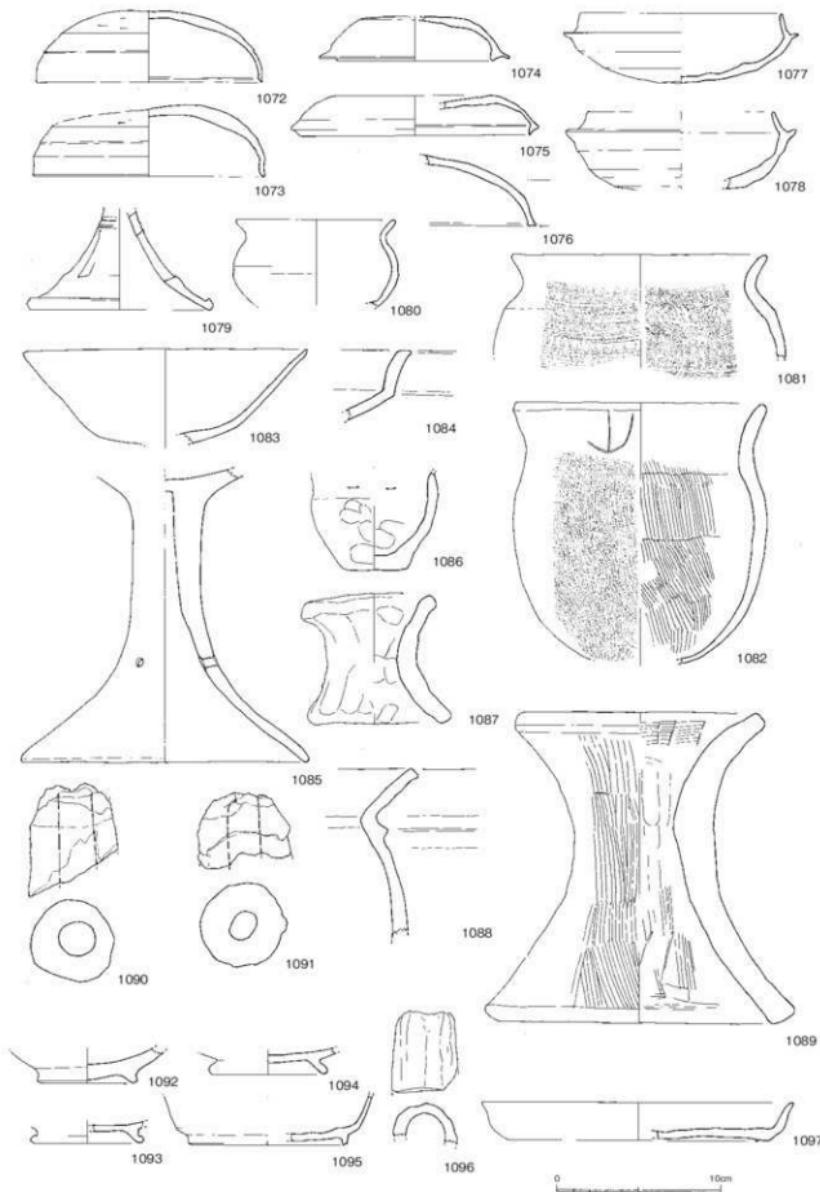


Fig.133 6区M層出土遺物実測図1 (1/3)

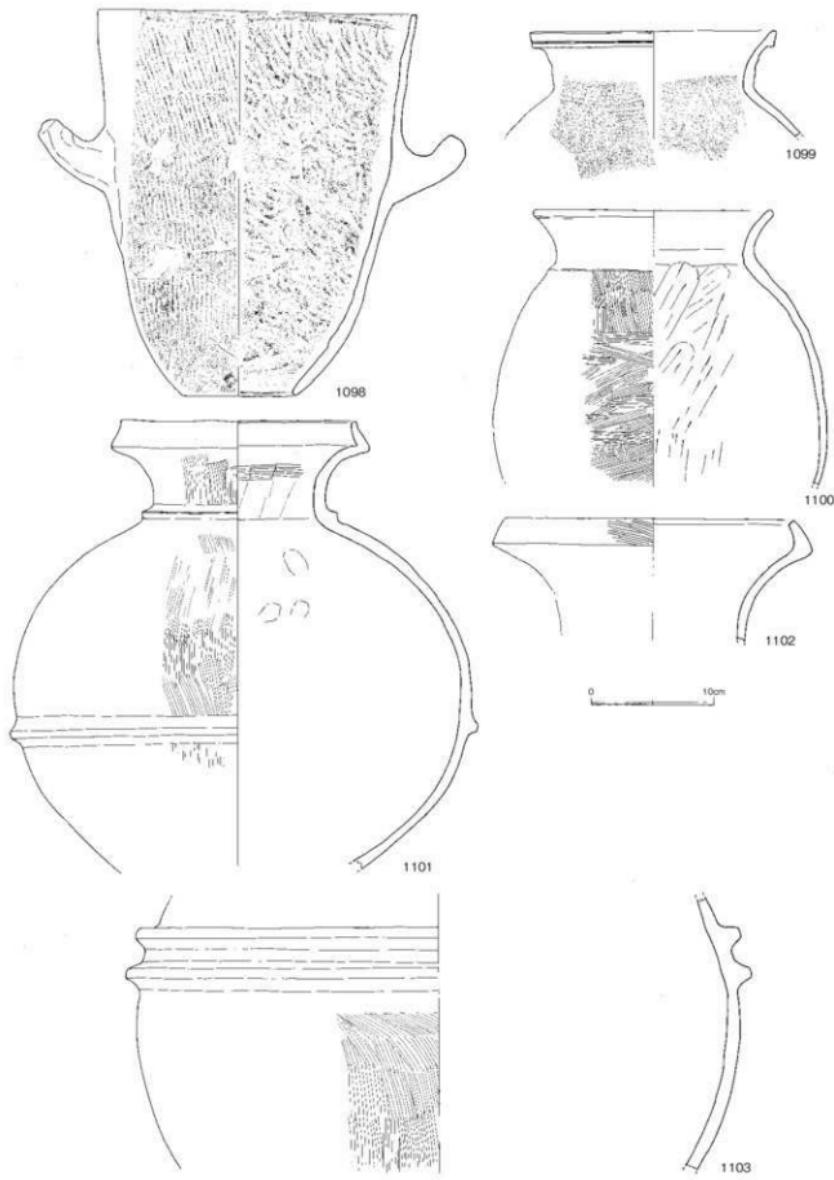
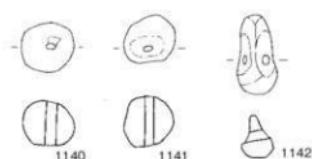
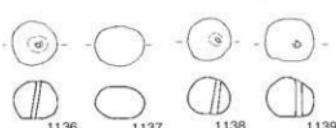
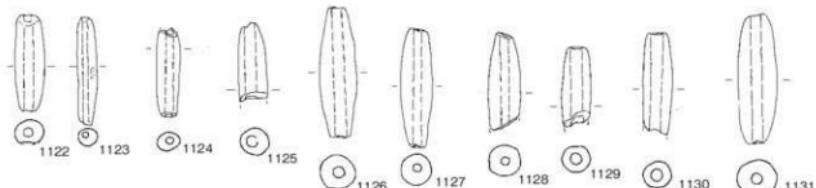
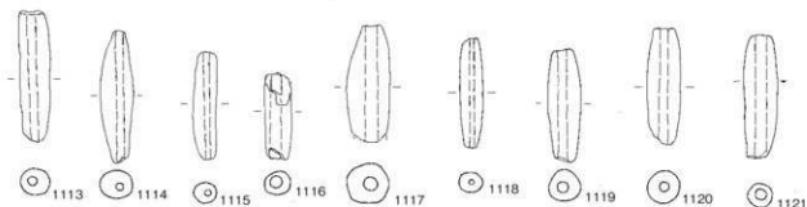
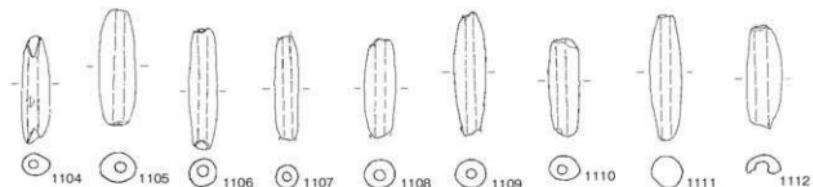


Fig.134 6区IV層出土遺物実測図2 (1/4)



土錘・土玉計測表

番号	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
1104	3	IIa	65	17	14	5.4	1.4	10
1105	3	IIb	705	22	28	4.75+	1.8	13+
1106	3	II F	74	17.3	20	7.9	2.2	30
1107	3	II F	63	14	11	7.14	2	27
1108	3	II F	595	19.6	18	5.9+	2	18+
1109	3	II F	75	19	21	4.8+	1.75	12+
1110	3	II d	59	185	15+	6.7+	1.75	13+
1111	3	II d	755	195	23	7.9	2.4	39
1112	3	II d	625	21	16+	5	1.4	3
1113	3	II c	8+	18	23+	13.3	1.8	165
1114	3	II c	8	205	26	13.4	1.9	3+
1115	3	II c	65	14	14	13.5	1.4	4
1116	3	II c	6.26+	1.67	13+	13.6	1.8	5
1117	3	II a	705	2.6	41	13.7	2	8
1118	3	II a	66	1.4	11	13.8	6	4
1119	3	II a	685	2	24	13.9	2	5
1120	3	II b	7	2.05	29	11.0	3	8
1121	3	II b	75	2.2+	20+	11.41	6	8
1122	3	II c	577	21	17	11.42	5	6
1123	3	II c	65	1.15	10	11.42	1.3	6

0 10cm

Fig.135 河川・包含層出土土製品遺物実測図 (1/3・2)

(10) 小結

49・51次調査では旧石器時代から近現代までの遺物が出土し、各時期の遺構を確認した。

旧石器・縄文時代の遺物は各地点で出土し、縄文時代早期の遺物集中と突堤文期の土坑を検出したが、これらについては追って報告したい。弥生時代の遺構は少ないが、河川のIV・V層では中期後半以降特に後期の遺物が途切れることなく出土しており、失われた遺構が多いと考えられる。古墳時代前期は河川032で布留式の甕などが出土しているがわずかである。

調査地点の開発が本格的に開始されるのは6世紀後半、須恵器Ⅲbの時期からで、遺構・遺物が増え7世紀から8世紀初めまでが今回の調査の主体をしめる。14軒確認した竪穴住居はほぼⅢb期で、切り合い関係があるが時期差は小さい。削平等で失われたものも多いと思われる。河川032の堆積であるIV層以下は主にⅢbの時期に埋まり、建築材等の木器はこの時期のものと考えられる。また土坑SK450、鉄器集中部SX089などの遺構もこの時期に含まれる。掘立柱建物は遺物が少なく、小片であるため時期を決めがたい。柱穴からの遺物は大半のものが6世紀後半から7世紀のもので一部8世紀代を含む。住居との切り合いでSC011・501・589が掘立柱建物から切られる。逆にSC120はSB173・174を切るが、SB174からは須恵器蓋264が出土しており、切り合い・建物の構成・遺物の帰属のいずれかに誤りがある。建物群の時期はⅢ区上層を除いて6世紀後半から7世紀代を中心とし、8世紀前半までの幅の間でとらえておきたい。周溝状の溝も同様の時期幅の中で取ると考えられる。河川の遺物はIV層の上部からⅢ層に多い。6区では7世紀後半から8世紀初めの完形品を含む土器が多く、周囲および上流に遺構の存在をうかがわせる。

8世紀以降になると遺構は急に少なくなる。I区では谷の中央へ向かうSD009・SD028などの溝が幾つにも走り9・10世紀を中心に12世紀までの遺物を含む。溝の用途は不明だが、前代のような規模の集落はないと考えられる。II区では上層で鍛冶炉、III区では上面で掘立柱建物SB155・156・157・170や土坑SK113・145、1区では土坑SK315がある。III区の遺構は遺物から9世紀後半から10世紀代と考えられる。また、III-5-1区からII-I区の北西側段落ちの下に沿って溝の底が痕跡状に幾重にもなってつながる。これらの溝からは8世紀から12世紀の龍泉窯系青磁までを含み、溝が何度も掘り変えられた際の底と考えられる。溝の掘削の開始期は決定しがたいが、河川032がほぼ埋まつた8世紀以降に谷の雨水等を集めルを築いたものと考えられる。出土遺物とIII区の遺構の広がりから11世紀代を想定しておきたい。

以上の遺構の変遷から、古墳時代から古代にかけて、この谷の営みに二つの画期が認められる。まず6世紀後半のⅢb期に竪穴住居を中心とした集落が営まれる。その後、継続して7世紀代を通じ掘立柱建物群が築かれる。建物には倉庫群とIII区の様な大型の建物群があり、一般的な集落とは異なる公的な様相が見られる。次に急に遺構がみられなくなる8世紀代に画期が認められる。明確な関係はわからないが、上流の24次調査地点で大規模な製鉄炉が営まれるのが8世紀後半であり、この谷の利用の仕方が変化したと考えられる。第7次・18次で調査した谷でも6世紀後半に開発が始まり8世紀初めに急に遺構が見られなくなる。いずれも北西側の現在の大原川の水系に面している。丘陵を1つはさんで近接する第20・27次調査地点では、古墳前期から住居が営まれ、8世紀終わりまでより長期間にわたって遺構が集中し、8世紀には木簡の出土や倉庫群から官衙的な施設が想定されている。遺物にも墨書き土器や硯、石帶、帶金具などが多い。元岡・桑原遺跡群が位置する鳴郡は古代には朝鮮半島との緊張関係における軍事的拠点との位置づけがなされている。今回の調査成果がこのような歴史的背景と結びつくものか、慎重な検討が今後必要であろう。



Ph.27 調査地点全景（東から）



Ph.28 Ⅱ区全景（北東から）



Ph.29 Ⅲ区全景（北から）



Ph.30 6-2区全景（北東から）



Ph.31 5-3区全景（南から）



Ph.35 2・3区 全景（北東から）



Ph.32 Ⅲ区建物群（北から）



Ph.36 金戸池堤断面（北西から）



Ph.33 Ⅲ区段落ち部（北から）



Ph.37 SC118（北東から）



Ph.34 1-2区 SD306（北から）



Ph.38 SC120（北西から）



Ph.39 SC011 (南西から)



Ph.43 SX054·SB100 (北西から)



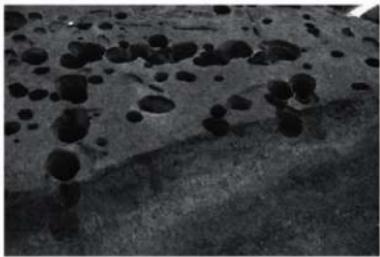
Ph.40 SC167 (北から)



Ph.44 SB048 (北西から)



Ph.41 SX088 (北から)



Ph.45 SB177·178 (北東から)



Ph.42 SX079 (北西から)



Ph.46 SB420·SP428 (東から)



Ph.47 SK113 (北東から)



Ph.51 河川出土木製鏟



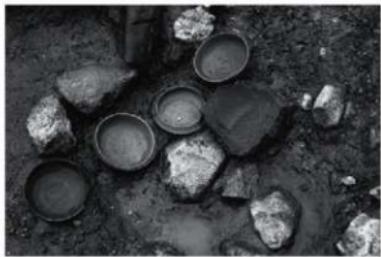
Ph.48 SK450 (北から)



Ph.52 貯木場SX417 (南東から)



Ph.49 SD508・509 (北東から)



Ph.53 SK610 (西から)



Ph.50 3区河川032 (南から)



Ph.54 SK620 (南東から)

VII 第50次調査の報告

1. 調査に至る経緯

平成18年の49次調査実施時には、調査区南に接する尾根の末端は36次調査で経塚古墳と近世墓などが出土し保存が決まっていた。しかしこの尾根が道路で切断されたすぐ山側は未試掘であった。このため試掘を行い、36次から続く近世墓と考えられる墓域と、須恵器などの遺物を確認した。平成18年3月には49次調査が終了したが、次の51次調査地点である金屎池・調整池の水抜きと上流に調整池を造成するための工事期間が発生した。そこでこの期間に上記の試掘箇所を50次調査として本調査を実施した。調査地点は字牛坂に位置し、調査期間は平成19年4月1日から平成19年8月27日、調査面積811m²である。

2. 調査の概要

立地 50次調査地点は水崎山から北東に向かって伸びる丘陵上の末端近く、標高約15mに位置する。丘陵は標高20m付近で傾斜を緩め、さらに削平を受けている(Fig.48)。調査地点では丘陵の幅約60mほどで、造成を受けたような平地である。東側は道路で切断され崖の比高差は5.5mほどである。また西側には北側からのコンクリート敷きの道路が上ってきている。さらに西の平坦地は、畠地として使われたのち近年まで建物があり、試掘では遺構・遺物は確認されていない。50次調査地点の現状は竹等の藪であった。

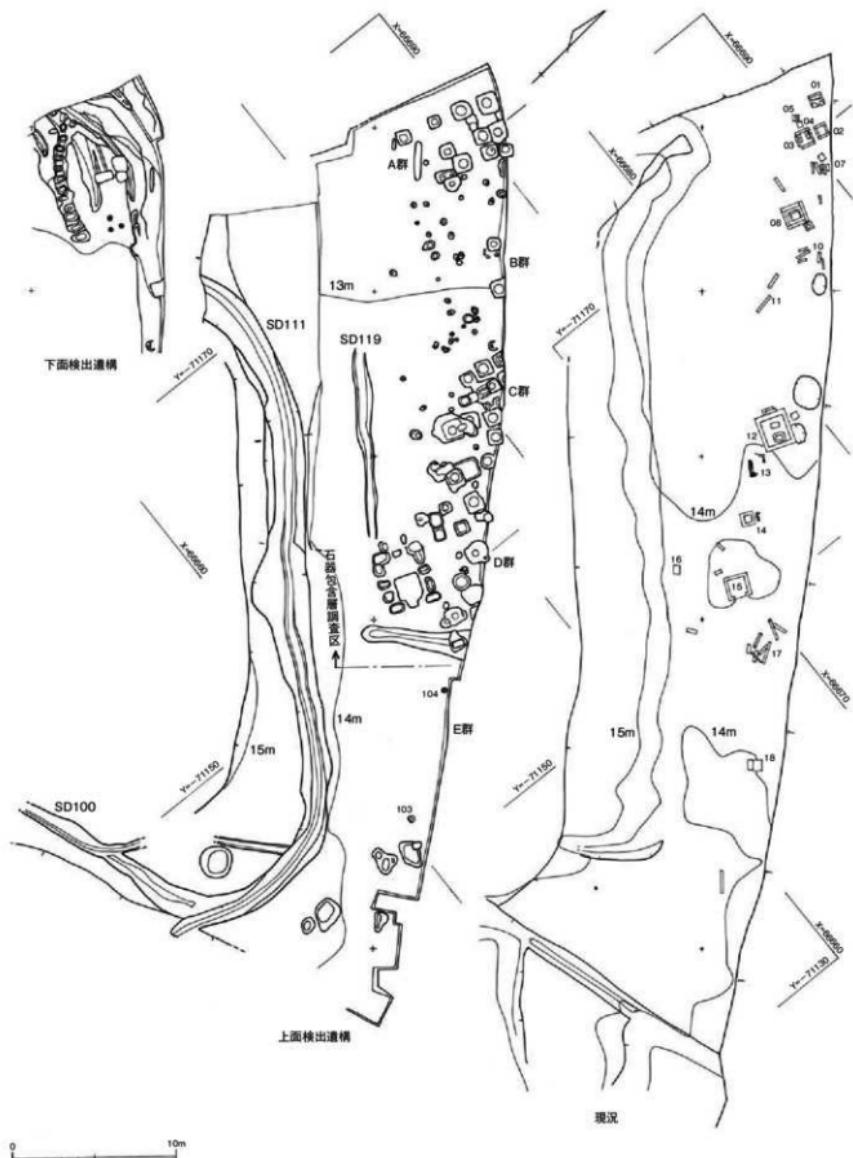
36次調査では経塚古墳と周辺の近世墓が保存されている。近世墓は道路で切断され、墓域の広がりが道路の対岸に及ぶ。50次調査はこの広がりに残された墓域を含む地点である。現況では改葬後に墓石が撤去され、一部基礎が残された状態であった。墓地は昭和40年代までの使用が確認され、54年までに墓域・丘陵を横断する道路建設で削平を受け、現在に至っている。36次調査の内容と周辺の状況については「元岡・桑原遺跡群18」(1105集)で報告されている。

調査の経緯 調査は竹林の伐採から行い、現況測量と同時に6本のトレーナーを入れた。測量時には地表に残っていた墓の基礎等の簡易な記録を平板・写真およびメモで行っている。トレーナー調査では厚さ20から50cmの腐植土を除去すると赤褐色の山土または淡黄褐色土となり、薬罐などの埋葬施設を確認した。顕著な盛り土なども確認できなかったため、重機で表土を除去したのち遺構検出を行った。墓坑は赤茶褐色土に乗る淡黄褐色土上面で検出した。実際には表土からの堀込みが見られる。若干の盛り土もあったであろう。検出した主な遺構は埋葬施設と丘陵を横断する溝SD111である。また、遺構を検出した面の北半に広がる淡黄褐色のシルト質土には黒曜石が含まれていたため、出土位置を記録して取り上げた。さらに北端部は、南側で見られる赤褐色土の地山が落ち、墓地はこれが埋まつた後に営まれていた。このため、トレーナーで土層を確認した後に重機で埋土を除去し、溝等の下層の遺構を確認した。

検出遺構のうち埋葬施設は甕棺墓21基、土壙・木棺墓26基、小型容器の埋設10基の計57基である。このほかに関連施設として納骨関連施設がある。時期は近代以降と考えられ、甕棺墓から火葬に移行する明治から昭和にかけて営まれたものと考えられる。この他に、溝、下層遺構として階段状の遺構、黒曜石包含層がある。以下この順で報告する。

3. 遺構と遺物

(1) 埋葬施設



現況測量時に確認した墓の基礎等については001から番号を付しFig.136右側の現況図に示した。下部の墓壙と重なっていたものはSX01とST140、SX02とST145、SX03とST144、SX12とST125でいずれも大型甕棺を主体部とするものである。SX08は花崗岩の基壙が残っていたが下部では何も確認できなかった。表土除去後に検出した施設は101番から番号を付しFig.136の中央の遺構配置図とFig.137に示した。

墓域は平地で南側に向かって上がっている。西側は平坦地とは境を成して緩傾斜となり、平坦地から人為的な印象を受ける。墓域はこの平坦面の北西よりに分布し、東側の道路崖面へ続く。調査は崖近くまで行ったが、危険防止のため崖面に影響を及ぼす恐れがあるものについては行っていない。甕棺を確認しながら、一部採集にとどめたものがある。また、埋葬施設の分布は小さなまとまりがあり、並んで営まれた形跡が読み取れる。大まかではあるが、Fig.136にAからE群とした。

以下甕棺墓、小型容器、土壙・木棺墓、関連遺構の順で概要に触れる。遺物は甕棺と副葬品を中心とし遺物を図化したが、未図化のものを含めて表に記載している。「副葬品」と別にした「遺物」の欄は流入した甕棺埋土、堀方出土のものである。

甕棺墓 (Fig.138・139・140) 甕棺を主体部とするものは21基が出土した。甕棺には大型（高さ80cm弱）、中型（50cm前後）、小型（40cm前後）のものがあり、大型の全てと中型の一部には蓋形の上甕がセットになる。

大型の下甕は、長胴で肩部ですばり頭部との境に沈線を施す。口縁部はやや外反し内面を肥厚する。大きさはほぼ一定でややくすんだ暗茶褐色の軸を内外にかける。頭部の沈線に白色軸を対面する2箇所に装飾として垂らすものA類（2・4・10・14）と胴部に横走する沈線を持つものB類（6・12）がある。C類8は高さ70cmとやや小さく胴部沈線がなく頭部からの軸の垂れも茶褐色で装飾的でない。

中型の下甕はバリエーションがある。15・16は大型品より幅広の器形で、肥厚した口縁部がほぼ水平となる点は共通するが、15が緑灰色の軸に対し、16は光沢の強い茶色の軸を施す。ST105・127は16に近い。図化していないがST151は大型とほぼ同じ器形で沈線、装飾的なものはない。小型とした17、18は寸胴で内面は露胎である。ST186（19）は小型としたが、主体部ではない可能性がある。

甕棺の墓壙は隅丸の方形プランで、ST151のみが円形を呈す。堀方は甕棺の大きさに合わせて掘削され幅に余裕はない。深いものは150cm以上を測る。ST124はST125の改葬時の堀方と考えられる。22～24のように蔵骨器と考えられる遺物は改葬時に入ったものであろう。

副葬品では10基から銅鏡が出土したことが特筆される。寛永通宝が多いが、無文も見られる。このほか陶磁器、ガラス製品、プラスチック、レンズ、入れ歯などがみられ、布や船殻が残っていたものもあった。骨は残るものもあるがわずかである。

小型容器 (Fig.141) 陶製・金属製の薬罐、小型の甕・壺が単独で埋置されていた例があった。ST103や104のように墓群の中心からはなれたものが目立つ。これに対し、158から161のように集まった箇所もある。蔵骨器、胞衣容器などの用途が考えられよう。ST105の上部で出土した陶器（25）もこれらと一緒にすべきかもしれない。またST168は陶器（26・27・63）と磁器（64）が割れた状態で埋まっており状況を異にする。鉄製の薬罐は腐食により残りが悪い。

土壙・木棺墓 (Fig.142・143・144) 各種の墓壙を一括している。まず平面形で長方形と方形、円形のものがある。長方形を呈す2基（108・150）のうちST108は改葬と思われる攪乱を受けているが底に木棺が残っている。ST150は骨片が方20cmの2箇所に集まり、箱等に入っていたものと考えられ、方形プランのものに近い。方形プランには、底のプランが丸いもの（146・183）、広めの（101・102・143等）、狭まるもの（107・120・122等）がある。丸いもののうちST146の底には径50cmほどの円形の圧

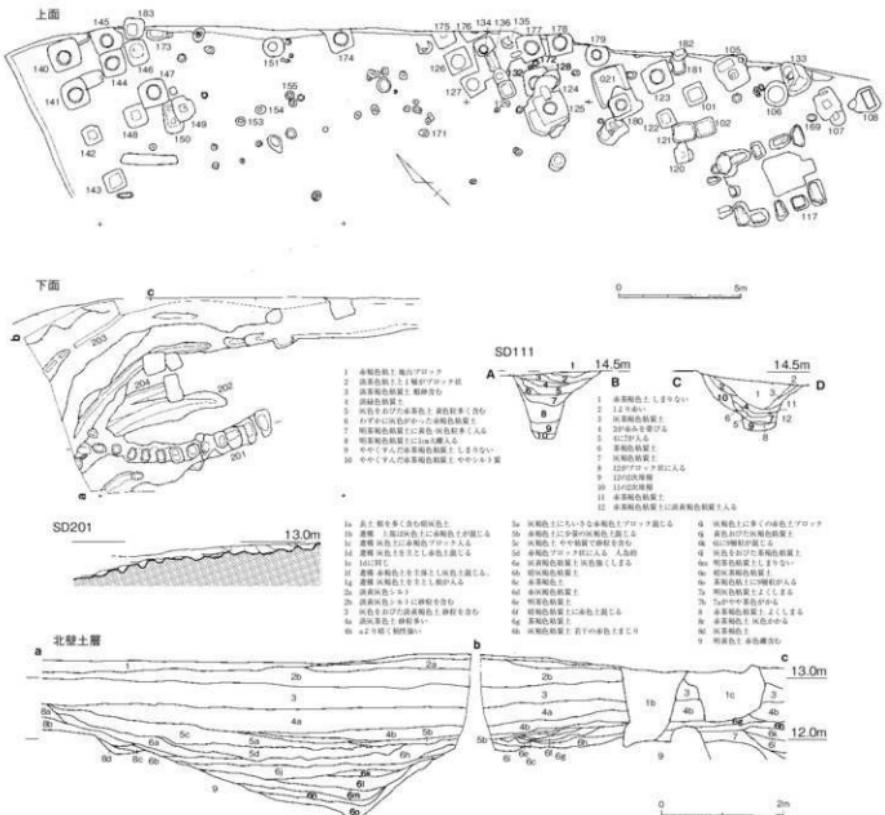


Fig.137 遺構配置図、北壁・SD111土層図 (1/200・80)

痕が残っており木桶を棺にしていたものと考えられ、他も同様の可能性がある。広めのうちST101の底には径80cmの円形に木質が残り木桶と考えられる。ほかのものは木桶・木棺・木箱等の可能性がある。底が狹まるものではST107からは一辺20cmの方形の木箱が、ST120からは骨片が出土し、火葬墓と考えられる。ST120も木箱であろう。他のものについても同様の可能性が高い。ST175は段堀りし、陶器の蓋のみが出土している。木箱であろう。このほかST181は浅く丸みをおびた長方形の土壤で染め付けの椀69が出土した。遺物が江戸期に収まる唯一の例である。またST136とした箇所は複雑に小さな段があり、切り合いがあるようにも見える。小さなまとまりで番号をつけたが遺構の性格はつかめていない。ST166から銅鏡が1枚出土している。またST126との間に横穴が掘られている。

関連遺構 (Fig.144) SK021はST180に切られる浅い土壤で性格不明である。SX117は大型の礫をその大きさにくぼめた穴に落とし、全体に長方形に配列する。北側には入り口状の張り出しがあり、南側中央に方形プランの土壤がある。配石には明治7年の銘をもった墓石、花崗岩の切石、不正形の礫、コンクリートが付いたものがあり墓の基礎、墓石の転用である。南側の土壤のちょうど上にはコンクリート製の窓の段がもうけられ、南側から入るようになっていた。納骨施設であろうか。

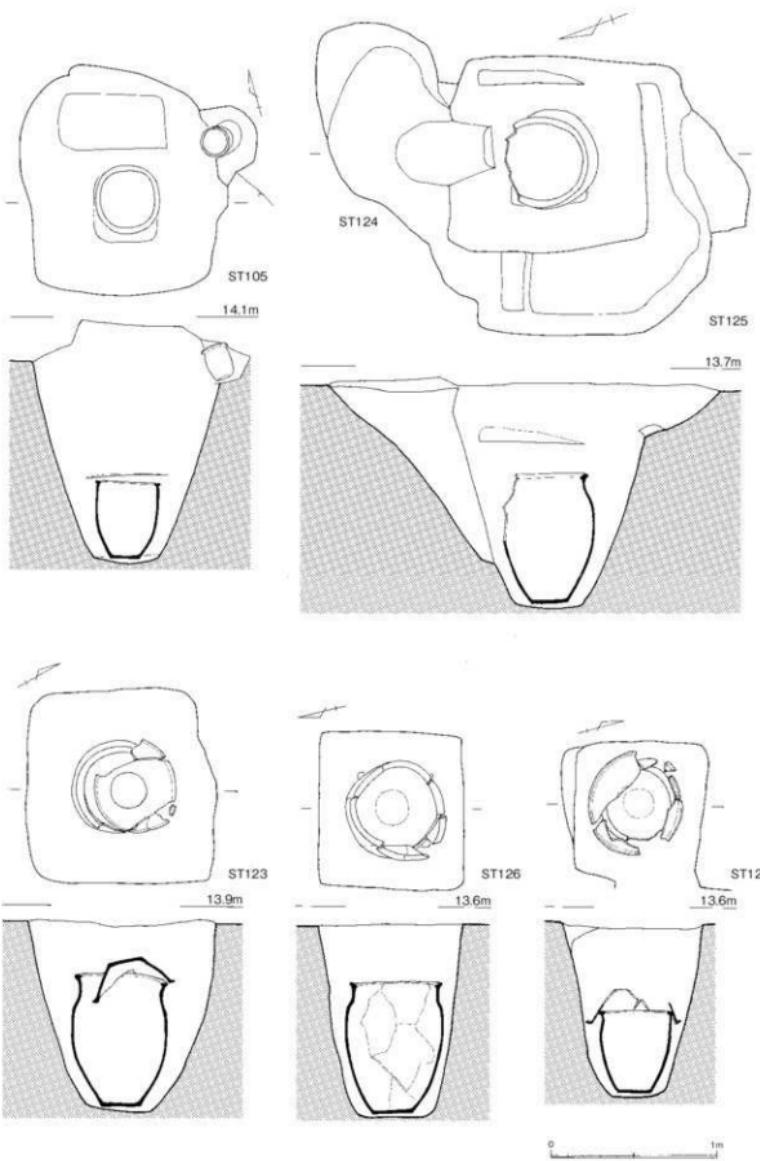


Fig.138 墓塚墓実測図1 (1/30)

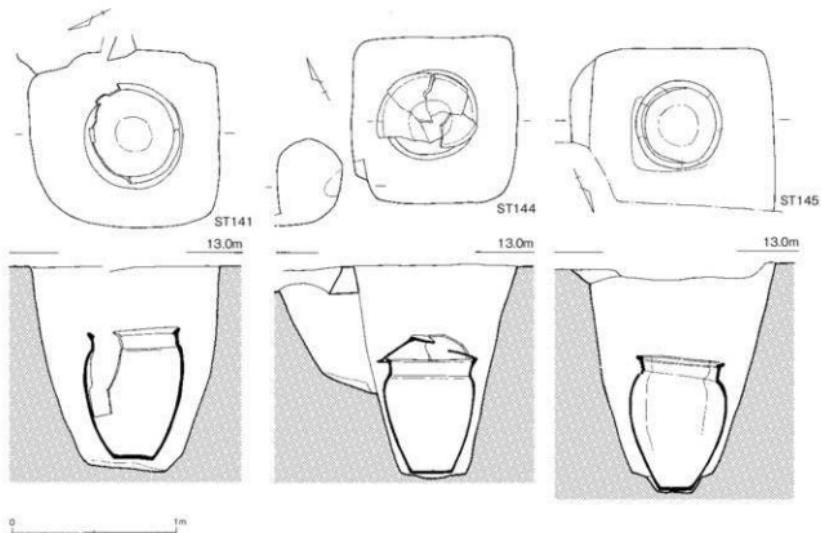
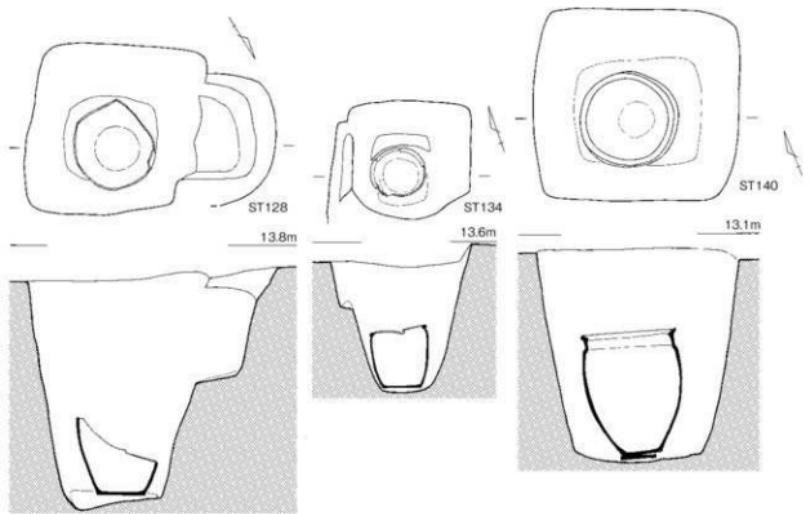


Fig.139 墓棺墓実測図2 (1/30)

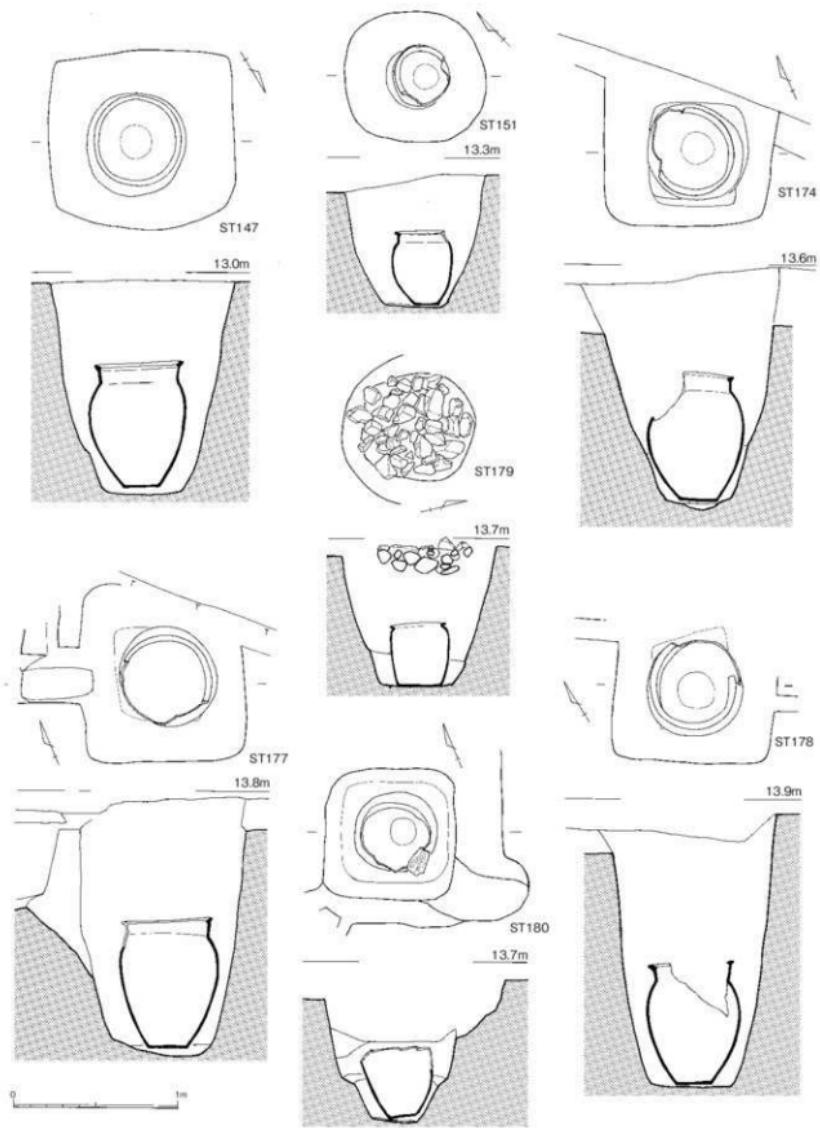


Fig.140 墓室実測図3 (1/30)

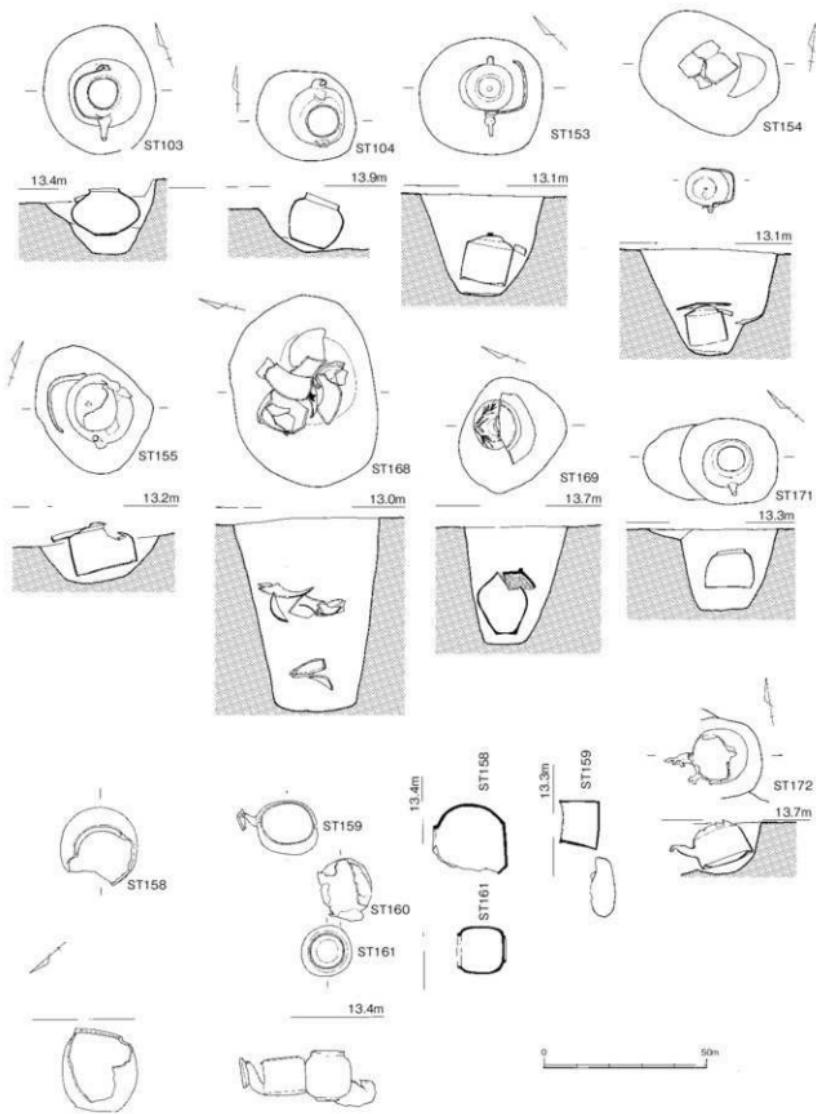


Fig.141 小型墓実測図 (1/15)

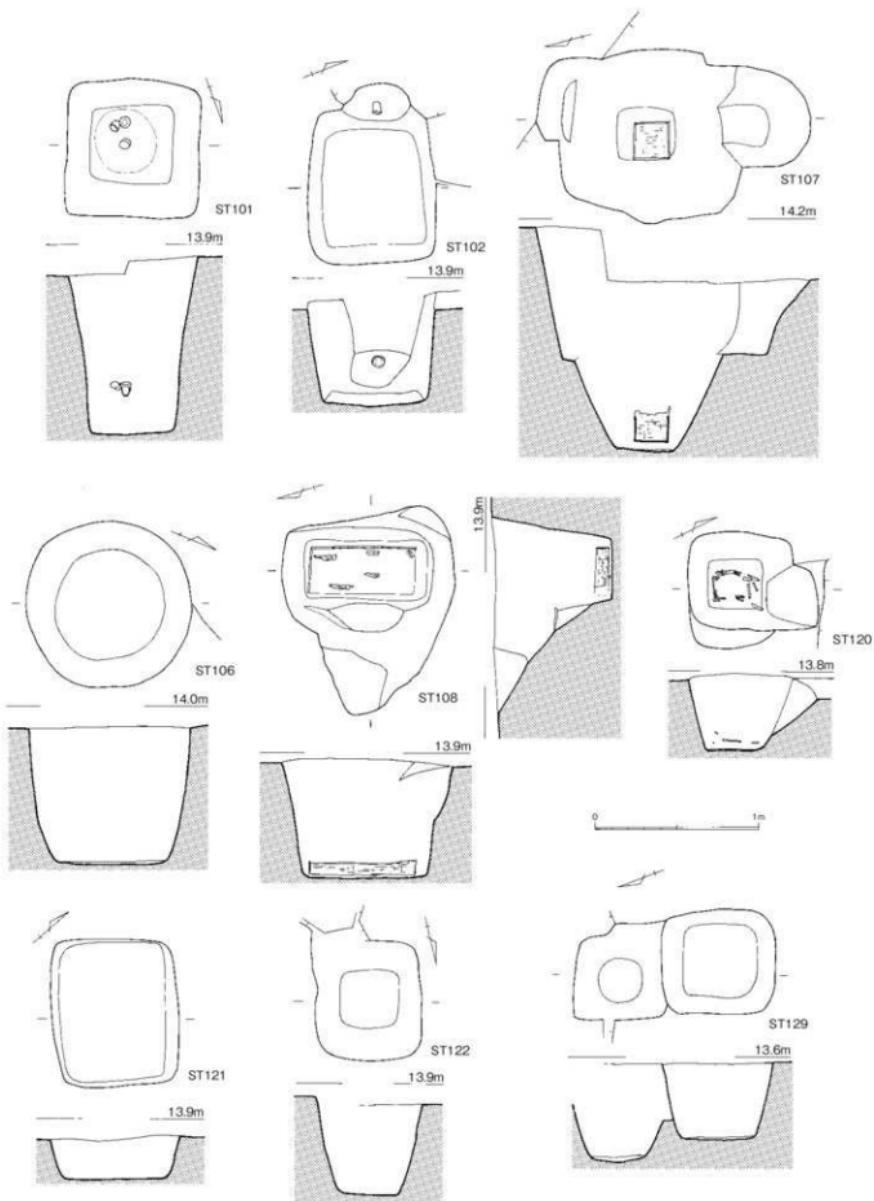


Fig.142 土塚墓・木棺墓実測図1 (1/30)

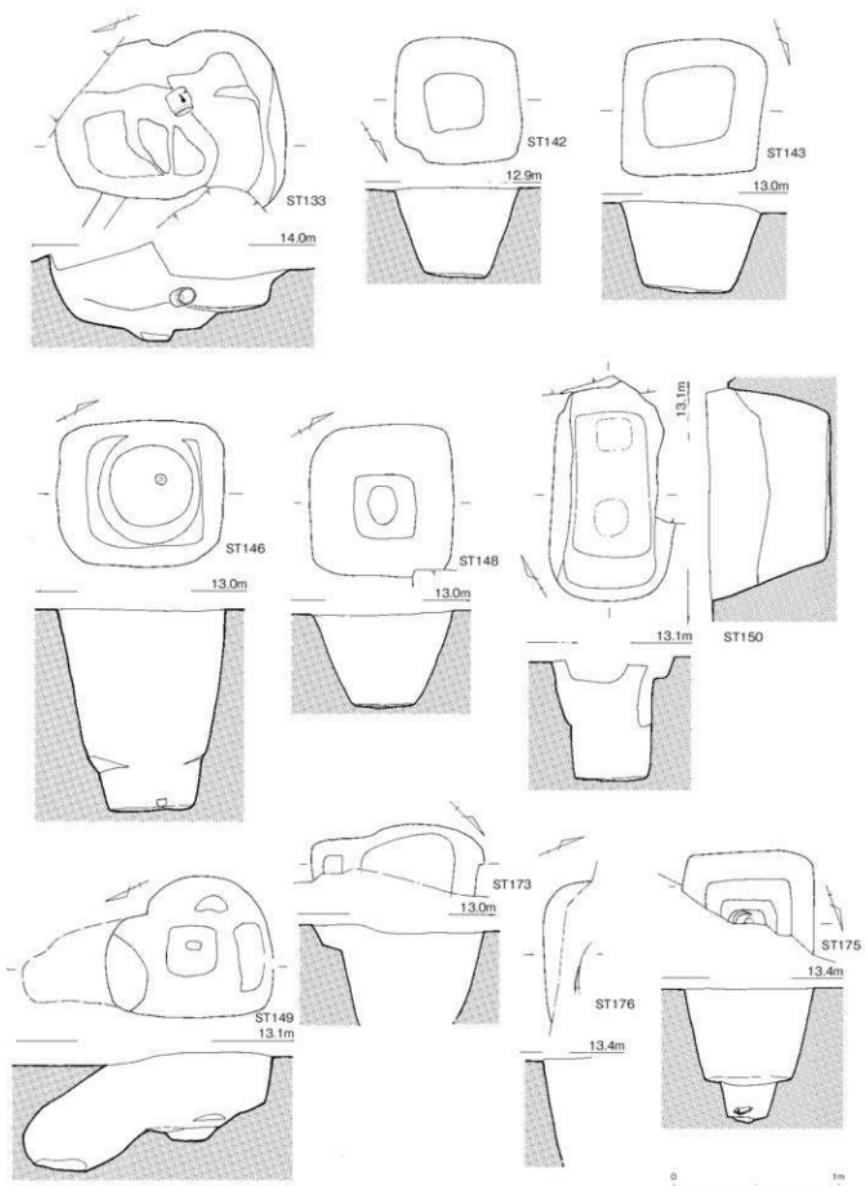


Fig.143 土壌墓・木棺墓実測図2 (1/30)

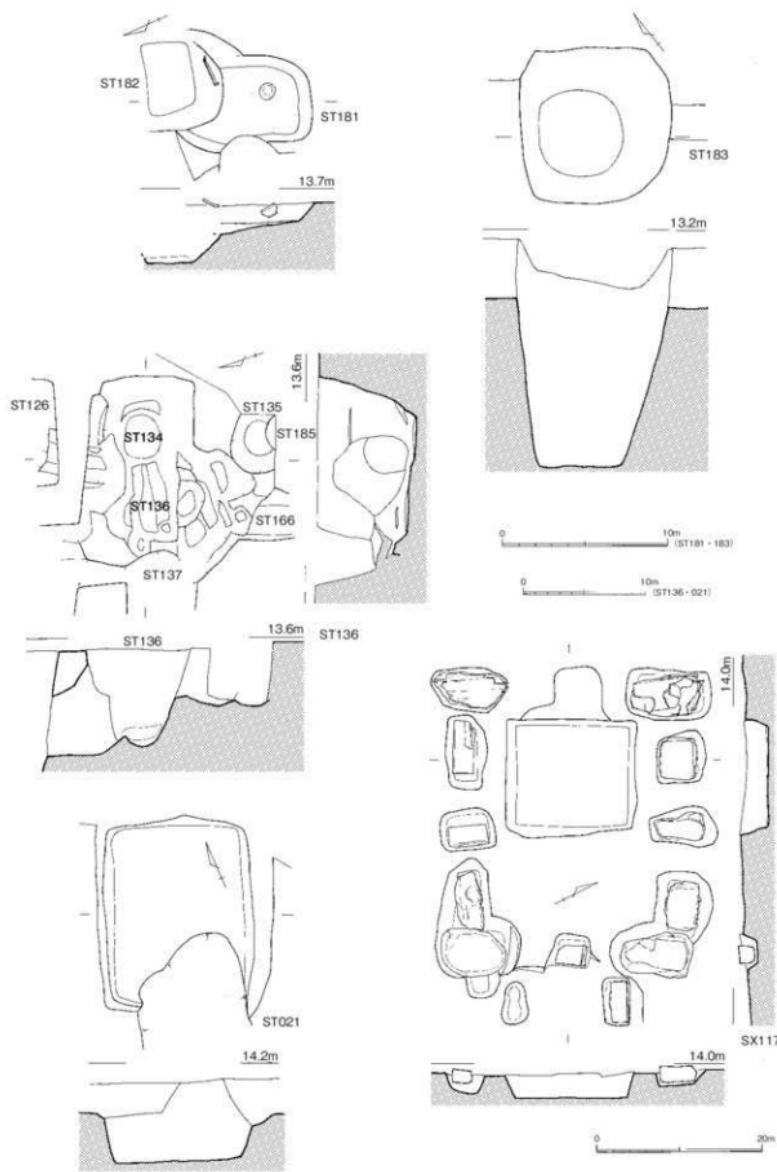


Fig.144 土坑墓・その他の遺構 (1/30・40・60)

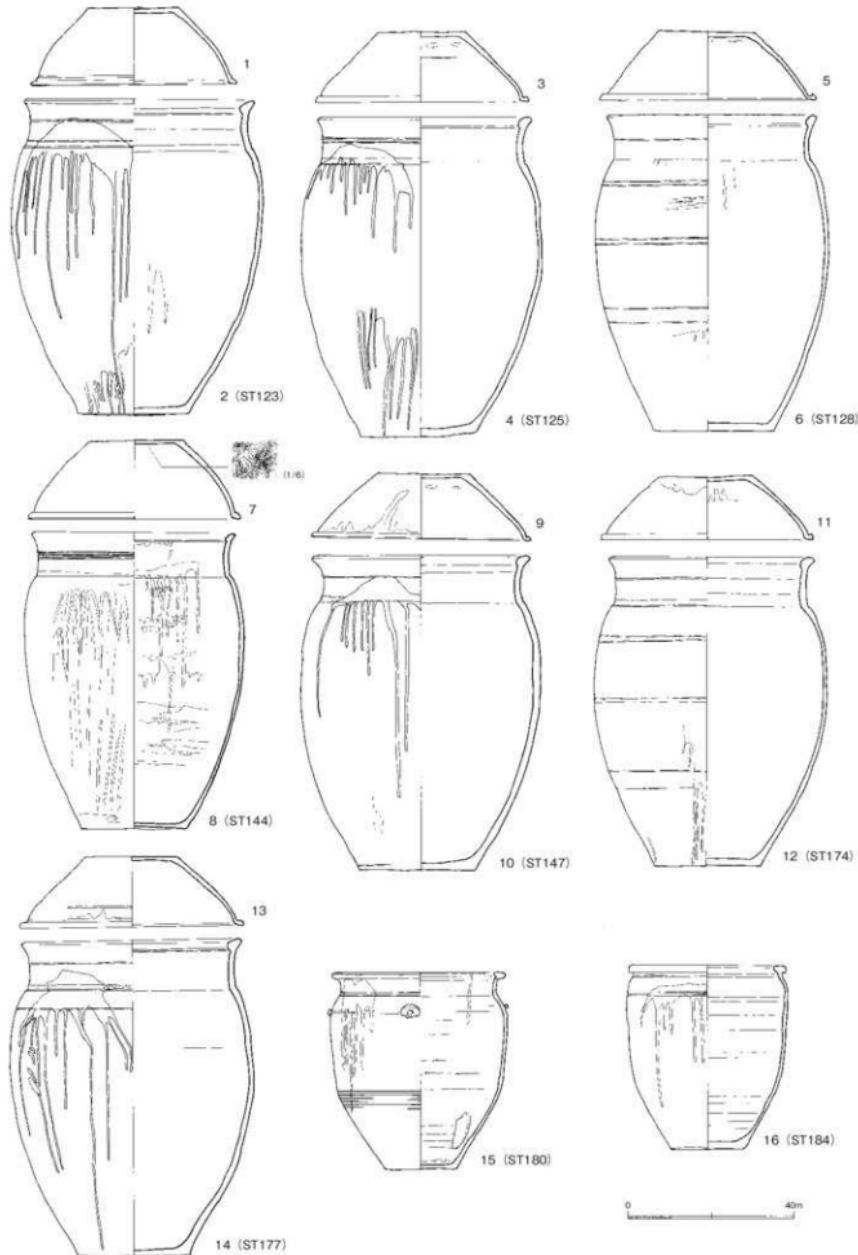


Fig.145 霊棺実測図1 (1/12)

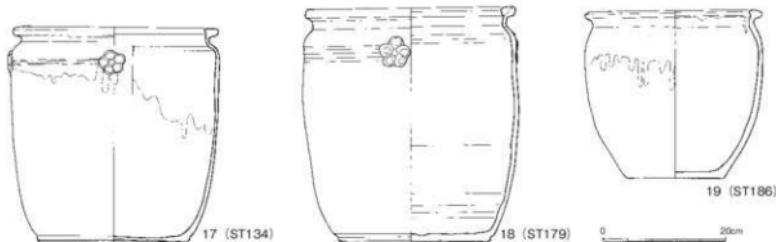


Fig.146 墓棺実測図2 (1/8)

墓石 墓石は3点残っていた。一部字体を新字体で表記している。

- ・表面「宗桂禪童子」裏面「明治四十三年八月二十日中村好太郎三男種吉事」
 - ・表面「清堂妙影禪尼」裏面「明治七年甲戌三月廿四日 行年四十四歳吉田利定妻」
 - ・表面「明治五年・・・行 卅一卒行五・・二歳」裏面「明治十六年 門弟中 未年八月吉日」
- 副葬遺物 (147-148)** 出土遺物の概要は表に示した。銭、磁器が目立つ。ST181の69以外は明治以降のものである。図示したもので磁器以外のものは40が土師皿、41が陶器の灯明皿、47、48、59、63、66の蓋は素焼きの外側にクリーム色の釉がかかる。釉がかからないものもある。56は陶製の鳩笛、67は陶製の盤に鯛の意匠が貼り付くと考えられる。65は石製の硯である。

(2) 溝

SD111 (Fig.136-137-149) 西側の斜面を尾根を横断して走る。幅1から2m、深さ1m強で断面逆台形を呈し、肩が崩れていない部分の壁は急である。南側は西に曲がり段落ちに切られる。北側は西に曲がり道路で切られるが、山側の断面にやや立ち上がりが緩やかな溝状の落ちがある。調査では追っていない。覆土は下部は地山とおなじ茶褐色土で上部には灰褐色、淡黄褐色の腐植土混じりの土が堆積する。遺物は少なく、ほとんどが上層出土である。70から75が上層、76、77が下層から出土した。70は乳白色の瓶である。75は染め付け、77はいぶし瓦で溝が近世にさかのぼる可能性は残る。

SD119 (Fig.136) 墓域の西よりに北走する浅い溝で、幅80cm、深さ12cmを測る。染め付け、白磁片などが出土している。

SD210 (Fig.136-149) 南端の落ち際を走る溝で現代のものと考えられるが須恵器81、82が出土した。

(3) 下層遺構

調査区北端部は南側で見られる赤褐色土の地山が落ち、墓地はこれが埋まった後に営まれていた。このため、トレンチで土層を確認した後に重機で埋土を除去し、溝等の下層の遺構を確認した。Fig.137の北壁土層に見られるように東側からの溝SD203が全ての溝を切る。溝の落ちは東側で特に急である。堆積は途中に赤褐色の山土を挟み灰褐色系の埋土がたまり、人為的に埋めた印象を受ける。

遺物は少ない。底近くまで重機で掘削したこともあるが、トレンチを入れた際にもほとんど遺物は出土していない。SD204の遺物を示した。79は白磁IV類の椀、80は陶器であろうか線刻の花文が見られる。SD204から染め付け片が1点出土している他は中世・古代までのもので他に青磁、擂り鉢、瓦器、土師器片がある。染め付けは深い墓壙からの混じりも考えられる。また、少量ではあるが、各溝から鉄滓が出土している。SD201はくほみ状の連続でFig.137に断面を示した。階段状の道であろうか。他

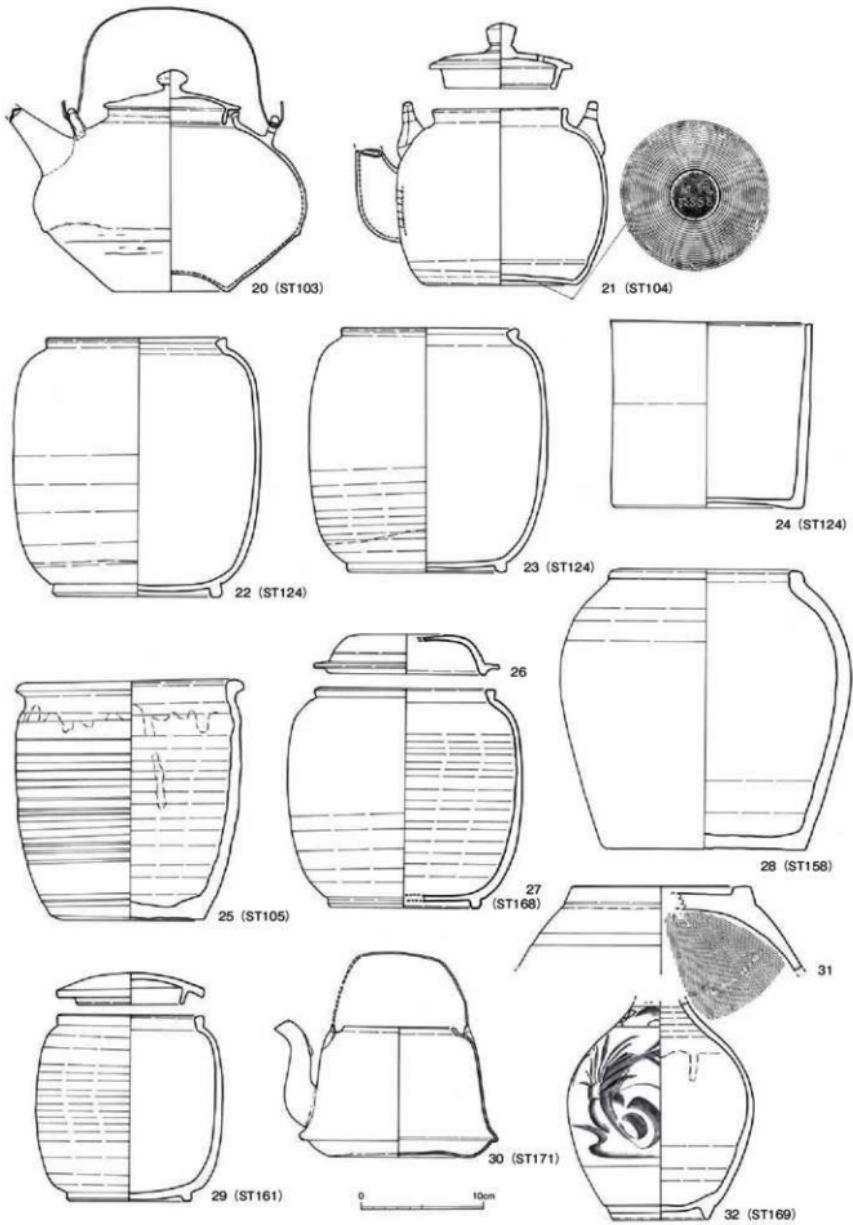


Fig.147 小型棺実測図 (1/4)

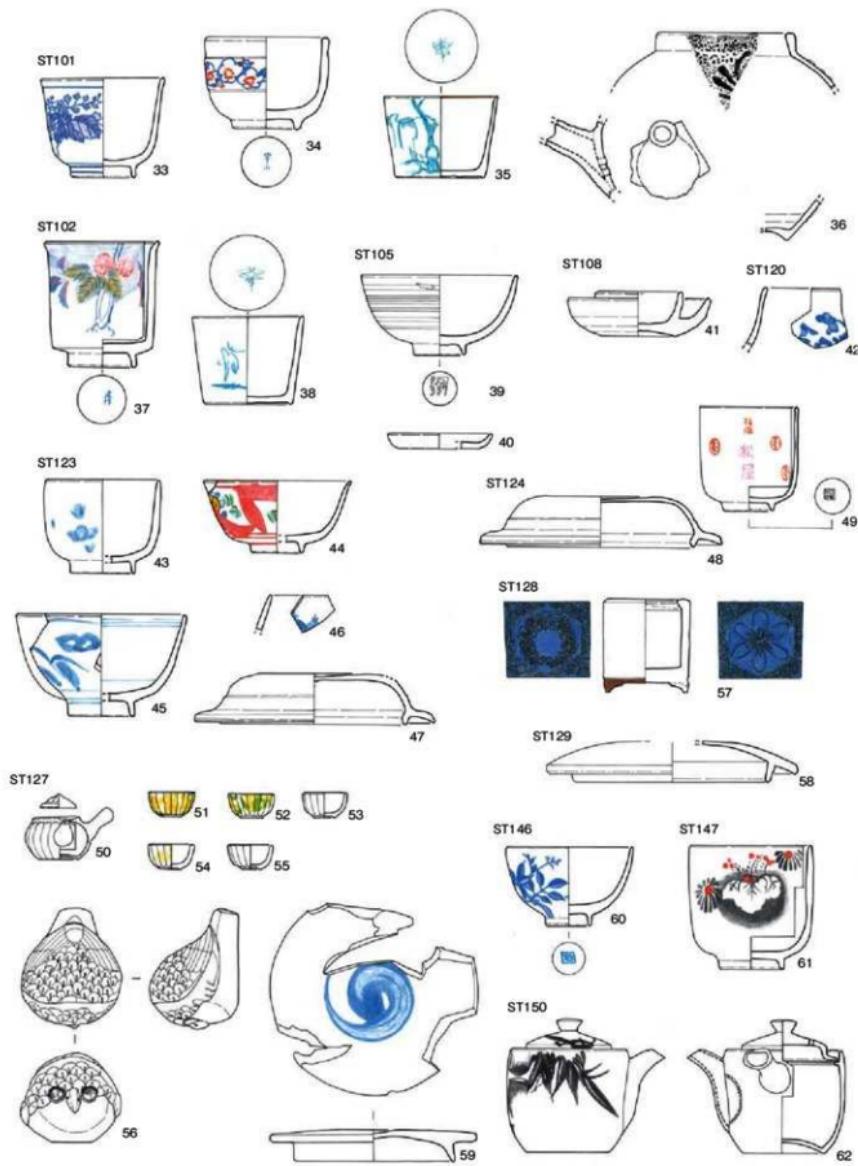


Fig.148 副葬遺物実測図1 (1/3)

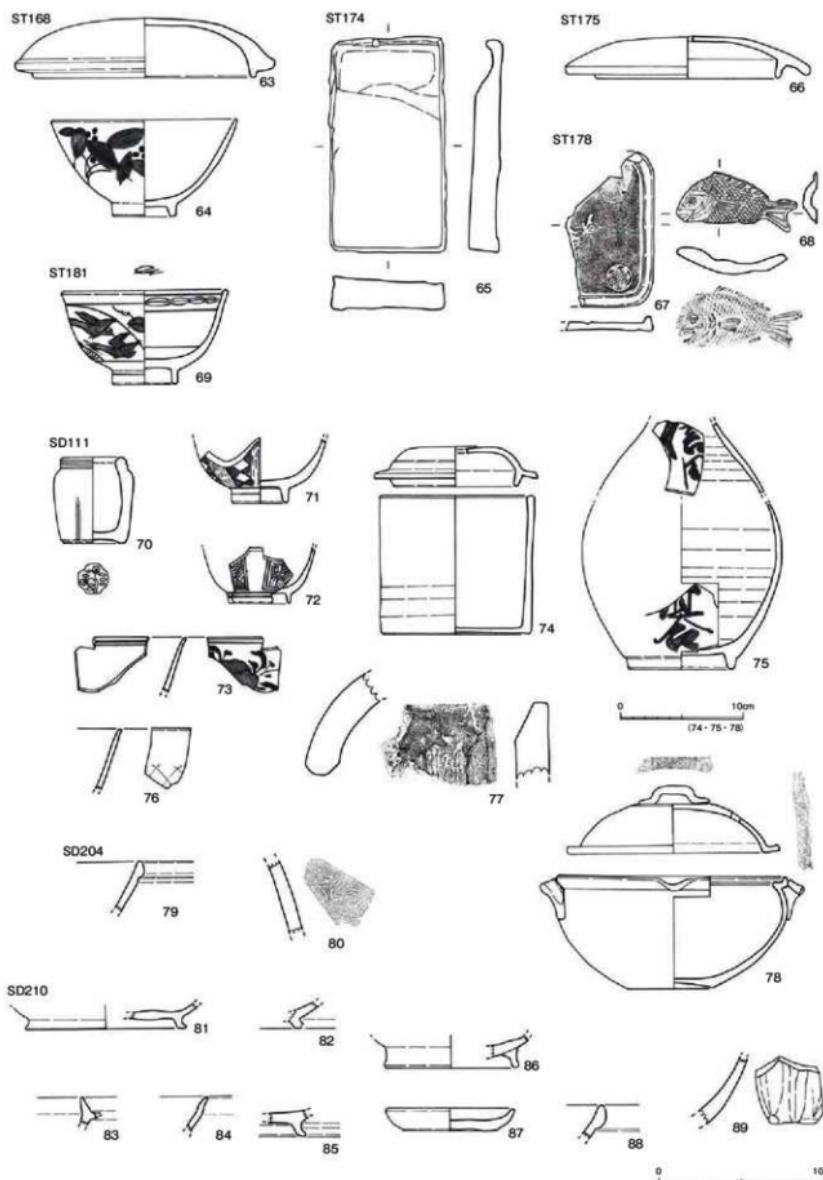


Fig.149 副葬遺物実測図2 (1/3·4)

50次調査遺構台帳

遺構	遺構の種類	実相	地区	測量尺 目録	土手底 面標示 図	出土遺物番号	東方偏東 北西偏西 南東偏東 北東偏西	備考	調査品	遺物
101 上層 小植		D	142			148-33-36	86 81 109	990cmの木質板あり 小植か	猪13	印判機輪、急務(緑系色)、染め付け瓶、虫歴茎片
102 下層		D	142			148-37-38		猪13Bは張り出で頂上。複層するか	猪12	
103 鋼製車輪(緑色)	E	141	147-20			80 35 24				
104 鋼製車輪(緑色)	E	141	147-21			30 27 19				
105 異形 中型	F	D	128	復元		147-25.	140 125 159	北側更上層レベルに段・土手に小型 窓2(引戸・男女差別窓か)	ガラス板(バイオリン型)	染め付け豆皿、土器片
106 上層 円柱		D	142			103 100	85 86 130	85mmの柱(130mmの厚さ)	猪12	小瓶、印判・染め付片、土器底、 土器身、土器蓋
107 木製堅忍	D	142				112 106	135 125 104	左方木棒(60×28cm)右方木棒 8cm厚み	猪12	圓口(丸底出土)
108 大棺		D	142			148-41	106 65 72	左方木棒(60×28cm)右方木棒 8cm厚み	プラスチック	土器底、硝密器、瓦、灯明柱
117 陶器施設	D	144				148-42	65 59 42	底は~30cm 小本棺か 瓦片出る 底は~30cm 8cm厚み 8cm×8cm	瓦	土器片、白磁、陶器底、瓦片
119 陶器			136				91 78 27	22cm	瓦	土器片、白磁、陶器底
120 上層 小木棺	D	142				148-42	65 59 42	底は~30cm 小本棺か 瓦片出る 底は~30cm 8cm厚み 8cm×8cm	瓦	土器片、印判、土器底
121 上層	D	142				91 78 27	22cm			
122 上層 小木棺?	D	142				74	68 59	底は~35cm	入丸ぬ	土器、白磁、陶器底、瓦片
123 異形 大型	E	D	138	145-1-2		148-43~47	118 118 112	蓋ずれる	ガラス(中空玉)、瓦、塗付陶器 白、赤粘土、素焼き、瓦片、骨 片	瓦器、白磁、陶器底、瓦、玄武岩扁平円錐
124 改修坑	C		147-22-23-24	148-48~49			126に同じ?		鐵1	土器片、白磁、陶器底、瓦片、瓦
125 異形大	E	F	138	145-3-4		122 122 144		蓋端大きめ	骨片	硝密器、染付、印判、土器、玄武 岩円錐
126 異形大	E	F	138	復元		97	89 118	蓋はぐく一部が取れ 切られる	鐵1	土器片、人面、ボタン、小 幅方型組合
127 異形中	E	F	138	復元		148-50~56	85 79 106	蓋の中央は割れて落ちる 139などに 切られる	鐵5、断面フレーム、レンズ、 場面、ミニチュア磁器、骨片、染付 片、瓦	瓦片当
128 異形 大型	E	F	139	145-5-6		148-57	106 64 105	140 横乱13Iから残りは下部のみ	鐵5、断面フレーム、レンズ、 場面、ミニチュア磁器、骨片、染付 片、瓦	土器片、人面、ボタン、小 幅方型組合
129 土器上層 小木棺?	C	142				148-58	64 64 47	底は~44cm 方形 底は5cm厚	鐵5	瓦片、印判、白磁、土器底
132 土器上層 小木棺?	C	142				59	55 62	底は5cm厚 底は5cm厚	鐵5	土器片、ガラス片
133 土器	D	143				148-59	142 102 60	底を2つ不規則に小破損 底は5cm厚	鐵5	瓦片、印判、白磁、土器底
134 土器 小型	F		143			148-61	82	73 90	底は5cm厚	鐵5
135 土器 小型(未解)	F	C	144						鐵5	瓦片、染付、印判、土器、玄武 岩円錐
136 土器	C	144							鐵5	瓦片、染付、印判、土器、 瓦
137 土器	C	144							鐵5	瓦片、染付、印判、土器、 瓦
140 異形 大型	F	A	139	復元		128 128 132		土器は切る 蓋は原位置になし 瓦片	鐵5(植内), 鐵5(外底), 瓦片, 骨片	瓦片当
141 異形 大型	F	A	139	復元		117 108 125			ガラス、角瓶	瓦片底、印判器皿、白磁
142 土器上層 小木棺?	C	143				78		底は~35cm 方形	鐵5	瓦片、印判、白磁、土器底
143 土器上層 小木棺?	C	143				86	54 57	底は40cmの円形	鐵5	瓦片、印判、白磁、土器底
144 異形大	E	F	139	145-7-8		103 103 131		蓋は一部落ちる	鐵5、ガラス王1、骨片	瓦片
145 異形 大型	E	F	139	復元		114 96~140			鐵5(瓦は裏腹), 骨片	瓦片、印判、白磁、土器底
146 土器 伸仲	A	143				148-60	103 89 143	底は50cmの円形 底に猪口正直 底は50cmの円形	鐵5	瓦片、染付、印判、土器、瓦
147 異形大	E	F	140	145-9~10		114 111 121		蓋は既に裏返し 左右 瓦片	鐵5	瓦片、色刷口、骨片
148 土器上層 小木棺?	A	143				92 89 60		瓦片は35cm万形 148に切られ る?	鐵5	瓦片
149 土器 小木棺?	A	143				103 88 54		底は35cmの方形で小木棺か	ガラス樂器5	瓦片、染付、土器底
150 土器 3層、木棺?	A	143				148-62	130 64 74	底は45cmの円形 149に切られ る?	ガラス樂器5、 硝密器、瓦片、土器底	瓦片、染付、土器底、瓦
151 異形中	F	B	140	復元		86	94 83	140 方型凹型	鐵5、瓦1~2、骨片	瓦片
153 素解車輪	B	141				30	32 32	正直	鐵5	瓦片
154 素解車輪	B	141				41	37 33	倒置 壁上置き瓦を蓋に	鐵5	瓦片
155 素解車輪	B	141				37	31 15		鐵5	瓦片
156 土器	B	141				148-72			鐵5	瓦片
159 異形凹	B	141							鐵5	瓦片
160 ドラム? 車輪?	B	141							鐵5	瓦片
161 下層	B	141				147-29			鐵5	瓦片、瓦底、瓦片、瓦
163 土器	C	144				なし			鐵5	瓦片
166 土器?	C	144							鐵5	177の西、無方の一部か
167 土器	C	144							鐵5	176のことか?
168 土器			143			147-26~27	149-63-64	58	43 60	底は45cmの円形 149に切られ る?
169 錫器	D	141				147-31~32			鐵5、骨片	瓦片、染付
171 銅製車輪(緑色)	C	141	147-30						鐵5	瓦片、瓦底、瓦片、瓦
172 銅製車輪	C	141				30	26 25	正直	鐵5	瓦片
173 上層	A	143				47	40 30	調査区域で半分を掘削、底に連して いない	鐵5、瓦、布、ボタン(矮), 「小学生用鉛筆」、調製バッキ、 ガラス樂器5	瓦片、白磁、瓦片
174 異形大	上・F	B	140	145-11-12		149-65	88 63~62~	底は~30cmの方形 瓦片底に陶器 底有	鐵5、瓦、布、ボタン(矮), 「小学生用鉛筆」、調製バッキ、 ガラス樂器5、骨片	瓦片、染付、陶器
175 上層 小木棺?	C	143				149-66	105 92 150	底は~30cmの方形 瓦片底に陶器 底有	土器底、瓦、陶器底	瓦片、染付、陶器
176 異形大	上・F	C	143			65+	80 80	一部分削除 異形を確認したのみ 下 側はシングルのみ	鐵5	土器
177 異形大	上・F	C	140	145-13-14		85+ 30~61~		蓋高さある	鐵5、骨・瓦片	瓦片底、瓦片、瓦底
178 異形大	上・F	C	140	復元		149-67~68	110 100 156	蓋高さある 調査区域の斜坑に切られ る? 瓦片底に瓦片付	鐵5、瓦片、瓦底	瓦片、瓦底
179 異形 小型	F	D	140	146-18		95+	105 105	上部に瓦片	鐵5	土器底
180 土器中	F	D	140	145-15		94	94 87		鐵5	土器底
181 土器	D	144				149-69	80 88 100	182に切られる?	鐵5、瓦片吸手	土器底
182 土器	D	144				85 60 94	181を切り?		鐵5	土器底
183 土器	A	144				96 86 108	谷片		鐵5、薄3	瓦片
184 土器 中型	F	A	141	145-16~17					鐵5	瓦片
186 土器小型	C	141	146-19						鐵5	瓦片、白磁、瓦片
201 金										瓦底、土器底、瓦底、延体 頭部器、土器底、陶器(古代)、 瓦式片
202 金										頭部器、土器底
203 金										頭部器、土器底
204 金						149-79~80				頭部器、瓦底、頭部器、土器底、 瓦式片
208 金										青筋、土器
209 金										頭部器、瓦底
210 金						149-81~82				瓦片底、土器底

の溝も道の可能性があろう。

(4) その他の出土遺物

墓や溝などから中世以前の遺物が少量であるが出土している。83から86は須恵器である。87は糸切り底の土師皿で復元口径8.8cmを測る。88は白磁碗IV類、89は鍋連弁の青磁碗である。

(5) 石器包含層

50次調査区では上部の近世墓地の調査段階に少量の風化の著しい石器類が出土したため、堆積状況の良い北側丘陵上に旧石器時代調査区を設けた。調査区は全体グリットに沿って南北8~5m、東西33mの範囲であり、200mに満たない面積である。遺構検出面である鳥居ローム上部から風化レス土層までの層準に石器類の散布、包含があった。遺物の分布状況からみて本来は北側の現県道側まで分布が続いていると推定される。調査範囲は北から10m単位でA、B、C…区とし、また個々に番号を付して出土資料の取り上げを行った。地形はA区が西側に隣接する49、51次調査区側の谷沢に緩く下がる。南側はこの中位段丘面と急斜面の丘陵尾根の崖が数mで接する。こうした様相は柏原F、大原D遺跡などの「崖際遺跡」の様相に近く、その関連性も注目されよう。また、36、53次調査区は同じ中位段丘が続く平坦面の先端でより北側にあるが、その間を道路が開削されている。重要な遺跡範囲は未調査のまま早く失われたと考えられる。

91~93はナイフ形石器である。何れも幅1cm前後の小型であり、91、92は二側縁調整である。94~96は縦長剥片であり、幅1~1.5cmで重みがある。95は台形石器。もしくはその未成品かとも考えたが、基部折断後の二次調整が不十分で、また先端側はガジリとなっていて明らかでない。97~99は不定形剥片であり、98、99の背面に蝶面があり、石核調整剥片である。100~102は横長剥片であり、100は偶発的剥離によるものと見られる。103

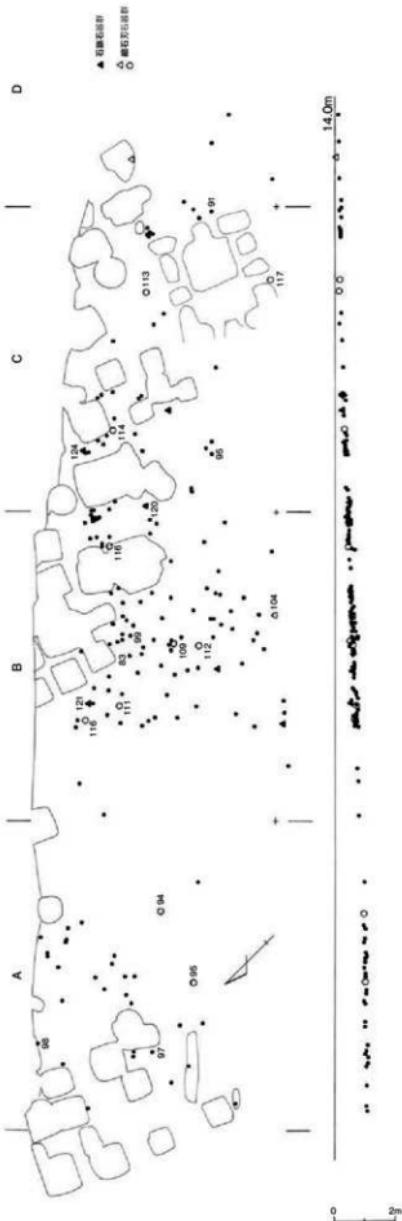


Fig.150 石器包含層遺物分布図 (1/80)

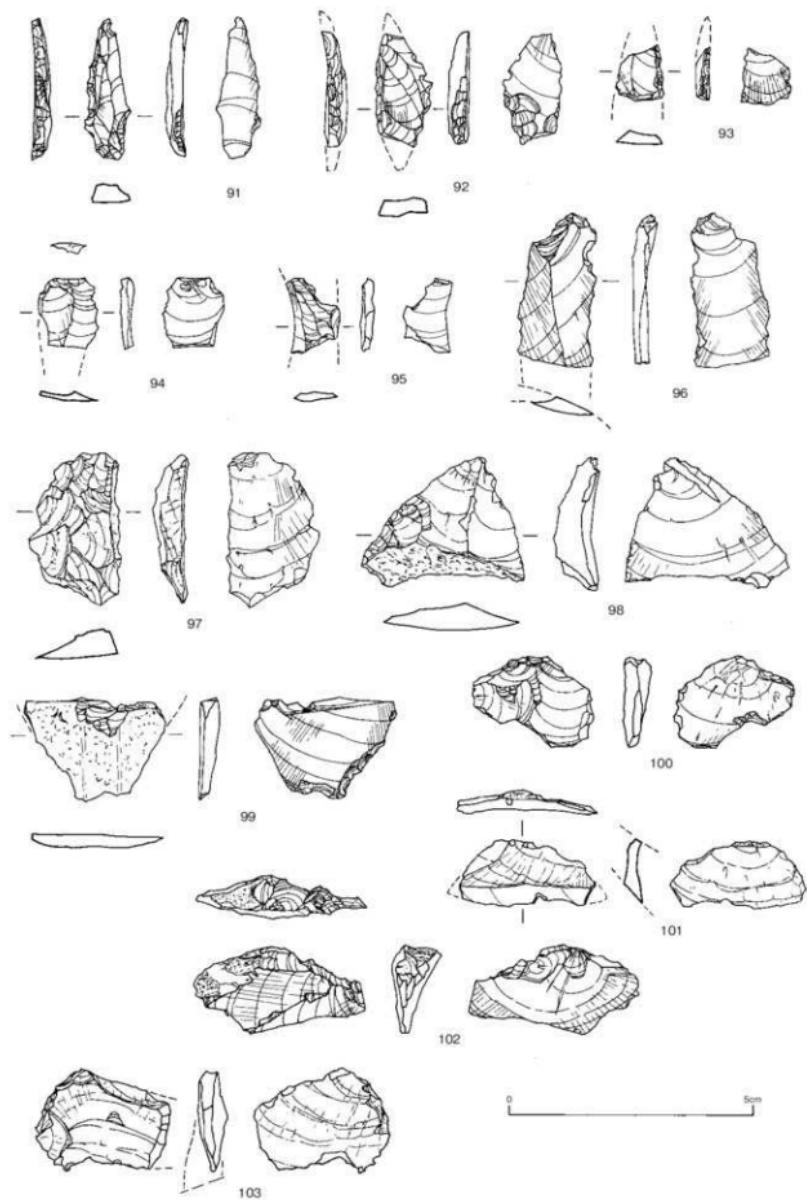


Fig.151 旧石器時代～縄文時代草創期の石器実測図1 (1/1)

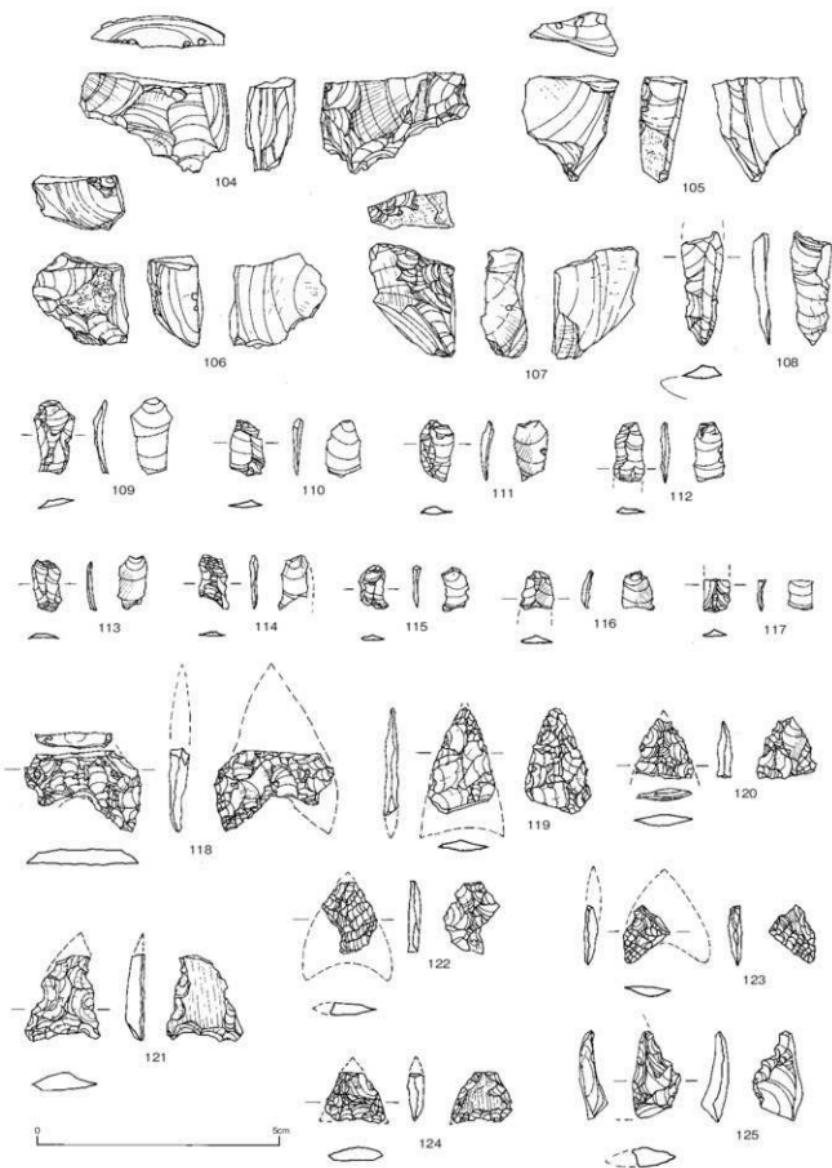


Fig.152 旧石器時代～縄文時代草創期の石器実測図2 (1/1)

は横長剥片石核である。101、103は小型であるが、他の全ての石材が黒曜石であるのに対し、この2点のみサスカイトを利用していることからも注意される。

104~107は細石刃核母核であり、板状素材を荒い調整で福井型に近い成形をしている。105~107には縫面が残されている。打面は3点が横打ちであり、芝(2011)のいうS群細石刃核の素材としてよいものである。108~117は細石刃であり、全体に小振りで両面加工石器の調整碎片を含む可能性もある。108は基部を欠損するが、左側縁に石核調整剥離面を取り込んでいる。118~125は石鎚である。風化度合いが強く、旧石器～細石刃石器群の風化度に類似し、且つ縄文早期以降の石鎚を排除した一群である。大型(121)、中型(119~123)、小型(124)があり、過半数の4点に裏面に研磨が認められる。また、小型は三角鎚、中～大型は先、脚端を尖らせる浅い逆V字形の抉りに特徴がある。125は石鎚未成品か。

さて、遺物の分布状況はB～C区北側を中心として集中分布を示し、周囲に拡散した状況である(Fig.150)。しかし、集中分布付近は僅かな地形の窪みがあり、旧石器時代、縄文時代早期～草創期の遺物が混在していた。また、近世開発に伴うと見られる水路などの敷設位置などから見て、付近が近世墓地以前に農地として開墾された可能性が高い。こうした点から出土した石器類の分布位置が埋没初期の状況を保っているかは疑問が残る。但し横長剥片を含むナイフ形石器段階の遺物は主にB区より西(A区)側に多く、それに対し細石刃石器群や石鎚などの縄文草創期段階の遺物は主にB区から東(C区)側に多い傾向が認められた。

これらの時期的位置づけは、資料数が少なく困難であるが、前者は小型ながら端正な縦長二側縁調整ナイフ形石器を有し、小型の横長剥片剥離が残存することから、後期旧石器時代終末期でも古相に位置付けられる。後者は削片形細石刃石器群の終末期的様相である。石鎚石器群との共伴は確実とは言い難いが、形態や特徴、出土状況などからその可能性は高い。吉武遺跡9次に後出する段階と考えられる。

(6) 小結

丘陵末端から広がる墓域の縁辺部にある。道を挟んで近接する36次調査では墓壙が幾重にも重なった状態で確認され、中世末からの造営の可能性が想定されている。本調査地点は、時期が下るにつれて墓域の拡大にともない造営されたものと考えられる。元岡村誌によれば、明治30年頃に宇大久保の山奥に伝染病患者のみの火葬場ができ、大正15年には道路の低いところに移る。次第に火葬を嫌う人も少くなり、かつ寄せ墓が流行り昭和26年に困難な土地の選定を経てFig.3にみられる字牛坂に火葬場が移転している。出土した墓地はちょうど村誌に記載された、甕棺墓から寄せ墓・火葬へと変遷する時期の墓域と言えよう。席田青木遺跡(『市報告書356集』)では木棺から早桶、18世紀から19世紀は甕棺という変遷が示されている。今回の調査で検出した甕棺は席田青木遺跡で甕棺葬が終わる時期と近いと考えられるが、木棺はプラスチックの副葬などがあり明らかに新しく、時期が異なる。副葬品では銅錢が19基から出土し、種類がわかるもののすべてが寛永通宝である。1基の副葬数は6枚が最も多い。今回の報告では墓域構成、副葬遺物等十分な報告・検討に至らなかった。今後補いたい。

下層で検出した溝は丘陵への道の可能性が高い。遺物からは古代末から13世紀が想定される。尾根上には遺構は見当たらず、削平が大きい西側の平坦部に何らかの遺構があった可能性は残る。

旧石器から縄文時代の石器のまとまった出土は、遺構面の削平を想定していたため予想外であった。石鎚に伴う縄文土器は出土していない。



Ph.55 墓域全景（西から）



Ph.56 下面遺構（西から）



Ph.57 調査前（北から）



Ph.61 ST103（南東から）



Ph.58 調査区全景：調査後（西から）



Ph.62 ST105（北西から）



Ph.59 SD111（北西から）



Ph.63 ST107木箱（西から）



Ph.60 ST102（西から）



Ph.64 ST108（南西から）



Ph.65 ST106 (西から)



Ph.69 ST151周辺 (南から)



Ph.66 ST147 (北西から)



Ph.70 SX117上部施設 (南から)



Ph.67 ST120 (北西から)



Ph.71 SX117 (西から)



Ph.68 ST150 (北西から)



Ph.72 下面北壁土層

報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうだいがくとうごういてんようちないまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ		
書名	九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書		
副書名	元岡・桑原遺跡群20 — 第43次・48次・49次・50次・51次・第54次調査の報告 —		
巻次	10		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書	シリーズ番号	第1173集
編著者名	池田祐司		
編集機関	福岡市教育委員会	発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	2012年2月29日		
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 電話:(092) 711-4667		
遺跡名	元岡・桑原遺跡群(もとおか・くわばらいせきぐん)		
所在地	福岡県福岡市西区(ふくおかげんふくおかしにしく)		
市町村コード	40135	遺跡番号	0741

ふりがな	ふりがな	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
次数	所在地	(世界測地系)				
43次	大字元岡字石ヶ原(いしがはら)	33°35'45"	130°13'35"	2006.2.7 ~ 2006.3.8	180.5m ²	消防署用地造成
48次	大字桑原字戸山(とやま)	33°36'10"	130°13'38"	2006.1.10 ~ 2006.2.23	447.3m ²	
54次	大字桑原字戸山(とやま)	33°36'11"	130°13'40"	2008.10.6 ~ 2009.1.9	1872m ²	
49次	大字桑原字金糞(かなくそ)	33°36'7"	130°13'48"	2006.4.1 ~ 2007.3.22	2723m ²	
51次	大字桑原字金糞(かなくそ)	33°36'7"	130°13'46"	2007.8.29 ~ 2008.10.3	6887.4m ²	
50次	大字桑原字牛坂(うしさか)	33°36'7"	130°13'50"	2007.4.1 ~ 2007.8.27	811m ²	

次数	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
43次	古墳(元岡古墳群A群1号墳)	古墳・繩文	古墳1基・土坑	須恵器・土師器・石獣	丘陵の末端に位置する。6世紀末から7世紀初頭の古墳の墓道部分を調査した。対象施外の石室は工事で大半を崩された。
48次	集落	旧石器・繩文・古墳前期・古代	竪穴住居3・掘立柱建物5・土坑・溝・段落ち	ナイフ型石器・条痕土器・石獣・土師器・須恵器・木簡	20次調査に継ぐ古墳跡前半の住居と6世紀後半から7世紀代と考される遺物を検出した。
54次	集落	旧石器・繩文・弥生・古墳前期・古代	杭列・溝・土坑・河川・石器集中	ナイフ型石器・阿高式土器・石獣・玄武岩片・土師器・須恵器・越州窯系青磁	200次調査から続く古墳時代を主体とした河川とその立ち上がりに杭列・土坑を確認した。
49次	集落・製鉄	旧石器・繩文・弥生・古墳前期・古代	竪穴住居7・掘立柱建物37・土坑・溝・鍛冶炉・鉄器集中	礎石柱・石獣・押型土器・須恵器・土師器・黑色土器・白磁・鍛造済片・鍛製鐵先・鍛造鉄茶・銅族・铁滓	谷の北西向きの斜面で6世紀後半から7世紀初頭の竪穴住居と7世紀代までの掘立柱建物を多く検出した。8世紀にはこれらを切る溝がある他は遺構は少ない。
51次	集落	旧石器・繩文・弥生・古墳前期・古代	竪穴住居7・掘立柱建物35・土坑・溝・河川	奈良文土器・突管文土器・弥生土器・石獣・須恵器・土師器・越州窯系青磁・石鍋・木製農具・建築材	49次調査区に連続する。弥生時代からおよそ7世紀の河川を挟んで竪穴住居・掘立柱建物を検出した。これらは8世紀代には廃止し上流の製鉄の開始の影響が考えられる。
50次	墓地・散布地	旧石器・繩文・中世・近代	近代墓44(墓館・木棺等)・溝・石器包含層	古代甕・染め付け・陶器・銅鏡・玩具・石瓶・織石刀石器群	要指叢から火葬への変遷をたどることができる墓地で明治から昭和にかけてのものである。丘陵端部からの広がる墓域の端に位置する。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1173集
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群20

— 第43次・48次・49次・50次・51次・第54次調査の報告 —

2012年2月29日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 株式会社西日本新聞印刷